窓恋

宇奈月　香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
窓恋

【Ｎコード】
Ｎ１０１０Ｑ

【作者名】
宇奈月　香

【あらすじ】
仕事も恋愛も順風満帆な修司には気になることがあった。
それは久々に実家に戻ってきた時に風呂場で耳にした”おかしな鼻歌”。
童謡や懐メロ、アニメの主題歌をご機嫌に歌い上げる顔も知らない隣人の事だ。
今の恋に潮時を感じ始めていた修司は、隣人が同じ会社で働いていることを知り、興味本位で彼女に近づいていく――。

1）　鼻歌（前書き）

再投稿しました。

1）鼻歌

「母さん。隣りの住人、変わった？」

久しぶりに実家に帰っていた浅野（あさの）修司（しゅうじ）は、ふろ上がりで濡れた髪を拭きながら台所に立つ母に尋ねた。

「あら、言わなかった？お隣の幸子さんが海外勤務になるから、その間だけ姪子さんがお隣に住むことになったって。４月くらいに挨拶に見えたのよ」

「ふぅん」

冷蔵庫から３５０ｍＬの缶ビールを取り出し、一気に飲みくだす。冷えたビールの炭酸が喉を潤すと、ようやくほっと一息ついた。

大学時代から住んでいたアパートが浸水したのは今日の昼ごろの話。上の階の部屋の水漏れが修司の部屋まで洩れたという、ありがちな話だ。

だが、実際身の上に降りかかると笑ってもいられない。アパートの管理会社から謝罪の電話があったが、完全に修理が終わるまでは一週間ほどかかるらしい。

仕方なくびしょぬれになったアパートから必要と思われるものをスーツケースに詰め込んで、実家に戻ってきた。

アパートが水浸しになったのも痛いが、それより貴重な睡眠時間が１時間も削られることの方が痛い。

会社まで自転車で１０分という、低血圧の修司にとって最高の物件だったのに。

「それにしてもアパートが水浸しになるなんて災難だったわね。保障とかは大丈夫なの？」

洗い物をすませた母がテーブルの向いに座りながら言った。

「まぁね、その辺は管理会社がちゃんとしてるから平気だよ。ただ、ここからだと通勤が不便なんだよな。やっぱり会社近くのマンスリーにすれば良かったかな」

「何言ってるのよ。どうせ車通勤にするんでしょ？たいして変わらないじゃない。それより、どうしてお隣さんが変わったって知ってるのよ」

愚痴る修司をたしなめて、母が尋ねた。

「あぁ、それね」

☆
★
☆

修司が風呂に入っていると、どこからか歌声が聞こえてきた。やたら上手いそれは、鼻歌にしてははっきりと歌ってるし、同じ曲ばかり繰り返し歌っている。

気になって少し浴室の窓を開けて外を見渡すと、ちょうど真正面にあたる隣の窓に明かりがともっていて、人影が写っていた。

「〇〇〇　〇〇〇　〇〇〇”じょ”」

――――『じょ』？

それは誰もが知っている名曲で、当然修司も知っている。三歩進んでも結局一歩しか進まないのだが、とにかく背中を押される名曲。一曲をそらで歌いきるほどではないが、ワンフレーズなら完璧に口ずさめるその歌詞を、窓際の人物はおかしな単語をつけて歌っている。

「×××　×××　×××”じょ”」

また『じょ』？

今度こそ絶対に『じょ』って歌ったよな。

少し鼻にかかったメゾソプラノの歌声に、修司は自分が風呂に入っている最中なのも忘れて、しばし唖然とした。

あの名曲をこれほどはっきりと間違って歌う人間がいるのか。

まじまじと見つめる視線の先で、女は相変わらずご機嫌ではじめから歌い直している。もちろん、歌詞は間違ったままだ。

歌声に交じって聞こえる水音とカチャカチャとぶつかる物音に、窓の向こうが台所だと推測する。

窓は磨りガラスになっているので、相手の顔まではわからない。

（いや、目が合ったらまずいか）

ようやく自分が風呂の途中であることを思い出し、修司は開けた窓を閉めた。

途端に歌声は小さくなる。

（変な女）

それが隣の住人に抱いた印象だった。

☆
★
☆

「なんかさ、ご機嫌で歌ってたのが聞こえたから、ちょっと気になった」
「そうだったの。彼女、とっても良い子よ。平日は勤めに出ているみたいだけど、土曜日は大抵庭奥にある畑の草むしりをしてるし、愛想も良いし。ゴミ出しもきちんとしてるわ」
「へぇ、そうなんだ」

めずらしく母が絶賛したので、修司は少しだけ隣の住人に興味が湧いた。
学生時代から時々連れてくる彼女を見ては、ああだこうだと難癖ばかり言っていたのに、年をとるとその辺りも丸くなったりするのだろうか。

「修司もしばらく居るんだし、顔を合わせたら挨拶くらいしなさいね」
「わかったよ」

（多分、ないと思うけど）

それこそ朝から晩まで仕事に明け暮れているのだ。平日に会うことはまずないし、休日は彼女との約束がある。
もちろんそんな事を言えば、母の小言を聞くのはわかっていたので、修司は素直に頷いてビールを飲み干した。

「もう寝るよ。明日は7時には出るから」
「はいはい。お休みなさい」
空になった缶ビールを空き缶入れに捨てて、修司の初日は終わった。

2）祖母の面影

☆
★
☆

「それで、今日から実家通勤ってわけか。大変だな、お前も」

社員食堂で「今日のおすすめ」サバの味噌煮を美味そうに頬張っているのは、同期の山下。部署は違うが入社当時からなんとなく馬が合って、以来友人の関係を続けている。

「どうせなら、この機に沙絵（さえ）ちゃんと同棲でもしたら良かったのに。向こうだって、〝そろそろ〟そういうの意識してんじゃないのか」

「やめてくれよ。俺はまだ結婚に縛られたくない」

キツネうどんに浮かぶ油揚げを箸でつつきながら、修司は辟易した顔を見せた。

沙絵は一昨年入社してきた女子社員で、その容姿をかわれて受付をしている。修司より5歳年下で可愛いと思うが、それが結婚に結びつくかといわれると「否」だ。

彼女に家庭的なものは求めてないし、四六時中一緒に居るのかと思うと、正直疲れる。

可愛いだけでは結婚に踏み切れない。それが本音だ。

「あ〜ぁ、可哀そうに。あの子、２５歳までに寿退社したいって周りに言ってるらしいぞ。もちろん、相手はお前な」

「……ウソだろ？」

「ほんと。修司ももうすぐ３０歳になるんだし、そろそろこの辺で

決めたらどうだ」
「そういうお前は早かったよな。もうすぐ生まれるんだろ？二人目だっけ」
「そうなんだよ～。来月の3日が予定日なんだけど、今から落ち着かなくって。嫁はもう臨月に入ってるし、いつ生まれてもおかしくないんだよな」

大学卒業と同時に結婚を決めた山下は、もうすぐ二児のパパになる。嫁の美咲（みさき）は山下の胸ほどしかない小ささと線の細さのせいか頼りなさを感じたが、話してみるとこれがしっかりしていて、山下の手綱をしっかり握っていた。
二人を見ていると結婚もいいなと思うが、自分が子供を抱いている姿がまだ想像できない。
隣に並ぶ嫁の輪郭すら浮かばない。

（……あれ？）

浮かばないはずなのに、なぜか声だけは浮かんだ。昨日聞いたあの歌声だ。

（なんでだ？）

自分でも理解できない発想に、思わずうどんを食べる手が止まる。顔も知らない、隣人。歌もまともに歌えないような女の歌声がどうして嫁の理想像に当てはまったのか。

「どうした？うどん、そんなに不味いか？」

じっとうどんを睨んで難しそうな表情をしている修司の顔を山下が覗きこんだ。

「あ、いや。なんでもない」

（昨日聞いたから、たまたま思い出しただけだ。自分に暗示めいたものをかけるなんて、バカバカしい）

修司は改めてうどんを食べ始めた。

出汁を吸って太さが増したうどんは、何の喉ごしもなかった。

☆★☆

今夜も窓越しから隣人の鼻歌が聞こえる。

（今日はアニソンか…）

どうやら修司が風呂に入る時間と、隣人が台所をつかう時間は同じ時間帯らしく、今夜も隣人のワンマンライブを風呂場で聞いていた。

今歌っているのは、昔見た「〇〇食品」提供の世界名作劇場でやっていた「ピー〇ーパン」だ。歌詞が合っているかは知らないが、相変わらず鼻歌とは思えない熱唱ぶりを披露している。

（こっちに筒抜けだってことに気づいてないのか？）

窓を半分だけ開けた状態で歌えば、外に聞こえることを知らないのか構わないのか。

どちらにしても、修司にはいい迷惑だ。

だったら窓を閉めて入ればいいだけの話だが、なぜかこっちも浴

室の窓を半分だけ開けている。

（別に聞きたいわけじゃない。風呂場が暑いだけだ）

少し鼻にかかった歌声も耳触りではない。音程が良いのが救いだと、とってつけたような言い訳で自分を納得させ、たっぷりと彼女の歌声を堪能した。

「あら、めずらしくゆっくりとしたお風呂ね」

湯気のたつ修司を見た母が、驚きの声を上げるほどに。

冷蔵庫からビールを出してテーブルにつくと、旨そうなトマトがゴロゴロと転がっている。

「母さん、このトマトは？誰かにもらったの？」

買ってきたにしては不格好な形だが、色は真っ赤で張りもある。手にとって眺めていると、

「それね。お隣の理子ちゃんがくれたのよ。たくさん採れたから、良かったらどうぞ、って」

「理子ちゃん？」

「そう。白雪（しらゆき）　理子（りこ）ちゃん。お隣さんよ」

白雪　理子。なんだかメルヘンチックな名前だ。

「トマト作ってるんだ」

「修司の部屋からも見えるでしょ。お隣の広い畑。あそこで作ってるのよ」

「別にわざわざ作らなくても、スーパーに行けば売ってるだろ」

「それはそうだけど、やっぱり自分で作ったのは美味しいのよ。買えば簡単だけど、トマトだって数を買えば結構するのよ。それなら多少手間暇がかかっても苗を買って育てた方が安上がりだし、育てる楽しみもあるんだって。初めて作るから美味しいかどうかはわかりません、って言ってたわ」

理子との会話を思い出した母が、嬉しそうに笑っていた。

そんなものか、と手にしたトマトを眺める。

「そういえば、昔はばあちゃんが作ってたよな」

一昨年亡くなった祖母が元気なころは、毎年何かと野菜を作っていた。ジャガイモ掘りに、トマトの収穫。トウモロコシも？（もぎ）いだ。ニンジン嫌いの修司も、祖母の作ったニンジンだけは不思議と食べていた。

学年が上がるにつれて徐々に手伝うことはなくなったが、祖母が作った野菜はうまかった。

不細工なトマトを見ていると、祖母の面影を思い出す。

「母さん、これ一個洗ってよ」

手にしていたトマトを台所に立っている母に差し出した。

「冷えてないわよ」

「このままでいいから」

昔は獲れたてを食べた。なまぬるくてもうまいものはうまい。

洗ったトマトを受け取って、さっそく一口かじる。

口の中に広がる少しきつめの酸味。それ以上の旨みが唐突に記憶

を呼び覚ました。

（ばあちゃんのトマトもこんな味だったな）

記憶は薄れても味覚はちゃんと覚えている。修司は無心で理子の作ったトマトを食べた。

「ごちそうさま」

見る間に腹の中に治まったトマト。母は満足気にそんな修司を見ていた。

3）偶然という何か

☆★☆

終業時間間近、後ろから呼びかける声に足を止めた。

「修司、今日一緒にご飯食べに行こうよ」

制服姿の沙絵が愛らしい笑顔を浮かべてそう言った。

柔らかい栗色の髪を毛先だけ巻いて、頭を動かすとそれもゆんわりと揺れる。大きな目はいつも濡れたように見えて、それを囲むまつ毛も一本一本がわかるほど綺麗に整えられている。

女性の持つ柔らかい肌、今は控え目に塗られているが沙絵の赤い唇は熟れた果実みたいだ。

「…悪い、まだ仕事が残ってるんだ」

「そっか、残念。結構かかるの？わたし、先にお店で待っててても良いよ」

「今日中に作らないといけない書類でさ。帰りがいつになるかもわからないから」

沙絵と最後に会ったのはもう一カ月ほど前のことだ。

仕事の忙しさと、アパートの水害とですっかりほったらかしにしてしまっている。

悪いと思っているが、疲れた身体で沙絵の相手をするのはしんどい。

沙絵は何か言いたげに口を開きかけたが、すぐにその口をつぐん

で代わりに笑顔を浮かべた。

「わかった。じゃあ、また今度ね」

言いたい事があるのだろう。

修司に対する不満や二人の関係に不安を感じていること。沙絵をどう思っているか。

聞きたいことはたくさんあるけれど、懸命にそれらを押し殺して「聞きわけの良い彼女」を演じようとしている沙絵を見ていると、申し訳ない気持ちになる。

「あぁ、また今度な」

打った相槌が社交辞令になっていることにも、修司は気づいていた。

（そろそろ潮時か…）

漠然と終わりを感じる。沙絵と別れても修司の日常は何も変わらない。

朝から晩まで仕事漬けで、休日だけ時間が空くだけだ。だがそれもたまっているＤＶＤを見たり、本屋をめぐっていれば十分埋まる時間である。

（好きだったはずなんだけどな）

いつからそれが薄れてきたんだろう。

去っていく沙絵の後姿を見送って、小さく溜息を零した。

☆
★
☆

結局、家に帰ったのは１０時を過ぎた頃だった。
カーポートに車を入れて家に入る途中、何気に視線が隣の家に向いた。
いつもと同じ明かりがともっている。
それだけで修司の心に不思議な安堵が広がった。

（…俺も相当疲れてるな）

他人の家の明かりにほっとするなんて、どうかしている。団らんを望んでいるわけでもないくせに。
ここ数日の不可解な感情に首をかしげるも、すべて忙しさが見せる錯覚で片づけた。

「ただいま」
「お帰りなさい。遅かったのね、夕飯はどうするの？」
「なんか軽く食べたい」

ネクタイを緩めて、かけていた眼鏡をはずす。スーツのジャケットを脱いでリビングのソファに座るとまたテーブルの上にトマトがあるのを見つけた。

「またもらったの？」

母もそれがトマトの事だと知っているので、「そうよ」と頷いただけだ。

「洗って一個ちょうだい」

無性にあのトマトが食べたくなって頼むと、夕飯の準備をしていた母がちらりと修司を見た。

「いいわよ」

手頃な大きさのをひとつとり、洗ってそれを器に乗せて持ってきた。器ごと受け取って、さっそくかじりつく。口に入ったトマトは、今日もうまかった。

「トマト食べるのもいいけれど、せめて着替えてらっしゃい」
「これ食べたら着替えるよ」

ぼんやりとしながら無心でトマトを頬張っている修司に、母は呆れた顔をした。

「なぁ、母さん。隣りってひとりで暮らしてるんだろ。畑するくらいならけっこういい年なんじゃない」

どうしてそんな事を聞いたのか、修司にもよくわからなかった。ただ、このもやもやを解消する何かが欲しかっただけなのかもしれない。

「あなた、まだ一度も会ったことないの?理子ちゃん、修司と同じ会社で働いてるのよ。年だってあなたと同じよ」
「えっ?」

思いがけない事実に、それまでソファに沈んでいた身体が振り子のごとく起き上った。

「同じ会社？って何部にいるか聞いた？」
「ええっと、確か総務って言ってたかしら」

驚いた。ひさびさにこんなに驚いた。
まさか隣人が同じ会社の子社員だったとは、まったくの想定外だ。
こんな偶然があるのか。
手にしたトマトを落とすくらい衝撃的だった。

そうか、同じ会社なのか。

ありえない展開に、笑いがこみあげてくる。
唐突に笑い出した修司を母が気味が悪いと顔を歪めた。だが、今の修司に母の反応はどうでもいい。

（会いたい）

それは自然と芽生えた感情だった。

どんな子なのか、見てみたい。

4）　けじめ

☆
★
☆

理子が同じ会社にいるとわかると、次の日からはどうやって理子と接触しようか、修司はそればかり考えるようになった。

あいにく修司の企画開発部と総務部は接点があるようで、直接修司が関わることは少ない。雑務のほとんどは女子社員がしているため、修司が行けば逆にひとめについてしまいそうだ。

近づきたいわけじゃない。ただ見てみたいんだ。

ならウダウダ考えずに適当な理由をつけて総務部まで行けばいいのに、なぜか後ろめたい。

とりあえず、自分よりは総務に接点がありそうな山下に理子について聞いてみた。

が、返ってきた答えは意外なものだった。

「――――なに、お前。なんで急にそんなこと聞くわけ」

「なんでって、聞いちゃまずいか」

「まずいね。あいつには手を出すな」

いつになく真剣なまなざしで山下が釘をさした。いつものおちゃらけた雰囲気は微塵もないことに、山下の本気がうかがえる。

自販機で無糖コーヒーを買って手渡すと、山下は無言で受け取る。

「山下。白雪　理子となんかあるのか」

自分用のコーヒーを押しながら聞くと、

「あいつは美咲の親友だ。なら、俺にとっても大事な友達だ。お前の適当な恋愛に付き合えるような子じゃない。頼むから手を出すな」

と真正面から修司を牽制した。

これまでそれとなく修司の恋愛を非難したことがあるが、ここまではっきりと「適当な恋愛」と言われたのは初めてだった。

（こいつにはそんな風に見えてたんだな…）

決して適当に付き合ってきたわけじゃない。ただ自分のすべてを注ぎ込むような恋愛にならなかっただけだ。好きになろうとしたし、それなにり好きになっていた。

沙絵だって、可愛いと思っていた。

ガラン…とコーヒーの落ちる音が休憩所に響く。夕暮れの太陽が斜めに差し込んで、修司の顔に影を落とした。

「――悪い、言いすぎた」

「いや、実際そうかもしれないし」

山下は苦虫をかみつぶしたみたいな顔ですぎた言葉を詫びた。だが、一度出た言葉は消せないことくらいお互い知っている。

「なんで理子のこと知ってるんだ。修司とは何の接点もなかっただろ」

躊躇いがちに尋ねた山下は、バツの悪い顔をしながらちらりと修司を見た。

「今、俺の隣に住んでるんだよ」

（憎めないヤツ）

口端に笑みを浮かべて答えると、あからさまにほっとした顔になる。修司はコーヒーを拾い上げて山下の隣に腰かけた。

「そういえば叔母さんの家を間借りしてるって美咲が言ってたな。じゃあ、それがお前の実家の横ってわけか」
「そう。で、毎日トマトを母親に持ってくる」
「おぉ、そうそう！今度うちにも持っていくから、て言ってたな」
「毎日アニソンを歌ってる」
「あいつは童謡も歌うぞ。それと卒業の歌もな」
「俺等と同期なんだろ……。２９歳でそれはどうなんだ？」
「ちょっと変わってるけど、良い子なのは保証する。折り紙つきだ」
「なら、紹介しろよ」
「それは無理」

頑として首を振らない山下も、いい加減頑固オヤジだ。
それだけ大事な友人なんだろう。

「別に付き合いたいとは言ってない。どんな子か見てみたいだけだ」
「家が隣なんだから、窓からこそっとのぞけばいいだろ」
「それは俺に痴漢になれと言ってるのか？」
「隣同士なんだ。たまたま外見てたら目が合った、て言えば疑わないって」
「そんなバカな話があるか」

苦し紛れの言い訳にもほどがある。

「大丈夫。あいつは根っからのお人よしだから、真面目な顔して言

えば「そうなんですか」って言うぞ」

山下は理子をかっているのか馬鹿にしているのかどちらなんだろう。

胡散臭いと睨む修司の肩をぽんと叩いて、「だから見るだけで勘弁してやってくれ」と再度念を押した。

「お前、そんな事より沙絵ちゃんとはどうなっているんだ。もうしばらく会ってないんじゃないか」

「……そうだった」

あれ以来、沙絵とは全く個人的な話はしていない。というより、顔を合わす程度で終わっている。

「終わり、だろうな」

向こうもうすうす修司の変化に気づいているはずだ。それでも別れを切り出さないのは、山下が言うとおり結婚に未練があるせいか。寂しげな顔で見られているのを知りながら、修司は仕事を理由に見て見ぬふりを続けている。

どちらにしろ、けじめをつけるべきだ。

「駄目ならちゃんとそう言ってやれ。向こうだっていつまでも同じ場所で立ち止まってたくはないだろうしな」

「そうだな」

「修司はなまじ見た目がいいからな。仕事も出来るし女が放っておかないのもわかるけど、もう少し自分の気持ちを大事にしろよ。溜まるってんなら、割り切れるドライな女を選ぶんだな。とにかく理子に会うにしても、まずはそっちを片づけてからにしろ。これは友人としての忠告だからな」

「ありがたく拝聴するよ」

山下の言い分はしごくまっとうで、修司はその通りだと思った。理子に会ってみたいという興味の正体が何なのか、はっきりさせる前に自分にはやるべきことがある。

いい加減、ケリをつけよう。

終焉が見えているのに、いつまでもその扉を閉めれずにいるのはいつものこと。とっくに気持ちは離れているくせに、相手から離れていくのをじっと待っていた。

振るより振られた方が楽でいい。

後味の悪い別れ方より、自然消滅が面倒くさくなくていい。

それが女の自尊心を傷つけずにすむ別れ方だと思っていた。

だが、そんな修司を真正面から「適当」と非難されるとさすがに胸に刺さる。相手が友人ならなおさらだ。

気持ちがなくなったのだと。そう告げれば沙絵は泣くかもしれない。

大きな目が涙で濡れるのを想像しても、心が痛まない自分にはっきりと気持ちが離れたことを確信する。

だったら、早いうちが良い。

（平手打ちの2，3発くらい覚悟するさ）

ぐびっと缶コーヒーを一気に飲み干して立ちあがる。

「行くのか？」

別れに行くのか――――。短い問いかけに修司は頷いた。

この時間ならまだ沙絵は社内にいるはずだ。

山下に手を挙げて別れを告げると、ポケットから携帯を取り出して沙絵の番号を押した。

『もしもし？』

理子とは違うかわいらしい声に「俺」と短く告げる。

「これから時間ある？」

『え、これから？ちょっと待ってね。――うん、大丈夫。何、どうしたの？』

久しぶりの恋人からの誘いに沙絵の声音が上がる。

だが、それは沙絵が思っているような甘い展開にはもうならない。

「話しがあるんだ。いつもの場所で待ってる」

『うん、わかった。あたしもすぐ行くね！』

嬉しそうな声に罪悪感が残る。修司は一度息を大きく吐いて、けじめをつけるために歩きだした。

5）別れ話

☆★☆

駅を通り過ぎて、大通りから脇道へと曲がる角地に建つクラシカルな外装の建物。その1階にある喫茶店が「いつもの場所」だ。

店舗を探していたマスターと建物の管理者を探していたオーナーの利害が一致したことはもちろん、マスターの挽くコーヒーに惚れ込んだオーナーが当初契約事項になかった資本金の出資と二階も居住区として貸し出した話は、馴染み客の間では有名だ。

店内には旅行好きのオーナーが買ってくるアンティーク品がさりげなく飾られている。

メルヘンチックなものが多いのは、孫が大のアリスファンだからとか。

懐中時計の時刻に慌てるウサギ、帽子屋を連想させるハット、すまし顔のネコ。

落ち着いた雰囲気にちょっとした遊び心を添えることで、ほっと息つく空間に仕上がっている。

店先では看板犬ラブラドールレトリバーのラウルが尻尾を振って修司を出迎えた。

「よぉ、元気だったか」と頭を撫でると、気持ち良さそうに黒目を細めた。

ベルを鳴らしてドアをくぐると、カウンターから馴染みの声がかかった。

「いらっしゃい」

「お久しぶりです」

マスターは修司を見て嬉しそうにほほ笑んだ。

肩につく襟足を紺色のリボンで結んで嫌味に見えないのは、それが似合っているから。４０代半ばだというが、見た目はどう見ても３０代。

白いシャツと黒いエプロン、袖を捲くった腕のたくましさに少しの老いも見えない。

オーナーを虜にしたオリジナルブレンドは絶品だが、店内に女性客が多い理由もわかる気がする。

人当たりの良い笑顔、柔らかい物腰は迎えられる者をほっとさせる魅力がある。

「いつものでいいかな」

「お願いします。それと向こう空いてますか？」

視線だけで指したのは、窓際奥のテーブルだ。

「あぁ、もちろん。後から沙絵ちゃんが来るの？」

いつもと変わらない笑顔で言われると、どう返していいかわからない。

まさかこれからここで別れ話をするんだとも言えず、修司は曖昧に笑った。

普段なら待ち合わせで座るのはカウンター。マスターは「後で持っていくよ」とだけ言った。

アルバイトの女の子が、テーブルについた修司の前に水の入ったグラスを置いていく。

修司は沙絵が来るまでの間、ぼんやりと窓の外を眺めて見ていた。

店内に流れる心地よい音楽を聞きながら、思い出すのは理子の鼻歌。

少し鼻にかかった歌声。

ここに理子を連れてきたらどんな反応を見せるだろう。やっぱり鼻歌を口ずさんだりするのだろうか。

店内を飾るアンティーク達は、理子の心をくすぐってくれるのか。

マスターの入れるコーヒーを飲ませてみたい。いや、そもそも理子はコーヒーを飲むのか。

向かいに座る理子の幻影は、ミルクと砂糖をたっぷり入れている。

あのコーヒーはブラックに限るが、理子が飲むならそれも許せる気がする。

（何考えてんだ、俺）

これから別れ話をするくせに、考えるのは顔も知らない理子のことばかり。

どうしてこんなに気になるのだろう。

家庭菜園をやっていて、母の受けも良くて、友人にも大事にされて、少し鼻にかかった声で童謡やアニソンを熱唱する顔も知らない隣人。

それは修司が知りたくて調べたことではなく、自然と耳に入ってきたものばかり。

顔も知らないくせにこれだけ知っているのもおかしな話だ。

どんな子なんだろう。

そういえば母は「いい子だ」とは言っていたが、容姿については一言も触れなかった。擦りガラス越しに見える人影程度じゃ相手の姿を思い浮かべられるはずがない。

ただ分かっているのは、あの歌声は嫌いじゃない、という事だけ。

「修司、お待たせ」

真横から突然降ってきた声に、修司ははっと我に返った。
振り仰ぐと、ちょっと驚いた顔をした沙絵が立っている。

「ごめん、そんなにびっくりした？」
「――いや、いいんだ。座れば？」

さっきとは違うアルバイトの女の子が沙絵の前にグラスを置くと、
「ミルクティを下さい」とメニューを見ずに伝えた。沙絵はアールグレイかミルクティしか飲まない。

「急に電話してくるからびっくりした。今日はもう仕事は終わったの？」
「まあね、沙絵も本当は予定あったんじゃないのか？」
「ん？いいよ。久々に修司と会えるんだもの。全然問題ない」

言って嬉しそうに笑う沙絵はやっぱり可愛いと思う。笑うとふわりと揺れる毛先や、グラスを持つ細い指が爪の先まで綺麗に整っていることに女らしさを感じる。綿菓子みたいな女の子。
だが、愛おしいとは思わなかった。
恋人の笑顔を目の前にしても心は弾まない。
もしかして沙絵の顔を見たら決心が鈍る、なんて一抹の不安があったわけじゃないが、やはり自分がこの恋に冷めてしまったことを自覚させられる。

「これからどこ行く？ご飯、なに食べようか」
「いや。食事はいいよ。それより話があるんだ」

「今すぐじゃないと駄目？あたしもうお腹ペコペコなの」

こんな風に沙絵と向き合うことも久しぶりだ。最後に会った時、彼女は春らしい色合いの長袖ワンピースを着ていた。裾が短くなった分が流れた時間を表している。

細い腕が記憶と重ならない。もしかして少し痩せたのだろうか。

そう感じて沙絵の顔を見ると、やはり顔周りも小さくなった気がする。

女の子ならば夏に向けてのダイエットというのもあるだろうが、沙絵の場合は違う。

修司に対する不安。

目の下のクマは上手く化粧でごまかせても、漂う憂いは作り笑いなんかじゃ消えない。

そういえば沙絵にはアパートが水浸しになったことも言っていない。「一緒に暮らしたい」と言い出されるのが面倒で、あえて何も告げなかった。もしかして何度か修司のいない部屋を訪ねてたのかも知れないが、沙絵は何も言ってこない。いや、言えなかったのだろう。

何も話してくれないことが更に不安をかきたて、「物分かりのいい彼女」を演じることを強要させた。

会えない時間などなかったように笑う沙絵。

今はその不自然さに違和感を覚える。

（沙絵も、もう限界なんだ）

修司はぐっと腹に力を込めてまっすぐ沙絵を見た。

「別れてほしい」

前振りもなにもない。

幸せな彼女であろうとする顔に、修司は告げた。
その笑顔がゆっくりと凍る様を見ても、心は驚くほど静かだった。

「沙絵の事、もう好きになれない。だから、別れてほしい」

勝手な言い分だが、物分かりの良い彼女を演じるなら、最後まで演じきって欲しいと思った。
これで引いてくれると助かる。
別れの原因が自分にありながら、なんて身勝手な考えだ。
一瞬の沈黙の後、大きく見開かれた目がゆっくりと瞬きを終えると、

「それでね、修司は何食べたい？」

沙絵はあらぬ方向に走り始めた。

「沙絵。ちゃんと聞いて」
「ほら、前に目の前で揚げてくれる天ぷら食べてみたいねって話してたじゃない。あたし良いお店見つけたの。今夜はそこに行かない？」

今度こそ修司は目を眇める。
聞こえなかったはずがない。この状況で聞き逃すことなどありえない。
瞬きをするわずかな間で別れ話をなかった事にした沙絵は、どうでもいい話を口にしている。
別れたくない。
全身がそう訴えていた。
ならばそう言えばいいのに。
なかったことにすれば、別れが訪れないとでも？

理由を問い詰めるわけでもなく、話を流したのはただ逃げただけだ。
突然の別れに気が動転したのはわかる。誰だってできることならなかったことにしたいだろう。
今、自分がひどい事をしていることも理解している。
だが恋愛は一方通行じゃ続かない。お互いが強く願わなければ越えられない事だってある。

「終わりにしてほしい」

わざとらしくはしゃぐ沙絵を前に、修司の心はどんどん冷えていく。
静かに別れを告げる修司が沙絵には見えていないのだろうか。

「あたしは修司が好きよ」

挙句の果てには、およそ場違いな言葉を口にする。
貼りついた笑顔も、その目だけは笑っていなかった。受け入れたくない現実を懸命に覆そうと必死な目だ。
大きな目がじっと修司を見据える。無言で問いかける。
『嘘でしょう?』と。
懇願するような眼差しに、修司は無言で首を振った。

もう沙絵が望む言葉は口にできない。

「――――ど…して?」

6）身勝手な男

☆★☆

その呟きを口火に、作った笑顔がボロボロと崩れ始めた。

「な…んで？あたし、何か修司の気に障るようなことした？」

震える声に涙色が混じる。

「仕事が忙しいことなら気にしてないよ？修司が仕事熱心なのは知ってるし、そんなとこも好きだもの。だって…」

「仕事は関係ない」

「だったら…っ」

「ごめん。もう無理なんだ」

「何が無理なのよぉっ！」

興奮した高い声が店内に響いた。

他の客達が「何事か」と一斉に視線をこちらに向ける。

他人の視線を浴びている事も気づかないほど激昂した沙絵。目を真っ赤に充血させながら下唇を震わせる。

「知ってるよ。修司がそんなにあたしのこと好きじゃなかったことくらい。でも、そんなの付き合いだせばいくらでも変えられるって思ってた。修司の一番近くにいて、いつも笑っていれば絶対にあたしを見てくれるはずだって。修司に釣り合うような彼女になりたくて、お洒落もメイクも話し方も練習した。いつでも『可愛い彼女』

でいたかったから。――なのに、なんで？好きになれないって、なに？あたし、うざいの？」

「違う。沙絵のせいじゃない。俺が悪いんだ」

一緒にいることが面倒くさいと思うようになった。

沙絵がいなくなっても平気だとわかったら、そばにいることが無意味に思えた。

全部、自分の我が儘。

「気が済むまで詰(なじ)ってくれていい。殴りたいならそうしてくれ。俺に出来るのはもうそれくらいしかない」

「それくらいしかないって…！――じゃあ、もう一度やり直してよ。悪いと思ってるのなら今度こそ本気で好きになって！」

金切声(かなきりごえ)に近い叫びが、修司に突き刺さる。

人の気持ちが強要されてどうにかなるものじゃないことくらい、沙絵だって知っているだろうに。

ふくれ上がった激情を持て余しているのか、必死で唇を噛みしめていた。

怒りに満ちた強い眼差し。

食い入るように睨まれようと、気持ちは揺らがない。

もう一度、彼女を好きになることはない。

（ごめん、沙絵）

「それはできない」

直後、顔面に衝撃が当たった。

「きゃっ！」

被さるように女性客の悲鳴が聞こえて、マスターが慌ててカウンターから出てくるのが見えた。
修司は濡れた髪も顔もそのままで、向かいに座る沙絵を見据えた。
指の色が変わるほどグラスを強く握りしめた沙絵は、泣きそうな顔で修司を睨んでいる。

気がすむようにすればいい。
沙絵にはその権利がある。

沙絵が嫌いになったわけじゃない。
好きだと思っていた。――違う、好きだと思い込んでいた。
いつだって好きかと問われれば答えは「否」だったのに、そこから目をそむけていた。
そうしなければ付き合う意味がなくなるから。
理子の事がなかったら、山下の言葉がなかったら、きっと今回も自然消滅を選んでいた。
別れを切り出したのは、沙絵が特別だったからじゃない。
修司に『特別』なことができたからだ。
沙絵との関係を解消することで、修司は動き出せる。この気持ちの正体を見に行ける。
その為の別れ。
その為だけの別れ。
相当むごいことをしている。どれだけもっともらしい理由を並べても、沙絵にしてみれば最悪だ。
いや、もっともらしい理由なんて果たしてあるのか？
気になる子ができた。ちょうど気持ちが冷めていた。だから別れることを決めた。
そこに沙絵の気持ちは欠片も組まれていない。
すべて修司の一存。身勝手な理由。それのどこがまっとうな理由

だというのか。

沙絵は可愛い。だが、それだけ。

これまで付き合ってきた彼女達と同じで、修司の心を掴む”何か”を持っていない。

例えば、あの鼻歌みたいな。

同じものを見て、同じように感じて欲しいと願ったこともない。

どう思うかなんて聞いたこともなかった。

マスターの入れるコーヒーを飲んで欲しいと思わなかった。

ここを待ち合わせにしていたのは、修司がここのコーヒーを飲みたかったからにすぎない。

いつだって沙絵と自分は、そばに居ながら気持ちは別の場所にいた。

1年も付き合っていながら、沙絵のことを何も知らないのがその証拠じゃないか。

「――他に、好きな子でも、出来た…？」

掠れた声で、沙絵が問う。

――好きな子。

顔も知らない人が気になるのは、好きと呼べるのか。

「まだ、よく分からない」

「は…っ、――なにそれ。意味わかんないし…」

ありのままの気持ちを告げると、沙絵は嘲笑（ちょうしょう）を浮かべてそれきり口を噤んだ。

持っていたグラスを乱暴にテーブルに置くと、そのまま両ひじをついて手のひらで顔を覆う。

「――行って」

ぽつりと零れた声に、修司は眉を寄せる。

「もう行ってよ。あたし振られたんでしょ？ならもう行って。一人にしてよっ」

投げやりな言葉が傷の深さを見せつける。

血を吐くような口ぶりに、修司は返す言葉がない。

山下が言った「適当な恋愛」の結末がこれだ。

好きだと言われたから付き合った。求められたから寝た。ごく自然のことのように流されていた。

なんてお粗末だろう。

修司は一度もこちらを見ない沙絵に、深々と頭をさげてもう一度「ごめん」と心から謝罪した。

テーブルを立つと、入口近くでマスターがタオルを差し出した。

修司はそれを首を振って断ると、財布から一万円札を抜いて差し出した。

「ご迷惑をおかけしました」

マスターにも頭を下げて、そのまま店を出る。

ラウルが不安げに修司を見上げている。「悪かったな」言って撫でるとクゥン…と寂しそうに鳴いた。

後味の悪いものが胸に重くのしかかってくる。

何度か経験した別れの中で、これまで味わったことのない感情。

自分で望んだことなのに、どうしてこんなにも重たい気持ちになるのか。

ぶつかってくる感情の強さも、むき出しの怒りも、それ以上の悲しみも。
すべてが「なぜ」と問いかけていた。
心変わりの理由。――始めから心がなかったと言えば良かったのか。

「あいつ、一度も泣かなかったな…」

メガネを外して濡れた前髪を後ろにかき上げると、溜息が出た。

（確かに「適当な恋愛」だったよ…）

☆
★
☆

家に帰って風呂に入れば、あの歌声が聞こえてくる。
風呂場の窓を半分開けておくのも、当り前になっていた。
今日もご機嫌な鼻歌は、修司の知らない曲だ。ロマンチックカラー満載の歌詞は、多分何かのアニソンだろう。もちろん歌詞が合っているかどうかなんて知らない。
テンポの良い鼻歌を聞きながら、湯船に顔を沈める。

（疲れた…）

仕事でもこんなに疲れたと感じることは少ない。
精神的な疲労は、体の芯まで疲弊させた。

濡れたスーツで帰宅した修司に母は物言いたげな顔をしたが、それも無視した。

今は何も言われたくない。
ぼんやりと湯船に浸かりながら、理子の鼻歌に耳を傾ける。
なんだか沙絵の気持ちを可愛らしくデフォルメしたような歌だ。
実際はこんなピンクっぽい感情だけで済まないのに、と勝手に愚痴る。

（アニソンに八つ当たりしてどうすんだよ…）

駄目だ、相当まいってる。
湯をすくって豪快に顔にかける。
沙絵にかけられたのは冷水だったなと思い返す。
だが冷たいとは少しも思わなかった。
あれがあの時、沙絵にできた精一杯の抵抗だったのかと思うと、やるせない気持ちになる。
沙絵は一滴も涙を零さなかった。
怒りで顔を上気させながらも、わななく口は修司を罵ることもなかった。
言いたいことは山ほどあったはずだ。
やりきれない感情を沙絵はどこに向けるのだろう。

（俺が考えることじゃないか）

手を放したのは修司だ。
納得できないと言われるかもしれない。
その時はまた同じ言葉を告げるだけだ。
だが、できることなら言いたくない。これ以上沙絵を傷つけたくない。

（違う。これ以上最低な自分を見たくない、だろ？）

ようやく顔を出した本音に、修司は自嘲した薄笑いを浮かべた。
沙絵の視線に晒されて、いかに自分が最低だったのか思い知った。
幾度の別れの中で経験したことのない、胸のつかえ。
その正体が罪悪感だとしたら、自分はどれだけ卑怯なことを繰り返していたのだろう。
最後の決断はいつも相手任せ。
その方が楽だから。自分はそれに倣うだけでいいから、相手を傷つけた自覚がない。
何が女の自尊心を傷つけない別れ方だ。
結局は自分が傷つくのが嫌だっただけじゃないか。

柔らかい印象しかなかった沙絵の、あれほど強い眼差しを初めて見た。
もしかして修司が思うよりずっと強いのかもしれない。
涙を見せなかったのも、恨みごとを言わなかったのも、修司が望んだとおりの「彼女」を演じきりたかったのだとしたら。
すげなくされても笑顔を浮かべられたのは、強さゆえのことだとしたら。

修司は大きく息を吐きながら首を振った。
今更考えても遅い。
胸のもやもやも、棘となってくすぶっている沙絵への罪悪感も、自分がまいた種。
理子は気が遠くなるほどの愛を歌う。

（俺もそれくらい愛してみたいよ）

そう思える相手に出会ってみたい。

7）スタートライン

☆
★
☆

食堂で竜田揚げ定食を食べていると、眼の前に影が落ちた。

「噂になってるぞ」

大盛りラーメンと大盛り炒飯で両手がふさがった山下がしたり顔で笑う。

「お、修司は竜田揚げかぁ。やっぱりそっちにすれば良かったかなぁ」

「失敗した」とぼやく姿に、軽く呆れる。

無言で足を伸ばして山下の椅子を押しやると、「サンキュな」と弾んだ声が返ってきた。

見かけによらず大食漢な山下は、今日も健啖（けんたん）ぶりを披露する気らしい。

よくそれだけ食べて仕事ができるものだと感心する。

午後から眠くなったりしないのだろうか。

修司の疑問をよそに、山下は鼻歌を歌いながら慎重に抱えたメニューをテーブルに置く。

と、動きが一瞬鈍った。

「どうした？座れよ」

怪訝な顔をする修司に、なぜか視線を泳がせる。
何か言いたげな顔に「なんだよ」ともう一度問いかけるが、

「いや。なんでもない。それより、噂になってるぞ」

と、はぐらかされた。
ごまかしたのが何だったのか。気になったが振られたネタの威力に吹き飛んだ。
少なくとも今日だけは外で食べれば良かったと後悔するほどに。

「だから知ってるって。二度も言うな。朝から視線が痛くてうんざりしてるんだ」

かくゆう今だってこちらを窺いながら、ひそひそと囁き合う女子社員の姿が目に付く。
今朝から遠慮がちに様子をうかがう者、興味津津で話を広げる者。

（いい加減にしてくれ）

そんなに別れ話がおもしろいのか。
突然の沙絵の豹変ぶりが、噂に尾ひれをつけた。今では社内中を縦横無尽に泳いでいる。
うんざりしてため息を漏らすと、ちょっとだけ同情めいた顔をされる。

「そりゃそうだろうよ。あれはさすがに度肝抜かれるぞ」
「俺もびっくりだよ。声かけられても誰かわからなかった」
「だろうな～。ふわふわして可愛いのが売りだったのに、あんなになっちゃって。いや、もともと可愛い顔立ちだったけど、あそこまでベリーショートにしたもんだから。なぁ？」

「なぁ、って何だよ」

豪快にラーメンをすすった山下をじろりとねめつける。

「いやね、一皮むけて可愛くなったって言ってるの。俺は今の沙絵ちゃんの方が好きかな」

「美咲ちゃんに言っとくよ。旦那が妄想浮気してるって」

「ばっ！バカ野郎！そんなこと言ってないだろっ！！」

いつにない慌てようにいよいよ怪しさが増す。訝しげな視線を向けると、山下は急いで視線をそらせた。

わざとらしい態度が、不信を煽ることを知らないのか。

今の山下は、まるで美咲に知られたと言わんばかりだ。

（言うわけないだろ）

冗談と本気の区別がつかないほど子供ではない。

第一、美咲を愛してやまない姿を嫌というほど見ているのだから、今さら誰かに目移りするなど本気で思うわけがないのに。

（ほんと、憎めないやつだな）

午前中の鬱憤が少し和らいだせいか、修司の顔に笑顔が浮かんだ。

途端、思い出すのは『あの事』。

心に余裕ができたそばから、どうして次から次と悩みを探してくるんだ。

休む間もなく活動する脳を恨む。

忘れていたわけではない。噂話で隅に追いやられていただけの『あの事』。

隣人の白雪　理子の事だ。

別れてから一週間。修司は未だに同じ場所で足ふみ状態を続けている。

沙絵との事が消化しきれていないせいもある。胸に刺さった棘は繁忙さも手伝って薄れているが、だからと言って踏ん切りがついたわけではない。

傷つけた沙絵がどんな答えを出したのか。

それが今も修司を踏みとどまらせている理由だ。

そこに追い打ちをかけたのが”あの事”。

昨日、修司は風呂場で衝撃の会話を耳にしていた。

『シュウちゃん、こんなとこでじゃれつかないで！』

理子がはなった一言は、修司を愕然とさせるには十分すぎる破壊力を備えていた。

思わず窓から隣を覗き見たが、ガラスに映る人影は理子ひとりだけ。

（シュウちゃんって、誰だよ）

自分じゃないことは知っている。が、理子が他の男の名前を呼ぶのは気に入らない。しかもそれが自分と同じ『シュウちゃん』ときた。

（俺だって”シュウちゃん”だろ？）

どうせ呼ぶなら俺に向かって言えばいいのに。

そうしたら――。そうしたら？

そうしたら何だ。

よぎった思考に、竜田揚げを掴む箸が止まる。

（俺、今なに考えてた？）

隣の家の会話に耳をそばだてて、その一言一句に目くじらを立てるなんて、立派に変質者じゃないか。

「……い、おい。修司」

「……あ？」

「あ？じゃねぇぞ。お前、俺の話聞いて無かっただろ」

ひとりで煩悶（はんもん）しているところを、強引に引き戻される。

「悪い…。なんだっけ？」

「ったく。だから、沙絵ちゃんのイメチェンの理由だって。何か聞いてないのか？」

「俺が知るかよ。気になるなら本人に聞けばいいだろ」

何度も言うが、沙絵とは終わっている。

次の日は休んでいたようだが、二日目からは普段通りに受付に立っていた。

今までは、大勢の社員の中に紛れていても沙絵の笑顔は修司に向けられていた。

だが、もうそれもない。

恋人からただの同僚になったことに、安堵と少しばかりの寂しさを覚える。

あれから一度も話をしていない。

何も言ってこないのは、沙絵なりに納得したからだろうと勝手に解釈している。

「聞いたさ。もう吹っ切れたのって聞いたら”はい！”だって。すっげぇ笑顔だったぞ。女の子はいくつになってもたくましいね」
「そっか」

それが今朝、状況は一変した。
後ろから声をかけてきた沙絵はそれまでのイメージをぶち壊して別人になっていた。
憑き物がとれたようにすっきりした顔、頭の形がわかるほどのベリーショート。ワンピースを脱いで、パンツにスニーカー、ジャケットを羽織り自転車に跨っていた姿には、さすがに驚いた。

『復活したけど、まだ許したわけじゃないから。悪いと思ってんなら今度奢ってよね！修司の財布まるごと飲み干してやるわ！』

ついでに性格までも変わっていた。
だが、真っ直ぐ修司を見て笑う沙絵はとても清々しかった。
答えが出たのだ。
新しい沙絵に、おこがましくも違う関係の入口を見た。
ただの綿菓子だったのに、今はパチパチキャンディーが入っている。
太陽の光を浴びた沙絵は、眩いほど綺麗だった。

「あ、やっぱりなんか知ってるんだろ」

これで俺も次に行ける。
一回り大きく見えた沙絵は置いておいて、「そんなことより…」と山下を見た。

「お前こそ、あの時の言葉忘れてないだろうな」

「――あの時？」
「とぼけるな。沙絵との事が解決したら、白雪　理子に行っていいんだろ」
「え…、おいっ。修司？」
そうだ。やっと会いに行けるんだ。
にやりと笑う修司を見て、山下の表情がひきつった。
「もうとやかく言わせないから」
言って、食べかけのトレイを持って立ち上がる。
「今度こそ、三千年くらい愛せるかもしれないしな？」
意味深な言葉を残して、不敵に笑う。
呆気にとられる山下を残して、修司は軽くなった足取りで午後の仕事へ向かった。

☆★☆

急にやる気になった修司を見送った山下は、その姿が見えなくなるとようやく息を吐き出した。
「三千年くらい愛せるかもだって。――今度は何歌ってたのかな、理子ちゃん」
さっきまで修司が座っていた席のひとつ空けた右隣、広げたお弁当もそのままに真っ赤な顔をして俯いている理子を見た。

「…多分、マ〇ちゃん？」
「多分って、絶対マ〇ちゃんだろ。どうすんだ？あのやる気は仕事以外で見たことないぞ。理子、マジでそれくらい愛されちゃうかもしれないぜ。しかもあいつ、しらっと千年足したぞ」

真顔で言った修司は相当痛い。
しかも、当人がすぐ傍にいることも気づいていないのだから、痛いどころか哀れだ。
近づく前に気持ちをばらしてどうする。
が、見た目が良いのは何かと得だ。
歯の浮くような台詞も、あの顔で言われると妙に納得してしまう。
真顔で迫られたら、男でもくらりとしそうだ。
つくづく恵まれた男。

「あんな恥ずかし～い王子様でいいわけ？理子ちゃん、これから大変だな」

耳まで真っ赤にした理子は、何度も手の甲を頬に当てて火照りを冷ましている。
修司はまだ自分の気持ちに自覚がないのか、それともあえて気づかないふりをしているのか。
「適当な恋愛」しかできなかった男が、ここまで会ったこともない女に固執する理由が、ただの好奇心なわけがないのに。

（意外とウブなんだよな）

体と性だけ大人になったが、修司の初恋は芽吹いたばかり。
それを大事に育てられるかどうかは、ひとえの修司の努力次第だ。
なにせ相手は”俺たちの大事”な理子。

（前途多難だな…）

最強の剣　～模造品の女～

『フジモリ・ケーキ』はお菓子の家だ。
いつも甘い匂いが漂っていて、たくさんのケーキが置いてある。
店長もその奥さんも、いつだって甘い香りがした。
将来はフジモリケーキのお嫁さんになることが、夢だった。

ＰＭ１０：００――。

店じまいを終えた藤森（ふじもり）　優治（ゆうじ）は凝った肩を揉みほぐしながら、自室の部屋の明かりをつけた。

直後、

「つけるなっ！！」

闇を切り裂く鋭い声に、一瞬動きが拘束される。が、すぐに正体を見て溜息を零した。

「沙絵…、何やってんだよ」

優治のベッドの隅で、小さい体をたたむように丸めた2歳年上の幼馴染み・沙絵。
会社帰りのまま来たのか、綺麗なワンピースを着ている。二軒隣の沙絵は、昔からフジモリ・ケーキの超がつくお得意様で、優治と

は兄妹のように育ってきた。
今でこそ綿菓子みたいな姿だが、昔は細い四肢を晒して、優治と共に野球やサッカーに明け暮れた。木登りもクワガタ採りも誰よりも上手かった。
さっぱりした性格は同性からも異性からも好かれたが、「ＬＯＶＥ」ではなく「ＬＩＫＥ」。
沙絵の恋愛はどれも長くは続かない。

『沙絵は楽しいけれど、なんか違う』

別れた男は今の沙絵のような綿菓子女を選んでいった。
よほど悔しかったのだろう。

大学卒業後、入社した会社では渾身の猫を被り、”わんぱく沙絵ちゃん”から”おとなし沙絵ちゃん”になった。
ジーンズをスカートに履き替え、スニーカーをヒールに変えて、モンキーヘアーも今では肩にかかるほど伸びている。
一年前、やたらカッコいい彼氏が出来たとはしゃいでいたのに。

（なんだ、あのぐずぐず感は…）

優治は部屋を突っ切って、うずくまる沙絵の前にしゃがみ込んだ。首を傾げて俯いた顔を覗き込む。

「彼氏と喧嘩でもしたか？」

最近会っていないと愚痴っていたから、とうとうブチ切れたんだろうなと適当に見当をつけると、大きな目がカッと見開いて優治を睨みつけた。

「――――た」
「は？何て？」
「――振られた。振られたんだってば！！」
「え、え、えぇぇっ」

真っ赤に充血した目、泣き顔に涙が一滴もないのは、悔しさで埋め尽くされている証拠。

「――――――マジかよ…」

唖然とする優治を前に、沙絵は顔をくしゃくしゃに歪めている。

「今日、突然。いきなり、別れてくれって！！好きになれないんだって！あたしのこともう好きじゃないんだって！！」

涙声なのに、涙は出ない。
沙絵は優治の袖をぎゅっと握りしめた。

「好きだったのに…！今も全然好きなのに、なんでぇぇ…っ」
「なんでって…」

（それを俺に聞くなよ）

ぎゅっと目をつぶるも、零れてくるのは嗚咽だけ。
苦しげに何度もしゃくりあげる沙絵に見かねて、優治は立ち上がる。

「ちょっと待ってろ」

言って向かった先は、フジモリ・ケーキ。

売れ残ったケーキを入れた冷蔵庫を開けて、ありったけのケーキをトレイに乗せる。種類は問わない。
とにかくあるだけ全部だ。
それからティーポットに並々と紅茶を作る。ミルクポットも忘れずに乗せる。
洗面所から姉のクレンジングシートと化粧水を拝借し、それらを持って再び自室に戻る。

沙絵は優治が出ていった時のまま、同じ場所にうずくまっていた。
ドアが開く音で上げた顔が優治が抱えているケーキセットを捕らえると、ようやく防波堤が崩れた。

大粒の涙が滝のように溢れ出す。

昔からそうだ。沙絵は負けん気が強く、泣かない子供だった。悔し涙は絶対に流さない。
泣くのは悲しい時だけ。
大好きだった祖父が亡くなった時、車に轢かれた猫を土手に埋めた後。
ボロボロと大きな目から涙を流して泣いた。

泣けない沙絵を唯一泣かすことができるのが、フジモリ・ケーキだ。
どれだけ悔しくてもこれがあれば、涙が出る。
泣くだけ泣いて、ケーキを食べる。ミルクティをがぶ飲みする。
それが沙絵のストレス解消法だ。

そしてそれを知っているのは幼馴染みの優治だけ。

「う…っ、う…っ。あぁ――――っ」

豪快な泣き方はとても女らしくないけれど。
声を上げてわんわん泣く姿を見て、ほっと胸をなでおろす。

「なんでぇっ。なんで振られるのぉぉ」
「ちゃんと理由を聞いたのか」

沙絵の前にあぐらをかいた優治がたずねると、ふるふると首を振った。

「そんなの聞けないよぉ。なんて聞けばいいのよぉぉ」
「なんてって、普通にどうしてって聞けばいいんじゃねぇの？」
「ど…してって聞いても、”ごめん”としか言われなかったもん！”俺が悪い”って。そんなんじゃ納得できないぃ！」
「じゃあ、なんでそれをそのまま言わないんだよ」
「だって、うざいって思われるの嫌だったんだもん。ずっと…ずっと”聞きわけのいい物分かりのいい彼女”やってきたのに、悔しいでしょう…っ！」

あぁ、なるほど。
こんなところで負けん気が出たな。
振られてもまだ好きな男。みっともない女と思われたくなかったんだろう。
普段から猫なんかかぶってるから、仇になるんだ。お前はそんな言いたいことも言えない女じゃないだろう。

溜息をついて、膝にのせた手に顎を乗せた。

「しゅうじぃぃ…」

振られてもまだ彼氏の名前を呼ぶのか。
めずらしく長く続いていると思っていたが、どうやら沙絵の一方的な踏ん張りだけで続いていたのだろう。

（好きだったんだろうな）

自分を偽ってまで、相手の傍にいたかった。
どんどん女らしくなる沙絵を誰よりも傍で見てきた優治だから分かることもある。
本気で惚れてたんだ。
だが、それも終わった。
相手の一方的な決別に納得できないのもわかる。
好きだから、本当の理由が知りたい。
そんなところだろうか。

「ほら、もっとちゃんと泣けよ。まだつっかえてるだろ？」
「う、ううぅぅ」
「ケーキもたくさん持ってきたからな。好きなだけ食え」

テーブルに乗せたトレイを指差すと、沙絵の視線が後を追いかけてきた。
が、ケーキを見てまた豪快に泣き始める。

「モンブランがないぃぃ…」
「仕方ないだろ。売れ残りなんだしさ。そもそもモンブランは秋だろ？文句言うな」
「優治の意地悪――っ。う、うあぁぁぁ、修司ぃぃ」
「あーーーもう、うぜぇな！」

髪に手を突っ込んで、かき回しながら悪態をつく。

「わかった！明日作ってやるから、なっ！これでいいだろ？？」
「今食べたいのにぃぃ…」
「そのかわりお前の好きなロールケーキがあるぞ？今日はマンゴー入りだ」
「マンゴー…？」

一秒前まで泣いていたのが、うそのようにピタリと涙が止む。

「ほら。吐くほど食え」

フォークでロールケーキを一口取って、沙絵に差し出した。
するとまたくしゃりと泣き顔が歪む。

「吐かないもん…っ」
「いいから食えよ」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔をもう片方の手に持ったタオルで拭いてやる。
泣きながら頬張ったケーキに、また涙が止まる。

「美味いか？」

尋ねると無言で頷いた。優治はまた一口差し出す。
半分くらいそれを繰り返すと、沙絵が優治の手からフォークを取り上げた。

「じ、自分で食べ…るっ」

まだまだしゃくり声の沙絵は、ロールケーキの皿を手に取った。

それを見届けて、持ってきたクレンジングシートで崩れきった化粧を丁寧に拭き取ってやる。

（ひでぇ顔だな）

どれだけホラーだと色の混じった顔を擦らないよう、優しくゆっくりと撫でる。

その間も沙絵はロールケーキを食べて「修司」と泣き、二個目、三個目を食べてはまた振られた男の名を呼んで泣いた。

持ってきたケーキがあらかた無くなる頃になって、ようやく涙もひと段落したようだ。

手当たり次第持ってきたが、トレイに乗ったケーキは２０個はあった。それを一人で平らげる沙絵には、毎回驚かされる。

お得意様だとしても、限度があるだろう。

あの小さい体は胃しかないのか、と呆れるほど沙絵は大食いで底なしの酒豪だ。

「お前、彼氏の前でその大食い見せのか？」

「もう彼氏じゃない」

「…元彼は知ってんのかよ？」

ぬるくなった紅茶にミルクをたっぷり注いで、沙絵が首を振る。

「どうせ雀の涙くらいしか食べなかったんだろ？ほんっと馬鹿だよな、お前は」

イミテーションのダイヤにいかほどの価値があるのか。

そんなものに引っかかる男がどれだけいると思う。

宝石はダイヤだけじゃない。男がみんな綿菓子女を好きなわけじゃない。

どれだけ自分を偽っても、サファイアがダイヤになれるはずがないだろう。
結局、最後は自分の持っている武器で挑むしかないのに。
必要なのは無敵の剣じゃない。そいつにだけ効く最強の剣だっていうことにどうして気づかないのだろう。
少なくとも、優治にとって沙絵の持つ剣は最強だ。
それが他の男に効くわけがない。

（マジ、ムカつく…）

こんなにも近くにいるのに。
何が悲しくて惚れた女の惚れた腫れたと騒ぐ姿を見続けなくてはいけないのか。
同じ数だけ振られたと泣く女を部屋で介抱する身にもなってほしい。

（拷問だろ？）

これがそうでなくて、何だと言うんだ。
しかも、沙絵は優治の気持ちなど知りもしないで、相変わらず振られた男の名前を呼んでいる。

（俺を呼べよ）

泣くなら、俺のことで泣け。
俺の部屋で、俺の傍で他の男の名前を言うな。

「ごちそうさま」

紅茶も綺麗に飲み干して、沙絵はほっと息をついた。

まだ濡れた目で優治を見る。

「美味しかった。…ありがと」

気恥ずかしいのか、最後は口ごもりながらだったが、優治には十分だった。

「もう良いのか？」

「まだわかんない。…でも、きっとまた泣くと思う」

それはそうだろう。好きの気持ちがそんなに簡単に消せるなら、誰だって苦労はしない。

どうにもならないから、苦しい。

「その時はまたうちのケーキ、食いに来い」

「うん」

ぐいっと手の平で涙を拭う姿は男らしい。

「今日のロールケーキ、優治が作ったやつでしょう」

「なんだ、分かったのか」

「わかるよ。どれだけ食べてると思ってるの」

「だよな。俺は絶対沙絵にだけは奢りたくない」

間違いなく破産する。

「ふふ…、じゃあ。罪滅ぼしに今度修司に奢らせようかな」

「おお、やれやれ。そいつの財布を食いつぶしてやれ」

沙絵ならやりかねない。

元彼の前でこの食欲が出せるなら、結構なことだ。飾らない沙絵を見せてやれ。

加勢すると、やっと沙絵が笑った。

化粧を落とした顔は、年齢よりもずっとあどけない。

目を強調したメイクや、果物みたいな唇よりも、こっちの沙絵の方がずっと”らしい”。

思わず腕を伸ばして抱きしめたくなるほどだ。

優治は伸びた手の方向を理性だけでその頭へと転換させた。

柔らかい髪をくしゃくしゃにかき回すと、途端に沙絵からブーイングが上がる。

「ちょっと！やめてよ！」

「ほら。もう食ったんなら帰れよ。明日も仕事なんだろ？」

これ以上はいろいろとまずい。

傷心の女に手を出すほど飢えてないが、相手が沙絵なら話は別だ。

よろこんで狼になるだろう。

だが沙絵は優治の葛藤も知らず、とんでもないことを言いだした。

「嫌。今日はここに泊まるの」

「なっ…！」

「帰るの面倒くさいし、こんな顔見られたくないもの。仕事も休むから」

「沙絵っ！」

「優治、なんかTシャツ貸して？」

言って、勝手にクローゼットを物色し始める。

「沙絵！」

「あ、これでいいか」

しかも、その場でワンピースのファスナーを降ろしだすのだから始末が悪い。

優治は光よりも早く飛びついて、その手を押しとどめた。

「頼むから帰れよ！」

「なんでよ？いいじゃん」

「せめて着替えはよそでやれっ！」

「今さら何言ってるの？バカじゃない？」

「バカはお前だろっ！」

最悪だ。

沙絵は惜しげもなく最強の剣を振りおろす。何度も何度も。

こっちは瀕死だというのに、無自覚は罪だ。

「…手ぇ出すぞ」

これが最後通告だ。

頼むから帰ると言ってくれ。

祈る気持ちで、沙絵を見下ろす。

すぐ傍にある体温にどうしようもないくらい愛しさがこみ上げてくる。

「…いいよ」

沙絵は優治の視線から逃れるように横を向いた。

「こんな日にひとりになりたくない。優治がしたいなら、いいよ？」

簡単に投げ出そうとする沙絵に無性に腹が経つ。
もし今目の前にいるのが他の男でも、同じ台詞を言うのか。

「お前なっ」

いい加減にしろ、と続くはずだった言葉が、途中で途切れる。目の前の体が小刻みに震えていることに気がついたからだ。

めいいっぱいの虚勢。
本当は全然良くないくせに、悪ぶろうとする姿に怒りもかき消される。
おそらく沙絵が口にした言葉のほとんどが本当だろう。でも、最後だけは嘘。
沙絵は投げやりで寝るような女ではない。

（毒されてるな）

甘いと分かっていながらも、結局は沙絵を許してしまう。
はぁっと腹の底から息をついて、いじっぱりな幼馴染の頭を撫でた。

「俺は明日も仕事だから。目ぇ覚めてもひとりだぞ」

沙絵の性格を分かってやれるのは、世界中できっと優治だけ。

「朝飯は母さんに言っておくから。ゆっくり寝ろ。そして一刻も早く忘れてくれ」

優治の気持ちに気づくのは、その後でもいい。
２２年の片想い。いまさら一日二日伸びたからなんだと言うんだ。

「明日になったら最高に美味いモンブランを食わしてやるよ」

だから、もう他の男で泣くな。

前途多難の片想いを抱える男に、沙絵はとびきりの笑顔で頷いた。

8）　手にした切符

☆★☆

『三千年くらい愛せるかもしれないしな？』

部屋を仕切ってある襖（ふすま）を取り払った、１６畳ほどあるリビング兼ダイニング。

畳張りの床に二人掛けのソファと、一枚板の長机。壁に沿って置かれた３２型薄型テレビと手作りのテレビラック。

部屋の隅には観葉植物。その脇に飾られている”××９”のフィギュア、ザ〇のプラモデル。

すべて幸子が使っていた時のままだ。

夕飯を食べ終えた理子は、ソファの上で膝を抱えながらパソコンの画面を泳ぐスクリーンセイバーを眺めていた。

立ち上げたＩ〇ｕｎｅｓからはピアノの音色がジャズを奏でている。

理子の隣で夕飯を食べ終えた幸子の置き土産『シュウ』が、人間顔負けのいびきをかいて眠っている。

ようやく１歳になったばかりのキャバリア『シュウ』。

女の子なのに勇ましいネーミングは、幸子のセンスだ。そして理子がこの家に住むことになった要因。

海外勤務が決まった時、幸子はシュウも連れて行く予定だった。

だが、会社が手配したマンションはペット禁止の物件で、日にちも差し迫っていたことから、急きょ理子に依頼が来た。

幸子の姉である母も二つ返事で快諾し、次の日には身の回りのも

のだけ持たされてこの家にやってきた。
実家から車で15分ほどの距離ということもあり、必要なものはその都度取りに行っている。
羽根のように柔らかい毛並み。茶色と白の割合が1：9のそれをゆっくりと梳きながらも、さっきから心ここにあらずだ。厳密にはお昼の社員食堂からだが。

『沙絵との事が解決したら、白雪　理子に行っていいんだろ』

そう言ったのは、企画開発部の課長補佐　浅野　修司。
はっきりとした顔立ちをした彼は、女子達の間ではちょっとした人気者だ。陰で『王子』と呼ばれている。
付き合っていた受付嬢の高木　沙絵と別れたらしいという噂話は、沙絵の変貌で肯定された。
スウィート路線を降りて別人になった沙絵には驚いたが、予告なしの爆弾発言をかました修司にはさらに度肝を抜かれた。

（聞き間違いじゃないよね？）

『三千年くらい愛せるかもしれないしな？』

「にゃぁぁぁぁ――――っ！」

手近にあるクッションを掴んで思いきり放り投げる。廊下へ続く襖にぶつかった音ではっと我に返り、慌てて駆け寄る。破れていないことを手で確認すると、自己嫌悪に落ちた。

（駄目だ…。ぜんっぜん消えてくれない）

修司の事は入社当時から知っていた。容姿の豪華さに目を惹かれ

たのもあるが、理子はずっと以前に修司に会っている。
子供の頃に一度会っただけの人間を、いったいどれだけの人が記憶しているだろう。
さして印象的な容姿でないなら、なおのこと記憶に留まりはしない。
廊下ですれ違っても、食堂で近くの席になっても、修司は一度も理子に気づかなかった。
だからと言ってこちらから声をかける勇気もなくて、時間だけが流れた。
それが一転したのが、今日のお昼。
修司の口ぶりは理子を知っているようにも聞こえた。

（もしかして思い出してくれた？）

一瞬淡い期待が膨らんだが、修司は理子の存在は知っていても顔を知らないということもわかった。
だが理子の歌う鼻歌は知っている。
修司が言っていた言葉は、アニメソングのワンフレーズだ。
昔大好きだったアニメの曲は、大人になっても忘れない。最近はインターネットで簡単にダウンロードできるので聞きたい時に聞けるのが便利だ。
ひとりでいる寂しさを紛らわせようと歌った鼻歌。
聞かれているとは思わなかった。
ここに越して来た時、修司が家を出ていることを聞いたときはがっかりした。
会社では接点がなくても、家が隣なら話す機会もあるだろう。そんな浅はかで邪な思いがあった。
その時、修司には沙絵という可愛い彼女がいたのも知っていた。
奪いたいわけじゃない。お隣さんとして理子の存在を修司に植えつけられるだけで満足だった。

だがふたを開けてみれば、すでに修司の姿は無く、全ては理子の妄想で終わった。

（いつの間に帰ってきたんだろう）

悶々としていると、来客を知らせるインターフォンが鳴った。

途端、寝ていたはずのシュウが遠吠えを上げる。

「こら、ダメよ」

縄張り意識の強い性格なのか、知らない人がくるといつもこれだ。

内弁慶のくせにと、視線で窘めて玄関に向かう。

「はい…」

引き戸向こうに見える人影が「浅野です」と答える。

（浅野のおじさんかな？）

浅野家とは、挨拶に伺ったのをきっかけに、時々物のやり取りをする間柄になっていた。

ひとり暮らしの理子を気にかけてくれ、なにかと力になってくれる。

地区の社会奉仕やごみステーションの掃除の仕方を教えてくれたのも、修司の母・美由紀（みゆき）だ。

「はぁい、今開けます」

サンダルを履いて戸を引くと、立っていたのは理子を悩ませている人物だった。

「あ…」
「こんばんは」

☆★☆

一瞬にして棒立ちになった理子に、修司は人畜無害な笑顔を浮かべていた。

「隣の浅野です。いつも美味しいトマトを頂いているので、今日はお礼を込めて、コレ持ってきました」

言って抱えていたスイカを持ち上げて見せた。

「親戚から送ってきたものです。良かったらどうぞ」

丸々としたスイカ。それを持つ修司とを交互に見やり、またスイカに視線を戻す。

これが修司の言っていた『行く』ということなのか。

食堂での宣言。その夜の来訪。しかも手の中にはおいしそうなスイカを持っている。

有言実行。

行動に移すまでの速さに舌をまきつつも、行動派の修司が眩しく思う。手にした切符が”修司行き”なのか分からなくて、改札口さえ通り抜けられずにいた理子とは対照的だ。

じっとスイカを凝視したままの理子に、修司は怪訝な顔になる。

「あの…」
「あ、すいません！いただきますっ」
慌てて修司の手からスイカを受け取る。ずっしりとした質量に中身が詰まっていることを確信する。手で叩くと良い音がした。
「さっき家で割ってみたけど、うまそうだったよ」
理子の心を代弁したかのような修司に、理子ははっとして俯いた。頂き物なのにくれた相手の前でなんて失礼な事をしたのだろう。恥ずかしさに顔が熱くなった。
「す、すいません…っ」
「いいよ。やっぱり気になるよね」
理子の失態を修司は笑って許す。
「それじゃあ」
「あのっ」
呼び止めた時だ。
突然バァァンと襖にぶつかる音に、二人して瞠目した。
振り返ると、僅かな隙間からシュウの鼻先が出ている。
強引に顔を出したと思ったら、あっと言う間に修司の足下をすり抜けて夜の外へと飛び出した。
「あっ、こら！駄目よっ！シュウちゃんっ！！」
「えっ、シュウちゃん？」
驚いた顔をする修司の脇を、下駄箱の飾り棚にスイカを置いて同

じように理子が駆け抜ける。が、修司の腕がそれを押し留めた。

「は、離してっ！」

「俺も探す」

言うや否や修司が矢のごとく駈け出した。二拍遅れで理子も後を追いかける。

敷地を出たところで「俺はこっち行くから。君は向こうね」と言い残した。

頷いて、理子は夜の闇に眼を凝らす。

暗いとはいえ、街灯がある。家の明かりもある。

後はシュウの行きそうな場所をしらみつぶしで探すだけだ。

まだそんなに遠くに行っていないはず。名前を呼べば振り向くし、ちゃんと自分が『シュウ』だということも理解している。

「シュウ――っ、シュウちゃ――ん！！」

近所迷惑を承知で声を張り上げる。

シュウはとにかく匂いを嗅ぎたがる。

他の犬がマーキングした匂いや猫の匂いを見つけては、自分の匂いで上書きして歩くのだ。

散歩コースでも特にシュウが気になっている場所が、家の裏手にある細道。

あそこは猫がたくさん集まっていて、シュウを刺激するらしい。

猫とカラスに異常な敵対心を見せるシュウは、姿を見るだけで狂ったように吠えまくる。

そのくせ、反撃の狼煙を上げられたら速攻で逃げ帰ってくるヘタレ。

隙あらば脱走してやろうと目論んでいるのは見え見えだったし、その機会を虎視眈々と狙っていたのも知っている。

（でも、本当に脱走するなんて思わなかった！）

周りに注意を向けながら、理子はそこに向かっていた。
遠くでシュウではない犬の鳴き声が聞こえる。おそらく理子の声に反応して鳴いているのだろう。
駆け足でその場所まで行くが、予想は外れていた。
シュウの姿がない。
どんどん不安が膨らんでいく。

（車道に飛び出して轢かれでもしたら…っ）

道端に横たわるシュウの姿を想像して、背筋が凍った。
妄想に鷲掴みにされた心臓が縮みあがる。

（駄目だっ！しっかりしろっ！！）

震え出した体を叱咤して、理子は自分に喝を入れた。
再び走り出した時、道向こうからこちらに歩いてくる人影が見えた。
薄暗がりの中でぼんやりと浮かび上がる白い物体。
目を凝らす間もなく、理子は駈け出した。

「シュウっ！」

☆★☆

腕に抱えてきたのは修司だった。

大人しく抱かれていたシュウは、理子の声に反応して尻尾を振っている。

「ど、ど、どこにいましたっ！？」
「俺の家」
「へ……？」
「うちも犬飼ってるんだけど、そいつの前でにらみ合ってた」
「じゃあ、さっき聞こえた犬の声は」
「うちの犬だ」
「よかったぁぁぁ……」

ため息と共に理子は安堵の声を零した。修司の腕にいるシュウに抱きついて、「も～、心配させないで」と柔らかい毛並みに顔をすり寄せた。

「すみません。ありがとうございました」

ほっとした表情で礼を述べて、シュウを腕の中から抱き上げた。腕に戻った5キロ弱の重みに、無事を実感する。長い耳を後ろに流すように何度も顔を撫でてシュウの存在を確認した。
修司はそんな理子を見て、申し訳なさそうに「こっちこそごめん」と謝る。

「俺がちゃんと閉めてれば良かったのに」
「いいんです。あたしもちゃんと襖閉めとかなかったのがいけないんだし。無事に見つかって良かった」

シュウも大きな目で理子を見上げて「ごめんね」と唇を舐めた。
そんなシュウの頭を修司が撫でた。
向ける視線の優しさに、釘づけになる。

綺麗な顔立ちをしているのに、少しも気どったところがない。誰にでも優しいけれど、誰も特別ではない。それが修司を『王子』と呼ぶ所以。

腕の長さ分もない距離にようやく気がついて、理子の鼓動が跳ねる。

今まで遠くから見ているだけだった人がこんなにもそばにいることが、どうしようもなく嬉しい。

『三千年くらい愛せるかもしれないしな？』

あれは理子が思っているような意味でいいのだろうか。

（それって、あたしのこと恋愛対象として見るかもってこと？）

そうだったらいいのに。

別れたばかりの人にそんな思いを抱くのは不謹慎だろうか。

「白雪さん、犬飼ってたんだな。母からは一人暮らしだって聞いてたから」

「この子は幸子さん…、あたしの叔母の犬なんです。どうしても連れて行けなくなったからって、うちにこの子の世話を頼んで来て」

「それでひとり暮らしか」

「はい。あたしももういい年だし、一回実家を離れてみなさいって母が」

「そう」

理子の話を修司は真面目に聞いている。さして面白くないはずなのにと思いながらも、こうして修司と話せることが嬉しかった。

「あのさ…。今更だけど、俺、浅野　修司って言うから」

「――同じ会社ですから、課長補佐の事は知っていました」

急に口調が変わった理子に、修司は微妙な顔をした。
改めて名乗られて、やはり覚えていないのだと知らされる。弾んだ気持ちが少しだけしぼんで落ちた。

「いきなりそれ？俺ら同じ年だと思うんだけど」

あえて役職で呼んだのは、修司との壁を感じたからだ。会社用の仮面をつけた理子だが、修司は気に入らなかったらしい。
『課長補佐』と言われても、フランクな修司の口調は変わらなかった。

「あ…の、じゃあ”浅野さん”」

言い直すと、笑われる。

「だから同じ年だって」
「それじゃあ…、”浅野”？」
「……」
「すみません。”浅野君”でお願いします」

いきなり呼び捨てはまずかったのだと反省し、妥協案を提示した。

「まあ、いいか」

修司はジーンズの後ろポケットに手を突っ込んではにかんだ。
そして食堂で見せたあの不敵な笑みを浮かべた。

「よろしく、”理子ちゃん”」

9）口実

☆★☆

家に帰った修司を待っていたのは、帰りを今か今かと待ちかねていた母だ。

「なに？」

言わんとすることの予想はついているが、一応尋ねる。

案の定、母は手招きをしながらテーブルに着くよう修司を促した。

「理子ちゃん、喜んでいたでしょ？」

「さぁね。喜んでたんじゃない？」

シュウの一件で『いただき物』の印象は薄れてしまったが、スイカが嫌いというわけではなさそうだった。

テーブルの上には、それの”保険”が乗っている。

スイカは食べ飽きたと言っていた母だが、これは別格だったようだ。

「なんて言って渡してきたのよ」

「トマトのお礼だって言ったさ」

「それで？」

「”親戚から送ってきたから”て言ったけど？」

しれっとした顔で言うと、母は目を丸くした。

「よくもまぁ、そんな嘘を。うちにそんな親戚はいないわよ」

そんな事は百も承知だ。

あのスイカは会社帰りに修司が買ってきたものだ。

フルーツ専門店で購入した一玉五千円のスイカ。

桐の箱に入ったそれを二玉買って帰宅した修司を、母は幽霊に遭遇したような顔で見た。

ひとつは理子に、もうひとつは保険として。

味見をしてこれならと思うものでなければ、理子には渡せない。

いい加減な物は贈りたくなかった。

山下に堂々と宣言をしてから、気持ちは晴れ晴れとしていた。

午後の仕事に向かいつつ考えていたことは、どうやって理子と知り合いになるかの一点のみ。

真剣な表情でパソコンの画面を睨む修司に「なんかあったんっスか？」と、部下が心配するほど難しい顔をしていた。

仕事以外で、これほど真剣になったことがあっただろうか。

黙っていても向こうからやってきた歴代の彼女達とは、わけが違う。初めて自分から動くことの難しさを痛感する。

あの手この手で接点を持とうとした彼女達の努力に感嘆する。

（大変だったんだな）

そちら側に立ってみないと分からないこともある。

あれこれ考えを巡らしていたが、やはり会社では接点が少ないと踏んだ修司が、次に狙いをつけたのが『お隣さん』という立場。

家庭菜園の野菜をくれるのなら、こちらから何かを返しても不自然ではないだろう。

それには『トマトのお礼』という口実はうってつけだった。

修司が探していたのは、きっかけ。
贈る物は何でもいい。ただしあまり大げさでないものだ。
理子が気兼ねせず受け取ってくれそうなもの。
考えあぐねた結果、スイカにした。
これならスーパーに行けば普通に売っているし、相手に気を遣わせないだろう。
夏はスイカという安直なイメージも、選んだ理由だ。
もちろん、普通のスイカを贈るつもりはない。
それで購入したのが、あれだ。見た目は分からないが、食べればその違いは一目瞭然。
きっと理子も満足してくれるだろう。
修司が贈ったスイカをうまそうに頬張る姿を想像するだけで楽しくなる。

ただし、この口実も弊害があった。母だ。
トマトのお礼だと言っても、通用しないのも知っていた。
それまで近所付き合いには無縁の息子が、ある日突然高級スイカを買って帰り、いそいそと隣に持っていく様子は、普通に考えて怪しい。
だが、ようやく理子へと歩き出せた喜びの前に、そんな事はどうでもよかった。
好きなだけ妄想すれば良い。
意味有り気な視線をものともせず、修司は今夜の出来栄えに満足していた。
しかも、修司を悩ませていたもうひとりの『シュウちゃん』の正体もわかった。

（まさか犬だったとはな）

探すと言ったは良いが、実際は八方ふさがりだった。どこを探せ

ばいいか見当もつかない。
どうしたものかと思案してきた時に聞こえてきたのが、うちの犬の鳴き声。
まさかの予感は見事命中し、シュウはいた。小さい体に尻尾を入れて、完全に脅えていた。それでも視線だけはしっかり相手を睨んでいたのだから、大したものだ。
どうやら入ったは良いが、入口はうちのが塞いでしまったせいで、出るに出られなくなったらしい。
名前を呼ぶと、シュウはすぐに駆け寄ってきた。よほど怖かったのだろう。
必死で膝に上ってくる姿に、つい笑ってしまった。
抱き上げた時、確認した性別はメス。

（”じゃれつかないで”だよな）

あれは足元でじゃれついてきたシュウに向けていった言葉だろう。どうりで人影が理子ひとりしかないはずだ。
今夜は顔を覚えてもらうことが目的だったのに、予期せぬ出来事のおかげでもう一歩進むことができた。

『浅野君』

恥ずかしそうに修司を呼ぶ理子を思い出すと、思わず口端が緩む。
素直に嬉しかった。
贅沢を言えば、下の名前で呼んで欲しかったが、いきなりそれは難しいだろう。
知り合ったばかりで、そこまで踏み込んでいけるようなタイプには見えなかった。

（あんな顔してたんだな）

初めて見た理子は、イメージしていた姿とは全然違っていた。
修司が勝手に思い描いていた理子は、小さく可愛らしい女性だ。
それこそ沙絵のような柔らかくふんわりしたイメージを抱いていた。
しかし実際の理子は、すらりと背筋がのびて、背中を覆うほど長い髪をしていた。
近づいた時に香っていた、フローラルな香り。化粧品の香りとは違う馴染み深い香りに、親近感を覚えた。
太くもないが細くもない、標準と呼ばれる体型。部屋着のワンピースからすらりと伸びる足の長さに驚いた。
小ぶりな顔立ちに、小さめの目が小動物みたいな理子。素顔の女を見たのは久々で、逆に新鮮だった。
初めて聞いた声は、鼻歌よりわずかに低いトーン。きっと電話口で聞けばとても同じ年とは思わないだろう。
柔らかい印象の話し方は好感を誘う。
何もかもがイメージとは違っていたが、落胆した気持ちはない。
むしろ、現実の理子と会えたことが嬉しかった。

「なによ、ニヤニヤして。いやらしいわ」

にやさがった顔に、あきれ果てた声が飛ぶ。

「母さん、隣が犬飼ってたの知ってた？」
「そりゃあ知ってるわよ。夕方になると散歩してるじゃない」
「そうなんだ。俺は一度も見たことなかったけどな」
「それはあなたの帰りが遅いからよ。時々吠える声も聞こえるわよ」
「へぇ、それも知らなかった」
「でもうちみたいにうるさく吠えないわね。あの犬種はそういうものなのかしら」
「しつけが良いんじゃないの？」

浅野家で飼われているのはコーギー。
狩猟犬ならば吠えるのも仕方がないだろうと思う一方で、好き放題させすぎたんじゃないかとも思っている。

「それがどうかしたの？」
「さっきスイカ持って行った時に、脱走した」
「えっ？？それで？シュウちゃん、見つかったの？」

どうやら犬の名前まで知っているようだ。
だったら前もって教えてくれればいいのに、と少し母を恨む。

「いたよ。小太郎とにらみ合ってた」
「あら、そうなの」

ほっとする母を修司はじっと見つめる。
神妙な顔の修司に、母の顔が怪訝な表情になった。

「なによ、じっと見て。気持ち悪い」
「理子ちゃん。良い子だったよ」

修司が理子をちゃん付けで呼んだことがそれほど意外だったのか。
それとも真顔で褒めたことに驚いたのか。どちらにしろ目が点になっていた。

「実はアパートの管理会社から修繕完了の連絡があったんだけど、もう少しここにいることにしたから」
「――――あなた、まさかと思うけど」
「家に帰ってきて良かったよ」
「ちょっと、修司？」

「そういうこと。そのスイカは好きにしてくれていいから。じゃあ、お休み」
「修司？」
まだ始まったばかり。
こんなにもわくわくするなんて、いつ以来だろう。
理子との出会いが、確実に修司の人生に色を添え始めている。
この気持ちの正体は、まだ誰にも言われたくない。

１０）約束

☆
★
☆

夏は昼が長い。
午後7時を過ぎて、ようやく辺りが暗くなり始めたころ、帰宅途中の車の中から見覚えのある後ろ姿を見つけた。
羽つきの扇を連想させる白い尻尾、それが群青色に染まりかけた空に向かってピンと伸びあがり、歩く度にふわふわと揺れている。
隣を歩くのは髪の長い女性。
ショートパンツから伸びた見事な脚線美に一瞬目を奪われるが、心が弾んだ理由はそこではない。
速度を落として、一匹と一人の後ろ姿に近づく。

「理子ちゃん」

呼びかけると、驚いた顔をした理子が振り向いた。長い黒髪がふわりと揺れて肩を覆う。

「浅野さんっ」

耳馴染んだ声。
黒目がちな小さな目が、転がり落ちそうなほど大きく見開く。
そんな理子の反応に満足しながら、修司は「呼び方、違うよ?」と笑って窘めた。

「あ…、そうでした」

「ついでに敬語も止めような」
「は…うん」

『はい』を『うん』と言い直したかったのだろうが、続けたせいでおかしな単語になった。
笑みを深くさせた修司が、歩道脇に車を一時停止させて、ハザードランプを点灯させる。

「もしかして散歩？いつもこんな遠くまで来てるんだ」

どういう道のりで来たのかは分からないが、直線距離でも1キロはある。そこを道にならって来たのなら、歩いた距離はそれ以上だ。
シュウは長い舌を垂らして、はあはあと荒い息づかいを繰り返している。よく見れば舌先に細かい砂が付いている。いったいどれだけ歩けばこうなるだろう。
まだまだ歩けるよ！と訴える黒目の横で、微妙に息のあがった理子がバツの悪い顔をした。

「いつもってわけじゃないんで…だけど、歩いてたら楽しくなってきちゃって」

つい歩きすぎました、と苦笑いを浮かべた。

「歩きすぎたってどれくらい？」
「えっと、今何時ですか？」
「7時20分くらい」
「あたしが家出たのが6時前だったから、1時間ちょっとくらいかな？」

さらりと述べた理子に驚いたのもつかの間、すぐに修司の眉間に

皺が入る。
いくら日が長くなっているとはいえ、犬を連れて歩いているとしても、その脚線美を晒して1時間半も外を一人で歩いていたのは関心しない。
世の中、善良な人間ばかりではない。
もし何かあったらどうするつもりなのだろうか。
後ろ姿は完璧なのに、本人にその自覚が全くないのだから始末に負えない。
特にその足は曲者だ。

（俺が彼氏なら、絶対にそんなパンツは穿かせない）

見ていいのは自分だけだ。

急に不機嫌なオーラになった修司に、理子は小首を傾げた。

「浅野君？」
「乗って」
「え？」
「送るから、乗って」
「い、いいですよっ！歩いて帰れますからっ」

理子は慌てた様子で胸の前で手を振って一緒に首も振った。
小動物みたいだと思いながらも、修司は頑として譲らない。

「駄目だ。今から帰ってもまだ２０分はかかるだろ。家に着くころには真っ暗になってるぞ」

暮れ始めると、夜は駆け足でやってくる。あっという間に暗くなるのだ。

「危ないから。女の子がひとりでで歩いちゃダメだ」

わかったら乗って、と助手席を指差す。

理子はまだ逡巡（しゅんじゅん）していたが、修司の気迫に押されて頷いた。

「でもシュウが居るから、車の中毛だらけになっちゃいますよ？」

それでもまだしぶっている理子にいい加減しびれを切らした修司が、運転席を降りて強引に助手席まで背中を押した。ドアを開けてまず理子を押しこむ。着ていたスーツのジャケットを脱いで、理子の足にかける。その上にシュウを乗せた。

再び運転席に戻ってようやくほっとすると、「すみません…」と蚊が鳴くような声で謝られた。

「謝るくらいなら、素直に乗って」

「ごめんなさい」

ため息をついて助手席を見やると、理子は体を小さくしている。

（しまった…。ビビらせたか…？）

ぎゅっと膝の上に乗せたシュウを抱きしめて俯いた理子を見て、強く言いすぎたことに気付いた。

だが今頃気づいても遅い。

たかが「送っていく」の一言が、どうしてスマートに言えないのか。

「ごめん。怒ったわけじゃないから」

声のトーンを和らげて、できるだけ優しく声をかける。
まだ知り合ってばかりの相手からいきなり強い口調で言われるのはさすがに怖いだろう。
修司は気を抜くとすぐに『怖い』と言われる事があるので、理子もそう感じたのかも知れない。
ようやく一歩近づけたのに、こんな些細なことで二歩も三歩も下がりたくは無い。
今までとは、何もかもが違う。
相手を気遣うことは、こんなにも難しい。
相手の機嫌を伺うなど、これまでの修司ならありえないことだ。
そうしてでも会話を続けたいと思うのは、どうしてだろう。
理子が見せるほんの少しの翳りに、焦燥を感じるのはなぜだ。
怖がらないでほしい。
じっと様子をうかがっていると、やがて理子が顔を上げてぎこちなくはにかんだ。

「わかってます」

本当にわかっているのだろうか。
不安はくすぶったままだが、これ以上弁解するのもわざとらしく感じたので、それ以上は何も言わなかった。
理子も車内のぎこちない雰囲気に居心地が悪いか、何も話さない。
修司は諦めてハザードランプを消して、アクセルを踏んだ。

（失敗した）

外ばかり見ている理子を横目で気にしつつ、胸の中で盛大なため息を吐いた。
修司の車に乗ったことを後悔しているようで、怖い。
ただ理子が心配だっただけなのに、どうしてこんなことになるん

だろう。
もっと話したいと思った。
それだけなのに、上手くいかない。
信号で止まると、それまで外しかみていなかった理子が、初めて修司を見た。
うかがうような顔には、まだ脅えた色が残る。
完全に怖がられたのだとわかって、数分前の自分を殴りたくなった。

「あの…」

それでも理子が開こうとした突破口を見逃すほど間抜けでもない。

「なに？」

顔を向けると、理子と目が合う。怒っていないことが分かるように、ことさら優しく見ると、理子の表情から強張りが抜けた。

「あの、尚(なお)ちゃん…じゃない。山下君の奥さん、今朝、無事に赤ちゃん産んだってメール来てました」

選んだ会話が山下関連なのはいただけないが。
理子と修司に共通する話題はまだ少ない。理子にすれば必死の話題だったのだろう。
しかし、

（なんで山下がちゃん付けで呼ばれるんだ）

付き合いの長さが違うのは分かっていても、おもしろくない。
自分はまだ敬語さえ取れていないのに、尚紀(なおき)の分際で生意気だ。

だがそんな事はおくびにも出さず、修司は人畜無害な笑顔で相槌を打った。

「俺のところにもメールが来たよ。初めての女の子なんだろう？」
「そうなんです。美咲もものすごく喜んでました！」

会話の糸口を見つけられたのが、嬉しかったのだろう。ほっとした表情で理子が言った。

「理子ちゃんは顔を見に行くの？」
「はい！明日行こうかと思って」

何持って行こうかな、と嬉しげに呟いた横顔に、ほっと胸を撫でおろす。
どうやら苦手意識は持たれずに済んだようだ。
そうとわかれば、また進むだけ。

「なら一緒に行かないか？」
「はい？」
「俺もまだ何贈ろうか迷ってたところなんだ。生まれた子が女の子なら、やっぱり女の子が選んだ物の方が良いと思わない？」

よくもしゃあしゃあとこんなセリフが出てくるものだ。と自分で自分に舌を出す。
母が聞いたら、また『まぁそんな嘘を』を呆れられそうだ。

ちょうど信号が青に変わり、再び車が動き出す。
理子は前を向いた修司の横顔を茫然と見つめていた。

（さぁ、なんて言うかな）

驚いた表情の理子は、本当に小動物だ。
瞬きする仕草や、つぶらな目が余計そう思わせるのだろうか。
左半身に神経を集中して、じっと理子の返事を待つ。

「そ…うですね。そう言われるとそんな気がします」

思わずガッツポーズをしたくなった。

「じゃあ、決まりだ。病院は何時から面会時間なのか知ってる?」
「確か１０時からだったと」
「なら午前中に買い物をして、午後から病院に行けばいいかな。俺、ベビー用品なんて初めて見に行くよ」

丸一日を一緒に過ごそう、という意図は伝わっただろうか。
やや強引な誘い方だったが、これに頷いてくれれば万々歳(ばんばんざい)だ。
もっと理子の事が知りたい。
もっといろんな顔を見てみたい。
どんな食べ物が好きで、どんなことに興味があるのか。何を見て感動するのか。
口ずさむ音楽は知っているが、それ以外の事はまだ何も知らない。
知らない事が知りたくてたまらなかった。

「いいと思います。じゃ、あの…。待ち合わせは何時にしますか?」
「１０時くらいでいいんじゃない?迎えに行くよって、お隣さんだけど」
「わかりました。じゃあ、待ってます」

暗くなりかけた車内では理子の表情までは読み取れなかったが、その声は間違いなく弾んでいた。

理子も修司と出かけることを楽しみに感じてくれたことに、無性に叫びだしたくなる。

どうして家路はこんなに短いんだろう。

もっと遠くの家ならば、もっといろんな話ができるのに。

見え始めた我が家を恨めしく睨みながら、車をカーポートに駐車する。

「ありがとうございました」

シュウを先に下ろしてから、理子が降り際に言った。

「多分、毛がいっぱい落ちてると思うんで、明日コロコロ持ってきますね」

「コロコロ？」

「ほら、絨毯なんかの上でコロコロ…て転がす」

「あぁ、あれね」

「そう。アレです。明日持ってきますから」

「了解。忘れずにお願いします」

「まかせてください」

修司も車を降りて、鍵をかける。

「あと、これはクリーニングしてからお返しします」

言われて、そういえばジャケットをかけたことを思い出した。素足の上に犬の爪は痛いだろうと思ったのと、理子に傷をつけるのが嫌だったのと、あとは自分の視線がそこに行かないようにするための目隠しのつもりでかけたものだ。

「そんなの気にしないで」
「でも、シュウの足汚れてるし、絶対白くなってますよ」
スーツなのに、と言う理子は、よほどこれが高級なものに見えるのか。
「別に大したもんでもないから」
事実、それは大量生産のメーカー品で、近頃流行りの洗えるスーツだ。
「ほら、貸して？」
車を回って、理子の前に立つ。ぎゅっとジャケットを抱きしめている姿に苦笑し、腕を出す。理子はしばらくためらっていたが、やがておずおずとそれを手渡した。
「すみません……」
どうせ謝るなら、その敬語をとってくれた方が良いのにと思う。
「それじゃあ、ありがとうございました。…おやすみなさい」
「おやすみ」
軽く会釈して、そのまま理子は隣へ入って行った。
残ったのは、理子の移り香とシュウの足跡がついたジャケットだけ。
「おやすみなさい、か……」

腕時計はまだ7時半にもなっていない。
１０分も満たないドライブ。でも実りはあった。

わくわくする胸が、ほんのりと温かい。
明日はもっと温かくなるんだろうか。

こみ上げる笑みを奥歯で噛み殺して、修司も家に入っていった。

11）デート

☆
★
☆

午前10時5分前。
修司は隣の家のインターフォンを押した。

「は～い！今行きま～す！」

引き戸越しで聞こえた声は、少し遠い。早かったかなと浮かれた自分を改めていると、「シュウ！お座り！待て。待てよ～」と号令を出す声がして、続いてドアが閉まる音。「よしっ！」の掛け声がしたと思ったら、引き戸が開いた。

「お待たせしました」

言って、笑顔の理子が現れた。

「準備は出来た？」
「はい。完璧です」
「シュウは？」
「家で留守番です」

理子が日中仕事に行っている間は、部屋でおとなしく待っているのだと言う。初めはサークルに入れていたが、トイレもほぼ完璧に覚えた事と、いたずらをすることなく待っていることが分かって以来、部屋を自由に歩ける状態にして留守番をさせているらしい。

「そうだ。コレ、持ってきました」

カゴバックから取り出したのは、昨日言っていた『コロコロ』。

修司が助手席のドアを開けると、早速シートを掃除し始める。毛だらけと言っても、乗っていたのはたった１０分程度。終始理子が抱いていたおかげで言うほど落ちていないが、理子はしきりに気にしていたので、好きにさせる。

ものの2分程度で元通りになった助手席に、改めて理子を乗せた。

「お邪魔します」

「どうぞ」

運転席に乗り込んだ修司を見て、理子がほほ笑んだ。

今日の理子は、少しゆとりのあるジーンズの裾をくるぶしが見える程度に巻いて、足元は真っ赤なローヒール。上はネックラインがゆったりとした、絹のような風合いの白いブラウスを合わせている。腰の部分で一度絞って、裾がドレープ状になっている綺麗なブラウスだ。

ショートパンツでないことにほっとしたいような、残念だったような複雑な感想はあるが、少なくとも目のやり場には困らない。

長い髪を片側で無造作にまとめていると、顔の小ささがよくわかる。

「それで、どこに行こうか。お勧めの店とかって知ってる?」

エンジンをかけて尋ねると、理子は得意気な顔をした。

「昨日いろいろとネットで見てたんですけど。市外の国道沿いにあるショッピングモールに可愛いお店があるんですよ。ただちょっと

遠いんですけど……」
「それって最近出来たあそこだろ？そんなに遠くないよ？」
「そ…うですか？なら、やっぱりそこに行きたいです」
「了解」

シートベルトを締めると、理子もそれにならう。

「では、出発」
「お願いします」

☆
★
☆

道中の車内は笑い声と、とりとめのない会話で終始喧騒に包まれていた。
理子が告げたショッピングモールは、車で３０分ほど行った場所にある。ただし高速を使っての所要時間だ。
ＥＴＣのゲートを通る間際、理子はしきりに「ゆっくり、ゆっくりですよっ」と何度も念を押していた。
ゲートのバーに当たるのを心配していたのだ。

（いや、そんなバカじゃないし…）

いくらなんでもここを猛スピードで通り抜けたりはしない。制限速度を守っているにも関わらず、理子はぎゅっとシートベルトを握りしめていた。
理子は出勤にパールピンクの軽自動車を使っている。ならば高速ぐらい乗ったことがあるだろう。
尋ねると、

「ありますよ？2回くらいなら」

と、耳を疑うような答えが返ってきた。

「2回？2回って、もしかして免許取ってからってこと？」

「はい。あんまり高速に乗る機会もなかったし」

「じゃあ、ちょっと遠出をしたいときは？」

「電車、ですね。後は友達と一緒だったり、どうしても行かなきゃ行けない時は下道で行ったりとか」

つまり、運転は得意でないということだ。

それならＥＴＣに慣れていないのも頷ける。

（これからもっと連れ出そう…）

出かけること自体は好きそうだ。ただ運転に不安があるせいで、いまひとつ行動派になれないのだろう。ついでに予備知識として都会に遊びに行った回数を聞くと、両手で足りる数だった。

未だに地下鉄の見方がわからなければ、切符も言われるがままボタンを押した、という筋金入り。

危なすぎる。

だが本人は露ほどもそうは思っていない。

「数をこなせば慣れるんですけどね」と呑気なものだ。それまでに絶対泣きを見る。

「ちなみに、方向感覚はどうなの？」

一抹の不安に駆られながら助手席を見ると、途端、理子が口ごもった。

「あ…っとですね、実はあんまり」

（やっぱりか）

「前に友達と大阪に買い物に行ったんですけど、駅でトイレに入ったらそのまま逆方向に歩いてました。似たような景色だと、どこを曲がったのかわかんなくなりませんか？」

「全然」

本物だ。たった今、修司の中で理子は最重要保護対象者になった。

ショッピングモールに着くと、早速目当ての店へ歩く。

先ほどの会話から、修司はよぎった不安を口にした。

「で、店の場所は分かってるの？」

「はい。1階です」

「……そこの案内図、見て行こうか」

自信満々で答えた理子は、首を傾げていた。

修司は入口付近の柱にある案内図から理子が告げた店を探し、歩き出す。その隣を理子が歩く。

途中、女の子が好きそうな雑貨屋やセレクトショップの前を通り過ぎる度に、理子の歩く速度が落ちた。

「後で見に来ような」

どこまでもマイペースな理子。だがそれに振り回されるのは楽しい。

修司を見上げて笑う顔が見れれば、それだけで嬉しいからだ。

たどり着いた店はベビー用品専門店というわけではなく、店の3分の1ほどは雑貨が置かれていた。
ベビー服やおもちゃ、マタニティ用品など、今はまだ無縁なものばかり。
いつの日か結婚して子供が産まれたら、買い物をしにくるのだろうか。その時、隣に立つ女性は彼女だったらいいのに。

（……て、なに考えてんだ?）

ごく自然に理子との未来を思い描いた自分に驚いた。
以前、山下に沙絵との結婚を追及された時、修司が思い描いた女性の声は理子だった。
今度ははっきりとそれが理子の姿と重なる。

「いらっしゃいませ」

女性スタッフがこちらに気づいて、笑顔で声をかける。
二十代くらいのスタッフに愛想笑いで対応している姿を見ながら、頭から幻想を追いだした。
そうしなければ本当に自分に暗示をかけそうで怖い。

「ちなみに浅野君は何か考えてました?例えば、こんなものがいいなとか」
「そうだな」

実を言えば、理子と出かけることばかり気持ちがいって、何も考えていない。
だが少し見栄を張りたくて、目に入った物を出すことにした。

「赤ちゃんの服…とかかな」

適当に言ったが、意外にも理子は「良いですね」と賛同した。

「あたしもいろいろ考えたんですけど、肌着ならいくらあってもいいかなって思って。後はおむつとか日常使う物でもいいと思うんですけど。どうでしょう？」

顎に手を添えて難しい顔になった理子に親しみを覚えた半面、適当な自分が恥ずかしくなった。

理子はあらかじめ店を決めていた。

昨日から考えていたのは明白で、真剣な表情に目を奪われる。

山下夫妻に訪れた天使を想う理子の気持ちが伝わって、胸が温かくなった。

「いいと思うよ」

きっと自分も驚くほど蕩(とろ)けた笑みをしていただろう。

案の定、真正面にいる理子が固まる。

次いではっきりと分かるほど頬を赤らめると、慌てた様子で視線を背けた。

「じ、じゃあそういうことで！ここからは別行動にしましょうっ！」

あたふたと急いで修司から離れようとする理子の手を思わず掴む。

「どうして？一緒に見ようよ」

「あ…、え…っと」

「駄目か？」

首を傾けて、小さな目を覗きこむ。ますます顔が赤らんだ。かわ

いそうに耳まで真っ赤になっている。
修司も自分の容姿が他人の目を惹いていることは自覚している。
それを目当てに寄ってこられるので辟易していたが、こういう使い道もあるのか。

「駄目じゃないです」

耳を澄まさなければ拾えないほど小声で話す理子はおもしろい。
いちいち修司を満足させてくれる。

「ほら、選ぼう?」

つかんだ手を引くと、おとなしく理子が付いてくる。手のひらで包んだそれは、修司の心の中みたいに温かかった。

(少しやりすぎたかな)

男に対する免疫がないのはなんとなく感じていた。この程度で恥ずかしがるなら付き合った経験も少ないだろう。
まだまだいろんな理子を見てみたい。一秒前まで覆っていた憂いが、一瞬にして晴れた気分だ。
修司は陳列してあるベビー服を手に取って広げる。

「ちっちぇえ…。何これ」

本当に自分と同じ人間が着るのか。新生児はこれほど小さいのか。
目を疑うほど小さな服。かつて自分もそうだったのだろうが、そんな昔のことはどうでもいい。

「そんなものでしょう?」

ようやく復活した理子が、横から口を挟んだ。

「浅野君、赤ちゃん見たことないの？」

初めて砕けた口調になった理子の問いかけに、修司は首を振った。

「あるけど、ベビー服は買ったことがない。見てるのと手に取るのってこんなにも違うんだな」

「でも、可愛いよね」

理子もそばにある服を手に取っている。

ピンクは女の子、ブルーは男の子、黄色はどちらでも使える色だろうか。

しばらく二人で物色していると、いつの間にか側に店員が立っていた。

「贈り物ですか？」

顔を上げるとさっきとは違う店員だ。中年代の女性は店員というより『初孫を持ったお母さん』という印象の婦人。

「はい。友人への出産祝いです」

「それはおめでとうございます。女の子ですか？」

言い当てたのは、修司がピンクの服ばかり見ていたからだろう。

「えぇ、昨日生まれたんです。でもどれにしたら良いか迷ってしまって」

婦人は嬉しそうにほほ笑みながら頷き、さりげなくアドバイスをくれる。

「洋服を贈る場合でしたら、少し大きめのものを選ぶと良いですよ。子供はすぐに大きくなりますからね。そうですね…、この辺りのサイズがよろしいんじゃないでしょうか？」

案内したのは、今まで見ていたものよりもう少し大きいサイズが並んでいた。

「肌触りも良いですし、なによりお値段もお手頃です」

ちゃめっけの効いた口調に、思わず二人してはにかんだ。

「どうする？」

「良いと思う。浅野君は服に決めるの？」

「え、理子ちゃんは？」

「あたしは、あれもちょっと気になってるの」

指差したそれはケーキに見えた。

「何あれ？」

「おむつケーキ。おむつで土台を作って、あとはオモチャとかタオルとかでデコレーションしてあるんだけど、見た目も良い感じでしょ？」

尋ねているが、目は買う気満々だ。

土台のおむつを囲うこげ茶色のタオル、ウエディングケーキを模した天辺（てっぺん）には、大きな耳が特徴のゾウが乗っていた。

（へぇ、ああいうのが好きなんだ）

やはり女の子だな、と思う。

「じゃあ、俺は服にするから、理子ちゃんはアレだな」

「うん」

贈り物はあっと言う間に決まった。

12）生まれた命

☆★☆

ショーウィンドウに映る姿を見たのは、これで何度目だろう。
頭ひとつ分違う背丈。並んで歩く二人の姿。前を向く横顔を見る度に、胸がときめく。
修司はいるだけで目を惹く。行き交う人がその姿を目で追うほど素敵だ。
そんな彼の隣に居る自分は、どう見えているのだろう。

恋人――――？

本当にそうなら良いのに。
贅沢な願望は、少しだけ自分を優越感に酔わせる。でもそれは偽物の優越感。

私服姿の修司は、会社で見るより近づきやすい雰囲気を漂わせていた。
スーツを脱ぐだけで、これほど人の印象が変わるものなのか。それともかけているメガネもいつもと違うからか。
どちらにしろ、ときめきが止まらない。
気合いが入りすぎないよう厳選を重ねた今日の服装は、隣に並んでもおかしくないか。そればかりが気になる。
せめてヒールはもう少し色を抑えた物にすれば良かった。
理子はジーンズよりも、スカート派。特に夏場はショートパンツか、膝上スカートが定番化している。ただでさえ暑いのに、肌を通

気性の悪い分厚い生地で覆うことへの抵抗感と、汗で肌に生地がひっつく気持ち悪さが嫌だった。

だけど、今日はジーンズ。

昨日、素足だったせいで修司に入らぬ気を遣わせてしまったことを反省して選んだ。なにより沙絵がスカートばかり穿いていたのを見ていたからだ。

比べてほしくない。前の彼女と同じと思われたくなかった。

残念なのは、修司はさほど理子の格好に興味はなさそうということだ。

彼女でもないくせに、元カノと張り合うなんてどうかしている。嫉妬じみた意地は、修司への想いを知らしめるだけなのに。

（結局、スーツもそのままになっちゃった…）

気にするなと言われれば、余計気にする。

優しい修司のことだ。クリーニング代は受け取ってもらえないだろう。ならばせめてものお詫びに、今日のお昼を奢ろうと決めていた。

だが、

「なんで？」

レジで真顔で聞き返された。

修司は顔が整っている分、ふとした表情が怖い。今もそうだ。

びくついている間に、さっさと二人分出してしまう。

（しまった…。奢るつもりが奢られてどうするの）

「……ごちそうさまでした」

借りを返すはずだったのに。肩を落とす理子を見て、修司が忍び笑いを堪えている。

「そんなに出したかった？」

「うん」

そのつもりで財布を膨らませてきたのだ。

どんな店に入っても平気なように、万札を４枚も入れてきた。今なら焼肉だって行ける。

が、食べたのは、ラーメン。

しかも、その理由が『理子ちゃんが食べたそうにしてた』からだ。

（そりゃ、おいしそうだなって思ったけどさ。初めてのデートできなりラーメン食べる女ってどうなのよ？可愛くないでしょ？）

少しでも修司には可愛く見せたいのに。

と言っても、何が可愛いのかもわからない。

久しぶりのショッピングモールは楽しかった。目移りばかりしてあの店この店とふらふらしては、修司を振り回していた。

修司は全く気にしていないようだったが、内心面倒くさいと思っていたんじゃないだろうか。

『王子スマイル』は、なかなか本音を見せてくれない。

本当は隣で笑いながら、一歩後ろをついてくるような大和撫子が好きだったらどうしよう。

「だったら、帰りにコーヒー奢ってよ。駐車場にスタバあっただろ」

「コーヒーでいいの？」

「いいよ。好きだし。理子ちゃんは？」

「あたしも好き。でもきっと頼むのはホイップクリームがいっぱい入ったヤツ」

それとドーナツ。
この後お見舞いに行かなければ、陳列してある分全部買い占めるくらいの大好物だ。

「じゃあ、そろそろ行こうか。戻った頃にはいい時間になってるよ」

買ったお祝いを持って、修司が言った。
当然のように、理子が買った分も持ってくれる。

（なんて良い人）

理子は急いで後を追った。

☆
★
☆

「み～さき」
「理子っ！？わぁぁ、来てくれたんだっ」

ベッドに腰かけていた美咲が、二人を見て目を輝かせた。

「え～、何なに？二人で来たの？」
「うん。だって今、お隣さんだもん」
「あ、そっかぁ。そうだったよね」

理子よりも１０センチは背の低い美咲は、二児の母には見えないくらい若い。
伸ばしていた髪を「洗うのが面倒になった」と言って、出産前に

ばっさり切ったので、今はうなじが見えるほど短くなっている。
おっとりした性格は、言いかえれば多少の事で動じない腰の据わった性格。
菩薩様のような深い懐で、お調子者の尚紀（なおき）を上手に遊ばせている。
きゃあきゃあと手を握り合ってひとしきり騒ぐと、頃会いを見て尚紀が止めに入った。

「はいはい。二人とも、その辺にしような。ほら、修司が遠くに行ってるぞ」

慌てて振り向くと、完全に乗り遅れた顔をした修司が佇んでいる。

「いや、大丈夫…」
「ご、ごめんなさい。つい嬉しくって」

駆け寄って謝ると、修司はあの優しい顔になった。
そういえば修司にはまだ山下夫妻との関係を話していない事に気づいた。
昨日、車の中で話を出した時は普通に返してくれたのを見ると、理子が知り合いだというのは知っているようだ。ただの友人で通しても構わないのだが、修司には本当の事を告げても良い気がした。

「あ…っと、美咲とは大学時代からの友人で、そして彼は…」

ちらりと尚紀を見て確認をとる。頷くのを確認して、

「黙っててごめんなさい。あたしの兄です」

と紹介した。
予想通り「えっ？」と驚きを漏らして絶句する。整った顔を驚愕

に染めながら、機械仕掛けのロボットみたいに、ゆっくりと理子を見下ろした。

「は……？兄って、何？」

「え～、つまり彼とは二卵性の双子で、親が離婚して別々に引き取られたんです。それから両方の親が再婚したので、苗字は違うんですけど、正真正銘血の繋がった兄…です」

端的に事実だけを述べると、修司の顔から表情が消える。

「お前……、そんな話聞いてないぞ」

凄みの効いた声に思わず体が強張った。

「ご、ごめんなさいっ」

「あ、違う違う。理子ちゃんじゃなくて、今のはあっちに言ったの」

言って修司が指差した先は、にやにやと気色悪い顔になっている尚紀だ。

ああいう顔をしている時は、ろくなことを考えていない。したり顔の兄を見るとため息が出る。

お調子者で、お祭り好きで、おせっかいな兄。

「そんなの言うわけないじゃん。わざわざ家の事情なんて吹聴して回るとでも？」

「それはそうだが……」

「な？それに俺と理子が双子だからって、修司に何か関係でもあるのかな？ん？」

「――――覚えてろよ」

よほど修司の反応が嬉しかったのか、尚紀はこの上なく上機嫌だ。
反面、美形が凄むと恐ろしい。
メガネの奥からは殺人的な視線が飛んでいる。

美咲はそんな二人を見て、ケラケラと笑っていた。恐ろしくないのだろうか。
結局ひとり気を揉んでいるのは、理子。なんとか場の雰囲気を和ませようと、修司が持ってくれていたお祝いを手に取り美咲に渡した。

「はい。これお祝い。おめでとうっ」
「わぁ、ありがとうっ！なんか大きいね。開けていい？」
「うん。もちろん」

美咲は丁寧に袋から出すと、箱のテープを外した。
中を覗いて上げた顔は、キラキラと輝いている。

「きゃあっ、めっちゃ可愛いんだけどっ」
「でしょ？美咲なら絶対喜んでくれると思ったんだ」
「え～、すごいっ！これおむつで出来てるの？あ、これはおもちゃだ。へ～、すごいすごい。ねぇ尚紀も見て」
「うん。見えてるよ。ありがとな、理子」

修司にはお調子者の尚紀も、美咲にだけは優しい。表情も口調も違う。

「これは俺から。美咲ちゃん、おめでとう」
「ありがとうっ。ふふっ、修司君からもいただけるんだ。嬉しいなぁ」
「ほ～んと、意外だよなぁ」

やはり尚紀はにやにやしている。

「あ、これ一緒のお店の袋だ。二人で買いに行ってくれたの？」

「うん。浅野君が運転してくれて。出産祝いを買うのは初めてだから一緒にって…んぐっ」

言いかけて途中で修司に止められた。

大きな手が口をふさいでいる。直接唇に手のひらが触れて、心臓が飛びあがった。

なにより後ろから伸びた手が引き寄せるように口をふさいだせいで、修司の体が背中に当たっている。

「――ふ～ん。一緒に、ねぇ」

真っ赤になった理子と、しらじらしいほど平然とする修司を見比べて、まだにやにやしている。

そんな様子を美咲が微笑ましげに眺めていた。

「そうだ。せっかく来てくれたんだし、リナの顔見てって」

「え？もう名前決まったんだ。早いね」

「そうよ。『里（さと）』に奈良の『奈（な）』で里奈。ちょっと待っててね。あ、尚紀は二人にお茶出してね。さっきお義母さんが持ってきてくれたクッキー開けてよ」

言い残して、美咲が部屋を出て行った。

残ったのは不機嫌なオーラをまとった修司、ご機嫌な尚紀、居心地の悪さを感じている理子。

修司は何を思っているのか、その無表情な顔からは何も見えてこない。ただ不機嫌なことだけは十分に伝わってくる。

弱り顔でいると、尚紀が呼んだ。

「気づいたか？『里奈』は『理子』から一字もらったんだ。ま、呼び方だけになっちゃったけどな」

言った顔は兄の表情になっていた。

「二文字だしちょっと似てるなって思ったけど、そこまでは分からなかった。でも、なんで？」

「あいつが、美咲がどうしてもって言ってたんだよ。自分達に女の子が産まれたら、絶対理子から一字もらうって。理由聞いたらなんて言ったと思う？『あたしは理子が大好きだから』だぜ？普通、こういう時は俺の名前からとるもんだろ？あ、そうだ。お茶入れないと。二人ともその辺に座れよ。コーヒーで良いか？」

矢継ぎ早に言って、尚紀が修司を見る。

「その前に、……おい修司。いい加減、俺の妹から手を離せ」

しっかりと理子の肩を抱いている手を、見たこともないくらいおぞましい視線で射抜いた。

飛び上がって離れる理子に、修司がかすかに舌打ちする。

「本当は上の子につけたがってたんだけど、男だったろ？あいつ、意地になってさ。産み分けをやるって言い出した時は、まぁ良いかくらいで付き合ってたんだけど。風水で南枕が良いって聞くと、夜でもベッド移動させるし、野菜中心の食生活が良いって聞くと、ずっと野菜野菜で……。俺、辛かった」

言いながらインスタントコーヒーを淹れたカップを二つテーブル

に乗せて、自分の分とクッキー缶を持ってベッドに腰掛けた。
泣きごとを言いながらも、尚紀は嬉しそうだ。

「無事に女の子が生まれて良かったね」
「本当だよ。エコーで女の子だって分かったときは、”お帰り、お肉ちゃん！”て思ったね。でもありがとな。修司もわざわざ悪かったな」

修司は尚紀を見ると鼻で笑った。でもその顔は少しも嫌そうには見えなかった。

「は～い、お待たせしましたぁ」

その時、カートに透明なケースに入った里奈を乗せて美咲が戻ってきた。
理子は立ちあがって駆け寄る。

「うわぁっ、かっわいい！」
「はい、どうぞ」

美咲はひょいっと里奈を抱き上げると、あっという間に理子の腕に入れた。慌てて両腕で抱きとめる。

「えっ、ちょ…。ちょっと！美咲？」

困惑する理子を見て、美咲は聖母様みたいに慈愛に満ちたほほ笑みを浮かべた。

「次は理子だよ。この重み、忘れないで」
「……美咲」

ツンと鼻の奥が痛くなる。こみ上げる感情は一体何なのか。
腕の中にある生まれたばかりの小さな命。これが命の重みなんだと知る。
何の汚れもない、まっ白で純粋な命。
『なぜ』も『どうして』もない。
涙があふれてくるのは、里奈が愛おしいから。
子を抱く喜びが、涙となる。
いつの日か、自分もわが子を腕に抱く日が来るのだろうか。
まだ3キロも満たない小さな命。
あどけない寝顔に、心から笑みが浮かんだ。

13）　ままごと

☆★☆

『お好み焼きをするので、食べに来ませんか？ただしビールは持参してね！』

理子からのメールに気がついたのは、午後の会議を終えて机に戻ってきたときだ。

絵文字も顔文字もない、文章と簡単な記号だけで作った文面。ところどころ敬語混じりなのが理子らしい。

アドレスの交換をしたのは、見舞いからの帰り道だ。

「アドレス？じゃあこっちからメールするから、えっと…、綴り教えて？」

赤外線通信を教えると、「そうでした…」と恥ずかしそうに苦笑した。

あの日、病室で里奈を抱いた理子は綺麗だった。母性にあふれたほほ笑みを、惜しみなく腕に眠る子に降り注いでいた姿は、修司の心に沁みた。

まるで最初からそこにあったものが戻ってきたように、わずかなズレもなくすんなりと落ちた。

あの時、頬を伝う涙をぬぐってやりたいと思った。

側にいてやりたいと感じた気持ちが、理子を意識しているのだと教えた。

偶然耳にした鼻歌が気になったのも、理子との未来を思い描いた

のも、彼女の一挙一動に振り回されるのも、ただの興味本意ではないことくらいもう分かっている。

ただ、まだそれを認めるにはあまりにも時間が短すぎる。

知り合って間もない人に、こんな感情を抱くのは間違っているだろうか。

マイペースでどこか抜けているのが危なっかしくて、そのくせ飄々（ひょうひょう）としている。そしていつも楽しそうだ。笑顔で隣にいてくれるだけで心が和む。その日遭ったことを笑って話す姿に、どれほど癒されているか、理子は知らない。

『7時過ぎになるけど、いいかな？』

『お待ちしております』

すぐに届いた返信に、口端が緩んだ。

修司はさっさと仕事を切り上げて、帰りにコンビニで6本入りのビールと、チューハイを2本買った。

こうして理子の家で夕飯を食べるのも、これで何度目だろう。

あれからもうひと月が経っていた。

理由を見つけては会う約束をしていたのは、最初の頃だけで、今は週末を一緒に過ごすのが当たり前になっている。

いや、修司が当たり前にさせている。

会う回数を重ねていく毎に、理子の事を覚えていく。

例えば、酒は好きだが飲む量は少ないこと。どれも舐めるようにちびりちびりと飲むこと。

その中で割と好んで飲むのが、梅酒とカルピスサワーだということ。

修司はそれぞれを一本ずつ買って、一旦家へ戻り、着替えてから隣へ向かった。

出掛けに母が、

「理子ちゃんにコレ上げて。おいしそうな巨峰をいただいたのよ」

と実が張った巨峰を持たせた。

インターフォンを押すと、「どうぞー」と声がする。

下駄箱の飾り棚には、観葉植物と『ルパン〇世』の食玩が飾ってある。先週は『E〇A』のフィギュアだった。頭と腕の一部がえぐり取られている部分までも再現してあるそれは、えぐい。理子は幸子が置いていったものだと言い張っていたが、

「このえぐい感じがたまんないのよね」

と恍惚に似た表情で熱く語っていた時点で、ボロが出ている。フィギュアが好きなのは男ばかりだと思っていたが、どうやら修司の偏見だったようだ。その証拠に理子の家には食玩やプラモデル、フィギュアが点々と飾ってある。

興味がないなら、まず片づけるだろうそれらが埃も被らず飾ってあるのを見ると、理子も満更ではない。

「お帰りなさい、浅野君」

台所でお好み焼きのタネを作っていた理子が、修司に気がついて顔を上げた。

『いらっしゃい』ではなく『お帰りなさい』。

ままごとみたいだ。

「お帰り、修司」

ただし、小姑付きのままごとはいらない。

「お前、また来てたのか？」

シュウを上に乗せてソファに寝そべりながらテレビを見ている山下に、修司はうんざりとして言った。

「つれないな。今日は俺がお好み焼き食べたいって言ったから、呼ばれたんだぞ」

俺のおかげだ、と言わんばかりの口調にますます気持ちが萎える。美咲が上の子を連れて実家に帰っている間、山下は何かと理由を付けて食事をせびりに来る。

一人で食べる夕飯は味気ないだとか、レトルトや弁当はまずいとか、白米が食べたいとか、修司から見ればどうでもいい理由ばかりだ。

ならば理子のもとへ通わず、美咲の実家に行けば良いだろうと思うが、それはしない。

「だって、行ったら絶対何かと用事させられるし、ちっともゆっくりできないじゃん」

要はぐうたらでも文句を言わない理子が心地良いのだ。

呆れた山下は放っておいて、渡された巨峰を理子に差し出した。

「これ、母さんから理子ちゃんへって」

「わぁ、おいしそうっ！後から食べようねっ。冷蔵庫に入れておいてくれる？」

顔を明るくさせて喜ぶ理子に心が洗われる。一人暮らしには十分すぎる大きさの冷蔵庫に飲み物と巨峰をしまうと、理子のすぐそば

に立った。

「手伝おうか？」

「大丈夫、もうすぐ終わるから。それに浅野君には”焼く”ていう大仕事が待ってるのよ」

「理子ちゃんはひっくり返すのはヘタクソだからな」

「も～。まだ言うかな」

ひっくり返した生地が、二つに折れて半円形の分厚いオムレツみたいになった。以来、タネを作るのは理子、焼くのは修司の役目になっている。

「お～い、修司。腹減った」

せっかくの気分に水を差すのは、いつだって小姑。

上半身をホールディングしているシュウが、山下が動く度に「ウウゥッ」と唸っている。

ベッドが動くな、と言っているようだ。

「尚ちゃんも寝転がってないで、油くらい引いてよ」

言って冷凍庫から脂身を取り出して十分に加熱されたホットプレートに落とす。修司は出来上がったタネの入ったボウルを抱えて、長机についた。

生地を流し入れたそばから熱で焼かれる香ばしい音に、山下を支配していたシュウが顔を上げた。そそくさと下りると、修司の隣でお座りをして愛らしく見上げている。

持参した飲み物と麦茶、それにハラミの入ったボウルを乗せたトレイを持って、理子がやってきた。

ホットプレートの空いたスペースで肉を焼くのも、理子流。

本人はさほど食べないが、肉は山下の好物だ。
台所へ戻り、まだ作業を続けている理子の後ろ姿を見ていると、ハラミを焼き始めた山下が言った。

「修司、俺は認めたわけじゃないぞ」
「なんだよ。藪から棒に。もっと話は脈絡を持ってしろ」
「理子のことだよ。確かに沙絵ちゃんとの事が片付いたらって言ったけどな、付き合っていいとは言ってない」

ジュワ…と肉独特の香りが立ち込める。

「それは俺と彼女が決めることだ。兄貴だからって口出しする権利はないと思うぞ」
「なくても言いたいの。あいつには本当に大事にしてくれる男でないと駄目だ」
「それって俺のことだろ？」
「馬鹿言え。理子はお前のことなんてなんとも思ってないよ。だって警戒心無いじゃん」

痛いところを突く。
普通、部屋に男を上げるなら、それなりの展開を予想するものだ。だが、理子にはそれがない。全くの無防備さに修司が戸惑ったくらいだ。もしかして山下と自分は同格なのでは、と不安が募る。
理子が修司の事を兄のような存在としか見ていないなら、警戒心が働かないのも納得がいく。
それでは嫌だ。
修司は理子の兄になりたいわけじゃない。

「遅くなりました」

ようやく作業を終えた理子が、修司の隣に座る。それだけで心が弾んだ。

修司に気があるから、隣を選んだのか。警戒心が無いからどこでも良かったのか。理子の心が知りたい。

（俺のことをどう思ってる？）

聞いてみたいが、聞きたくない。もし修司が思っている事がそのまま理子の口から語られたら、絶対に立ち直れない。やっとここまで来た関係すら壊れてしまいそうだ。

ならば、今はまだこのままがいい。

お隣さんとして、友人として理子に関われれば、今は満足だ。

「浅野君、もうそろそろ良いんじゃない？」

ひっくり返せと言われて、修司は二つある生地をひっくり返した。店で食べるより一回り大きいそれを器用に裏返す。

一人分ずつ三枚焼くより、みんなでつついた方が美味しそう、という理子の発案だ。

以前は、これをひっくり返したのは理子だったが。尊敬のまなざしで見られると、優越感が湧く。

こんなことでとしらける自分と、良いところを見せたい自分。

シュウは待ちきれないんだと、修司の腕を鼻で何度もつつく。

山下はさっさとハラミを焼いて晩酌を始めている。

焼きあがった生地にソースと鰹節をかけて皿に取り分けると、理子が笑顔になった。

ずっとこんな景色が続けば良いのに、と願う。

もうこの気持ちの正体が何なのか知っている。

だからどうか理子も同じ気持ちでいてほしいと、願ってしまう。

美味しそうにお好み焼きを頬張る姿に、自然と頬が緩んだ。

「おつかれさま」

言って、修司のグラスにビールを注ぐ理子は可愛い。お返しに理子のグラスにも梅酒を注ぐ。

いつからこんな尽くす男になったんだ。

呆れるくらい世話を焼きたがる自分が滑稽で、そんな自分も悪くないと思う時点でもう理子にハマっているのだろう。

口についたソースを指で拭ってやると、恥ずかしげにはにかんだ。

「冬になったらお鍋も良いね」

理子はごくさりげなく未来の話をする。

この先も続いていくのを望んでいるんだと思うと、たまらないほど嬉しさがこみ上げてくる。

「冬になったらな」

もうすぐ夏が終わろうとしていた。

１４）発端

☆★☆

「白雪さんって、課長補佐と付き合ってるんですか？」

営業課まで請求書の確認をしに行った帰り、理子を後ろから呼びとめる声がした。

振り返ると、胸のあたりまで伸びた黒髪が印象的な女性が挑戦的な視線を向けている。

少し見下ろす格好になったので、背は理子よりも低い。

「あ…と、ごめんなさい。あなたは…」

「企画開発部の清水です」

企画開発部は営業課の途中にある。理子が通るのを見て後を追いかけてきたのだろう。

だがその内容がこれか。

とても勤務時間中に呼び止めて話す事だとは思えず、『またか…』と胸の内でため息をついた。

最近やたらとこの質問をされる。

顔を知っているくらいの女子社員や、同じ課の男性社員までもが口を揃えて同じ事を言ってくるのには、辟易していた。

発端は、修司の変化だ。

廊下ですれ違えば声をかける、食堂で一緒になれば同じテーブルに座る。

修司がはっきりと態度に表わすようになったのは、夏の終わりご

ろから。同僚で同期なら珍しくないことだろうが、修司は『王子』だ。

誰にでも優しいが特別はいない、というのが謳い文句だった男が、ここまで誰か一人をかまう姿を見たことがない。付き合っていた沙絵ですら、この扱いはなかった。

当然、社員達の目に二人は「特別な関係」と映った。

理子が勤務する会社は、社内恋愛を禁止していないので、昼休みは肩を寄せ合ってランチをとっている姿は当たり前に見られる。

隣に座る人が違う男性ならば、ここまで気に掛けられないのだろうが、相手はあの『王子』だ。

理子と修司の向かいに尚紀が座っているのに、誰の視界にも入らないから困っている。

修司ほどではないが、尚紀もインパクトのある外見をしているはずだが、修司の変貌の前には霞んでしまった。

（大人なんだし、放っておいてくれないかな…）

二人の様子を温かく見守る目は、まだ少ない。

沙絵が彼女の座にいた時は、「高木　沙絵なら仕方がない」と納得せざるをえない部分があった。それは沙絵が誰の目から見ても可愛いからだ。

だが、理子は違う。人ごみに紛れたら分からなくなるよう『「普通』の容姿。

だからこそ、こぞって真意を聞きたがるのだろう。

「……付き合ってないわ」

語尾につく『まだ』の一文字を口の中に残して理子は言った。

残酷だと思う。

誰よりも答えを知りたいのは、理子の方なのに。

付き合っていないと自分の口で否定する度に、現実を見せつけられる。

（付き合ってますって、言えたらいいのに……）

そう言えば、もう誰も聞いてこなくなるのだろうか。

ううん、違う。今度はきっと「どうしてあなたが？」と言われるに決まっている。

ならば嘘でも「付き合っている」と言ってやろうか。だがそんなことをすれば、きっとすぐに修司の耳に届く。

修司は理子をお隣さんで友人としか思っていなかったら、とんだ思い上がりだ。

彼の気持ちを聞きたいけれど、怖い。

そのせいで今の関係が壊れるのが怖い。

ずっと見ているだけだった人が、やっと近くに来てくれたこの場所を離れたくない。

そう思うととても告白する勇気はない。

もっと、確信できる何かがあれば。

そんなものがあれば、誰も苦労しない。

思わず漏れたため息が、清水に油を注いでしまった。

馬鹿にされたと勘違いした清水が頬を紅潮させて、理子を睨む。

「付き合ってもいないなら、あまり課長補佐の周りをうろつかないでください」

嫌悪と侮蔑を眼差しに乗せて、理子を睨みつける。

きつい視線を真っ向から受け止めて、ぐっと奥歯を噛みしめた。

ここまではっきりと「邪魔者」扱いされる理由は何だろう。

理子は誰に対しても同じ返事を返している。

それに対して納得いかない顔はされるものの、だからと言って何

かを言われたりされたりしたことはない。
こんな風に邪険にされる覚えもない。

（うろつかないでって……）

余計なお世話だ、と怒鳴ってやりたい。
清水は正論を述べているつもりだろうが、見当違いもいいとこだ。
その目は何を見ている。理子と修司の間には必ず尚紀がいるのが見えていないのか。
勤務時間中ならいざ知らず、昼休みに世間話をするのがいけない事だとは思わない。
周りを不快にさせるような態度もとっていない。会社にいる間は、常に修司を『同期』という視線で見ることを心がけている。それは修司とて同じだろう。
会社でなければ会えないわけではない。ほほ笑み合うのは帰ってからで十分だ。
清水がどんな意図を持って理子を非難したのかはわからない。
これが部下という立場からではなく、個人的な嫉妬から出た言葉だとするなら…。

「もう、行ってもいいかな」

これ以上、清水とこの話を続ける気はなかった。
理子ですら今の状況をうまく理解できないのに、他人に話せるわけがない。
付き合っているかと問われたから、ありのまま伝えた。
それだけのことなのに、なぜこんな言葉を言われるのだろう。
清水は理子だけが悪いと責めた。
苛立った気持ちが、理子にすげない態度をとらせる。それが清水の自尊心を傷つけた。

「ちょっと構われてるからって、いい気にならないでっ」

捨て台詞を残して走り去った後姿を唖然と見送った。これでは残された理子が悪者みたいだ。

釈然としない状況に、額を手のひらで擦りながら重たい息をつく。

「苦労してるみたいだな」

ポンと肩を叩いて、営業課長の深澤（ふかざわ）が現れた。

外回りの帰りなのだろう、深澤からは少しだけ土のにおいがした。

「深澤さん…。聞こえましたか」

「たまたま、ね」

苦笑いを浮かべて尋ねると、深澤は少し肩をすくめて見せた。

「お見苦しいところをお見せしました」

「それは構わないが、随分な言われようだったな。いい気にならないで、か」

清水の捨て台詞を繰り返して含み笑いをする。

「それで、本当はどうなんだ？付き合ってるんだろ？」

「深澤さんまでそんな事を…。本当に付き合ってません、まだ」

今度は、ちゃんと最後まで続ける。

営業課長という肩書の他に、深澤には『親友の恋人』という特別な肩書がある。そのせいもあって、心を開いて話せる一人だ。

「ふぅん。まだなんだ。浅野って意外とオクテなんだな。理子ちゃんにその気はあるんだろ」
「…はい」

隠しても仕方がないので、理子は素直に頷いた。

「だったら、理子ちゃんから言えばいいのに。付き合って欲しいって」
「……言って振られたら、立ち直れません」

だからいつまでも同じ場所で足ふみをしているのだ。

「ま、それはそうだ」

深澤も今の恋人を落とすまでに珍しく時間をかけた身なので、理子の言葉に素直に頷いた。

「あいつは？理子ちゃんが陰で因縁つけられていることを知ってるのか？」
「因縁って…」

大げさな言い回しに、思わず笑いがこぼれる。

「浅野君には言ってません。別に何かが変わるわけでもないですし。それにあんな事言われたの、今回が初めてですよ」

そう、今は物珍しさが目障りなだけ。時間が経てば見方も変わってくるだろう。

「だといいがな」

何か言いたげな深澤だったが、それ以上を語ることはなかった。

☆
★
☆

理子の杞憂を知らない修司は、変わらず優しくて甘い。

「今年の秋祭りは、一緒に行こうか」

ソファに並んでテレビを見ていた修司が、当り前のように理子を誘う。二人の間に入って寝息を立てているシュウに「お前も一緒な」と声をかけた。

修司の言う秋祭りは市で一番大きな祭りだ。１０日間かけて行う祭りには大勢の市民や観光客もやってくる。

『山車（やま）』と呼ばれる神輿に武者鎧を付けた人形を乗せて大通りを練り歩いたり、カーニバルやパレード、夜は民謡踊りもある。

アーケードの軒下沿いにひしめく屋台に目移りしながら歩くのが恒例で、人ごみの中を歩くせいか一周するだけでくたくたになる。

最近は疎遠になっていた祭りだが、修司が連れて行ってくれるのなら、ぜひ行きたい。

その時、思い切ってあの日の事を聞いてみようか。

飾り棚に食玩と一緒においてある、色褪せた『キン〇マン』のゴム人形。修司はいつ気づいてくれるだろう。

「うん」

一緒にいられるなら、少々のやっかみくらい耐えられる。

清水が修司に上司以上の感情を抱いているのは、目を見て感じた。
だからと言って理子が身を引く理由はない。
自分の存在で他の誰かが泣いているとしても、理子にはどうすることもできない。
修司が好きだから。
この現実が偶然が重なっただけのものだとしても、やっと舞い込んだ切符を手放すわけにはいかなかった。

15）繋いだ手

☆
★
☆

今年の秋祭りの初日は、日曜日に当たった。
昼過ぎに実家に戻ってきた理子は、クローゼットの上段にある桐の箱を取り出していた。
修司は「シュウも一緒に」と言ってくれたが、今回ばかりは遠慮してもらう。
せっかくの『お祭りデート』。
邪魔はされたくない。
箱の中には成人式に着た振り袖一式と、大人になって作りなおした浴衣が入っている。
黒地に花火を模した斑点がちりばめられた、少し大人の雰囲気の浴衣。これに紅い帯を結ぶつもりだ。

「ママ、もう時間ないよっ」
「大丈夫よ。浴衣はすぐに着れるから。それより自分の準備は出来たの？」
「うん。髪はこれでいい？おかしくないかな？」

ドレッサーの前で1時間もかけて結った渾身の髪。おくれ毛を残しつつ、ひとつにまとめた髪に蝶の飾りがついた簪を挿した。

「浴衣からのぞくうなじに、ハラリとかかる髪が男心を掴むのよ」

髪型をどうしようか思案していると、いまひとつ意味のわからな

い母の言葉におされて、この髪型に決めた。ＹｏｕＴｕ○ｅを見ながら見よう見まねで仕上げた割に、なかなかの出来栄えだ。

昨日、浴衣を着つけてほしいと連絡した時に言われた言葉が「彼氏と行くの？」。

よほど娘の男っけのなさを心配しているらしい。

２９歳という年齢の娘を持つ母なら当然の悩みだろうが、あからさまだ。

母には会社の同僚で、幸子のお隣さんとだけ伝えたのだが。

（完全に勘違いしてるし…）

「あらっ、下着はつけたまま？腕組んだ時に、ふわんと柔らかい感触を伝えなくていいの？」

「何にもつけてない恥じらいが色っぽいのに、わかってないわねぇ」

そんなもの分からなくていい。

待ち合わせの時間は、午後６時。あっという間の半日だった。

☆★☆

「あら、まぁっ！」

時間通り実家に迎えに来た修司を出迎えたのは、母だ。

玄関先から上がった黄色い声に驚いて、脱衣場の鏡で最後のチェックをしていた理子が飛び出す。

視線の先では、修司の男前ぶりに母が大はしゃぎをしていた。

韓流スターを目の当たりにしたような興奮ぶりを見せる母の後ろ

から、申し訳ないと無言で詫びる。
放っておけば、デジカメを持ち出しそうな勢いだ。
修司は笑っていたが、その王子スマイルがますます母を虜にしたことに気づいていただろうか。

「ごめんね、忙(せわ)しない人で」

車に乗り込んで、改めて母の行動を詫びる。

（まったく、油断も隙もないんだから）

少女のように目を輝かせながら「ママが一緒に行きたいわぁ」と、修司の腕に絡みついた母を無理やり引きはがして家を出てきた。

（あたしもしたことないのにっ）

もちろんそれはオクテの娘をからかうための小芝居だったが、組まれた腕に釘づけになっている理子にはパンチが強すぎた。
ぎょっと目をむく理子に見せつけるように、しっかりと腕を抱きしめていた母。
思い出すだけで、腹が立つ。
まさか母親に嫉妬する日が来るなんて、思いもしなかった。
修司も修司だ。何もされるがままになっていなくても良いのに。
だが、確かにこの腕はそそられる。
理子はハンドルを握る筋張った腕を横目で見た。隆々（りゅうりゅう）としているわけがないが、それなりに筋肉がついた腕はしなやかでたくましい。
どうして腕なのに、色気を感じるのか。
尚紀を見てこんな風に感じたことはない。当たり前だ、ただの腕なのだから。

それが修司の腕だと思うと触ってみたいという欲求が生まれる。
母がしていたように、ギュッと抱きしめてみたい。何もつけていない胸が当たったら、修司はどんな反応を見せるだろう。……良いかもしれない。

（って、あたしバカでしょ）

ハレンチな妄想に夢中になっていた自分が情けなくなる。
うなだれると修司が「でも楽しいお母さんだね」と慰めの言葉をかけた。
落ち込んだのは自分が変態だからとも言えず、曖昧に笑ってごまかす。修司には悪いが、誤解はそのままにしておくことにした。

「浴衣、似合ってる」

運転の合間に、修司が言った。

「ふふっ、ありがとう」

何かで読んだことがある。たとえリップサービスでも褒められた時は、変な謙遜はせず素直に受け取れ、と。もちろん時と場合はあるが、今は教えに従って良いと思う。
ほら、修司は満足気だ。
間違っていなかったことにほっと安堵し、浴衣を着てきた自分に小さくガッツポーズを出した。
街頭が灯り始めた道沿いには、理子と同じように浴衣を着た女の子がたくさん歩いている。隣を歩くのは彼氏だろう。
一瞬で過ぎる人達の表情まで見えないが、きっと幸せな笑顔を浮かべているはず。
自分たちもあそこに紛れたら、恋人に見えるのだろうか。

あんなふうに手を繋いで歩いてみたい。
今夜は大勢の人が集まってくる。理子や修司の友人、会社の人にも出くわすはずだ。
その時、修司は理子をなんと呼ぶのだろう。
友達、……それとも。
自分はなんて言えば良いだろう。
心の中で修司に『友達』の二文字を当てはめるが、うまくいかない。

（友達なんかじゃいられないくせに）

理子がここ数年秋祭りから疎遠になっていたのは、この年でまだ一人でいる自分を知り合いに見られたくなかったからだ。
２５歳を過ぎたあたりから、友達はひとりふたりと結婚していった。
「いつでも誘って」と言われても、独身気分ではもう誘えない。
彼女たちには優先させる存在が他にあるのだ。
家族に囲まれた友達は眩しくて、とても直視していられない。
そこには理子が羨んで仕方のないものばかり詰まっている。
だが今年は違う。隣には修司がいる。
誘われた時は、本当に嬉しかった。
彼氏ではないけれど、理子の好きな人。
だからこそ、今日だけは誰にも会いたくない。
修司を『友達』と言いたくないから。
もしかして秋祭りに誘ってくれたのは、「期待して良いよ」という意思表示なんだろうか。
清水に聞かれたらまた「いい気になっている」と言われそうだ。
自分でも都合の良いことばかり考えていると思う。
それでも、あの時『三千年くらい愛せるかも』と言った言葉を現実にしたい。

修司に振り向いてほしい。
今夜こそ、お祭りの雰囲気を借りてもう少し先に進みたかった。

車は会場から少し離れた指定駐車場に入った。

「ちょっと歩くけど大丈夫？」
「もちろん」

鼻緒擦れ対策も万全だ。
修司は浴衣姿の理子のために、助手席のドアを開けてくれた。
今ならお姫様にもなれそう。
人の波に乗って歩くと、下駄の軽い音がする。
まだ残暑が厳しく、夜になっても吹く風は生ぬるかった。それでも蛙の鳴き声に混じって、鈴虫の声も聞こえてくるようになったのは、秋が近いことを教えてくれる。
風のにおいも変わった。もうしばらくすれば涼しくなるだろう。
１０分ほど歩くとアーケードに入り、目の前が一気ににぎやかになった。
並ぶ屋台の間を行き交う人の多さに、改めてこの祭りの華やかさを実感する。
お好み焼き、スーパーボウルすくい、ガラス細工、クレープ屋。
おもちゃ箱をひっくり返したようなにぎわいは、昔と変わらない。
屋台の熱気に混じり、美味しそうなにおいが香ってくる。
見渡す限りの人。
年に一回の大行事はさすがに盛大だ。
訪れる人達は、似たような店がひしめく中でもちゃんと『美味しい店』を知っている。
店沿いに出来た行列が、アーケードを抜けて車道側まで続いている。お祭りの期間だけは、この大通りも歩行者専用だ。
それを見て、やっぱりあそこは人気なんだ、としみじみ思う。

久しぶりに感じるお祭りムードは、理子の気分を上げてくれる。
せっかく来たのなら、絶対一周は見て回りたい。お祭りの中心でもある神社に行って、境内の中も歩いてみたい。
まだあのお化け屋敷はあるんだろうか。
境内前のタイ焼き屋が美味しかったんだっけ。
履きなれない下駄と、着なれない浴衣。加えてきょろきょろと周りを見物しながら歩くので、当然歩みは遅くなった。
それでも修司と並んで歩きたい理子は、無意識に修司の服の裾を掴んでいる。
脇腹の後ろ辺りをつまんで歩く理子を見て、修司は呆れたような顔をした。

「掴むならこっち」

言って服をつまんでいた手を解いて、代わりに修司の手を握らせた。
驚いて見上げると、優しくて甘い笑顔とぶつかる。

「好きに歩いて良いから、はぐれるなよ」

握った手を反対の手で軽く叩きながら念を押す。
せっかくのメイクも台無しになっているじゃないかと思うほど、顔が熱い。

どうしよう。幸せすぎる…。

１６）伝えたい事

☆
★
☆

襟からのぞく白いうなじと、黒髪のコントラストが艶めかしい。
時折伏せ目がちになる横顔に目を奪われる。

やばい。浴衣を着た理子はいつもより2割増しで可愛い。

熱気で頬をほんのりと赤くさせ、久しぶりに訪れた祭りの様子に目を輝かせている姿は微笑ましいのに、今日の理子には女の色気がある。

黒の浴衣はすらりとした理子によく似合っていた。
夏の間中、日焼け止めを欠かさなかったという肌は白い。花火のような柄は一見すると派手だが、理子が着ると上品な風合いを醸(かも)し出している。
髪を飾る蝶の簪が、揺れるたびにシャラン…と涼やかな音色を奏でた。

浴衣を着て行きたいと言われたのは、昨日のことだ。
浴衣で車を運転させるわけにはいかず、実家に迎えに行く約束をした。
初めて訪問する理子の実家。
日曜の夕方なんて、両親が在宅している可能性が最も高い時間帯だ。緊張しないわけがない。
娘を連れ出す男は、大抵父親に嫌われる。
例え人受けが良い修司でも、それは例外ではないだろう。

せめて第一印象だけは悪くならないようにと、気を引き締めて白雪家を訪ねた。

気負い立って向かった白雪家だが、修司を出迎えたのは母親だった。

理子と良く似た顔立ち。きっと理子も年を重ねるとこの婦人に似てくるだろう。

さすが親子と思ったのもつかの間、母親の行動に修司が硬直した。

（もしかしてミーハー？）

韓流スターを真似て『シュウ様』と連呼されながら、腕を組まれた。

動揺こそ顔に出なかったものの、内心たじろいだ。

なにせ相手は理子の母親だ。振り払うこともできず、ただ笑うしかなかった。

だが、飛んできた理子がみるみる顔を不機嫌に染めると、すぐに腕が解放された。

どうやら理子をからかうためだけにやったことらしい。

（そういえば、山下の母親でもあるんだよな…）

思い出した事実に、なるほどなと納得する。

山下の性格は間違いなく母親譲り。悪ふざけのやり方がそっくりだ。

二卵性なら山下の顔立ちは父親似なのだろう。

ただそのおかげでいいものも見れた。

理子が不機嫌になった理由。あれは絶対に『やきもち』だ。

母親相手に嫉妬する理子は可愛いとしか言いようがない。

顔に『怒ってます』と書いて先を行く理子を見届けて、母親はそっと修司を呼び止めた。

「娘をお願いね」

さんざん理子をからかっていたとは思えないほど、母親の顔で言った。

今日だけの事を言っているのか、それともこの先の事を見据えて言ったのか。

言葉の意味を履き違えないよう胸に刻み込んで、修司ははっきりと頷いて見せた。

「わかっています」

「ふふっ、あなた良い人ね。またいらっしゃいな」

嬉しそうに笑う顔に見送られ、車を出発させる。

理子の視線が、ちらちらと腕に当たる。きっと頭の中はさっきの残像でいっぱいなのだろう。

不思議だ、胸がわくわくする。

夢中になればいい。

理子の頭が修司で隙間なく埋まるくらい占領できればいいのに。

だからだろうか。理子が服の裾をつまんできたときは、柄にもなく胸が高鳴った。

本人は全くの無意識だったのを見ると、はぐれないための手段だったようだ。

やはり理子にとって修司は兄なのか。

やりきれない思いがため息に変わる。

思わず裾をつまんでいた手を解いて、自分の手のひらの中に入れた。

理子は目を丸くしていたが、すぐに顔を赤らめた。

嫌がっていないと分かれば、絶対に離してなんかやらない。

さっきまであんなに目移りしていた理子が、半歩後ろを俯き加減

で付いてくる。時々、顔を上げて修司を見ていた。
小さくはないが、大きすぎることもない理子の手は、握ると気持ちよかった。
なめらかな感触を堪能するように、親指で手の甲を撫でながら歩く。
理子と手を繋ぐと、不思議と懐かしい感じがする。
半歩下がって歩く理子の手を引いて、隣に並ばせる。恥ずかしそうにはにかむ理子に頷いて、ゆっくりと人の波を歩く。
見るともなしに屋台をのぞき、目新しいものがあると立ち止まる。

昔はこんなのなかったな。
浅野君、見て！今年は風船で作ったダックスが人気みたいよ。
あ～ぁ、もうどこの屋台もクレープにアイスが入ってない…。中学生の時はあったのに。

記憶と照らし合わせながら、理子と他愛のない会話を交わして、また流れに乗って歩く。
ゆっくりと流れつく先は、市で一番大きな神社。入口にそびえる鳥居は重要文化財にも指定されている。
境内に入る前に、お目当ての屋台でタイ焼きをひとつ買い、それを二人で食べた。
おもちゃのダーツに二人して夢中になり、景品のゲーム機欲しさに3回もやった。
お化け屋敷からは悲鳴が聞こえる。決して傍には行かないが、しきりに中の様子を窺っている様子に、ピンと来た。
にやりと口端を上げた修司が、そのままお化け屋敷に向かって歩き出す。
慌てた理子が、「絶対嫌っ！」とエビのように体をくの字に曲げて騒いだ。
妙齢の女性がする行動じゃないだろう、と呆れるほどへっぴり腰

になった姿につい笑いが噴き出す。

「理由を言ったら、考え直してもいいよ」

そう言うと、理子はまだいかがわしげにしていたが、しぶしぶ口を開いた。

昔、父に連れられて一緒に入ったが、怖すぎて途中で出してもらったことがあるのだ、という。

あまりに可愛い理由に、修司は腹が捩(よじ)れるかと思った。

余程、怖かったのだろう。

昔の恐怖心が今も抜けないのは可哀そうだとは思うが、なんて可愛らしい。

おかげで理子はすっかりふてくされた。

修司が何度も「ごめん」と謝るが、ご機嫌を損ねた姫はなかなか笑顔になってくれない。

「笑いすぎよっ」

「ごめんって。お詫びに何か奢るから、機嫌直して」

「ね？」と王子スマイルでむくれた顔をのぞきこめば、途端にその頬が赤くなった。

それでも理子は唇を真一文字に結んで、じろりと修司をねめつける。

「焼きそばと、広島焼き、焼きトウモロコシに焼きイカ、それとおでんと焼き鳥。あとコーラ」

「そんなに食べるの？」

「……うそ。広島焼きが食べたい」

悔し紛れに目についたメニューを並べたのだろう。

修司はそんな理子の頭を軽く撫でて、境内の中央に集まっている屋台村に連れて行った。
が、仮設テーブルを陣取って、理子が言ったメニューそのままを一人で食べている見知った顔がいた。

「高木さん…？」

理子が驚いた顔で言った。

☆
★
☆

確かに沙絵だ。
すっかりベリーショートが定着した沙絵は、美味そうに焼きそばを頬張っている。向かいに座っている男が時々横からつまんでいる。
野性味溢れた雰囲気は綿菓子の沙絵と正反対に感じるが、二人並ぶ姿は不思議なほどしっくりと馴染んで見える。
もしかして、彼が沙絵を変えたんじゃないだろうか。

「挨拶しに行く？」

しばらく二人の様子を見ていた修司に、隣から気遣わしげな声が掛かる。
理子は少しだけさびしい顔をしていた。それでも声をかけることを促したのは、理子なりの心配りだろう。
別れた恋人が違う男と居る姿にショックを受けたと思ったのだろうか。
そんなわけないのに。
沙絵が笑っている事が嬉しかった。彼女に感じる情は、恋心とは

違う。

「いいよ。邪魔しちゃ悪いしな。広島焼きは別の店で買おう」
「うん」

手を引いて歩き出すと、理子は大人しくついてくる。だが、さっきまであった打ち解けたものは影を潜めていた。
顔からは笑顔が消え、自分の殻に入ってしまった。
やはり理由は何であれ沙絵を見ていたのが良くなかったのだ。
繋いだ手が冷たくなっている。
もしかして、まだ未練があると思われたのか。
それこそ杞憂だ。理子が不安になる理由などどこにもないのに。
ゆっくりと鳥居へと続く石畳を人の波に乗って歩く。
来た時と同じ道なのに、見える景色が違う。

「沙絵…高木さんとは、もう終わってるから」

どうしてこんな話をしたのか。彼女はまだ修司の恋人ではないのに。
ただ理子に誤解をされるのだけは嫌だ。
過去の恋人について話すのが良いことかは分からない。今は少しでも理子の不安を取り除いてやりたかった。特別な感情はないのだ、と教えたかった。
沙絵を「高木さん」と言い直したのも、もう気持ちが無いことを伝えたかったからだ。

「さっき彼女を見てたのは、ほっとしたからだよ。彼女が楽しそうにしてる姿が見れて嬉しかっただけなんだ」

修司の口から沙絵について語られると思っていなかったのだろう。

理子は驚きで目を大きくさせていた。
やがて理子を覆っていた翳りが徐々に薄れていく。
「不安になったんだろ？」
意地悪な質問をしている。
彼女の気持ちを探っているみたいだ。
問いかけると、理子が強く首を振った。が、その表情には安堵が広がっている。
修司にはそれが不安を肯定しているように見えた。
（もしかして……）
理子を見ていた修司の脳裏に、一筋の希望が生まれた。
それはあまりにも都合のよすぎる思い。
もしかして理子も修司と同じ気持ちなんじゃないだろうか。
母親に嫉妬したり、過去の恋人の存在に不安になったりするのは、修司を『特別』な目で見ているからではないのか。
いままでの行動も『兄』ではなく『特別』な人に対するものだとしたら。
理子が無防備なのは警戒心が無いのではなく、疑う事を知らないだけだとしたら。
修司は今、確かにサインを見た気がした。
理子からの想いが「不安」というものになって翳りを作っていたのなら、修司の想いは都合の良い一方的な希望ではなくなる。
これはチャンスだ。
理子の気持ちを知る、絶好の機会だ。

自分の目で見た事を信じろ。傲慢でおこがましい希望を、現実にするんだ。

修司は握っていた手をもう一度しっかりと握り直し、愛しい名前を呼んだ。

「理子ちゃん」

見上げるつぶらな目に、ありったけの想いを乗せて告げる。

「俺は君が好きだよ」

17）伝わった想い

☆★☆

想いはちゃんと届いただろうか。

小さな目にさまざまな感情が映る。

驚き、当惑、疑心、そして……。

歩みが遅くなった理子を連れて、人波から外れる。喧騒を避けるように歩けば、辺りはすぐに静寂に包まれた。

祭りの灯りが少し遠くなる。理子は終止無言だった。

（早まったか…）

沈黙が重い。

感じたサインは、独りよがりな思い込みだったのか。

彼女の気持ちが知りたいと思った。

あふれる気持ちを抑えることが出来なくて、告げた。ありったけの想いが詰まった一言。

それを口にするのに必要なのは、伝えたいという強い気持ち。

どうか自分と同じ気持ちでいてほしい。あの瞬間、彼女の気持ちを感じられたから「好きだ」と告げた。

この先へ続く道を理子と共に歩み出したかった。その為の大事な言葉。

あれきり口を噤んでしまった理子が、今どんな表情をしているのか、修司からは見えない。

何か言ってほしいと思う反面、答えを聞くのが怖い。

彼女から聞きたいのは「好き」の言葉だけ。「でも」や「ごめん」は要らない。

ましてや「ずっとお友達で」なんて教科書通りの断り方なら、いっそ「嫌い」と言われたい。

いままで適当な恋愛をしてきた立場で、言えた義理ではないのも知っている。

それでも理子にだけは「好き」と言われたい。

結局、理子が口を開くのを待つしかなかった。

ただ繋いだ手を握り締めることで、理子と繋がれるような気がした。

「あた…し」

立ち止まった理子の声に、心臓が高鳴る。

（頼む……っ）

無意識に握る手に力が籠った。理子は一度瞼を伏せて、まっすぐ修司を見た。

宿るひとつの決意を、修司は食い入るように見つめた。

「あたしは、…ずっと。ずっと前から好き」

花開くように笑うさまを茫然と見つめる。

こんなにも胸を温める笑顔は見たことが無い。伝えて良かった。

言えて良かった。

間違ってなかったんだとこみあげる喜びに、目の奥が熱くなった。

心が通じ合うことが、こんなにも心を揺さぶるものだと初めて知った。

幸せ過ぎて泣きそうだ。

不安が現実にならなくてよかった。
解放されると、溜息が出た。

「良かった」

そんな修司を見て、理子が微笑んだ。

「もしかして緊張してた？」
「当り前だろ、告白したのは初めてです」

ほっと肩の緊張を解いて、くすりと笑う理子を見る。
想いが繋がって良かった。
答えが分かれば”どうしてたった一言が”と思えるが、それは今だから思えること。
あの緊張と不安は過去最高だ。

「浅野君。ありが…とっ」

理子が声を詰まらせる。俯いた小さな頭に空いている手を乗せた。

「泣くなよ」
「泣きま…せんっ」

ムキになっているが、声はしっかり涙声だ。意地っ張りな姿が愛おしくて、笑顔が零れる。

「化粧、とれるよ？」
「だっ…から、泣いてないってば！」

言って顔を上げた理子は、確かに泣いていない。が、祭りの灯り

が目尻に溜まった涙に反射して宝石みたいだ。
前に理子の涙を見たのは里奈を抱いた時だ。あの時も綺麗だった。
手の甲で鼻を押さえながらすすって、恥ずかしそうにはにかむ。

「なんか、本当にお腹空いてきたね」

不思議だ。理子との距離が急に縮まったように感じる。
繋ぐ手の長さも二人の立ち位置も変わらないのに、すぐ近くに理子を感じる。
修司は嬉しくなって理子の頭を撫でた。
触れたいと思う人に、いつでも触れられるこの距離感が修司を幸福にさせる。

「じゃあ、今度こそ本当に広島焼き買いに行くか」

歩き出すと理子が隣に並んだ。もう遠慮がちに半歩後ろを歩いたりはしない。
修司を見上げる笑顔が可愛い。
また人波に戻ると、相変わらずの賑わいが二人を迎える。
アーケードに入ると、ぐっと人口密度が上がった。
誰かとぶつからないよう理子に左側を歩かせた。屋台の様子は見えにくくなるが、本人もさほど気にしていない様子だ。
それよりも、さっきから修司にもの言いた気な視線を送ることで頭がいっぱいになっている。
口を開きかけては止めるという仕草を何度も繰り返して、チラチラと横目で見る。
どうせ、また微笑ましい何かを考えているに違いない。

「あのさ、もし友達とかに会ったら、浅野君のこと、…その、か、”彼氏”だって言ってもいい？」

（ほら、やっぱり）

改めて確認する必要などないのに、理子はそうやって実感を得たいのだろう。

かくゆう修司も、まだ実感がないのだ。友人から恋人になって、まだたった１０分程度。

何度でも言ってくれればいい。

理子が修司を『彼氏』と呼ぶ回数が、恋人になった実感をくれる。

伺いを立てる顔が少し左に傾くと、簪から涼やかな音色が鳴った。

「いいよ。俺も理子ちゃんのこと『恋人』だって言うから」

「こ、こ、恋人って…！」

せっかくの白い肌が朱色に染まる。理子の中では彼女より恋人はランクが上だったようだ。

「違うの？」

こうやって目を覗きこめば、必ず彼女が固まるのを知っている。

それを承知でやるのだから、いい性格だ。

理子の困る顔が見たくてたまらない。

そうさせているのが自分だと思えば、尚更Ｓ心に火が灯る。

「ち…がわない」

視線をせわしなく動かす姿は、立派に小動物。

今や修司が愛してやまない存在になっている。

「これからは誰に聞かれても、ちゃんと付き合ってるって言えよ」

「え……」
「会社で、聞かれたんだろ」
二人の関係を聞かれていたのは理子だけではない。修司も何人かに同じ質問をされた。
その時は適当にごまかしていたが、『白雪さんは付き合ってないって言ってましたよ』と親切にも教えてくれた女子社員がいたのだ。真面目な理子が嘘でも『付き合っている』と言うわけがない。ただの友人と断言されるのはもっと嫌だが、分かっていてもおもしろくなかった。
「知ってたんだ」
「まあね」
「……ごめんなさい」
あの時はまだ付き合っていないのだから、理子が詫びる必要はない。修司は笑って許した。
「そういえば、理子ちゃん。さっき”あたしはずっと好きだった”って言っただろ？それっていつから？」
「ひっ、人の告白、繰り返さないでっ！」
修司の唐突な質問に、理子はそれこそ耳まで真っ赤にさせた。手を振りほどかんとする勢いを、繋いだ手に唇と落とすことでなだめた。
池のコイさながら口をパクパクさせる理子に、もう一度「教えて」と問いかける。
一連の行動がどれだけ理子の心拍数を上げているかは、見ればわかる。だが、どうしても気になっているのだ。
あの時は嬉しさで有頂天になっていたあまり聞き流したが、忘れ

たわけではない。
理子の存在を知る前か、知り合ってからなのか。
想いの長さがどうというわけではないが、彼女がどれだけの時間をかけて自分を思っていてくれたのか聞いてみたい。
理子は一瞬修司の顔をさぐる目をして、それから「やっぱり覚えてないかぁ」と寂しい顔をした。

「覚えてないって、なにが？」
「あたし達、小学生の時一度だけ会ってるのよ。このお祭りで」
「えっ？どういう事」
「あたしね、ここで迷子になったことがあるの。昔はうずらのヒナとかヒヨコとか売ってたじゃない。それに夢中になっている間に家族と離れ離れになっちゃって。道脇で泣いてたあたしを交番までつれて行ってくれたのが、浅野君。忘れちゃった？」

☆
★
☆

『どうしたの？もしかして迷子？』

道脇で泣いていた小さな女の子。修司は父親と一緒に秋祭りに来ていた。
自動販売機の脇で桃色の浴衣を着た女の子がひとりで泣いている。
声をかけたら小さな女の子が小さな二つの目で修司を見た。
目に涙をいっぱいためて、鼻を真っ赤にさせて涙まみれになった、少し太った女の子だった。
修司の問いかけに、女の子は無言で頷く。

『どこではぐれたの？』

尋ねると、少女は指ですぐ近くの人だかりを指した。
そこは大きなたらいいっぱいに生まれたてのヒヨコを売っている場所だ。可愛さにつられて買っていく人もいるが、やがてあれが鶏になると思うと、欲しいとは思わなかった。
起こされるのは、目ざまし時計と母だけで十分だ。
修司にはガチャガチャで手に入れた『キン〇マン』のキン消しの方がよっぽど魅力的だった。
少女もヒヨコの可愛さにつられた一人なんだろう。
案の定、見ている間にはぐれた、と泣きながら言った。
途方に暮れて泣きじゃくる少女に「交番に行こう」と言ったのは、父だ。

『おいで。僕と一緒に交番に行こうよ』

父に言われた事を復唱しただけだが、差し出した手を小さな手が握った時は不思議な高揚感があった。
幼いながらに「守ってやらなくちゃ」と思った。
修司と手を繋いで、１００ｍほど先にある交番に少女を預けた。
少女は『ヤマシタ　リコ』と名乗っていた。警官に修司達も名前を聞かれた。

『泣かずに待っててね』

不安そうに修司を見ている少女をなんとか励ましてやりたくて、修司は持っていたキン消しを渡した。
小さな手はとても柔らかくて、マショマロみたいだ。
その手にせっかく出た『キン〇マン』を押しこんで、交番を後にしたのだ。

☆
★
☆

ようやく思い出して、修司は茫然と理子を見下ろした。

（あの時の女の子か…？本当に？）

記憶の中の少女は本当にぽっちゃりとしていて、今の理子と結びつかない。だがこのつぶらな目は、言われてみればあの少女と同じものに見える。

思い出さなかったのは、見た目の変化と少女の名前が『ヤマシタリコ』だったからだ。

（そうか、両親が離婚する前だったんだ…）

合点がいくと、「やっと思い出してくれた？」と悪戯っ子のように理子が顔を覗き込んだ。

「思い出した。っていうか、気づかなかった」

正直に言うと、理子は可笑しそうに笑う。

「あの時はだいぶ太ってたし、名前も違ったしね。会社に入って浅野君の名前を見つけたときは、びっくりしたよ。しかも幸子さん家のお隣さんだし」

その時の様子を思い出して、

「絶対、運命だって思った」

自信満々に告げる。

「その割には随分と長い間待ってたんだな」

修司がもし実家に帰らなかったらどうするつもりだったんだろう。きっと、今でも遠くから見ているだけだったのだろう。

それを思えば、アパートが水浸しになったのも、ふろ場でおかしな鼻歌を聞いたのも、偶然という名の運命だったように思える。

すべてが修司に理子の存在を教えるためだとしたら、確かにそれは運命なのだろう。

「本当ね」

あの鼻歌を聞いていなければ、きっと理子に興味を抱かなかった。

「でもそのおかげで、理子ちゃんに会えた。――――――これからよろしく」

「こちらこそ」

理子は極上の笑顔を見せた。

18）過去からの足音

☆★☆

金木犀の香りが満ちた秋の半ば。

理子の家には、昆布だしの良い香りが漂っていた。

今夜の夕飯はおでん。昨夜から土鍋でじっくり煮込んだ力作を馴染みの顔が取り囲んでいる。

そもそもなぜ季節を先取りしておでんなのかと言えば、理子の兄・尚樹の我が儘ゆえだ。

しかも、自らリクエストしておきながら、当人はひどい仏頂面をぶら下げている。

「俺は認めてないぞ」

黄金色に染まった大根をつついて、尚樹がじろりと二人、いや修司を睨む。いいほど熱燗を飲んだ尚樹の目は据わっていた。

「もう、尚ちゃん。また言ってる」

理子は親の敵みたいにつつかれていた大根を、尚樹の皿によそいながら呆れた顔をした。

「そうだぞ、”お兄ちゃん”」

「お前の”お兄ちゃん”になった覚えはないっ！」

噛みついた尚樹に、修司は知らん顔で牛すじを食べている。

もう尚紀をあしらう態度も堂に入ったものだ。

晴れて『恋人』になった二人を素直に祝福できない尚樹は、思い出したように理子の家に押しかけては二人の邪魔をする。妻の美咲は二人の付き合いを賛成しているのだが、妹を思うあまり今や尚樹は立派な小姑になっている。行き過ぎた行動を無言で咎める妻の視線から逃れたい、という私的な理由もここへ足を向けさせる理由のひとつだ。

「理子、本当にこいつでいいのか？よぉく、考え直せ。今からだってちっとも遅くないんだからな」

「なに、言ってるの…。”よぉく”考えました」

それこそずっとこうなることを願ってきたのだ。今更何を考えるというのだろう。

「尚ちゃんこそ、美咲に何て言って家に来てるの？ちびっこ達の面倒も見ないで…、愛想尽かされたって知らないんだから」

「嫌な事言うなよっ！それでなくても最近美咲の目線が冷たいんだからなっ」

「じゃあ、帰れよ」

理子が注いだビールを飲み干して、修司が冷たく言った。

「でも、理子も心配なんだよっ！」

ずばり言われたのがおもしろくなかったのだろう。尚紀はムキになっている子供のようだ。

修司は鼻で笑っていたが、理子は尚樹がここまで過保護になる理由を知っているので、強くは言えない。もとはといえば、このシスコンの原因を作ったのは、理子自身だ。

もうすぐ二桁の年月が経とうとしているのに、未だに尚樹に心配をかけさせつづけている。

間に何度か恋愛をしていれば、ここまで過保護にならなかったのだろうが、過去の恋愛が残した爪痕は深く、無意識に理子を恋愛から遠ざけてきた。

おそらく尚樹も修司が信頼に足る人物だと分かっている。それでも確固たる確証が欲しいのだ。

『絶対に理子を裏切らない』という修司の誠意が。

「……心配症ね」

兄の気持ちが痛いほどわかるから、理子ははにかむことしかできない。

理子の過去は当然、美咲も知っている。非難の視線を向けつつも何も言わないのは、尚樹の気持ちがわかるからだろう。

「理子ちゃんも面倒な兄貴を持ったな」

「いいのよ、慣れてるから」

鬱陶しいくらいの尚樹に、理子は救われたのだ。

これを煙たがることなど、理子にできるはずがない。

修司には少し申し訳ないが、せめて尚樹が二人の事を認めてくれるまでは我慢してもらうしかない。

まだひとりぶつぶつと愚痴を言っている尚樹に水を出すため台所に入ると、修司も後についてきた。

「ん、何？」

傍に立つ気配に顔を上げると、不意に落ちてくる柔らかに感触に一瞬息が止まる。

目を見開けば、すぐ間近にある端整な顔が、蕩けるほど甘く微笑んだ。

「好きだよ」

満足気に笑う修司を見たら、理子は何も言えなくなる。

秋祭りから、少しずつ修司は理子に触れる。手や指、髪の先に唇を落とす。

『ここまでは？』『ここまでは、いい？』言葉にせずとも、視線が語っている。理子のわずかな反応も見逃さないよう真っ直ぐ見つめながら、唇を落としていくのだからたまらない。

修司は焦らすほどゆっくりと『友人』という色を染め変えていく。今はまだ唇だけだが、そのうち全てを許してしまう。もう抱きしめられるぬくもりや、唇の感触だけじゃ物足りなくなっている。

体に生まれる鈍い疼きが何であるかも知っている。それは以前付き合っていた男性から嫌というほど教え込まされたもの。

「な、尚ちゃんがいるときは、嫌っ」

声音を押さえて言うと、修司は小さく肩をすくめた。

「だって、あいつがあんまり”理子、理子”言うから、ちょっとムカついた。それに、理子ちゃんだって全然嫌そうじゃない」

「それは……、兄妹だもん」

「山下には、俺が猛獣にでも見えてるのか？全く信用されてないんだけど」

修司は面白くない顔をして言う。

「それも……、そのうち分かってくれるよ」

今はそうとしか言いようがない。確かに修司にしてみれば、付き合って以来ずっと同じことを言われ続けられているのだ。面白いはずがない。

もしかして、何か感じているのかも知れないが、聞かれてもいないことをわざわざこちらから突くことはない。

知らなくていいことだって、あるはずだ。

「……まぁ、いいけど」

修司はまだ少し憮然としていたが、もう一度理子の唇を奪う事で手打ちにした。

直後、理子の鉄拳が脇腹にめり込んだのは言うまでもない。

☆★☆

その夜、理子の携帯が鳴った。

調子良く歌っていた鼻歌と水道の水音で、それに気づくまでに時間がかかった。慌てて携帯をとり、通話ボタンを押す。

「はい、もしもし？」

直後、プツ…と回線が切れた。

「……っ」

一方的な切られ方に、理子はちょっと面食らった。

間違い電話だったのだろうか。それにしては随分失礼な切り方だ

った。ムッとしたものの、すぐ思い直して携帯を戻した。すると、また着信音が流れる。

眉を寄せながら、再び携帯を取る。

「もしもし？」

出ると、また切られた。

（なに、これ……）

本当に間違い電話なんだろうか。連続でかかってきて、両方とも無言で切られた。

沈黙した携帯をじっと凝視する。なんだか気味が悪い。

三度目もかかってくるだろうか。だとしたら、それはもう『無言電話』だ。

でも誰が、何のために？

履歴ボタンを押して番号を表示させるが、１１桁の数字の羅列だけでは誰の番号なのか分からない。アドレスに検索をかけてみるが、誰にも当てはまらなかった。

やはり知らない番号だ。

着信拒否にしてしまおうか。だが、たかが２回かかってきた程度でそれは大げさな気がする。

もう少し様子を見てからでも遅くは無いはずだ。

不気味な感じはするが、理子はそのまま携帯を置いた。

１９）　宣戦布告

☆★☆

一日３回。

無言電話が始まって今日で７日目。

初日は夜だった。次の日からは日中に１回と、夜に１回。時間帯はバラバラだが、決まって２回かけてきた。日中は無視さえすればいいが、夜は違う。理子が電話に出るまでずっと鳴り続けるのだ。

つまり夜の１回というのは、理子が電話に出る回数を指している。どんなに呼びかけても、返事がないのも決まっていて、淡々と沈黙を寄こす。

さすがに気持ち悪く感じて、４日目に着信拒否に設定した。すると次の日からは違う番号が携帯の履歴を埋め始めた。

しかも夜に取る電話の数が一本増えた。

まるで拒絶した報復だと言わんばかりの無言の応酬。

これでまた着信拒否にすれば、新しい番号で着信の数だけが増えていくのだろうか。

（本当に何なのよっ……）

地味な嫌がらせだが、毎日続けばそれなにり精神的に打撃を受ける。いっそ電源を落としておこうかとも思うが、携帯にかけてくるのはこの番号だけではない。

修司を筆頭に尚樹や美咲、実家の母がいる。家においてある固定電話は幸子名義になっているし、終日留守電になっていることもあって、理子はまず使わない。

この家に来るまでは、携帯を持たずに出歩く方が多かったくらいだ。

無くても困らないはずだったのが、一人暮らしをするようになってやたら周りから頻繁に連絡が入るようになったので、離すに離せなくなっていた。

恨めし気に携帯を見ていると、着信音が鳴る。

（来た……）

伝言サービスに切り替わるまで止まない音にうんざりする。

理子はソファの上で抱えた膝の間に頭を落としてうなだれた。どうせ一回くらいとらなくても、またすぐに掛かってくるのだ。

理子は何度目かの着信で、ようやく携帯をとった。

「……はい」

出た途端、切られる回線。もう溜息しか出ない。

これで1回。しばらくすれば2回目がかかってくる。間髪置かずかけてくれれば、さっさと2回取って終いにできるのに、それは許されないようだ。

ソファに携帯を転がして、一緒に自分も転がった。だらしなく伸びて眠っていたシュウのお腹に頭をつけると、薄目を開けたシュウが迷惑そうに理子を見る。

一人でいるときは、まだいい。

問題は修司が家に来ている時だ。最近はほぼ毎日家に顔を見せにきてくれるので、何度か彼がいる間に携帯が鳴り始めたことがあった。

無言電話を受けている事は、誰にも言っていない。

事情を知らない修司の前で無視するわけにもいかず、しぶしぶ出るが結果は同じ。

すぐに切られた電話に、修司は怪訝な顔をした。

「どうかした？」

「……間違い電話、みたい」

理子は曖昧に笑ってごまかした。

だが敏い修司の事だ。これが二日続けばきっと何か気付く。

それからは修司のいる間はマナーモードを設定し、バイブも止めてある。着信を知らせるランプだけは光ってしまうが、修司の目に止まらなければ良い。

頭の上にいるシュウの柔らかい毛並みに手を這わせながら、犯人像を考えた。

一体誰が、何の目的でやってるんだろう。

きっかけは何だ。

（浅野君と付き合いだしたから…？まさか）

そうだと仮定しても、相手は誰だと言うんだ。それこそ不特定多数の人を疑わなければいけなくなる。

第一、無言電話が始まった時期と、付き合いだした時期が合わない。

だったら他に原因があるのだろうが、それも皆目見当がつかない。誰かに強く恨まれるようなことをした覚えもない。

それとも自分が気づかないだけで、知らないうちに誰かを深く傷つけていたんだろうか。

（高木さん…とか）

浮かぶ太陽みたいな笑顔に、すぐに違うと思い直す。彼女はそんな陰湿な性格には見えない。

修司とは別れたが、社内で時々話している様子を見かける。
二人の間に特別なものは感じない。修司も秋祭りのときにはっきり「終わっている」と言っていた。
現に、沙絵を前にして修司は理子を「恋人」と呼んでくれた。
沙絵は面食らった顔をしていたが、すぐに「おめでとう」と笑ってくれた。暗い闇を抱えた人があんな弾けるような笑顔を浮かべるだろうか。
彼女であるはずがない。
なら、他に誰が。

（そういえば、あの人。清水さんって言ったかな）

『いい気にならないで』と捨て台詞を残した彼女だが、あれ以降何も言ってこない。廊下ですれ違うこともあるが、理子の存在はもはや眼中に様子だった。
記憶を巡らすけれど、思い当たる人はいない。やはり修司関係ではないのだろうか。

（尚ちゃんに相談してみようかな）

こんな時、尚樹ならどうするだろう。きっとこの携帯は取り上げられそうだ。
あの時のように、理子の知らないところで相手と話をつけるのだろう。
１０年前、当時１９歳だった理子が付き合っていた人は妻帯者だった。
知らずに付き合っていたとはいえ、世間から見れば立派に不倫だ。その事実に恐ろしくなって、理子は慌てて別れを切り出した。だが、相手の男がごねたのだ。
どうしようもなくなって、理子は尚樹に助けを求めた。

あの後、尚樹がどんな風に相手を説得したのかは知らない。どれだけ問いただしても決して口を割ることがなかった。

あれほど説得しても頷かなかった人が、呆気ないほど簡単に別れることに承諾した理由は何だったのだろう。知りたい気持ちは今もくすぶっているが、それも今更だ。

関係はとうに終わっている。その事実だけで満足するべきだ。

この先もあの件に関して、尚紀が話すことはないだろう。

すべてが終わった後、尚紀に思い切り頬を殴られ『二度とするな』と叱責された。

尚樹が理子に怒りを向けたのは、それ一度きりだ。たった一度きりだけど、感情の消えた尚樹は身が竦むほど恐ろしかった。

おちゃらけた尚紀の別の顔は、ひどく冷酷な鋭さを秘めていた。

もう二度と尚樹にあんな顔をさせちゃいけない。

あの時、自分の蒔いた種なのに始末もつけられなかった惨めさは、今も心の傷と共に深く刻まれている。

今度こそ自分の手で解決するんだ。

無言電話になんか、負けてたまるものか。

ようやくかかってきた2回目の電話をとって告げる。

「負けないよ」

それは、理子なりの宣戦布告だった。

☆
★
☆

次の日、仕事から帰ってきた理子は郵便受けに宛名のない茶封筒を見つける。

A4用紙を三つ折りにして封入する時に使うサイズのそれは、触

ると分かる程度の厚みしかなかった。
当然、消印もない。理子の名前さえ掛かれていないが、この家の郵便ポストに入っていたのだから、間違いなく理子宛てで誰かが入れたことは間違いない。
持ち上げて光にかざすと、中身のある部分だけ陰影が濃い。
なんだろう…。
見るからに怪しい代物だが、とにかく開封してみる。

（……写真？）

中に入っていたのは、数枚の写真。
訝しみつつ封筒からそれらを取り出す。映っていたものを見て、理子は息をのんだ。

「なに、これ…っ」

一枚は修司と一緒に写っている写真。理子の顔の部分だけ黒くマジックで塗りつぶされている。
カメラ目線でないことから、これは盗撮されたものだ。
もう一枚は、大学で入っていたサークルの集合写真。ＯＢも混じった飲み会で撮った写真だ。
塗りつぶされた自分の顔。
そこに込められているのは、理子への憎悪。
何度も往復した油性マジックの跡が背筋を震わせた。
だが、驚いたのはそれだけではない。
何の変哲もない集合写真。他人から見ればそう映るだろう。だが、理子にはもっと特別な意味があった。
理子の隣に並んで映っている男こそ、１０年前に理子が付き合っていた男だからだ。

（うそ……）

なぜ、修司の写真と共にこれが入っていたのか。それの意味するものは何なのか。

愕然と玄関で立ちつくす理子に、脅迫は更なる追い込みをかける。

携帯が鳴ったのだ。

おかしいほど肩が跳ねて、思わず手から写真が零れ落ちた。バッグの中でうるさく鳴る着信音は、あの無言電話であることを知らせていた。

日中の電話はかかってきていた。次は夜のはずだ。

夕方にかかってきたことなど一度もないことが、理子にある推測を生ませた。

修司と映った写真と、昔の人との写真。タイミングを見計らったように掛かってきた無言電話。

（まさ、か……）

鳴り止まない携帯を取って、通話ボタンを押す。

「…隆文（たかふみ）さんなの？」

佐々木　隆文。それが不倫相手の男の名前だった。

20）告げ口

☆★☆

理子の様子がおかしい。

企画書に目を通しているが、さっきから一行も頭に入ってこない。理子の異変が常に片隅にあって、気が散って仕方がないのだ。

一緒にいても、どこか上の空。あれは絶対何かに気をとられている。

でも、何に？

話す口調も、笑う顔も、少し赤くなって修司の悪戯を責める仕草も、何も変わらないように見せているが、何かが違う。

そう、理子の気持ちが自分に向いていない。

それに気づいたのは、3、4日前からだ。

ふとした拍子に浮かない顔になる。いや、『脅えた』と言った方が正しい。

気がついた時に尋ねているが、答えはいつも一緒。「なんでもないよ」と笑うだけだ。

間口を開けて待っているのに、理子は見向きもしない。修司には頼らない、と言われているようなものだ。

なにかあったのは間違いないのに、その原因が分からないもどかしさが、余計企画書を読めなくしている。

悩んでいることがあるなら、話してほしい。きっと力になれるはずだ。

思えば、理子からは相談を持ちかけられたことがない。

いろんな話をするが、自分の内側の話はしない。するのは日常の出来事や、シュウの事。時々先の未来も話すが、彼女の奥底までの

ぞいたことはなかった。
理子の過去を聞く機会も少ない。
小学生くらいの頃、化石発掘がしたくて庭先に山下のゴム製の怪獣を埋めたことは知っている。当時は土のあるところには化石があると思っていたそうだ。あいにく理子が住んでいた場所は埋め立て地で化石どころか貝殻すら出てこないような赤土だ。ならば化石を作ってやろうと兄のゴム製怪獣を埋めたのだが、すぐに見つかり断念したという、微笑ましい小話。
だが話す年代はそこまでで、中学生以降の話は一切口にしない。逆に聞かれた事も無い。言いたくない話題は突かない主義なのだろうか。
せめて大学の話くらいはと思うが、理子の嫌がる事はしたくない修司が改めて聞くこともなかったし、昔話をしなくても話題には毎日事欠かない日々だった。
会社の愚痴は話すくせに、肝心な話をしない恋人。
まだ心を預けられるに値しないのだと知らされる。

「浅野課長補佐」

その時、部下の一人に呼ばれた。
課内で修司を微妙に長く呼びにくい役職で呼ぶ人物は、一人しかいない。
少しも頭に入ってこない企画書から視線を上げて、デスク前に立つ清水を見る。

「なに？」

長い黒髪は理子とよく似ているが、きつい印象を与える目元が違う。
能力はあるが、完璧を求めすぎるために考えが固執する癖がある。

柔軟性とコミュニケーション能力が足りないことが難点だ。
清水は物思いにふけっていた修司の優しくない眼光に、一瞬ひるんだ。

「あの…、今お時間よろしいですか。お話したい件があります」

改まった清水に、少しだけ怪訝な表情になる。
この企画書も今日中に目を通さなければいけないのだが、今の状態ではまともな判断もできそうにない。
気分転換も兼ねて、清水の話を聞くことにした。

「いいよ。話して」
「……ここは、ちょっと」

声のトーンを落としたことで、内密な話であることを匂わした。

「わかった。隣に行こう」

席を立って向かったのは、併設された会議室だ。間を仕切るガラスはボタンひとつでスモークガラスになり、防音設備もある。修司は外からの視線を遮断して、清水を椅子に促した。自分もその隣に腰を下ろす。

「それで、話って何?」

清水は途端に口を噤んだ。揃えた膝に握った手を乗せて俯いている。思い詰めた雰囲気に深刻さが窺えた。
仕事で問題が起きたのだろうか。

「清水。黙ってても分からないよ」

このままだといつまでだって押し黙っていそうだ。話さなければ先には進まない。

早急に手を打たなければいけない事態になっているとしたら、こんなところで時間を無駄にするわけにはいかなかった。

修司が促すと、ようやく顔を上げた。だが勝気な目に涙が溜まっている。

「なに、どうし」

「課長補佐は、騙されてますっ」

唐突だった。

穏やかでない発言に修司は眉を寄せる。

（何の話だ？）

前振りも説明も飛ばして結論だけ告げた清水を、黙って見返す。

清水も潤んだ目を真っ直ぐ修司に向けた。

「私なんかがこんなこと言う権利が無いことは、よく分かっています。でも、あんな人に騙されている課長補佐を見ていられないんです。あなたは優しすぎるんです」

「……ごめん。全然言ってる意味がわからない」

全く意図の掴めない話だが、口ぶりから察すると仕事関係ではないようだ。

ならば清水の言う『あんな人』とは。

「総務課の白雪さんの事です。あの人、不倫してます」

あがった名前とあらぬ単語に耳を疑った。

（理子が、不倫…？）

なんて不似合いな言葉だ。そして、なんてバカな発想。

彼女に不貞ができるはずがない。第一、四六時中修司と共にいる理子に、いつ不倫する暇があるというのか。

とても男二人の間を渡り歩く器用さを兼ね備えているようには見えない。いや、無い。

理子を見ていれば、それくらいわかることだ。彼女の恋人は、自分ひとりだけ。

呆れた。バカバカしくてまともに取り合う気も失せた。

一蹴すると頭の芯がスッと冷えた。

修司は沈黙を守りつつ、視線を眇めて注意深く観察する。

知りたいのは、清水がこの話題を持ち出した理由。あえて告げ口をした目的はなんだ。

話を切ってしまうのは簡単だが、それは利口とは思わない。

真意を掴むには、まだ情報が足りなかった。

修司の顔から『王子』の仮面が消えかけていることに、清水は気づいていない。

「そうですよね、突然こんな事言われても驚くと思います。でも私、偶然聞いてしまったんです。外から戻ってくる時に資料庫の中であの人が電話してる会話を。”タカフミさん、どうしてっ”て必死な声で問い詰めてました」

「どうして、それだけで不倫してると分かるんだ？ただの友人かもしれない」

名前で呼び合うだけで不倫が成立するなら、世の中皆そうだ。

言うと清水は憐れんだ表情で首を振った。

「課長補佐は噂をご存知ないだけです。あの人、大学時代もその人と不倫してたそうです。会話を聞いたのは私だけでありません。他に何人もの子が同じような会話を聞いています。そうでなければ噂なんて流れたりしませんっ。課長補佐が傷つくから、誰も耳に入れないようにしていただけなんです。でも、これ以上課長補佐が裏切られている姿を見たくないんですっ」

それは修司の知らない理子の過去だった。

まさか他人の口から聞かされる羽目になるとは思わなかった。しかもなんて内容だ。

百歩、いや千歩譲ってその話が本当だと仮定してもだ。なぜ、それを清水が告げる。

そういえば理子と付き合い出す前、ご丁寧に『理子は付き合っていないと言っている』と教えてくれたのも彼女だった。

（それで”あんな人”ね…）

清水は不倫をしている女として、理子を見下したのだ。

修司とて不倫を容認しているわけではない。どんな事情があっても人のものに手をつけるのだ、中傷されても仕方がない。

だからと言って、自分の恋人を侮辱されていいわけがない。

「課長補佐がかわいそうです…」と清水が涙を流す。

なぜだろう。同じ涙でも、彼女の流すものに何も感じない。むしろ、白々しく見えた。

わかっているのだろうか、彼女が口にした言葉の重大さを。

清水は今、修司達の関係に波紋を生もうとしている。

冷めた目で見下ろすと「信じてくれないんですね…」とうなだれた。

「忠告だけは耳にとどめておくよ。でも、俺達の事に他人の君が口をはさむのは関心しない」
「でも、その権利はなくても」
「だったら、黙っていろ」

部下という立場だけでは、修司の恋愛に口を挟む権利は無い。

「課長補佐っ」

次第に頭の奥で苛立ちが生まれてきた。
理子の過去については動揺はしたものの、それについて清水と話すつもりはさらさらない。
いつまでもこんな茶番に付き合ってやるほど暇でもないのだ。

「君はそれを俺に言ってどうしたいんだ?目を覚ませとでも言うつもりか?」
「それはただの憶測だ。誰も現場を見たわけではないだろう」
「だったら電話の件はどうなるんですかっ?聞いたのは私だけじゃないってお伝えしました」

その気になれば話はいくらでもつくれるのだ。それが事実である保障はどこにもない。
恋人の不貞を密告する理由は、二つ。
純粋な正義と、悪意。彼女の場合はどちらだ。
清水は部下だ。多少目につく部分もあるが真面目な人間だ。
だが修司が見ているのは多面体の一面。それが全てではない。つまり、清水の話を全面的に信用できるほど彼女に信頼を寄せていない、ということだ。

「仕事の話でないなら、もういいね」

くだらない。

他人の口から恋人の過去を聞き、不貞まで匂わされておもしろいはずがなかった。

真実は本人に聞けばいい。他人の口を使えば、必ず入らぬ干渉が入るのは分かり切ったことだ。

修司を納得させられるのは、理子の口から語られる言葉だけ。その他は雑音にしか聞こえない。

「待って下さい！お願いします、信じて下さいっ」

立ちあがった修司の腕に清水の手が掛かる。修司はそれに視線を這わすことで放すよう促した。『王子』の仮面を外した眼光の鋭さに、清水の手が震えた。

「話が終わったら仕事に戻って」

事務的な口調に清水が悔しそうに唇を噛みしめる。

終止符を打った修司にまだもの言いたげな様子だが、しぶしぶ席を立ちあがった。

清水が会議室を出て行くのを見届けて、再び椅子に腰を下ろした。テーブルに肘をついて、そこに額を乗せる。

無意識にため息がもれた。

清水の言った通りだとするなら、理子が過去を話したがらない理由も納得する。

誰だって消したい過去はある。終わった恋を掘り返して問い詰めるつもりもない。

過去は過去でしかない。

それが今の彼女に続いていると思えば、受け入れることはできる。

だが清水は気になる言葉をいくつか残した。

『課長補佐は噂をご存知ないだけです』

『会話を聞いたのは私だけでありません』

密告は修司の心に『不審』という種を芽吹かせてしまった。

確かめるべきだ。

理子と向かい合うことでしか、この芽は刈りとれない。

もしかしたら、それが理子の異変と何か関係があるかも知れない。

心が決まると修司の行動は早かった。

デスクに戻り、企画書に目を通す。担当者を呼び、修正事項と再提出期限を伝え、さっさと帰り支度をする。

会議室から出てきた清水を見て、何人かが当惑していたが修司の知るところではない。

「お先」

短く告げて、会社を後にした。

21）不審の芽

☆★☆

その日、理子が自宅に戻ってきたのは、夜8時。夜風が徐々に肌寒く感じ出した。

「すみません。ありがとうございました」

送ってくれた相手に礼を述べて、助手席を降りた。

無言電話はいまや『いやがらせ』というアビリティまで持っている。郵便受けに入っていた写真と同じものがメールで添付されてくる、とうとう今日は車のタイヤがパンクしていた。後輪右側のタイヤに釘が打ち込まれていたのだ。

気がついたのは、定時で仕事を終えてスーパーに買い物に行った時だ。

「お嬢さん、車のタイヤ。パンクしてるよ」

親切に教えてくれたのは、隣に停車した車の持ち主。たまたま駐車する時に気づいてくれた。

それからいつも車検を受けている自動車販売会社に連絡し、レッカー車に乗せるまで約30分。一本だけかと思っていたが、左タイヤにも釘が刺さっていた。

どこで落ちていたんだと目を疑うほど太い釘。しっかりと根元まで刺さっている様に、「これは自然に刺さったとは言えないですね…」と整備員も引き気味だった。

形になって出てきた悪意に、ぞっとする。もしこれで事故に遭っていたらと思うと背筋が震えた。
代車を用意してもらえることになったが、理子はそれを断った。また同じことをされかねないと思ったからだ。
車は修理と点検を兼ねて、しばらく預かってもらうことにした。先ほど送ってくれたのは、販売会社の社員だ。
明日からはバス通勤にしよう。
家を出る時間が早まるが、事故に遭うよりはましだ。
重いため息を吐き出しながら、玄関のカギを開けて中に入る。

「……ただいま」

暗闇に声をかけると、帰りを待ちわびていたシュウがちぎれんばかりに尻尾を振って駆けてきた。

「良い子にしてた？」

後ろ足で立って、前足でおいでおいでと手招きする。それは早く撫でろという催促だ。
小さくて柔らかくて温かい、生きている温もり。
無条件の愛情を表わすシュウに、ずっと張りつめていた緊張の糸が緩んだ。途端、涙がこみ上げてくる。
どうして……。
なんであたしばっかり。
何をしたというんだ。ここまでされるほどあたしが何をした。
理由も分からず、毎日淡々と繰り返されるいやがらせに精神は疲弊しきっている。
負けないと啖呵を切ったものの、限界はすぐそこまで来ている。
犯人も目的も分からないことが、さらに理子の不安を掻きたてていた。

誰かに相談したい。
修司に、尚紀達に話してしまいたい。助けてと叫びたい。
だが、１０年前の出来事が理子を思い留まらせている。
相手は隆文かも知れない。もしそうならば、絶対に修司には言えない。彼に不倫をしていた過去を知られたくなかった。
尚紀達もそうだ。また理子に手を伸ばしたと分かれば、今度こそ何をするか分からない。
一人で戦うと決めたのに。
もう誰にも迷惑をかけないと誓ったのに……自分は脆い。
どれだけ嫌がらせを受けても平然とし続けることが、理子なりの戦い方だった。
犯人は徐々に距離を縮めてきている。理子が動じないことに苛立ちを募らせているのだろう。
もう少し、あと少し耐えていれば、きっと犯人は理子の前に現れる。
だが出口はまだ見えない。
暗闇から不意打ちで伸びてくる悪意に、心は傷ついていた。
誰でも良い、何でも良いからここからの突破口を教えてほしい。
あたしに何ができる――？
ギュッと小さな体を抱きしめる。すると玄関を向いていたシュウが鳴いた。

「…理子ちゃん？」

肩が震えた。修司だ。

「どうした？電気もつけないで」
「ダメっ、つけないで！」

部屋に上がってきた修司が蛍光灯のスイッチを押したが、理子が

その上から消した。
きっと今はひどい顔をしている。こんな情けない泣き顔を見られたくない。
様子が違う理子に、修司が眉を寄せた。重なった手はかすかに濡れている。
「……何があった」
静かに穏やかに問いかけられて、理子ははち切れるほどの悲しみを堪えて首を振る。
「……何にも、ない」
「ならどうして泣くの？」
「泣いて…ないっ」
こんなのは泣くとは言わない。悔しくて情けなくて流す涙など見られたくなかった。
「……ごめん。今日は帰って」
付き合って初めて修司を拒絶した。
今側に居られたらきっと話してしまう。修司にすがりついて全部さらけ出してしまいたくなる。
修司を巻き込むわけにはいかないのだ。
理子は振り向きもせず、そのまま二階に続く階段を上り出した。
どこでもいいから、とにかく今は一人になりたい。
「俺はそんなに頼りにならないのか？」
背中にかかる問いかけに、足が止まった。驚いて後ろを振り返る。

外灯だけ灯った玄関で見る修司の顔はひどく悲しげに見えた。

「何も言わないのは、信用できないから？俺は君の彼氏じゃないの？」

「彼氏だよ…？浅野君はあたしの彼氏だよっ！」

「でも悩みは言えない。理子の一番近くにいると思っていたのは俺だけ？」

「違う…っ」

「違わない。君は一度も俺を頼らないじゃないか」

それは涙が出るほど悲しい響きだった。

傷つけた…？

迷惑をかけたくなくてしたことが、修司を傷つけたのか。

理子が悩みを打ち明けないのは、優治だからではない。誰にも言わないだけだ。

自分の事は自分でするしかないと思ってきたから。誰かに相談する時は、もう自分の中では決まっている事。背中を押してほしくて話すことはあるけれど、悩みの最中に誰かに話すことはしない。

だがそれは理子の意見で考え方だ。

修司は違うのかも知れない。小さな事でも話してもらいたかったのではないか。

それに気づいたからと言って、抱えたこの悩みだけは知られるわけにはいかない。

言えば過去の事まで知られてしまう。

修司に背を向けられるのだけは耐えられなかった。

言って楽になりたいという衝動と、それを抑え込む理性がせめぎ合う。息苦しくてうまく声が出ない。

「……ご、めん」

今はそれしか言えなかった。

「自分が今どんな顔をしているか分かってる？そんな顔して泣いているのに、何もないわけがないだろう。ここ最近、ずっと何かに脅えていたね。それは何？どうして今日は自分の車じゃないの？」

矢継ぎ早の質問。

ありのまま伝えればいいのだろうか。

押し黙ると、修司がため息を吐く。

「今日、理子が不倫してるって言われた。相手は大学時代の不倫相手で今も続いている、そう言われたよ。昼間に電話をかけている相手とさっき送ってきた人は、同じ”タカフミさん”？」

修司の告白は理子を愕然とさせた。膝の力が抜けそうになる。

「ど…して」

なぜ知られてしまったのだろう。

確かに理子は昼間何度か電話をしていた。

写真を見て無言電話の相手が隆文ではないかと疑っていたからだ。

今まで無視していた無言電話に出たのは確証が欲しかったから。

一言でもいい。声を聞けば相手が隆文であるかないかは分かる。

だから理子は何度も呼びかけていた。

『隆文さんなの？どうしてこんなことをするのっ？』

向こうが会いたいと言うのなら、会ってもいい。

――――隆文とは二度と会わない――――。

そう尚紀とした約束を破ってでも、理子は真相を確かめたかった。

「答えろ。あれが不倫相手なのか」

「ち、違うっ。あの人はただの車屋さんでっ」
「車は？」
「……修理に出したの」
「なら代車があるだろ。言えば迎えに行ったのに、俺に電話しようとは思わなかった？」
「今日…は、いろいろあって…」
「いろいろね」

修司の言い分はもっともだ。理子だってできるならとっくにしている。
だが迎えに来れば、パンクが故意だと分かってしまう。うまくごまかしきれる自信がなかった。

「理子」

聞いたことのない冷たい声音に何も言えなくなる。
誤解だ。そう言いたいのに言葉が途切れ途切れになってうまく伝わらない。
必死で隠してきた過去は、とっくに修司にばれていた。そのせいで修司への気持ちすら疑われている。　もういっそ全部話してしまおうか。
無言電話や嫌がらせの事を全部話したら、誤解は解けるのだろうか。

「俺は理子の何を信じればいい？違うというなら信じられるものをくれ。何も話さないのは卑怯だ」

ざっくりと心が切れた。
卑怯と言われ、言葉を無くした。
何か言わなければと思うけれど、何も浮かんでこない。

縋る思いで修司を見つめる。
それでも、これだけは今言わなくてはいけない。
「あたしは……浅野君が好きなの」
疑われても信じられなくても、この気持ちだけは本当。
「は…っ、意味がわからないよ。それが質問の答え？」
修司が初めて理子をバカにしたように笑った。
伝わらない想いに唇を噛みしめる。このままでは修司が離れて行ってしまう。
でも、どうすればいいか何も考えられない。
考えることが多すぎて、気持ちもいっぱいいっぱいで、何日もうまく眠れなくて、まともに考えることなんてできない。
項垂れると、
「……理子は”信じてほしい”と言わないんだな」
聞いている理子の胸がつぶれるほど、悲痛な呟き。そのまま修司は出て行った。
力が抜けて、ずるずるとその場にしゃがみこむ。
最後に言われた言葉が今までで一番深い傷をつけた。
言えるわけがない。隆文が口癖のように言っていた言葉を理子が言えるはずがなかった。
何度も裏切り続けられた言葉にどれだけの信憑性（しんぴょうせい）があるのか。
信じてほしい。そう言えば修司は信じたのか？
修司は信じられるものをくれと言った。今の理子に見せられるのは修司を思う気持ちだけ。形にはできないから言葉にした。

「……疑ってるくせに」

折角伸ばしてくれた蜘蛛の糸を、理子は自らの手で引きちぎってしまったのだ。

☆
★
☆

同じ頃、情報管理部所属の山下がとあるデータを見つけていた。

それは課長職以上のパスワードが無ければ、アクセス不可能である『個人情報』データ。

この1か月で、2度不正アクセスされた形跡がある。

痕跡を辿るが、海外のサーバーを経由しているため、発信元の特定は難しい。だが、追跡者は山下だ。

大して手を煩わせることなく、徐々に獲物を追い詰めていく。

趣味が高じ過ぎたパソコンオタクの山下。この程度の目くらましが通用するわけがなかった。

10分後、現れた獲物に照準を合わせた。

なんと発信元は社内。

防犯カメラの映像とアクセス時刻を照会して、映像を映し出す。

「へぇ、やってくれるね」

冷酷な顔にうっすら笑みすら浮かべて、画面に出された映像を眺める。

キーボードを操作して、犯人が見ていたデータを出した。

そこには、理子に関する個人情報が映し出されていた。

22）唯一確かなもの

☆★☆

ひどい顔…。

ドレッサーの鏡に映った顔は悲惨だった。

両目の下にできたクマ、食欲が落ちていたせいでうっすらとこけた頬。くすんだ肌はハリも無くカサついている。なにより昨晩泣き晴らした瞼は恐ろしいほど腫れて、もともと小さな目が線になっていた。

とても会社に行ける顔ではない。

理子は溜息をひとつついて身支度をする手を止めた。そのままベッドにもぐりこむ。

枕の下に潜り込ませてある携帯を取り出して、会社に病欠の旨を伝える。もしかして尚紀が何か言ってくるかもしれないが、もうどうでもよかった。

修司にはとうにばれていた。今更尚紀にバレたからと言って何だと言うんだ。

犯人の目的が何にしろ、体調は最悪、修司との仲もこじれた。少なくとも理子を苦しめることが目的だったのなら、犯人の目論見は達成されたことになる。

理子は負けたのだ。

だから、もうどうでもいい。

サイドテーブルに置いてある錠剤に手を伸ばす。最近これがないと眠れない。常用は良くないと分かっているが、今は薬の力が必要だった。

夢の狭間を漂っていても携帯の音が聞こえてくる。鳴り止まない

着信に何度も目を覚ます。それが幻聴だと知っているのに、目をつぶると聞こえてくる。毎日その繰り返しで眠れるはずがなかった。
意識がぼんやりとするのは寝不足のせいか、それとも薬のせいなのか。
曖昧な思考は適量をも分からなくさせる。理子は4錠出して口に入れた。
隣ではまだ夢の中のシュウが眠っている。今はこの温もりだけが唯一確かなものだった。

☆
★
☆

「ちょっといいか」
珍しく仕事中にやってきた山下に修司は視線を向ける。
今朝の企画開発部はいつになく緊張が張りつめていた。課長補佐が漂わせる負のオーラが根源であるが、誰もその理由に触れられない。
『王子』の仮面はつけているものの、眼光と抑揚の消えた声は鋭利さを極めている。
朝一で入っていた会議を終えた課内の顔は揃って青ざめていた。淡々と企画書の欠点を的確に指摘する冷たい口調に容赦はない。
声を荒げるわけでもなくスタンスはいつも通りなのに、内から漂うものがまるで違う。
研ぎ澄まされた刃物に、むやみに近づけば骨ごと断たれるのは明白だ。誰もがパソコンに画面を向いて、この恐怖の時間が一秒でも早く過ぎ去ることを固唾を飲んで耐えていた。
山下がやってきたのはちょうど会議室から戻った修司が席に着いた時だ。

視線で外に出るよう促して先に企画部を出る。
修司はチッと舌打ちしながら後に続いた。ようやくこの緊張から解放されて、自然と課の中からはほっと安堵のため息が聞こえる。
修司はそれを見て見ぬふりをした。
向かった先は非常階段。
内ポケットから煙草を取り出して火をつける山下を、修司は黙って見ていた。

「…俺が言ったこと覚えてるだろ」

煙が風に流れていく様を見る。山下が何を言わんとしているのかくらい修司には分かっていた。

(敏い奴だな…)

相変わらず理子に関する事だけは鼻が利く。

「理子を大事に出来ない男にアイツは任せられない。…別れろよ」

飛躍した結論をせせら笑った。

「冗談だろ」
「いや、本気。もう理子には近づくな」
「お節介にもほどがあるぞ。俺も言ったはずだ。いくら兄貴でも俺達の事に口を挟む権利は無いってな。シスコンも大概にしろよ」
「これを見てもか?」

煙草を口に咥えた山下が内ポケットから取り出した携帯を操作して、修司にかざす。
目を眇めて映し出された画像を見た。

「…これが？」

映っていたのは、パソコンに向かう社員の姿。防犯カメラの映像だろう。上から撮られた画像には清水の顔がはっきりと見て取れた。なんの変哲もない。周りの明るさから見て残業している風景としか見えなかった。

返答のしようがない修司を見て、山下がもう一枚の画像を見せた。途端、修司の顔色が変わる。

「わかっただろ。彼女が見ていたのは課長以上でしか見れないはずの個人情報。夜の１１時にする残業にはうってつけだな？」

清水が見ていたのは理子に関する個人情報だった。

瞠目すると、今度は山下がせせら笑った。

「お前のせいなんじゃないのか？この画像は９月上旬、ちょうどお前達が付き合い出した頃だ」

言われて修司の眉が寄る。

「この頃から清水が日中社内で携帯を使っている姿が残っている。映像が無い日もあるが、毎日どこかに電話をかけているのは間違いないだろうな。そしてこの携帯はプリペイド式だ」

簡単に番号を使い捨てにできる携帯を持つ理由は、定期的に番号を変える必要があるときかもしくは相手に知られたくない時。

嫌な予感がした。

「それと、これがここ数日の画像。なんと清水がかけた時刻と同じ

時刻に理子も電話をしている。…もう分かるだろ。彼女がかけていた相手は理子だ。それもこれだけ長期にわたってかけていたのなら、十中八九いやがらせだな。これでもまだお前が関係してないって言えるか？『完璧を求めすぎて考えが固執する傾向がある』それがお前が出した清水の評価だったよな。清水の中でまさにお前は完璧な人間だった。だからこそ隣に並ぶ女は完璧でなければいけない。理子じゃ役不足だと判断したんだろう。周りには”課長補佐にあの人はふさわしくない”と言っていたらしいしな」

何かと理子との関係に口を出してきた理由はそれか。

「しっかしアレは叩くほど埃が出てくるな。…見ろよ、理子の車に細工してるだろ？これは、釘だな」

徐々に目の前に立つ男から表情が消える。

おちゃらけた仮面を外して現れたのは、冷酷な面。凍てつくほどの視線を躊躇なく修司に向けていた。

「お前、あれだけ側にいて何も気づかなかったのか？いやがらせに気づかなくても、理子の異変くらいはわかっただろう？なんで黙って見過ごしたんだ」

「…気づいてたさ。理子が何かに脅えてることは知っていた」

「知っていただけじゃ意味がない。いいか、理子を大事にしろっていうのは側で甘い言葉を囁けと言ってたわけじゃない。理子を支えろと言ってたんだ。お前は上っ面の美味い蜜だけ吸って満足してただけだろう。今まであいつの何を見てきた？大事な話は何もしてなかったんじゃないのか？」

修司には返す言葉が無かった。

まさに山下の言う通りだからだ。理子との甘い時間に酔って何も

話してこなかった。
もっと修司が理子の心を埋めていれば、理子が修司の想いに満たされ愛を感じていれば、心をさらけ出しただろう。だが理子は、心を開くことを怖がっていた。殻を被り、頑なになった心に「愛されている」と自覚させるには時間が必要だ。
闇の影に気づきながら、修司は理子可愛さに見て見ぬふりをし続けた。そのツケがこれだ。
『別れろ』と詰め寄られても仕方がない。

「昨日、理子は自分の車で帰って来なかった。修理に出したと言って、誰かに送られて帰って来たんだ。俺はそれが不倫相手なのかと問い詰めた。……理子が不倫していると言われて彼女を疑ったんだ」
「んなわけないだろう。あの男は今頃東南アジアでアクセク働いているさ。その情報も清水が？」
「……あぁ、俺が騙されていると涙ながらに訴えてきた」
「アホだな、お前」

呆れ顔で煙草をもみ消した山下が、修司を睨む。

「それで今日理子は休みなんだ。病欠だって言うのも嘘だな」
「……多分」
「修司。お前どうするつもりだ？今度もやっぱり”適当な恋愛”で終わるつもりか？」

適当な恋愛。
それは沙絵の時に言われた台詞だ。
理子に感じる気持ちは今までなかったもの。誰かを強く求めて手に入れたいと思ったのは彼女だけだ。
山下は訝しんでいるが、理子を好きだと思う気持ちは間違いなく真実。

（あぁ、そうか…。理子もそうだったんだ）

昨日、問い詰めた末に聞いた言葉が今、鮮明に思い出される。
彼女も自分が疑われている中で唯一確かな気持ちを口にしたのだ。

『浅野君が好きなの』

あれが真実。それ以外に何が必要だったというのか。
他に気持ちが向いているなら、あれほど寂しげに笑う必要があるのか。
言いたいことがあったのだ。でも、何を言ってもきっと修司は信じない。
それが分かっていたから、修司への気持ちだけを伝えた。
理子の言葉だけが真実だとぬかしながら、口を割らない理子に焦れた。彼女を送ってきた見知らぬ車に冷静さを失った。
だから理子が告げたものを一笑に付したのだ。
向き合おうとする理子に先に背を向けたのは修司の方だ。
愚か過ぎる自分が心底嫌になる。

「なぁ、修司。俺はお前をかってるんだ。理子がずっとお前に片思いをしていたのも見ている。偶然とはいえ隣同士になって理子に興味を持った時は嬉しかったんだぜ。あいつには今度こそ幸せになってほしいんだ。いい加減お前の本気を見せてくれよ」

理子が大事だと思うなら、自ずとやるべきことが見えるだろう。
今、修司がすべきことは何だ。
修司にはそう言っているように聞こえた。

「もう”みんなの王子”は辞めにしようぜ」

唯一だと思えるものを守るために、その仮面を捨てろ。

――――俺にお前を潰させるな――――

射抜く視線は本気だ。今修司が手を打たなければ、山下は清水もろとも修司も潰す気だ。

この男が本気になればやる。山下には底知れぬ冷酷さが潜んでいる。

「……そうだな」

修司はやりきれない思いを溜息を共に吐き出した。

差し出されたタバコに思わず手を伸ばす。ここ数年は禁煙していたが、こんな気分は吸わずにはいられない。山下がライターを取り出すと、手で風よけを作って火をつける。久しぶりのニコチンは美味かった。

しばらくぼんやりとタバコを吸っていたが、ふと疑問が生まれた。

「清水は沙絵にも同じことをしてたのか？」

「いや、沙絵ちゃんはないな」

「なんでだよ？」

断言した山下をちらりと横目で見る。

二本目を吸いながら手すりに背中を預けて空を見上げていた。

「言ったろ？清水は完璧主義なんだって。沙絵ちゃんは誰の目から見ても”可愛い”。完璧な修司と可愛い沙絵ならお似合いじゃないか。何かするわけないだろ？なんだったら本人に聞いて見れば？……おっ、噂をすれば」

言って、山下が一階下の踊り場をのぞいた。つられて見ると、なんと沙絵がいる。手には牛乳パックとパンを持参していた。
図ったようなタイミングの良さに目を細めると、山下は素知らぬ顔で「沙絵ちゃん」と呼んだ。
まさにパンに齧りつこうとしていた間際の呼び声に、沙絵はおもしろいほど肩を跳ねさせて、振り仰いだ。

「な、なにしてんのっ？」
「沙絵ちゃんこそ。今日はジャムパン？」

確信を得た台詞に修司は冷たい目を向ける。山下はここで沙絵がパンを食べることを知っていたのだ。清水の話題から沙絵との事が話題にあがるのも想定済み。
ここへ修司を連れてきたことも計算の内だ。
社内の防犯映像を自由に閲覧し、役職以上の権限でしか見れないはずのデータを見ることのできる男。
その正体を知っていても、まだまだ得体が知れない。
だが、得体の知れない男は頼りになる。

「沙絵、今日暇か？」

大きな目が修司を見上げた。

「なんで？」
「夕飯奢ってやるよ」
「ん～、でも今日は約束が」
「悪い、こっちが最優先だ」
「えぇっ！横暴だなぁ」
「頼む」

付き合っていた時もこんな物言いはしたことがなかった。沙絵の予定をキャンセルさせてまで自分を優先させた修司に、沙絵は少し驚いた顔をしていた。

「まぁ、そこまで言うならいいよ。場所は？」
「沙絵に任せる」
「オッケ！じゃあ、定時であがってね。ロビーで待ってるよ」

見る間にジャムパンを口に収めて、沙絵は手を上げて入って行った。同じように手を上げた修司は「お前も来い」と隣でニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている山下をねめつける。
いつものお調子者の顔に戻った友人に、

「喰えない奴だよ」

と悪態づいた。

23）反撃の狼煙

☆★☆

「で、何か話があるんでしょ？」

焼き鳥の串を手に、沙絵がちらりと修司を見た。が、見られた修司は唖然とした面持ちで言葉を失っている。その隣に座る山下も然り。先程からビールのジョッキを掴もうとしているのだが、視線が沙絵の手元に釘付けになっているせいで何度も空を切っている。

テーブルに置かれた山盛りの串カツ。

ロビーで待ち合わせて、連れてこられたのは焼き鳥屋。付き合っていた時はお洒落なレストランや落ち着いた雰囲気の店ばかりだったが、今の沙絵は匂いが髪に移ろうと隣と肩がぶつかろうとお構いなしだ。

「とりあえず、串カツ１００本。あと、ここからここまでを5本ずつと、玉ねぎフライ、トマトとキュウリを3人前ずつ、焼きおにぎりに生2つ、修司は車だからウーロン茶？」

注文を取りに来た店員が絶句するのも頷ける。3人で１７２本。初回の注文には多すぎる量だ。しかも沙絵は『とりあえず』とつけた。つまり、これだけで終わらないということだ。

焼き鳥屋というチョイスに「良いセンスだっ！」と絶賛していた山下も、今や完全に戦意を喪失している。

（どれだけ食べる気だよっ）

運ばれてきた量を目の当たりにして、軽く眩暈を覚えた。

「まずは乾杯！」

勝手にジョッキを合わして、一気に煽る。喉を鳴らしてビールを飲む姿は、効果音無しでＣＭに出れそうだ。テーブルに置く頃には、半分ほどが無くなっていた。

豪快すぎる。これがあの沙絵か？

「おい修司、沙絵ちゃんってこうだったのか？」

「……いや、初披露だ」

「……だろうな。変わったのは見た目だけなのかと思ってた」

おそらくこれが本来の沙絵なのだ。これまで修司が見てきたものが、虚像だった。その証拠に今の沙絵は生き生きとしている。

物言いたげな顔をして、修司の顔色を窺っていた頃の面影はもうない。

美味そうに串カツを頬張っている沙絵を見ていると、秋祭りを思い出す。そういえば、あの時も沙絵の目の前には大量の食べ物が置かれていた。まさかあれをここで披露するつもりなのか。

どうやら沙絵を甘く見ていたらしい。奢ると言ったのは早計だったのかも知れない。

テーブルに肘をついて、額を覆う。

だがこのタイミングで聞いておかなければいかないことがあるのだ。修司は気を取り直して沙絵を見た。

「沙絵。お前、俺と付き合ってる時、誰かに何かされなかったか？」

「はっ？何それ？あるわけないじゃん」

串を持つ手はそのままで、大きな目が驚いている。

「――だよな」

いくら沙絵をちゃんと見ていなかったとはいえ、誰かに嫌がらせを受けている感じはなかった。痩せたと思ったのは、修司との関係に不安を感じていたから。

だとすれば、やはり山下の推測通りなのだろう。

「何よ、意味深ね。何かあったんでしょ？……もしかして、理子さん？何かされたの？」

「――あぁ、されてる」

「されてるって、進行形？修司、こんなとこであたしとご飯食べてて良いの？」

「良くない」

こうしている間も理子へのいやがらせは継続している。

苛立ちを鎮めようとウーロン茶を飲むと、沙絵が目を剥いて怒鳴った。

「馬鹿ね！早く帰んなさいよっ」

「その前に確認しておきたかったんだ。本当に何もされていないんだな」

もう一度問い直すと、思いきり不服気な顔をしながらも頷いた。

「そうよ」

「なら、俺達が別れた後は？うちの課の清水に何か言われたか？」

『誰か』と言わず、あえて清水の名前を出したのは余計な手間を

省くためだ。こんなところでもったいつけても時間の無駄だ。

「清水さん？ううん、何も…あっ、そういえば」

「何、言って」

思い当たる節があった様子に、修司の視線がきつくなる。

「うん、あれは秋祭りが終わった頃くらいかな。向こうから声かけてきて”課長補佐の事はもういいんですか？あんな人にとられて悔しくないんですか？”って言われた。その時はもうあたしも優治と付き合ってたし、修司の事も何とも思ってなかったから、別にって言ったんだけど。彼女間違いは正すべきだ、って」

いかにも清水らしい言い回しだと思う。

何を根拠に間違いだと言っているのか。自分の物差しでしか測れないようじゃ話にならない。

「でも、それだけかな。後は別に何も言われてないよ？……もしかして、あの人が理子さんに何かしてるの？」

食べる手を止めて沙絵が尋ねる。

「無言電話、理子の車への細工と、データバンクへの不正アクセス。でもそれは俺が知る限りだから、きっと他にしていると思う」

過去の不倫を言わなかったのは、必要無いと判断したから。ちらりと山下の視線を感じたが無視した。

「――何よ、それ。もう犯罪じゃん」

「そうだ。完全に度を越している」

沙絵は信じられないと首を振って顔をしかめた。

「それで、理子さんは？何て言ってるの？大丈夫なの？」

一番に理子の安否を心配する沙絵に少しだけ心が救われる。目の前の彼女は清水のような陰湿さは微塵も感じられない、太陽みたいだ。

それに引き換え昨日の自分は何だ。思い出してまた気持ちが翳る。返事にもたつくと、沙絵が怪訝な顔をした。

「もしかして何も聞いてないの？付き合ってるんでしょ？」

「付き合ってるよ。でも、何も言わないんだ」

「何でよ。様子がおかしいの気づいてなかったの？何で無理やりにでも聞かないのよ？」

その通りだ。だが修司は理子に嫌われたくなくて、嫌がることは何一つしてこなかった。

心をそむけられるのが怖かったのだ。

そんな修司の顔を窺っていた沙絵が、呆れた顔をしてせせら笑った。

「聞かなかったんじゃなくて、聞けなかったんだ。突っ込んではじかれるのが怖かったんでしょう？」

図星を指されたら閉口するしかない。修司はテーブルに置いてあった山下のタバコから一本取り出して火をつけた。

「都合が悪くなったら黙秘なんてちょっと卑怯じゃない？白状しなさいよ、嫌われるのが怖くて何も聞けなかったんでしょ？」

「――――そうだよ」

舌打ちしながら吐き捨てる。

沙絵は乾いた笑いを零した。

「修司ってさ、カッコいいし優しいけど、胸の中は絶対に見せてくれないよね。居心地は良いけれど、いつも寂しかった。だって受け入れてくれてると感じていたのは錯覚で、本当はその心の中にあたしはいなかったんだもの。違う？理子さんとの関係がどうなのかは知らないけれど、胸の内を明かさない恋人に悩みを相談する人なんているのかな。信用できないじゃん」

喋り終えて、ビールで喉を潤す。

修司は黙ってそれを聞いていた。

ただ可愛いだけの女だと思っていたが、修司の予想を超えて沙絵はいろんな事を見ていた。修司が一度も何かを要求したことが無いことも、どんな我が儘も受け止めていたのも、沙絵に興味が無いことを知っていたのだ。

体に入れたニコチンがやたらときつい。自分の気持ちを誤魔化すように煙を吐き出した。

「理子さんがどういうつもりで何も言わなかったのは分かんないけど、彼女だけが悪いとは思わないな。喧嘩して本音晒して近づいていくんじゃないの？大事な事ほど言葉にしないと伝わんないよ？ってこれは受け売りだけど」

ぺろりと赤い舌を出してちゃめっけを出した沙絵がはにかんだ。

「修司もさ、思ってる事とか不満に思ってる事とかちゃんと言ってみなよ。理子さんならきっと受け止めてくれると思うんだ。だって

見てて思うもん。理子さん、修司の事大好きだよね。気持ち口にするのは怖いけどさ、言っちゃうとこんなものかって吹っ切れるとこもあるよ。理子さんが言えないなら、修司から言えば良いんだよ」

まさか5歳年下の女の子から説教されるとは思わなかった。

だが、沙絵は修司よりもずっと大人だ。心をぶつけ合う事を怖いと言いながらも、きっとそうして来たのだろう。

「カッコいい修司も良いけど、カッコ悪い修司があっても良いんじゃない？それを見れるのが恋人の特権ってもんでしょうよ」

しかもなんて決め台詞まで持っているのか。

カッコ悪い修司。

確かに、付き合っていた彼女達には一度だって見せたことが無い。いつも受け止める側で、誰かに向けて気持ちを発信することなどなかった。初めてそうしたいと思ったのが、理子だった。

沙絵の言うとおり。大事な事ほど言葉にしないと駄目だ。

自分達は圧倒的に言葉が足りなかった。

理子が大事だと思っていたくせに、良い面しか見せてこなかった自分はカッコつけていただけだ。

「沙絵は、凄いな」

もっとちゃんと向き合ってみれば良かった。適当な恋愛ではなく、相手の事をよく見ていれば違う面がたくさん見れたのだ。

少なくとも、沙絵のことを『可愛いだけの彼女』などとは思わなかった。

「でしょ？もっと褒めてよ」

自慢げに胸を張る姿に笑みがこぼれた。短くなったタバコを灰皿に擦りつける。

「それで、話は戻るけど。清水さんが犯人だって分かってるんでしょ？これからどうするの？」

注文したメニューの半分ほど食べ終えた沙絵が、空いた皿を脇に寄せて身を乗り出した。

「あたしに何かできることある？」

「あるわけないだろ」

相手は犯罪に手を染めている。無言電話から始まったいやがらせも徐々にエスカレートしている様に、清水の精神状態の危うさを感じる。

もう当初の目的が薄れて、ただその行為に快感を感じるようになっているのかも知れない。

だとしたらどこにそれが飛び火するか分からない。そんな状態の場所に沙絵を飛びこませるわけにはいかなかった。

「いいか。しばらくは一人になるなよ。自転車通勤もバスに戻せ。できないなら彼氏に送ってもらって。必ず傍に誰かいるようにしろ」

「えぇっ、大丈夫だよ」

大げさだと目を細めるが、沙絵は事態を軽く見ている傾向が窺える。これはゲームではない。

「絶対に駄目だ。沙絵が暴走するなら、お前の彼氏に止めてもらうことにするよ」

一度だけ見た野性的な男。
彼氏の話題を口にした途端、沙絵の様子が変わる。

「え……、優治に？いいよ、言わなくても」
「今日も迎えに来るんだろ。俺から言っておくから。いいか、何かあってからじゃ遅いんだ。俺は理子を守るだけで手いっぱいで、沙絵のことまで手が回らない」
「でも…。ここまで聞いてるのに、何もしないなんてできないよっ。あたしだって理子さん心配だもん！」

沙絵は理子の親友でもある水嶋　志穂を姉のように慕っている。そこから理子とも知り合い懐いていた。
大きな目が真っ直ぐ修司を見つめる。
本気で理子を心配している沙絵だからこそ、不安なのに。今、理子に関わるすべての人間が同じ危険に晒されている。
修司や山下は自分の身は守れる。だが、沙絵や美咲はそうじゃない。
清水がどこまで知っているのかは分からないが、大事なものを危険に晒したくないと思う気持ちは山下も同じのはずだ。山下は美咲に何も告げていない。

「修司、お願い！危ないことは絶対にしないからっ」

懇願されても、頷くわけにはいかなかった。

「駄目だ。聞きわけろ」
「お願いっ！自転車もしばらく止める、絶対に一人にならないからっ。だって理子さん、今苦しんでるんでしょ？」

一点の曇りもない眼差しには、真摯な光が宿っている。しばらく

それを見つめ返していたが、吐きだした溜息と共についに修司が折れた。

「――わかったよ。でも無茶は絶対にするな」

「やったね！」

パチンを指を鳴らして、その手で店員を呼んだ。

「すみませ～ん！生追加と、あと冷ややっこと、ご飯下さ～い！」

「おいっ、まだ食べる気か？」

半分は消化したとはいえ、まだテーブルの上には並々と串の山が盛り上がってる。ほとんど沙絵の胃の中に収まったのだからいい加減限界だろうと思っていた修司が甘かった。

「こんなの序の口だもんっ。言ったでしょ？修司の財布食いつぶしてやるって」

「もうとっくに食いつぶされてるし飲み干されるよ。…おい、どさくさにまぎれてお前も何注文してるんだっ」

山下も勝手に好きなものを注文し始めている。いったい今夜一晩でどれだけの金が飛んでいくことか。

やはり奢ると言ったのは、間違いだった。

「それで、どう反撃するつもりなんだ？あるんだろ、計画が」

新しく来たビールを一口飲んで、ようやく山下が核心に入ってきた。

半分やけくそ気味になった修司が、忌々しげに食べ終えた串を串入れに差し込む。

「あぁ。お前には十分に働いてもらうぞ」

言って、冷笑を浮かべる顔に『王子』の仮面はついていなかった。

24）後悔

☆★☆

沙絵達と別れた後、修司はその足で理子の元に向かった。

（理子に謝りたい）

沙絵に言われて目が覚めた。

――嫌われるのが怖くて何も聞けなかったんでしょ？

沙絵の指摘が繰り返し胸を射す。弁解も言い逃れもきかない。自分は逃げていた。沙絵との別れの時も顔を出した、あの臆病風に吹かれて大事なものが見えなくなっていた。

――そんなお前がどの面下げて会いに行くんだ。

もう一人の自分が嘲り笑う。

いつまで経っても成長しない。

理子を疑い、背を向けたお前に会いに行く資格などあるのか、と声高に糾弾する。

感情を現すのは嫌いだった。特に嫉妬や怒り、悲しみをさらけ出すことは、何かに負けた気がしていた。

いつだって一歩引いて接してきた。おそらく、理子にもそうだったのだ。

本気で向き合えないのは、自分が弱いから。拒絶されるのが怖い

から、最初から近づかないようにしていた。
そんな距離感で、どうして心の内を見せてくれるだろうか。
清水の自分勝手な思い込みと偏見が生んだ悪意。
理子はその巻き添えをくっただけで、彼女に非はひとつもない。
ただ修司と想いを結んだだけだ。
なぜそれが許されないのか。
沙絵のように目立つ容姿でもなければ、言えない過去もある。それが理由で人を好きになってはいけないことなど絶対にない。理子が修司の恋人になれない理由はどこにもないのだ。
なぜなら、修司が理子を幸せにしたいと願っているから。隣で笑っていて欲しいと思うからだ。
向けられる悪意の理由も知らず、彼女はすべてを自分一人で抱え込んでしまった。
誰に打ち明ける事もなく、たったひとりで耐えた。
何が理子にそうさせたのか。
頑なに口をつぐむ理由に、彼女の過去が関係しているのだろうか。
帰りの車の中で、山下が話した理子の過去。
不倫の結末だ。
別れ話がこじれて、理子は山下に助けを求めた。当時、男が関係していた女は理子の他にも数人いた。常務の一人娘と結婚し出世街道に乗っていた男は、女の目を引く容姿を餌に甘い言葉で若い女ばかりを食い物にしていた。
男にとって理子はその中の一人のはずだった。だが彼女が資産家山下（やました）　幸三（こうぞう）の孫だと知ると態度を一変させ、妻と別れてでも付き合いを続けたいと言い出したのだ。
妻と理子を天秤にかけ自分に有益な方を選んだ男に、山下は男が欲している権力を使い終止符を打たせた。早くから事業に携わっていた男にとって、それは造作もないことだった。
「あれからなんだよな。理子が悩みを打ち明けなくなったのって」

窓の外を眺めながら、ぽつりと呟いた声はひどく寂しげだった。
手を下した事を後悔しているのだろうか。
表情は夜の闇で隠され、修司からは窺うことができなかった。
山下は気づいていないのか。時折見せる冷酷な仮面の存在を。
もし理子がその顔を見ているのなら、それは間違いなくあの一件のときだろう。非情な顔をした兄を見て何を感じたのか。
理子のことだ。もう自分のせいで山下の冷酷さを表に出してはいけないと思ったはず。
だから口を閉ざし、一人で解決しようとした。
それならなぜ修司にまで隠す必要があったのか？

（結局、答えは理子しか持ってないんだ）

車をカーポートに入れて、理子の家に向かう。
闇に沈んだ家はひっそりと静まり返っていて、修司の訪問を拒絶しているようだ。
この時間に電気がついていないことを訝しく思いながらインターフォンを押す。が、返事はない。
普段なら温かい光と共に招き入れていたドアも、今日ばかりは重くその口を閉ざしていた。
シュウの遠吠えも聞こえない。
不在を確かめたくても、いつも停まっているはずのピンク色の軽自動車は修理中だ。今は目に写るひとつひとつが修司を責めている。
しかしここで引き下がるわけにはいかなかった。
腹に力を込めると、岩戸と化した引き戸を引いた。
シュウが飛び出してくるのを警戒してゆっくりと開けるが、聞こえてくるはずの廊下をかける軽快な足音がない。
暗闇はどんよりと重たい空気を漂わせて、沈黙を守っていた。

「理子？」

本当にいないのか。だとしたら車もなくシュウを連れてどこへ行ったのか。

怪訝に思って、中に入った。もう一度呼びかけてみるが、やはり返事が無い。リビングの電気を灯して見るが、二人の姿はなかった。在るはずの存在がいないことが、修司を不安へ駆りたてる。

そのまま階段をのぼると、寝室のドアが開けっぱなしになってた。

「理子、寝てるのか…？」

初めて見る寝室。

踏み入れる事に躊躇いを感じて、部屋への入口で呼びかける。しかし、問いかけは虚しく闇に消えた。

部屋の大部分を占めているダブルベッド。天井からは丸い天蓋が下がっていて、入口から枕元を隠している。

暗闇に目を凝らすが、人の気配がしない。

物音ひとつ聞こえない部屋に、いよいよ不安が本物へと変わる。

その時だ。

「修司っ、修司。帰ってるの？」

階下で修司を呼ぶ声がした。声の主は紛れもなく母だ。

でもなぜ母がここに？

驚いて二階から顔だけ出した。

「あぁ良かった！やっと帰って来たのね！」

慌てた声にすぐに何かあったのだと悟る。

「母さん、理子は？」
「理子は？じゃないわよっ！あんた今まで何処にいたのっ。何度も電話したのに全く肝心な時に使えないんだからっ」
「ちょっと待って。何の話？理子に何かあったのか？」
「何かあったのはシュウちゃんなのっ。今、病院で手術中よっ！」

☆
★
☆

「――は？どういう事」
ただ事で無い単語に、修司は瞠目した。
「だから、そのままの意味に決まってるでしょ！」
「そうじゃなくて、何で手術しているの？何があったのかちゃんと話して」
階段から駆け降りた修司が落ち着いた口調で問いかける。
取り乱していた母は、その声にはっと我に返った。
「え、えぇそうね。そうだったわ。どこから話せばいいかしら。…そう、夕方、理子ちゃんに頂き物のお菓子を持ってきた時だったわ。血相変えた理子ちゃんが飛び出してきて、〝お願い、動物病院に連れて行って！〟て泣きながら頼んできたの。何事かと思ったんだけど、とにかく理子ちゃんの様子が尋常じゃなくて、つられて私も慌てたのよね。急いで車に二人を乗せて、かかりつけの病院へ運んだわ。そしたらシュウちゃんの子宮に膿が溜まっていて破裂すると危ないって言われたの。それで」
「それで、手術なんだな」

ようやく話が繋がって、母が大きく頷いた。
鍵もかけず家を空けたのは、それどころじゃなかったからか。幸子の置き土産とはいえ、シュウは理子にとって家族も同然だ。
昨日訪れた時は、特に変化はなかった。だが修司も理子にばかり気をとられていたので、正確な記憶とは言えない。そんな感じがしたというだけだ。
不調を訴える小さな姿にどれほど心が凍ったことか。
命の危険を示唆された時、彼女の心はどれほどの闇に覆われたのか。
今、シュウを失うことになれば、理子の心は壊れてしまうかも知れない。連日の嫌がらせ、非情で残酷な悪意は少しずつ確実に彼女の心を疲弊させていったはずだ。
追い打ちをかけたのは修司からの猜疑心。そして愛犬の急変。
どうして彼女だけがここまで追い詰められなきゃいけない。
自分はなんて愚かだったんだ。
髪に手を突っ込んではがゆさをかき回す。そんな修司に母のきつい視線が飛んできた。

「理子ちゃんはシュウの麻酔が冷めるまで待合室で待つって言って、今そっちにいるの。それなのにあんたって子は！」

携帯を取り出し履歴を確認すると、不在着信が並んでいる。家と母の携帯からだ。
狂いだした歯車は、どんどん噛み合わなくなっている。
理子からの着信が一件もないことが、さらに修司を焦燥へと急きたてていた。
ぐっと奥歯を噛みしめると、「早く理子ちゃんのとこに行きなさいっ！」と一喝された。
言われるまでもない。

「病院はどこ？」
「中村動物病院よ」
修司は玄関を飛び出し、車に飛び乗った。

25）病

☆
★
☆

――また眠れなかった。

うつらうつらとするだけで眠れない体に、どろりと重たい液体の中にいるような倦怠感が付きまとっている。

眠りたい、何でもいいから眠ってしまいたい。

誰からも邪魔されず、いやがらせもストレスもない世界に行きたい。

永遠に戻ってこれなくても良かった。どうせこの世界は理子に優しくはない。

何もかもを投げ出して終わりたい。

思いつきの思考はすぐに願望へと成長し、切望へと変わる。

薬に手が伸びる。ついさっきも飲んだ気がしたのは気のせいだったろうか。

少しも効かない薬、いっそひと箱全部飲めば夢の世界へ行けるのだろうか。

靄がかった頭で考える事はどれも甘美で魅惑的で、傷ついた心を癒してくれる。

誘惑に誘われて箱の中身をぶちまけた。手に取って残っている錠剤を数える。

ひとつ、ふたつ…、残りはたった6錠。

これだけじゃ到底眠りにはつけない。せっかく見つけた出口なのに、肝心の鍵がないなら意味がない。

ひとつも思い通りにいかない事がまた理子を失意の中へと落とす。

溜息を吐いて、枕に顔を埋めた。抱えるように抱きしめると手に携帯が当たる。何気なく取り出して時間を見れば、まだ１０時を少し過ぎた頃だ。

あれからまだ2時間ほどしか経っていない。

今は何もかもに苛立ちを覚える。

進まない時間も、眠れない体も、隣で眠っているシュウすら恨めしく思えた。

気だるい体で寝返りをうって、少し乱暴に小さい体を揺する。

「シュウ、起きて」

壁の方をを向いて横たわっている愛犬に呼びかける。

シュウもずっと眠り続けているのだろうか。

いつもなら7時には起きて理子の顔に全身を擦りつけてくるのに、この時間までおとなしく眠っているなんてどうしたのだろう。

怪訝に思って、今度はそっと体を揺する。反応のない愛犬に異変を感じるまでそう時間はかからなかった。

「シュウ？」

体を起こしてシュウの顔をのぞきこむ。

呼びかけても薄目を開けるだけで、顔を上げようとしない。尻尾が愛想程度に動くだけだ。

床に置いてある水が入ったボウルを持ち上げて口許に運んでも、顔すら近付けない。飲めないのかと思い、指を濡らして近づけてみるがそれも駄目だった。抱き上げると、ぐったりとしている。

くたりと両腕から零れ落ちる首に目を見開く。抱き上げた体が普段より重く感じられた。

理子はだるい体を引きずるようにベッドから降りて、トイレシートを見に行く。案の定、それは綺麗なままだ。

一度も水を飲まず、トイレにも行っていない。動いた形跡がないばかりか、呼びかけても反応が薄い。

（おかしい…）

気を抜けばすぐに霧がかる頭を振って意識を保つ。とにかくシュウを病院に連れていかないと駄目だ。

パジャマを脱いで、急いで身支度を整えた。化粧まで気を配っている余裕はない。

下に降りて財布にかかりつけの病院の診察券を入れて車のキーを探す。

（そうだ、修理に出したんだった…）

こんな非常時にどうして。

苛立ちはすぐに犯人への憎悪に変わる。

舌打ちして押し入れから電話帳を取り出し、タクシーを呼んだ。犬を乗せることも伝えておく。土壇場での乗車拒否でもされたら発狂しそうだったからだ。

タクシーが来るまでの間に、シュウをそっと移動用のバッグに入れた。

普段なら絶対に嫌がるのに。やはり具合が悪いのだ。

一分でも一秒でも早くタクシーが来るのを祈りながら、到着を待った。１０分ほどでやってきた車に乗り込んで『中村動物病院』の名を告げる。

「ごめんなさい。終わるまで待っててもらえますか？」

降り際に一言告げて、病院に駆け込む。待合室には順番を待つ人が理子以外に３人いた。

診察券を出してから、空いている席で順番を待つ。その間もシュウの様子は相変わらずだ。

（いきなりなんで。シュウに何があったの？）

募る不安に握った指先が冷たくなっていた。バッグを胸に抱えて、ひたすら順番が来るのを待つ。

シュウを守るように丸めた体が、ゆらゆらと微かに前後に揺れていることに、理子は気づかない。

ただ俯いて、じっと時間が過ぎるのを待った。

「杉山さん。杉山　シュウちゃん」

『杉山』は幸子の名字だ。ようやく呼ばれてはっと顔を上げる。

「はいっ」

シュウを抱えて急いで診察室に入った。

中では４０代前半の男の獣医と、三人の助手が待っていた。診察台を机代わりにして、丸椅子に腰かけながらカルテを見ていた先生が顔を上げる。

「白雪さん、どうされました？」

犬は具合が悪くても、言葉で訴えたりできない。些細な事でも、専門の先生に診てもらう事が大事だ。

たびたび訪れる理子は、先生と顔なじみになっていた。

「あの…、シュウの様子がおかしくて。元気が無いしぐったりしてるんです」

「いつからですか？」
「今朝…からだと思います」
咄嗟に答えたが、自信はない。
「そうですか。食欲は？今朝は食べましたか」
「今朝はまだ何も…、水も飲んでませんでした。昨日の夜は半分ほど残してました。でも普段からあまり量は食べないので、気にしなかったんです」
昨日、理子が帰ってきたときは普段通りだった。修司が帰った後、泣きじゃくる理子の傍にずっと寄り添っていたのはシュウだ。
あの時シュウの温もりに、心を救われたのだ。
もしかするとすでに具合が悪かったのかも知れない。まるで理子の心に呼応するように、ぐったりとなったシュウを見ると、鼻の奥がツンと痛くなった。
（ごめんね、シュウ…）
「何か誤食をしたということもないんですよね？」
「ない…と思います」
曖昧な記憶で部屋の様子を思い返すが、うまくできない。おそらくないだろうという程度だった。
「とりあえず血液検査をしてみましょうか。体に異常があると白血球の数値が上がるのですぐに分かりますよ。シュウちゃんは…まだ1歳ですね。生理はありましたか？」
「あ、はい。春先に」
「若いから子宮の病気はまだ無いと思うんですが、しばらく様子を

診てみましょう。この状態が続くようでしたら明日また来てください。血液検査で異常がありましたら、すぐこちらから連絡しますので連絡がとれる番号を受付に伝えてもらえますか？」

「あ…、はい」

理子は少し躊躇ったが、携帯番号を残すことにした。

今は着信を受けること自体が恐ろしくなっていきている。できる事なら番号の流出は避けたい。

だが、シュウの為だと思えば自分のことなど構っていられない。

優先すべきは、シュウの体調だけだ。

診療代を支払い、待たせてあったタクシーに乗り込んで家へ戻る。

部屋に入って、改めて誤食をした形跡を探すが杞憂に終わった。

単に調子が悪いだけだろうか。本当にそれだけなら良いのに。

シュウをソファに寝かせて、その隣に腰を下ろす。

いつの間にか時刻は昼になっているが、食欲などあるわけがない。

ここしばらくまともに食べていないせいで、胃袋の活動も緩慢になっているらしい。

食べたいという欲求が出てこない。空腹感も感じなくなっていた。

結局、何もしないままただ日が傾くのをぼんやりと眺めていた。

こうしていると自分とシュウだけ現実から取り残されたみたいだ。

全部放棄した理子にたったひとつ残ったのが、シュウ。

この命の温もりがすべてだ。

シュウは理子の体温が消えると不安げな声を上げる。弱弱しい鳴き声に胸がつぶされそうになりながら、ずっと小さな体を撫でていた。

何も考えられない。無言電話もいやがらせも、修司のことすら頭の隅に追いやられている。

障子が茜色に染まり出す頃、携帯が鳴った。

ぞくりと恐怖が背中を走る。

『着信＝無言電話』という構図は、いまや理子の中に染みついて

いた。
取りたくない。
携帯に伸びる手が躊躇う。しかし病院からかも知れない。そう思うと発信先を確認せずにはいられなかった。
恐る恐る開けると表示されている『中村動物病院』の文字。
ほっとするも、鼓動が跳ねた。血液検査に異常があったのだ。

「はい…、白雪です」

声が震える。

『中村動物病院です。シュウちゃんの血液検査で異常が出ましたので、すぐに再診にいらしてもらえますか？』

直後、目の前が真っ白になった。

☆
★
☆

電話を切った後、自分はどうしたんだろう。
気がついたら、修司の母　美由紀の車に乗っていた。今度はシュウを腕に抱えたままだ。
病院に着くと、順番を待たずに診察室に通された。
すぐにレントゲンと超音波検査をされるシュウを美由紀と共に固唾を飲んで見守った。

「シュウちゃんの白血球の数値が通常値の倍以上ありました」

先生の堅い口調に眩暈を覚える。

レントゲン写真と画面を睨みながら腹部を上から入念に探っていく手元を息を詰めて見つめる。
どうか、原因が見つかりますように――っ。

「…あ、これかな」

呟きにはっと顔を上げる。先生は何度も異変がある部位を確認して、場所と原因を特定した。

「うん、間違いないな。わかりますか、ここに影が見えますよね」

言ってモノクロの画面を指す。

「ここは子宮なんですけど、…これは膿ですね。子宮に膿が溜まっています」
「…膿ですか？」

ピンとこない理子が聞き直すと、先生は引き出しからファイルを取り出し、一枚のプリントした用紙を取り出した。
そこには『子宮蓄膿症』と黒字で大きく書かれてあった。

「これは子宮に膿が溜まる病気です。通常はもっと高齢の犬がなる場合が多いのですが、シュウちゃんはまだ1歳なのでおかしいなとは思ってたんですが、間違いないと思います。進行すると食欲がなくなったり、下痢をしたり、元気がなくなったりしてきます。治療法は外科手術で子宮を摘出するのが一般的ですね」

先生はプリントと照らし合わせながら、ゆっくりと丁寧に症状を説明していく。理子の心はどんどん冷えていった。

「手術…ですか？」
「そうです。全身麻酔になりますが、手術自体は避妊手術と同じですので、さほど危険はありません。むしろこのまま放っておく事の方が危険です」
「あの、ちなみに手術ではなく薬で散らせる方法はないんですか？」
他の方法が無いのか、本当にそれが最善なのか知りたくて尋ねた。
「シュウちゃんの場合、白血球の数値も異常ですし、かなり大きくなってますから、いつこの袋が破けてもおかしくありません。膿が体に回ってしまう前に摘出することが一番です。子宮をとることによって、メス特有の病気を防ぐ事もできますよ」
迷っている時間はない。
今、シュウの命運を握っているのは理子なのだ。
しっかりしろ！
理子はぎゅっと手のひらを握りしめると、真っ直ぐ先生を見た。
「わかりました。お願いします」

26）喧嘩　－前編－

☆
★
☆

手術は午後7時から始まった。麻酔が切れる時間を合わせて約2時間。

先生は一度家に帰るよう勧めたが、理子は無理を言って待合室で待たせてもらった。

車もないし、また来るとなると足を捕まえなくてはいけない。美由紀は何度でも送り迎えをすると言ってくれたが、さすがにそれは申し訳なくて断った。

「そう…、じゃあ9時過ぎに迎えに来るわね」

後ろ髪を引かれる美由紀を精一杯の笑みで送り、待合室の椅子に深く腰掛けた。誰もいない8畳ほどの部屋は有線が流れている。慌てて飛び出してきたので、理子の服装はこの時期には少し肌寒い。せめて上着くらい着てくるべきだった。暖房が入っているのは病院側の心遣いだろう。

流行りのＪ－ＰＯＰＳを聞きながら、ぼんやりと天井を眺めていた。

「大丈夫、心配ありませんよ」

先生の声にほんの少しだけホッとした。

助かるんだ。

ずっと張りつめていた緊張がようやく和らいだ。吐きだした息と

共に体の力が抜ける。
ほっとすると、瞼が重くなってきた。
一日気の張りっぱなしで、今頃になって疲れが出てきたようだ。
顔を下げて目を閉じると、すぐに睡魔がやってくる。

（少しだけ……）

理子は誘われるまま、意識を手放した。

☆
★
☆

心地よい揺れと煙草の香りが、意識をまどろみからすくい上げた。
目を開けると辺りは暗く、時折白とオレンジの光が横切っていく。

（あ…れ…？）

起きぬけの頭はぼんやりとして、目からくる情報をうまく処理しない。
だが熟睡したのは何日ぶりだろう。頭の中でずっと鳴り続けていた着信音もしなかった。夢も見ず安心して眠れたのは、何かに守られている気がしたから。
温かくて気持ち良いあれはいったい何だったのだろう。
眠りから覚めたばかりの瞼は、放っておくとすぐにまた下がってくる。何度か船を漕いでは目を開けることを繰り返していると、頬に何かが触れた。
薄目を開けて身じろぐと、体にかけられている物に気づいた。すっぽりと理子を覆うようにかけられたそれは、男物のジャケット。
煙草の香りはこれからしていたのか。

でも、どうしてこれが？

「起きた？」

聞き慣れた声に、はっと目が覚めた。

驚いて飛び起きると、途中で強い力に拘束された。胸を圧迫するほどの強さに、一瞬息が止まる。

（シートベルト…？ここ、車…？え…、なんで）

自分は手術が終わるのを待合室で待っていた。途中眠くなってうつらうつらしているうちに、眠ってしまったらしい。だが目が覚めたら車の中で、聞こえた声は修司に似ていた。この車内のインテリアも知っている。

（どういうこと…）

理子の予想通りだとしたら、隣にいるのは。

体を固定しているシートベルトを左手で握りしめて、ゆっくりと右隣を振り向いた。

「浅野…君」

「おはよう、よく眠ってたね。家までもう少しあるから、まだ寝ていいよ」

信じられない、どうして彼が。

「何度も起こしたんだけどよく眠っていたから。話は代わりに聞いてきたよ。シュウも麻酔から覚めて大丈夫だ。これがその時の動画」

車の時計は9：51分を表示している。少しのつもりが3時間も寝てしまった。

叩き起こしてでも良いから起こしてほしかった。ひと目、シュウの元気な姿を見てたくて待ってたのに。

体を起こして、ジャケットを膝にかけ直す。車の中は十分温かかった。

修司に当たるのは筋違いだと分かっていても、どうしても恨めしい目で睨んでしまう。

だが修司は嫌な顔もひとつしない。

優しい修司、今はそれが理子を苛立たせる。

昨日の今日で、どんな顔をして会えばいいのか分からない。

理子は修司ほど平然となんてできない。

（何で来たの）

理子が起きた時の為にあらかじめ用意してあったのだろう。修司は携帯を取って理子へ渡した。

差し出された携帯と、修司の横顔を見比べる。

躊躇いながら受け取って再生ボタンを押すと、プラスチックのカラーを首につけたシュウがケージの中で動き出した。

『シュウ、大丈夫か？』

修司の声だ。シュウはまだ少しふらつく四肢でケージの一番前までやってくる。

『手術は成功です。麻酔からの回復も良いですし、今のところ問題はありません』

『ありがとうございます。それでいつ退院できますか？』

『そうですね、早くても一週間後だと思います。食事は明日の夕方

からになりますので、その時はシュウちゃんの一番好きな物なものを持って来てもらえますか。このときだけは何でもいいです。とにかく一番食いつきのいい物を持って来てください』

『わかりました』

『それと、これが摘出した子宮です。どうされるかは飼い主の方が決めて下さい。埋葬も良いと思いますし、火葬でもかまいません』

先生とのやり取りの間も、携帯はシュウを映している。首に巻いたカラーが気になるのか、しきりに首を振ったり手を上げてカラーを触っていた。

一日ぶりに見る元気そうな姿に思わず口許が綻んだ。画面に映るシュウを指で撫でる。

（よかった、大丈夫そう…）

一時はどうなることかと途方に暮れたが、自分の判断が間違ってなかった事にほっと胸をなでおろす。

あの時、手術を決めて良かった。

『じゃあな、シュウ。また明日来るから』

修司の手がシュウの鼻をくすぐって、動画は終わった。

「理子が起きた時、絶対シュウの様子が気になると思ったから撮ってきたんだ。明日会いに行けるから、今日はそれで我慢してくれないか。あと受け取った箱は後ろにあるから」

言って後部座席を指差した先に、手のひらほどの大きさをした箱があった。

「子宮をとると太る子が多いらしいね。シュウも体調管理は気をつけてくれって言われた」
「そう…」

素直に「ありがとう」と言えないのは、昨日のわだかまりが胸の内でくすぶってるから。
シュウの事がひと段落しても、理子にはまだ難題が残っている。
そのひとつが修司とのことだ。解決しなければ駄目だとわかっているが、口火を切る勇気が無い。
窓ガラスに顔を向けて流れる景色を眺め始めた理子に、修司は何も言わない。
無言を乗せて車は真っ直ぐ家路へと走る。

どうしてここに居るの。
なぜ不倫の事を知っているの。
もう、あたしの事嫌いになったんでしょ……。

尋ねたいことは溢れてくるのに、どれも口に出してはいけない気がしていた。
また喧嘩になるのが怖い。傷つけ合いたくなかった。
違う、本当は自分の言葉で誰かが傷つくのを見るのが嫌なんだ。
罪悪感は後悔となっていつまでも記憶に残るから。自分が可愛いから、口論はしたくない。
所詮は、自分が嫌な思いをしたくないだけ。
変わる景色の分だけ時間を無駄にしている。今は話しかけるタイミングを図る時じゃないのに。
あれきり修司は口を閉ざしている。
伝える事が無くなれば、それ以上理子と話をするつもりはないということなのか。こじれた仲をなんとかしたいと思っているのは理子だけで、修司の中ではとっくに終わってしまっているんじゃない

か。漂わす硬質な空気が話しかけるなと言っているみたいだ。
怖がってても何も始まらない。
でも、怖い。
この期に及んで、まだ穏便に済ませたいと思う自分は、どれだけ憶病なのだろう。
額を窓ガラスにコツンと当てて、やきれない気持ちを吐き出すとその部分だけガラスが白く濁った。
いつの間にか車は修司の家に到着してしまい、さっさと駐車させるとエンジンを切った。

「降りて」

すっかり委縮してしまった理子に、抑揚のない声はただ冷たく聞こえる。
この先に結末がある。
そう思うだけで足が動かない。

「理子」

躊躇っている間に、修司が助手席のドアを開けた。遠くの街灯ひとつでは修司の表情は見えない。
逃げられないんだ。
観念した理子は、こくりと息を飲んで助手席を降りた。

27）喧嘩　－後編－

☆★☆

嫌々車を降りた理子は、修司と居るのが余程苦痛なのか、車の中でもシュウの話が終わった途端、そっぽを向いていた。笑ったのはシュウの動画を見ていたあの一度だけ。
話がしたくても、理子との間には分厚い壁がある。

――修司に対する拒絶。

自分のしたことを思えば当然の結果だが、これほど簡単に心を閉ざしてしまう理子に悲しくなった。
いったい、自分はどれくらい理子に信用されていたのだろう。
手を取り合っていたと思ったのは幻で、実際は糸ほどか細い絆だったんじゃないだろうか。
それでも理子を手放すことなんて、できない。
どうせこんなところではろくに話もできないだろうと早々に諦めた修司は、さっさと家へ帰ることにした。
理子とゆっくり話し合える空間が欲しかったからだ。
謝りたい。
だが、理子はその隙すら与えてくれない。
自分の部屋か、理子の家か逡巡したが、やはり理子の家で話すことにした。昨日、ここでこじれたのなら、ここで修正すべきだ。

「あれ…、電気ついてる」

窓から零れる光に後ろからついてきた理子が呟く。

「多分、母さんじゃないかな」

世話好きの母の事だ。理子を心配して待っていたのだろう。

玄関を開けると、案の定、台所から母が顔を出した。

「おかえりなさい。シュウちゃんはどうだった？」

この気まずい空気を一掃する母の声に少しだけ救われる。だが、それも一時のことだ。

「ごめん、母さん。ちょっと理子と話があるから外してくれる？」

「え、今から。理子ちゃん今日疲れてるんだから、明日にしてあげれば？」

「どうしても今じゃないと駄目なんだ」

首を振ると母は少し不満げに顔をしかめたが、「それなら仕方ないわね」と頷いた。

「理子ちゃん、今日何も食べてないでしょう。台所に鍋焼きうどんの準備してあるから、話が終わったら食べなさい。食欲が無くてもちゃんと食べきるのよ。明日見に来ますからね」

修司の後ろに立っていた理子は、母の勢いに気押されつつ頷いた。

「今日はいろいろとありがとうございました」

「いいのよ。困った時はお互い様っていうでしょ。それじゃ二人とも（・・・・）お休みなさい」

去り際に修司の腕を軽く叩いて行く。

（なんだよ、今のは…）

意味深な台詞に目をむいたが、理子は何も気づいてないようだ。

母の「これからしようとしていることなんてお見通しよ」と言わんばかりの顔を見ていると、その手のひらで踊らされている気がしてくる。

「理子、先にうどん食べるか？」

気を取り直して問いかけても、理子は首を振るだけ。母とはまともに話すくせに、相手が修司だと途端に口が重たくなる。それほど自分は嫌われてしまったのだろうか。

溜息を吐いて部屋に上がる。彼女の家なのに、当の本人はひどく居心地が悪そうだ。

「座って」

ソファに促すと、大人しく腰を下ろした。修司は畳に膝をついて、理子と向かい合える姿勢になる。

だが理子は俯いたままで、顔も見ない。右手の人差指を反対の指で摘まんだり離したりして気まずさを誤魔化している。見かねてそれに手を置くとものすごい勢いで振り払われた。

「や…っ」

言葉でなく態度での拒絶。その瞬間、修司の中で何かが切れた。

もう一度その手を掴む。また振り払おうとするが、修司は離さなかった。

「理子、俺を見ろ」

理子は俯いたまま首を振る。

「ちゃんと話をしよう。俺達、大事な話から逃げたよな」

掴まれた手を暴れさせながら、また首を振った。どうあっても顔を上げる気はないらしい。

何が「違う」と言っているのか、いい加減言葉で話してほしい。その口は何のためについている。

思いを伝えるためにあるんじゃないのか。

「俺は逃げた。理子に感情をぶつけるのが怖かったから、ろくに話も聞かず君に背を向けた。本当はあの時、相手の男に嫉妬してたんだ。理子が不倫してるわけないって分かってたけど、見知らぬ車で送られてきた姿を見たら居ても立っても居られなかった」

理子が話たくないなら、自分の気持ちを伝えるだけだ。

彼女が心の闇をうち明けてくれるまで、いつまでだって伝え続ける。

これで終わりになんて、絶対にさせない。

「車が故障したのも、嘘だと思ってた。それは男と会うための口実で、俺は騙されてるんじゃないかって。冷静に考えればそんなわけないのに、それすらも分からなくなってた。あの時、俺が好きだと言ってくれたのは、それが理子にとって真実だったからだろ。なのに、分からないなんて言ってごめん。俺は昔の事をとやかく言うつもりはないよ。君が終わっているというなら、俺はそれを信じる」

いつの間にか、理子の抵抗は止んでいた。まだ顔は上げないが、じっと黙って修司の言葉を聞いている。が、最後の言葉を聞いて理子の肩が震えた。

修司はその様子に眉を潜める。なぜ怯えるのかが分からなかった。

「……うそつき」

ぽつりと落ちた言葉は、悲しみに満ちていた。

修司はその言葉をうち消すように首を振る。

「嘘じゃない。俺は理子を信じる」

「嘘よ…。だって疑ったじゃない…、あんな簡単にあたしのこと疑ったでしょ！」

はじかれたように顔を上げた小さな目には、たくさんの涙が溢れていた。

「不倫なんて、もうしてない！あの時の一回だけよっ！あの人とだって一度も会ってないわ、なのに…っ！」

「ごめん」

「あたしのことなんだと思ってたの？二股かけてるように見えた？そんな風な目で見られてたって知って、あたしがどんな気持ちだったのか分かる？あぁ、あたしってそんな程度の女なんだ、って。好きだって言っても一蹴されたあたしの気持ちがわかるの？！」

吐き出したのは、初めて聞く修司への不満。

どこにもぶつけられなかった感情が、今修司めがけて襲いかかってくる。

刺さる言葉が痛い。

それが深く彼女が傷ついていることを告げていた。

「それを簡単に信じるなんて、なんで言えるのっ？あたしには信じられるものが無いんでしょ、そう言ったじゃない！」

責められてぐっと奥歯を噛みしめた。確かに昨日そう言って彼女を責めた。

なのに今日は理子を信じると言われれば、疑いたくもなるだろう。だが、その一日が修司には重要な時間だった。彼女の周りで起きている事を知ることができた貴重な時間でもあった。

「ごめん…」

だから謝った。だが、理子はそれすら拒絶する。

「謝らないで！どうせ本気でそんなこと思ってないくせに！あの人だっていっつも口先だけだったわ！理子が好きだから、俺を信じて。それればっかり言ってた。あなただってそうなんでしょっ？」

自分の過ちのことならいくらでも我慢もできた。が、昔の男と一緒くたにされて黙ってられるほどお人よしではない。

「だったら、ちゃんと言えよ！」

理子の吐きだす激情につられて、気がつけば叫んでいた。

「分かってほしいなら、俺に話すことがあっただろ！なんで、いやがらせ受けてるの黙ってた。俺や山下に黙ってた理由って何」

「な…んで、それ」

小さな目が限界まで見開いて、絶句した。

当り前だ、彼女はいやがらせの件についてひとことも口にしていない。ばれていることなど知りもしない。

だがそんな説明は後回しだ。

そんなものより、今は大事なことがある。

彼女を想う気持ちがひと欠片も零れることなく、理子に届いて欲しい。

「俺はもう君のどんな話を聞いても絶対に嫌いになれない。この先理子が泣いて嫌がっても、離してやる日は来ないよ。それくらい理子が欲しいんだ、俺には必要なんだよ。情けない姿や、惨めなとこも見せてくかもしれない。俺は今までそういう感情を誰かに見せた事がないから、本当に格好悪い姿になるだろうけど、理子には見ていて欲しいんだ。気がついてる?俺の手、馬鹿みたいに震えてるの。――君に嫌われるのが怖くて必死なんだ」

冷たくなった指先で、縋るように理子の手を握りしめる。

離れて行かないでほしい。

大切だから、どこにも行かないで。

ただ切に願って強く握りしめると、包んだ手に力が込められた。

でもそれは振り払う為のものではなく、修司の手を握り返す為。

驚いて顔を上げると、泣き笑いみたいな顔をした理子がいた。

「――本当に?」

握り返した手が、自分と同じくらい冷たいことにようやく気がついた。

理子も怖かったのか。

修司が不安に思っていたように、彼女も不安だった。車の中の見えない壁は拒絶なんかじゃなく、怯えていただけなんだ。

小さな目から、宝石みたいな涙が零れ落ちてくる。

「話しても、あたしの事…。嫌いにならない…？」

それは理子が心を開いた瞬間だった。

修司はこみあげるものを必死で堪え、力強く頷いた。

途端、理子の顔が完全に泣き顔へ変わる。

「ほ、ほんとはね…、ずっと怖かったの。言いたかったけど、もしかして隆文さんじゃないかって思ったら、どうしても言えなかった。あなたには、不倫してた事を知られたくなかった…っ」

やっと聞けた。理子の本音。

だから、修司には何も言わなかったのか。

「おいで、理子」

引き寄せると、素直に腕に落ちてくる。

最後に抱きしめた時よりずっと細く薄くなった体を力いっぱい抱きしめた。

ようやく還ってきた愛しい温もりに今度こそ涙が落ちた。

髪を撫でれば胸の中で子供のように泣きじゃくる。ずっと耐えてきたものからようやく解放されたんだ。

思いきり泣けばいい。

もう、絶対に彼女をこんな目には合わせない。

柔らかい髪に顔を埋めて、彼女の香りを深く吸いこんだ。

報復の幕開けはすぐそこだ。

だが、今夜だけは取り戻した幸福に浸っていたい。

28）誘惑と理性

☆★☆

腕の中で愛しい人が身じろいだ。
ソファーの肘置きを背もたれにして、理子の髪を指に絡ませて遊んでいた修司は視線を下げると、その頭に軽く唇を落として彼女を支えていた腕の力を緩める。
理子が鼻をすすって体を起こした。

「もういいのか？」

頷いて、顔を上げた。乾ききっていない涙が両目を潤している。泣きすぎて赤くなった鼻の頭を指でかきながら恥ずかしそうにはにかんだ。

「ごめん、濡れちゃった…」

言ってその部分を指でなぞる。涙でしっとりと濡れたそこは理子の体温が離れたせいで、ひんやりと冷くなっている。本人は拭いている気になっているのだろうが、修司からは濡れた衣服を押しつけているようにしか見えない。
だが、その行為すら愛おしく感じてしまい、自然と口元が綻んだ。
ひとつ欲を言えば気にするのは修司の服ではなく、修司自身にしてほしい。

「いいよ、気にしないから」

両手で理子の頬を包み、親指で涙を拭う。自分の額と理子の額を軽く合わせて、小さな目を覗き込むと理子が少し笑った。それだけで幸せな気持ちになり、心の赴くまま唇を合わせる。

こうして彼女に触れるのも久しぶりだ。

柔らかい弾力に誘われ、すぐに深いものへと変わる。

本心は今すぐにでも彼女のすべてを自分のものにしてしまいたいが、今夜はもうひとつ大事な用が残っている。

分かっているが味わってしまった幸福観から逃れるのは難しい。名残り惜しさは振り払えず、「あと少しだけ」と自分を甘やかした。

それでもなんとか唇を離せば、零れた吐息が未練を誘う。

余韻が残る表情はひどく扇情的で、今すぐにでも引き戻したい衝動にかられる。理性だけが必死でそれを押し留めた。

潤んだ目がこの先を望んでいるのがわかるからこそ、苦しい。

まるで試されてるみたいだ。

「そんな顔しないで、…たまらなくなるから」

結局、早々に白旗を上げるしかなかった。これ以上、その顔で見られたら自制が引いた一線を越えてしまう。

いや。絶対、超える。

だが理子はそんな苦悩も知らず、さらに煽る。

腕を広げて修司の首に絡めると、自ら唇を寄せてきた。

（なんで、よりにもよって今日なんだ…っ）

こんな積極的な理子は見た事が無い。細い体と口づけを受けとめながらも、千載一遇のチャンスをむざむざ手放そうとしている自分は大馬鹿者だ。

それでも深みにはまる一歩手前でとどまれたのは、渾身の自制心

が踏ん張ったからだ。
目先の快楽を選ぶのは容易いが、それで理子の不安が解消されることはない。何も考えず、ただ修司を感じながら眠らせてやりたいと思う。だが、それは今夜じゃない。
痩せた体、疲弊をにじませた表情。そこに肉体的な疲労を重ねさせるわけにはいかなかった。
目を閉じて、一切の煩悩を振り払うように深く息を吐いてから、ゆっくりと理子の体を離した。

「これ以上は駄目だ」
「……どうして？」

初めて見せる修司への甘えと、欲情と、拒絶された悲しみが混じった表情に、せっかく築いた防壁に亀裂が走る。が、からくも持ちこたえた自分の理性に励まされて理子を見た。

「まだ解決してないことがあるだろ。今からしておきたい事があるんだ」

怪訝な顔に「いやがらせ対策」と告げると、途端に表情が翳る。視線を下げて唇を結びながら頬を少し膨らます仕草は、とてもさきほど見た「女の顔」からは想像できない。修司の知っている理子の顔だ。
悔しいが今だけは理子の気が削がれたことにほっと胸をなでおろした。

「対策って、なに？着信拒否したら違う番号でかかってきたのに。メールだって」
「大丈夫、一個ずつ見ていくから心配するな」
「でも…っ」

余程堪えているのだ。怯えた仕草を宥めるように頭を撫でた。

「大丈夫だ」

揺れる眼差しを真っ直ぐ見つめかえして、力強く告げる。それでも不安の色は完全には消えなかったが、修司の言葉に頷くとまた腕の中に飛び込んできた。

「…お願い、ぎゅってして」

両腕を背中に回された腕の強さと呟きに頬が緩む。

心を開いた理子は、どうしようもないくらい修司のツボをくすぐっていた。

☆
★
☆

ようやくパソコンを開くことができたのは、それから1時間後だった。

隣では理子が遅い夕食を食べている。もちろん、母が用意していた鍋焼きうどんだ。

お互いそれぞれ風呂に入り、理子が上がってくる前にうどんを作った。

一旦家に戻ってきて出て行く修司に、母は一度だけ視線を流したが何も言わなかった。

再び理子の家を訪れた修司がまず始めたことが、無言電話対策だった。

バッテリー切れで放ってあった携帯を充電させながら電源を入れ

た途端、並ぶ不在着信に目を疑った。
理子はうどんを啜りながら、バツの悪い顔をして修司の顔色を窺っている。

（よく耐えてたよ…）

驚きや呆れよりも、その精神力は称賛に値する。沙絵といい、理子といい、修司が思っている以上に女性はたくましい存在なのかもしれない。
なのに、当の本人は叱られた子供みたいな顔をしている。修司の反応が気になるようだ。
口を開きかけた途端、鳴り出す着信音。その音に理子の肩が震えた。
彼女の様子を横目で見ながら、通話ボタンを押して耳に当てる。が、当然無言だ。
修司は迷わず切った。
すぐさま「迷惑電話おことわりサービス」にその番号を登録する。もし、清水がこの一台しか手元にないのなら、今夜はかかってこないだろう。
まだ自分の携帯でかけてこないだろうと踏んでのことだ。

「…いま、何したの」

理子が不安そうな声で尋ねた。

「迷惑電話を着信拒否にしてくれるサービスに登録しただけ。違う番号でかかってきたら、また登録して。清水が尻尾を出すまで続けるから」
「……清水？って、あの清水さん？」
「そうだよ。この犯人は彼女だ」

清水の名を聞いて、理子は心底驚いた顔をしていた。どうやら彼女は不倫相手以外、犯人を想定していなかったようだ。

「でも、今はまだ証拠がね。他には？さっきメールがどうのって言ってなかった？」

「なんで、どうしてあの人がこんな事するの？」

「うん、それは作業しながら話すよ。だから、理子もまず食べなさい」

すぐに箸を置こうとする理子を窘めると、慌ててうどんを頬張り出した。

（まったく…）

すっかり食が細くなった理子は、たった一杯のうどんを食べるのも一苦労だ。加えて修司のしている事にも興味があるらしく、目を離すとすぐに修司の手元ばかりみている。

「それは、何？」

「これは、夜間の電話は受けないように設定してるんだ。悪いけどこの携帯はしばらく使わないで。明日、違うヤツを渡すから。…ほら、また箸が止まってる」

「あ、はい…」

まるで子供を相手にしているみたいだ。

29）偽王子の欲望

☆★☆

「しばらくちゃんと食べてなかったんだろ」

手こずっている様子を眺めながら尋ねると、ちらりと一瞬だけ視線が合うがすぐ逸らされる。本当はもう食べられないのだけど、修司が見ているから無理やり食べているのが見え見えだ。

だが、甘やかすつもりはない。ここで食べることを思い出させておかなければ、理子の体は細くなる一方だ。

女の子は少しくらいふくよかな方が良い。

ようやく食べ終えた頃には、満腹感にぐったりとしていた。

「もう明日の夜まで食べられない……」

ソファーに埋まった顔から、くぐもり声がする。

「うん。明日の朝は母さんが何か持ってくると思うから、がんばれ。あと、明日はまだ会社に行ったら駄目だからな」

「え、なんで」

「そんな顔して仕事なんてできるわけないだろ。明日は家でゆっくりしてろ。でも、病院なら行ってもいいよ。精神科のある病院に行って診断書貰っておいで」

「精神科っ？診断書って、なんで？」

「精神的苦痛を証明するものだから」

「なにもそこまでしなくても……」

馴染みのない科への受診と診断書の言葉に、理子が完全に引いたのが手に取るようにわかった。
どうやら彼女も事の重大性を分かっていないようだ。
パソコンのメールソフトをいじっていた修司がかけていたメガネを外して、理子をねめつけた。

「理子は単なるいやがらせって思ってるだろうけど、これはもう犯罪なんだ。向こうがどういうつもりかは知らないけれど、現実として理子の生活に支障がきてる以上、彼女には相応の償いはしてもらう」
「でも…」

修司の言葉を聞いてもおよび腰の態度に、呆れて眉を寄せた。
ここまでされているのに、まだ牙をむく事を恐れている。

「理子の優しさは良いところだけど、変な同情はやめろ。このままは嫌なんだろ？」

少しきつく問いかけると、理子の目が揺れる。が、小さく頷いた。

「うん、俺も嫌だよ。だから、これで終わらせるんだ。自分を守るために戦うことも覚えて。いいね」

諌めると、理子は顎を引いて目を反らした。
彼女がもめ事を嫌っているのは雰囲気で感じていた。だが、降りかかる火の粉も自分の手で止めることができることをいい加減知らなくては駄目だ。
傷つくのも傷つけることも恐れていては何も解決しない。
様子を窺っていると、理子は唇を引き締めて修司を見た。

「そのかわり、彼女をどうするかはあたしに決めさせて」
「わかった」

もちろん、修司もそうするつもりでいた。あくまで今やっている作業は、清水の逃げ道を断つ為のものだ。証拠が揃っているからといって、法に訴えるかどうかは、被害者である理子に一任する。

頷くと、理子も頷き返した。

りきみ過ぎて口がへの字になっている。

思わず噴き出すと、途端にそれがタコになった。

「人の顔を見て笑うなんて」と口を尖らせているが、可愛いと思ってしまうのだから仕方がない。頭を撫でると、ますますふくれっ面になった。

理子のこんな顔を見るとホッとする。笑った顔だけでなく、これからは違う顔も見せてほしい。

「ところで、メールが届き始めたのは先週から？」
「ううん。もっと前からなんだけど、くる度に消したり迷惑メールに入れたりしてたの」
「そうか、この辺は山下にやらせるかな。明日来るように言っとくよ」
「……やっぱり、尚ちゃんも知ってるんだ」

山下の名前にまた理子の顔が翳った。

「まあね、犯人を突き止めたのもアイツだし。あれはさすがにバレるよ」

経営側の人間としては、会社のデータに手を出したなら見過ごしておけないだろう。

「……尚ちゃん、怒ってなかった？」

清水が不正アクセスして情報を得た事を知らない理子は、役員としての山下より、兄としての反応を恐れていた。それほど前の一件が堪えているのだ。

「いや、どっちかって言うと、俺にキレてた。理子と別れろって詰め寄ってきたな」

「そうなんだ…。ごめんね、結局迷惑かけちゃって」

肩を落として項垂れる姿にはにかんで、細くなった体を引き寄せた。

「そう思うなら、これからは話して。何も知らないのが一番堪える」

実際、山下を筆頭に非難の集中砲火を浴びせられっぱなしだ。すべて自分の不甲斐なさが原因だと言われれば返す言葉もないが、さすがに気持ちが折れそうになった。

「……ごめんなさい」

それでも、こうして理子が自分の傍に帰ってきてくれたのだから、まだ首の皮一枚くらいは繋がっていたらしい。

もう、あんな思いは二度とごめんだ。

肩に乗った頭に軽く口づけを落として、肩を抱き寄せる。

ふわりと香るシャンプーの香り、流れる長い髪から覗くうなじの艶めかしさが目に入って、くらりと意識がもっていかれた。

今夜の理子はなにかと危うい。

心を開いてくれたのは嬉しいが、ここまで無防備になられるとど

う対応していいか分からない。
何気なく抱きよせただけなのに、これほど簡単に自分の首を絞めれるものなのか。
うっかり走り出そうとする欲望の襟首を慌てて掴むと、理子の頭に顎を乗せながらやるせなさを吐き出した。

もうこのまま抱きたい。

こんなに我慢するはめになるなら、とっとと抱いておけば良かったと、しみじみ後悔する。
大事にしすぎて今まで手が出せなかったなんて、偽善にもほどがある。
自分は聖人君子でも白馬の王子でもない。
どうしようもないくらい、ただの男だ。好きな女を抱きたいと思って何が悪い。
それでもやりきれない気持ちを振り払って、なんとか思考を違うことへ向ける。

「もう他には何もされてない？電話と、メールと、車の細工と、それだけ？」
「メールに添付されてる写真がポストに入ってた。それで全部」

言いながら理子が顔を肩に摺り寄せる。触れる感触は彼女が部屋着一枚しか着ていないことを教えていた。

（やばい…）

コクリ…と生唾も飲み込んでしまう。
さっきはなんとか凌いだが、作業もひと段落した今はとどまる要素がない。いや、彼女の体を気遣うという大事な要素はあるのだが、

当の本人は全く頓着していない。
これは無防備の延長なのか、それとも誘っているのか。
もう試されてるどころの話じゃない、生殺しだ。
それなりに経験を重ねてきたつもりでも、理子が相手だとまるで中学生だ。こうして抱きしめているだけでも限界が来る。
いっそ、このまま波にのまれてしまおうか。
悶々としていると、理子がふいに顔を上げた。
ほんのりと赤くなった頬、女の顔に胸が高鳴った。
小さな目の訴えが口から零れ落ちかけるが、言葉になる前にまた肩に埋まった。触れ合っている部分がほんのりと熱い。
伝わる熱が彼女の気持ちだと受け取っていいだろうか。

（どっちにしろ、俺がもう限界…）

愛しくてたまらない存在が腕の中にいて、温もりを感じて、お互いにそれを望んでいるのに手を出さないはずがないだろう。
百理由を並べても、この欲望には抗えない。

「……眠れないぞ」

手を出してしまえば、止まらなくなるのはわかっている。
なけなしの理性で尋ねると、「…それでも、帰らないで」と消え入りそうな呟きが返ってきた。

その瞬間、欲望が自制を越えた。

30）余韻と油断

☆★☆

翌朝は、修司の心を切り取ったような爽快な青空が広がっていた。

「よぉ。昨日は御馳走さ…、ん？」

尻あがりのおかしなトーンに振り返れば、未来の義兄がいつも通りのおちゃらけた顔で立っていた。

「おはよう」

挨拶を返すと、一瞬惚けた顔になり、はっとしたかと思えば、途端に険を孕んだ。

「修司、お前…」

「何」

気色悪い百面相に眉を寄せながら問いかける。するといきなり両肩を掴まれた。その態勢で山下が顔を寄せてきたので、咄嗟に手を顔と顔の間に差し込んだ。

（いきなり何だよっ）

出勤時間まっただ中の、社員が往来するロビーで何をしでかしてくれるのか。周りから見れば、修司が一方的に迫られているように

見えているはずだ。その証拠に、数人の女子達がこっちを見ながら「きゃあっ」と黄色い歓声を上げている。
冗談じゃない、きゃあと言いたいのはこっちの方だ。
何の因果で朝いちから野郎に迫られなきゃいけない。しかも嬉しくない事に山下の目は真剣だ。兄妹とはいえ修司を強請ってくれるのは理子だけでいい。
力いっぱい顔を押しやると、山下が負けじと押し返してくる。
無言の攻防を数秒繰り広げて、なんとか引き剥がすことに成功して見れば、今度は剥き出しの敵意を投げつけられた。

「だから、何」

スーツの乱れを整えて、向けられた視線と奇行の理由を尋ねる。
山下はじっと修司を凝視したまま、ぼそりと呟いた。

「――――したのか」

何を、と聞き返すほどお子様じゃない。だが、不躾な事を真顔で尋ねる山下のデリカシーの無さにこめかみが軽く痙攣した。
修司は答える代わりにメガネを外して、いつもより2割増しの笑顔で返す。素顔で放つ全開の王子スマイルに周囲からはさっきより盛大な歓声が上がった。それを尻目に山下が奥歯で苦虫を噛み潰すと、「ちょっと来い！」腕を掴んでずんずんと社内に入っていく。

「なんとかしろとは言ったが、なんだよ！そのきらっきらの王子スマイルはっ！昨日までのヘタレちゃんはどうしたっ！」
「お前が下らない事を聞くからだろ」
「アイツの匂いをぷんぷんさせてくるからだっ」
「そりゃ、するだろう。さっきまで一緒にいたんだからな」
「こ…の、ゲス野郎！」

くわっと目を見開いて、山下が吠えた。
いくら本人の意思が尊重される大人の恋愛とはいえ、こうもあからさまに見せつけられるのは兄として面白くないのだろう。
ロビーで迫ってきたのは、修司の体についた理子の残り香を確認するためだったのか。

（まったく…、犬かコイツは）

相変わらずのシスコンっぷりには困ったものだ。
メガネをかけ直して呆れた顔をすれば、ますます山下の鼻息が荒くなった。

「お前という奴は…っ、性欲なんか無さそうな顔しながら…。このむっつりスケベ！俺はまだ認めてないぞ！」
「お前の許可がいるとは思わん」
「俺の妹だ！」
「違うな。俺の彼女、だ」

誰がなんと言おうと、理子は自分のものだ。
一歩も引かない兄を相手に、このくだらない悶着も何回繰り返したことか。
何をしようと自分達の勝手だ。どこに交際の進捗具合をいちいち報告するバカがいるんだ。しかも、相手は理子の兄。絶対に言うものか。

理子を離してやれたのは、ほんの2時間ほど前のこと。宣言通り、一晩中理子の甘さを堪能していた。
なにが理子の体を思いやってだ。触れてしまった後は、タガが外れたように理子を求めた。

もう無理だと懇願する彼女を何度も追いつめた。
ぷっくりと赤く腫れた唇も、そこから零れる吐息も、潤んだ目も、しっとりと汗ばんだ肌も、何もかもが修司を誘った。
とどまる事の知らない欲望に夢中になりすぎて、気がつけば腕の中の恋人はくったりとなっていた。
おかげで一睡もしていないが、心の中はいつになく清々しい。
陰鬱とかかっていたどす黒い雲が一掃したような気分。晴れた視界に何もかもが眩しく映ってしまう。
ようやく身も心も自分のものになったという陶酔感に、思わず口端が緩んだ。
そんな様子を見てひくりと頬を痙攣させた山下だったが、諦めたように盛大な溜息を吐いた。
ようやく立ち止まった場所は、あの非常階段だ。

「それで、アイツは？」

がっくりと落ちた肩が寂しそうだ。

「休ませたよ。あの状況じゃ仕事なんてできそうにないし」
「お前は中学生か」
「バカ言え。そういう意味じゃない」

あながち嘘ではないが、それはまた別の話。休ませたのは昨日までの様子が芳しくなかったからだ。
ぐっすりと眠り込んだ横顔を思い出して、修司は細い息を吐いた。
ベッド下に散らばっていた飲みかけの錠剤。手に取った箱に書かれた『睡眠薬』の文字にぞっとした。
残り少なくなっていたそれが、常用の頻度を物語っていた。
あんなものを使わないと眠れなくなっていたなんて、今さらのように後悔が押し寄せた。

疲労が残る横顔をそっとなぞった感覚がまだ指先に残っている。

もう、これ以上の危害は加えさせやしない。

修司の眼差しの強さを横目に、山下が早速煙草に火をつけた。「お前も吸うか？」と差し出すが、修司は首を振って断る。

「理子が嫌がるから」

「あっそ…」

やっぱり面白くない顔をして、白い煙を吐き出した。

「で、昨日教えた事は全部したんだろうな」

「あぁ」

昨日修司がした「いやがらせ対策」は山下からの指示だ。

「アイツはそういうことはからきしだからな。防戦一方で立ち向かうことを知らない。しかも穏便に済ませたいと思ってる。犯人を締め上げるって言ったら嫌な顔してただろ」

「……本当、お前は呆れるほど理子を知ってるな」

理子を知り尽くした口調に、少し嫉妬する。山下はふふんと鼻を鳴らした。

「当然。離れてた期間はあるけれど、ずっとアイツを見てきたのは俺だもん。今更シスコンが止められるか」

「なんだ、自覚はあったんだ」

驚くと山下は煙草を咥えながら自嘲的に笑った。

「言っただろ。今度こそ理子には幸せになってほしいって。その為なら何だってするさ」
「また権力を行使してでも？」
「今度は修司、お前がいる。俺が手を下さなくても理子が望む終わり方ができるはずだろ」
「随分と買いかぶられたな。それは俺が兄貴のお眼鏡にかなったと受け取っていいんだな」
「気が早いぞ。でも、まぁこれが解決できたら考えてやってもいい」

にやりと笑う山下に、「えらそうに…」と悪態づいた。

修司もこんな事をいつまでも続けるつもりはない。
登録番号以外の受信を拒否しなかったのは現行犯で現場を押さえるためだ。もし違う番号でかかってきたとしても、理子には迷惑電話を着信拒否に登録するよう言ってある。清水だってそうそうプリペイドの携帯ばかり買っていられないはずだ。いずれ違うものに頼る。
形勢を逆転させるには、絶対に勝てる喧嘩でなければ駄目だ。これはそのための仕込み。
必ず仕留めてやる。

「じゃあ、しっかり協力してくれよ。山下、お前がすることは？」
「…清水の共犯をさぐること」
「そういうことだ」

清水にセキュリティをかいくぐってデータに侵入するほどの知識はない。使用されていたパスワードは経理課課長のものだ。考えられる選択肢は、課長自らが清水に教えたか、誰かがパスワードを偽装し清水に渡したか、それとも清水自身が自力でパスワードを持ち

出したかだ。
彼女の交友関係は沙絵がそれとなく調べることになっている。女子達の情報網は侮ってはいけない。特に「ここだけの話」はとんでもない爆弾を抱えていたりする。
そこで得た情報を修司に流すことが、沙絵に与えた仕事だ。ただやる気に満ち溢れた沙絵が勢い余って首を突っ込み過ぎそうで怖い。もし沙絵に何かあったら、間違いなくあの彼氏に殺される。

「まぁ、そっちは任せろ。俺の会社で好き勝手はさせないからさ」

にやりと口端にシニカルな笑みを浮かべる山下は、どこか楽しげに映る。普段おちゃらけた男が、一旦こうなると獲物を捕食するまで終わらない。修司にとって理子への嫌がらせを止めさせることが目的なので、不正を犯し理子を追いつめた者にかける情けは微塵もない。
共犯者をどうするか、清水にどんな処分を下すのかは山下次第だ。一介の課長補佐が口出しする権限はない。

「それと今夜にでも彼女の家に行ってやって。メールの復元をして欲しいんだ」
「了解」

修司との仲は相変わらず不満のようだが、理子を守りたいという点は一致している。始業時間が迫っていたので修司は「じゃあな」と言い残して先に社内に入った。

自分の部署へ向かいフロアに入ると「おはようございます」とそこかしこから声がかかる。
その声に応えながらデスクに着くと、改めて声がかかった。
顔を向ければ、清水が立っていた。理子とは対照的な溌剌とした

表情に一瞬で胸糞が悪くなる。
あれだけの事をやっておきながら平然とできる神経が分からない。
その表情には心なしか自信のようなものも窺える。以前は感じなかったものだ。
思わず眉をひそめかけて、メガネを押しやる仕草で誤魔化した。

「おはよう」
「課長補佐、こちらの書類にサインを頂けますか」
「分かった、そこに置いておいて」

視線でデスクの端を指すと、その場所に書類が置かれる。が、清水は席に戻ろうとしない。

「まだ何かあるのか？」

内心うんざりしながら問いかけると、口ごもった。こういう仕草をする時は、まず仕事関係の話ではない事は、もう知っている。
躊躇いがちの様子を無言で見返した。

「あの…、昨日、高木さんとご一緒だったんですね」

やっぱり。
しかも言った清水はなぜか嬉しそうだ。
昨日は沙絵とロビーで待ち合わせをして二人で会社を出た。そのすぐ後を山下が追いかけてきたが、誰もそこまでは気に止めなかったのだろう。

（…あぁ、なるほど。そういうことか）

清水がどこかで見ていたのか、もしくは人づてに聞いたのかはど

うでもいいが、彼女は自分の計画が順調だと思っている。とんとん拍子に計画が進んですっかり有頂天になっているんだ。

垣間見る自信はそこからか。

確かに彼女のたくらみは半ば成功していた。実際、理子は薬に頼らざるを得ないほど疲弊した。

これで修司が沙絵と復縁でもすれば、万々歳だったに違いない。だが、物事にアクシデントはつきものだ。計画通りに行くことなど稀だと言ってきたはずなのに、清水はそのことをすっかり失念している。

この場合、それは修司だ。

そもそも、清水はなぜ修司にばれずに遂行できると思ったのか。とは言うものの、修司もここまで事態を悪化させるまで何も手を打てずにいたのだから偉そうなことは言えない。

でも、挽回のチャンスは掴んだ。

「浅野課長補佐？」

「いや、なんでもない。それが、どうかしたか」

修司が浮かべた含み笑いに、気を良くした清水が嬉しそうに話を続ける。

「やはりお二人が並ぶ姿はお似合いです」

「そう」

「そういえば…、総務課の白雪さん。昨日からお休みなんですよね」

あぁ、全容が見えていると清水の行動のひとつひとつが滑稽に見えてくる。

接点のない清水がどうして理子の欠勤を知っているのかなんて、普通に考えてもおかしいだろう。

わずかな油断が計画に綻びを生んだ。

今度こそ眉を潜めると、「ご存知じゃないんですか？」と小首を傾げた。

もしここが職場でなくて、彼女が男だったら間違いなく殴り倒している。理子を追いつめておいて、しゃあしゃあと彼女を語るふてぶてしさには、もう嫌悪しか感じない。

「ただの風邪だよ。熱が下がらないんだ」

職場で堂々と上司のプライベートを尋ねる態度もどうかと思う。もっと節度をわきまえた人間だと思っていたのは、修司の勘違いだ。理子の様子を伝えることで、まだ切れていないという事も匂わす。案の定、一瞬だけ清水の顔が険しいものになった。

「気にかけてくれて、悪かったね。でも大丈夫だから」

「…いいえ。偶然耳にしただけですから」

一礼して清水が踵を返す。その後姿に向かって修司が声をかけた。

「それと、この間の件だけど。――先方に確認したが事実無根だった。君も根拠のない噂に惑わされないように。いいね」

鋭い視線で語尾を強めると、振り返った清水がきゅっと下唇を噛みしめた。

「…はい、申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる姿に、報復の幕が上がった。

さぁ、次はお前が狩られる番だ。

31）兄と妹

☆★☆

いつもより少し遅めに帰宅した修司が、理子を訪ねたのは夜8時頃だった。

その日一日の理子を様子をざっと母から聞いて、着替えてから家を出る。帰りに寄った携帯ショップの袋も忘れずに持った。

「今夜も泊まるの？」

「どうかな、まだ決めてない」

昨日は母の思惑通り理子の家に泊まった修司に、母は軽く頷いた。

「好きにしたらいいけど、順番だけは間違えないでね。ちゃんと避妊はしなさい」

なんだろう。もうすぐ30になる息子に堂々と避妊の義務を説く母は何者だ。

一瞬固まると、にっこり笑った母が「あなたはお父さん似だから」と呑気な声で含みのある言い方をする。

父親似だと何があるというのか。

言葉の意図を量りかねていると、母が珠のように笑って言った。

「私達の頃って、今ほどデキちゃった婚が容認されてなかったでしょう？お祖父ちゃんなんて、そりゃあ怒っちゃって。そのままぽっくり逝くんじゃないかって、こっちがハラハラしたぐらいなのよ。

お父さんもしらっとした顔で”うっかり忘れました”なんて言うものだから」

昔の思い出話を楽しそうに話す母だが、その内容はかなりディープだ。

うっかり何を忘れたって？

恵比寿様のように人畜無害な笑顔を称えている父と、ピヨピヨ鳴いて歩く黄色いヒヨコの列が頭の中を行進する。

とんでもない暴露話に言葉を失っていると、「あ、そうそう。これを持って行ってちょうだい」と母が冷蔵庫から何か取り出した。

あの父に限って、よもや『うっかり』なんて事態があるわけない。

人は父を恵比寿様のようだと言うが、あのパンパンに張った腹の中はどす黒く淀んでいる。

嫌いな相手とでも飄々と酒を飲むし、何をいわれても大抵にこやかだ。

お人好しで心が広いと言えば聞こえはいいが、その裏に鬼畜が潜んでいることを何人が知っているだろう。

母の家系の血を濃く受け継いだ修司と父はまるきり似ていない。

でも、母は昔から修司は父とそっくりだと言う。

なんとなく、父の考えた事が分かってしまうこの寂しさ。

もしかしてと浮かんだそれを母にぶつけてみる。

「もしかしてさ、父さんとじいちゃんが仲悪かったのって、そのせい？」

「違うわ。お祖父ちゃんは最初っから嫌いだったみたいよ。お父さんの事」

台所でごそごそと作業をしている母の間延びした声を聞いて、やっぱりなと納得する。

修司が幼い頃に死んだ祖父と父は、何かにつけて折り合いが悪かった。それもあけっぴろげに険悪なのではなく、ひっそりと悪かったのだ。

好き嫌いがはっきりしてた祖父は、誰にでも同じ顔で接する父が鼻についたのだろう。

祖父の怒りをのらりくらりと交わしていた父を思い出して、細く息をついた。

（父さん、謀ったな…）

つまり、父は『うっかり』忘れる事にしたんだ。

このままでは母との結婚を認めてもらえないだろうと踏んだ父が、無理やり祖父に認めさす為にとった強硬策。それでもまだ反対されるようなら、いっそ駆け落ちでもしてやろうと思っていたに違いない。

なんとも、あの父がやりそうなことだ。

そんな父とそっくりだと言われた自分。何がなど今さら聞かなくても知っている。

この性格だ。

「ね？だからあなたもうっかり順番を間違えちゃダメよ。はい、これ明日の朝、食べなさい。どうせ泊まるんでしょ」

そして、父の企みは母にはだだ漏れだったと言うわけか。

知っていながら、父の画策に乗った母も母だ。

言って持ってきたのは、大皿に山盛り積まれたいなり寿司。明日の朝とは言わず、夜まで残りそうな量に母の大雑把な性格を垣間見

る。
どうやら母の中で、修司が向こうへ泊まる事はすでに決定事項になっているらしい。
いったい母の思考回路はどうなっているのだろう。
未婚の女性の元へ連泊する息子を容認する親は、きっとそういないはずだ。

「そこは親として止めるべきとこじゃない」

つい修司がそう進言してしまうほどに。
母はコロコロと笑いながら「あら、やだ。もう大人なんですもの。自己責任よ」と言って修司の腕を叩いた。
父が母にだけは頭が上がらないように、きっとこの先修司も母にだけは敵わないのだ、と痛烈に確信させられた瞬間だった。

☆★☆

玄関の引き戸を開けると、途端にピリピリとした雰囲気が肌を刺した。
修司は中の様子を窺いながら、廊下から台所へ入る。持たされた大皿を置いて、一緒に携帯の袋も乗せた。
背後には剣呑さの元凶が居る。振り返るとソファの上で二卵性の双子が膝を突き合わせて正座していた。

「――なんでもっと早く兄ちゃんに言わなかったんだ」
「ご…、めんなさい」
「ごめんですんだら、警察はいりません。なんだ、この携帯の履歴は?メールの山は?兄ちゃん、とっても悲しいぞっ」

「すみません、…でした」
「しかも、そんなにガリガリになって！一体、お前は何になるつもりだったんだ？」
「あの……」
「口ごたえするんじゃない。兄ちゃんは怒ってるんだ」
「……」
「理子、何か言いなさい！」
「もうその辺にしといてやれよ」

見かねて修司が止めに入る。
修司の声に向き合っている兄妹が、同時に顔を上げた。
息がぴったりあった動作に息をつくと、山下の肩に手を置いてもう止めろと無言で諫めた。
漂う雰囲気と話の内容からこれが説教なのだと分かるが、どうにも修司の目には山下の遊びのように見えてならない。
だいたい、この男の本気がこんなに生易しいわけがない。

「お前、言ってることが矛盾してるぞ。口ごたえするなと言いながら、何か言えはないだろう」
「だってだな」
「もう十分反省してる。そうだよね」

振り返ると、理子は膝にぎゅっと握りしめた拳を乗せたまま俯いた。

「おい、修司。甘やかすなよ。今日という今日は、ちゃんと言い聞かせないと」
「さんざん甘やかしてきたのはお前もだろ」

修司がじろりと睨めつける。山下はムッとしたものの、思い当た

る節がある以上返す言葉がなかった。
感情のまま髪をかきむしって「…分かったよ」とふてくされた。

「ほら、理子も顔を上げて」

促して顔を上げさせれば、案の定、涙が目にいっぱい溜まっている。だが昨日より肌の血色がよく見える。少しは眠れたということだろう。

「お兄ちゃん…」

理子は恐々と涙目で山下を見た。
普段は「尚ちゃん」と呼んでいる理子が、「お兄ちゃん」と呼ぶのを初めて聞いた。
修司には今ひとつ迫力に欠ける説教でも、理子にしてみれば笑い事じゃないだろう。
しっかりと怒りが浮かぶ兄の顔に小さな目が揺らぐ。
黙って見守っていると、理子が小さな声で言った。

「…ごめんなさい。また、迷惑かけた…」

握りしめた手の甲にぽたりと涙が落ちた。
絞り出した涙声が訴える。無言で見据えていた山下が、一拍置いて呆れたように溜息を吐いた。

「ったく、本当にお前はっ」

言って、項垂れている理子の髪を両手でぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

「何回でも助けてやるに決まってるだろっ！兄ちゃん相手に遠慮なんかしやがって！このバカ理子がっ」

わかったか！と頭を掴んで顔を上げさすと、泣き顔のまま理子が「…うん」と頷いた。

漂っていた剣呑な雰囲気が、一瞬で霧散する。

（結局、コイツは何がしたかったんだ？）

頼られない事が、嫌だっただけじゃないのか。

本気の男は自分を「兄ちゃん」などとは呼ばないし、これほど簡単に相手を許したりしない。

大方、これは理子に自分の存在を思い出させる為の、一種のパフォーマンス。

彼女の周りには彼女を思う人間がちゃんといるのだと、再認識させるためにわざとやったことだろう。

山下がすぐに理子の謝罪を受け入れたのが、なによりの証拠じゃないか。

根っからのシスコンはどこまでも妹には甘い。

かくゆう修司も理子に関してだけは、あの兄と似たり寄ったりなので、強気な発言は言えないのだが。

それでも、自分もこんな風に見えているのかと思うと、少しだけこれからの態度を改めようかと思ってしまう。

拭っては溢れる涙をまた拭っている山下は、これ以上に無く満足気。

見ていて、ムカつく。

しかも、合間に「バカ」とか「これだから理子は…」とか愚痴っているが、顔はしっかりとにや下がっている。

冗談じゃない。俺はこんなんじゃないぞ。

甘すぎる慣れ合いに眉を潜めてしまうが、山下にしてみればこの

１０年間、ずっとこの時を待っていたはずだ。理子がもう一度、自分を頼ってくれるのを。

（ほんと、面倒くさい兄妹だな…）

一人っ子の修司には分からない感覚だ。

呆れながらも、理子の穏やかな笑顔を見るとこれで良かったんだと思えてくる。

微笑ましい光景。だが…、

「もうその辺にしておけよ？」

いい加減、恋人にべたべた触るのは止めてもらう。

いくら兄妹だからとはいえ、シスコンの触り方はどこか邪（よこしま）に見えるから始末が悪い。

ぐいっと手で山下の顔を引っぺがして、その隙に理子を腕の中に囲う。

二人の間に体を割り込ませて腰を下ろすと、途端に山下からブーイングが上がった。

「おまっ…、兄妹愛を確かめ合ってる最中に割り込むなんて、めちゃくちゃカッコ悪いぞっ！」

「カッコ悪くて結構だ。俺の理子にべたべた触るな」

理子が誰のものか、見せつけるようにしっかりと腕に囲う。

隣ではきゃんきゃんと山下が吠えているが、そんなことは修司の知ったことではなかった。

32）ひとつの決意

☆★☆

「いいか、お前なんか馬に蹴られちまえっ！」

玄関で靴を履きながら、山下が見当外れな捨て台詞を吐いた。

（いつからお前が理子の恋人になったんだよ……）

頭は良いのに、こと理子に関することになると、可哀そうなシスコンに成り下がる。修司はもう呆れて溜息も出ない。

「あぁ、そうだな」

適当にあしらって、まだブツブツ小言をぼやく小姑をとっとと玄関の外へと追いやる。

「あ、こら！お前、また泊まる気かっ！？」

閉める引き戸を慌てて押さえながら、山下がまた騒ぎ出した。

修司はうんざりしつつも、にこりと笑って答えてやる。

「安心しろ、親公認だ」

そんな事をすれば、火に油を注ぐことくらい分かっているのに。

ぴしゃりと戸を閉めて、ようやく修司は息をついた。

（アレが来ると、ひと騒動だな…）

しかし、なんだかんだと言いながら、山下もやることはやっていった。

メールの復元もしたし、後は履歴の一覧を作れば良い。

居間に戻って、復元されたデータに目を通す。

軽くスクロールしたが、この膨大な量を整理するには骨が折れそうだ。

「今日、病院に行ったんだって。診断書は貰って来た？」

「うん、一応…」

今朝、会社に行く前に理子を病院に連れて行ってくれるよう、母に頼んでおいたのだ。すっかり自分の娘のように思っている母は、なにかと理子の世話を焼きたくて仕方がないらしい。

快く頷いてくれた。

反面、病院に連れて行かれた理子は、かなり嫌々だったらしい。

理子はバッグの中から白い封筒を取り出して修司に渡した。

「これ」

「うん。じゃあ、俺が預かっておくから」

「明日は会社に行ってもいいでしょ？」

隣に座った理子が、修司の顔を窺うように覗く。

「もう少ししたら、ね」

「それって、明日も休めって事？」

「そうしてくれる？」

修司も同じように首を傾けて、理子の顔を覗きこむ。途端、理子は面白くないと口を尖らせた。

「いつまでも休んでられないわ。あたしだって仕事があるのよ」

「知ってるよ。なら、せめて食欲だけは元に戻してくれないと。今日の昼もあんまり食べてなかったんだって」

ちゃんと聞いてるぞとねめつけると、理子がうっと声を詰まらせた。

「シュウはしっかり食べてたらしいじゃないか。理子も見習ってほしいね」

夕方、母と共にシュウの様子を見に行った際、持参した蒸したささ身をシュウは美味そうに食べていたと言っていた。見事な食べっぷりに「これなら大丈夫です」と、先生の苦笑交じりのお墨付きも貰って帰ってきたらしい。

「母さんからいなり寿司預かってきた。明日の朝、二人で食べろって。ほら、あそこ」

言って、台所を指す。皿から溢れださんばかりの山盛りのいなり寿司に、理子の視線が釘付けになった。

「あれで一食分…？」

「そこは突っ込まないでやって。うちの母さん、作る量は半端ないから」

正当な疑問に思わず苦笑が漏れる。

理子が立ちあがって、台所に入っていくと「でも、美味しそう。

今、ちょっとだけ食べてもいい？」と、声を上げた。

「いいよ。それなら、俺にも何個かちょうだい」
「うん。あ、ねぇ。この携帯ショップの袋って」

あぁ、そうだ。忘れるところだった。
修司はかけていたメガネを外して、顔を上げた。

「昨日言っただろ。今までの携帯は使わないで欲しいから、明日代わりのを渡すって。しばらくはそっちを持ってて欲しいんだ」
「持ってて欲しいって。これ、あたしの名前で契約してないよ。新規でしょ？」
「そこら辺は気にしないで。俺が勝手に買ってきたんだから」
「駄目よ。あたしが使うなら、料金もあたしが払うべきよ。それに、番号を変えた事もみんなに知らせないと」
「それは、しばらく待って」

ストップを掛けると、理子は怪訝な顔をした。
どうしてと問いかける顔を、修司がすまなそうに見る。

「どこで清水と繋がってるか、まだはっきりしないうちは番号を誰にも知らせないで欲しいんだ。せっかく換えたのに、元の木阿弥になるのは嫌だから」
「でも、そうしたら」

理子が何か口を挟む前に、修司は畳みかける。

「分かってる。理子にはしばらく不自由をかける事になるけど、俺の我が儘を聞いて欲しいんだ。もう理子がいやがらせに怯える姿は見たくない。頼む、聞き入れて欲しい」

言い募ると、理子は押し黙った。その表情には、はっきりと戸惑いが見える。
修司はじっと様子を窺った。
しばらくして理子が「わかった」と頷く。

「ありがとう」

ほっと安堵する胸内で、修司はやはり母の見解は間違っていない事を再認識する。

(間違いなく、俺は父さん似だよ)

こんな言い方をすれば、理子が断れない事を知りながら、あえてその方法を選ぶ自分は、なんて強かだろう。
俺が悪い、全部俺のせいなんだと理子の良心に語りかける。
だから、『俺のせいにして』許して欲しいと。
二人分のいなり寿司と携帯の袋を持って戻ってきた理子は、ちょこんと修司の隣に腰を下ろした。

「はい、どうぞ」

理子は必ず最初に修司の分を並べる。些細なところで自分を立ててくれる気遣いがこそばゆい。

「これ、開けてもいい?」
「いいよ」

頷くと、早速中身を取り出し始めた。箱を開けて、すぐに驚いた表情で修司を見上げる。

「これ…」
「今使ってるやつと同じだって言いたいんだろ。こっそり取り替えるのに、見た目が違ってちゃ意味ないからね」
「そう、だよね」

今までの物と何も変わりはしないのに、理子は嬉しそうだ。開いたり、閉じたりを繰り返している。今までの携帯からストラップを取り外し、新しいものへと付け替えれば、見た目は何も変わらない。
理子は、額を修司の腕に当てて「ありがとう」と甘えた。
修司ははにかむと、そんな理子の髪に口づけを落とす。

「もうしばらくの辛抱だから」
「あたしこそいっぱいしてもらって、ありがとう」

素直に甘えてくる理子が可愛いと思う。

「あ、でも番号言っちゃ駄目なんだよね。実家からの電話とかどうしよう。このままだと浅野君が電話出ることになるよ」
「固定電話にかけてもらえば。お義母さんには、携帯が故障したとでも言っておこうか。確かナンバーディスプレイついてただろ?番号見て電話受けたらいいよ」
「あ、そうか」
「美咲ちゃんには山下がうまいこと言うだろうし、大丈夫だよ。その他の着信はその都度知らせるから、それも家の電話でかけてくれる?」
「わかった」

明るさを取り戻し始めた理子に、修司はほっと胸を撫でおろしていた。

誰だって、恋人の暗い顔は見ていたくない。それが、自分以外の何者かがさせているのなら、一刻も早く原因を取り去るまでだ。

素直に修司の言う事を聞く理子は、本当に同級なのかと思うほどあどけない。それは修司に信頼を寄せてくれているせいだと思いたいが、この白さは危うさをも秘めている。

理子は白磁気のようだ。

極限まで薄く伸ばされた陶器は、ほんのわずかな衝撃で砕け散ってしまう。

壊れないよう、傷つかないよう、山下はそれを守ってきた。

一度入った亀裂を、それ以上広げさせないよう、懸命に隠してきた。

修司もそうするべきだとずっと思っていた。

理子を綺麗な場所に飾り、些細な衝撃すら与えないよう腕の中で守ろうとしていた。

だが、それでは駄目なのだ。

誰もかれもが理子に同じように接してきたから、彼女は自分の身を守る術を知らない。いつも誰かが守ってくれていたから、痛みを受ける事も傷つけることも恐れている。

その事に、理子自身もようやく気が付いた。

まだ悪意と対峙する事への恐怖は拭いきれていないが、立ち向かう覚悟はある。

以前のような、後ろ向きな感情は見えなくなったのは、良い傾向だ。

もしまた新たな亀裂が入ったとしても、その時は修司が金継ぎをすればいい。割れて欠けたとしても、何度でも直して見せる。

その傷がまた違う理子を見せてくれるだろう。

「美由紀さんのおいなりさん、美味しいね」

理子と添い遂げるのは、自分しかいないと確信している。

まだ修司の想いを知らない理子は、そう言って微笑んだ。

33）仕掛けた罠

☆
★
☆

その翌日から、理子の携帯は修司が持っていた。
代わりに新しい携帯に入っているのは、修司の携帯番号だけ。
なんだが、理子を独り占めしているようで少し気分が良い。こんな時にそう思うのは不謹慎だろうか。
ひとりほくそ笑む修司とは対照的に、清水の顔色は目に見えて曇っていた。
繋がらない電話に苛立ちを募らせているのだ。
だが、それも修司にとってはどうでも良いこと。
清水の歯車がかみ合わなくなろうと、知った事ではない。むしろ、そうなるよう仕向けているのは、他ならない修司だからだ。
バイブを止め、消音にしているせいで、どれだけ携帯が震えようと日中はまるで気にならない。
ただ時折確認してみると、並ぶ不在着信には相変わらずうんざりするものがある。
かかってくる時間と、清水が席を立っている時間がほぼ同時刻であることに、やはり犯人は清水と見ていい。
しかし、これだけではまだ確固たる証拠とは言えない。
もっと、誰の目から見ても決定的な証拠だった。

（しかし、酷いな）

呆れるほどの着信。
昨日、理子が迷惑電話に登録した番号は2件。その前に1件。そ

して、今日も2件。合計5件。
一体、何台所有しているんだ、と感嘆するほどのしつこさ。
さほど値のはるものではないとしても、個人が所有する台数には制限があったはずだ。
もしかして、清水はその制限ぎりぎりまで使っているんじゃないだろうか。
一度、使えなくなったら切り捨てるしかない使い捨ての番号。
積み重なればそれなりの金額にもなるだろう。

まぁ、いいさ。気の済むまですれば良い。
これで諦めてくれるなら、それに越した事はないのだから。

☆
★
☆

「おはようございますっ！」

満面の笑みを向けてきたのは、受付に咲くひまわりみたいな沙絵。
その笑顔は真っ直ぐ理子に向けられていた。

「お、おはよう」

今にもカウンターから飛び出してきそうな勢いに押されつつ、理子が笑顔で挨拶を返す。
4日ぶりに会社復帰した理子は、朝から注目の的だった。
修司と付き合っている事は周知の事実であっても、こうして二人並んで出勤したことは一度もない。
しかも二人の手はしっかりと握られている。
これで注目されないはずがない。

（な、なんて大胆な……っ）

車を降りた途端、にこりと王子スマイルを見せた修司。

なんだろうと首を傾げる間もなく、手を取られた。そしてそのまま駐車場を抜け、堂々とロビーに入っていく。

あの『王子』がこれほどあからさまに所有権を露わにしたことも、羞恥で真っ赤になる理子に人目も憚らず甘い蕩けるような笑顔を見せることも珍しい。

いくら清水に二人の仲を見せつける為だとしても、いきなりコレは心臓に悪い。

彼女に見つかる前に、違う誰かに殺されそうだ。

その不安はすぐに現実のものとなり、

「お～は～よ～」

地を這うような低くくぐもった声に、理子は「ひゅっ」と息を飲んだ。

咄嗟に手を振り放そうとしたら、逆にぎゅっと握り返されてしまう。慌てた理子は修司と、後ろに控える尚紀を交互に見遣った。

「あ、あのっ、尚ちゃん。お、おはよ」

「おはよう、理子。もう具合は良いのか？」

「う、ん……」

張り付いた笑顔を前に、頬の筋肉が強張る。他の人には普段と変わらないおちゃらけた尚紀に映っていても、理子には分かる。尚紀は１％も笑ってなどいない。

思わず声がどもった。

「浅野課長補佐、少し話がある」

片頬を引くつかせながら、尚紀が修司を見る。

ここ最近、尚紀をわざとイラつかせているような修司の素振りには、毎度ハラハラさせられる。

人畜無害に見えても、張り合うどころか尚紀を手のひらで遊ばせているようにも見えるのだから、実は一筋縄ではいかない曲者ではないのか。

「お伺いしましょう。情報管理部殿」

一ミリも崩れない笑顔で受け答え、修司は名残惜しそうに理子を見た。

「と、言うわけで、ここから先は一人で行ける？」

どこまでついてくる気だったのだろう。これ以上悪目立ちしたくない理子は、首振り人形さながらコクコクと頷いた。それを見て、修司が少しだけ寂しげな顔をする。

まるで、一瞬たりとも離れたくないと言うように。

「それじゃ、無理だけはしないで。辛くなったら、早退するか、医務室で待ってて」

修司は繋いでいた手を親指で愛おしげに撫ぜて、山下と連れ立って先に入って行った。

注目の的がいなくなってほっとしたのもつかの間、ロビーのど真ん中でラブラブぶりを存分に発揮して放置された理子は、一瞬で羨望から嫉妬と噂の的へとすり替わってしまった。

（し、しまった……。こんなところで別れるんじゃなかった）

せめてもう少し人の往来が少ない場所を選ぶべきだった。助けを乞う様にフロントを見れば、沙絵が痛ましげに目を細めて、無言で首を振っている。

「ご愁傷さまです」の言葉が聞こえたのは、絶対に幻聴じゃない。敵に脅しをかけるつもりが、逆に敵を増やしてどうする。

はぁっと重い溜息をついた時、

「理子っ」

久しぶりの親友の声がした。

「あ、志穂……、おはよう」

「久しぶりねっ、風邪は大丈夫なのっ？」

「え、風邪？」

「インフルエンザだったんでしょ？」

ここしばらくの欠勤はインフルエンザになっていたのか。それなら4日休んでも不思議ではない。

理子の知らないところで話が進んでいる。うっかりしていると乗り遅れそうだ。

「う、うん。もう平気。ありがとうね」

急いで話を合わせて、苦笑いを浮かべる。

どうやら志穂には清水からの嫌がらせの話はいっていないようだ。

志穂は「そう。よかった」と素直に信じていた。

「しかし、理子ちゃんも朝から大変だな。あの浅野が、あそこまで

おおっぴらに態度に出すとな」

一緒に出勤してきた深澤が、感心めいた口調で唸る。

「は、はい。どうしたんでしょうね」

こちらも言葉を濁して誤魔化してみるが、深澤は志穂ほど甘くはなかった。探るような視線を向けられて、理子は咄嗟に視線を外してしまう。

わずかに開いた間が怖い。深澤には清水に噛みつかれているところを見られている。

「急に周りに見せつけたくなったんじゃないか？」

言って、深澤が志穂の肩を抱き寄せる。刹那、その手は小気味いい音と共に叩かれた。

「会社ではいちゃつかないでって言ってるでしょ」

あの営業課長を問答無用で叩き切ると、志穂は理子の腕に自分の腕を絡めた。

「じゃあ、あたし達もここでお別れね。行きましょう」

同じ恋人同士なのに、随分理子達と関係が違う。パワーバランスがまるで逆だ。

理子は一人残された深澤を振り返ると、叩かれた手でひらひらとこちらに手を振っていた。仕方がないと笑う顔に、慌てて会釈を返す。

「ちょ、ちょっと、良いのっ」
「いいのよ、あれくらい。本人も分かってやってるんだから。それより、理子、ちょっと痩せたんじゃない？本当に出てきて大丈夫なの？」
「あ、うん。それは平気」
これでもかなり良くなった方だ。
一度痩せた体はたかが４日では元には戻らなかったが、少しはましになった。これも、美由紀が甲斐甲斐しく世話を焼いてくれたおかげだ。
加えて修司が食べる事に妥協を許さなかったせいでもある。
「あたしの方こそごめんね、突然休んじゃって」
「そんなの良いのよ。具合が悪い時はお互い様だもの。でも、良かったわ。理子の元気そうな顔が見れて」
「うん」
顔を見合わせて、理子達はクスクスと笑い合った。
ロビーでの一部始終に、鋭い双眸が目を見開かせていた。
「別れたんじゃなかったの……？！」
愕然としながら呟きを洩らしたのは、清水だった。

34）糸口

☆★☆

昼休み、やはり理子の部署までやってきた修司と連れ立って外へランチに行こうとしたところで、小さな物体が物凄い勢いで突進してきた。

「うっ！」

「修司っ！お昼奢ってよっ！！」

修司の背中に一直線してきたのは、沙絵。

隣で目を見開いている理子に「御一緒させて下さいっ！」と太陽の笑顔で伺いを立てる。

突撃に一瞬息が止まった修司が、苦しげに顔を歪ませてむせた。

「お、前はっ。もっと静かな声のかけ方があるだろ」

「あはは、ごめんね。ちょっと興奮しちゃってさ」

まったく悪びれる様子もなく口にした謝罪は、ティッシュよりも軽い。修司は一瞬渋い顔をしたが、理子の顔を見て「どうする」と問いかける。

「もちろん、一緒に行こうね」

首を傾けて沙絵を見ると、ぱっと表情を輝かせた。

「近くのビュッフェはどう？種類もあるし、たくさん食べれるよ」
「さっすが、理子さん！愛してますっ！」

言って今度は理子に抱きついた。
志穂を介して親しくなった沙絵は、修司の元カノという事実を差し引いても、妹みたいで可愛い。
ベリーショートの髪を撫でてやると、すりすりと理子の胸に顔を摺り寄せてきた。

（か、可愛い…っ）

そんな沙絵の彼氏は、あの『フジモリ・ケーキ』の跡取り息子。
まだ一度も会った事はないが、かなりのイケメンらしい。
修司から聞いた話によれば並んだ姿は、「赤ずきんと野獣」なんだとか。

（一度会ってみたいな）

そして、できれば間近であの魔法のケーキが出来上がるのを見てみたい。
この件が落ち着いたら、絶対沙絵に頼んでみよう。

「おい、いつまでも胸に顔を埋めるな」

修司がいい加減にしろと、沙絵を理子から引き剥がす。

「もぅ、妬かないでよ。小さい男ね」
「何とでも」
「そうだぞ、修司」
「……お前は。いつもどこから沸いてくるんだ？」

さも初めからそこに居たかのように、自然と会話に混じってきた尚紀を見て、修司が嫌そうに眉を潜める。

「俺も聞きたいな。沙絵ちゃんが興奮したわけを」

軽い口調は変わらないが、いつになく力のある口調に、はっとして沙絵を見下ろした。

「もしかして、沙絵ちゃんも？」

沙絵も清水の件に関わっているのだろうか。

理子は修司を見る。

「それでは、ビュッフェに向かって出発！」

理子の予想を肯定するように、沙絵が意気揚々と声を上げた。

☆★☆

沙絵の健啖ぶりは深澤宅で見ているが、何度見ても感嘆のため息が出る。

志穂はこれが見たくて、頻繁に沙絵を自宅に招いているほどだ。

美味しそうに食べる沙絵に、うっとりと恍惚の表情を向けている志穂に、深澤と顔を見合わせては溜息を吐いている。

「今が昼だってこと忘れるなよ。まだ午後があるんだぞ」

修司の忠告は口だけのようなもので、もはや本気で沙絵を止めようという気はさらさら無い。
尚紀に関しては、まったく眼中に入れていない。
つまり、皆が沙絵の大食漢に慣れたということだ。

「で、ひと息ついたなら、そろそろ話せよ。興奮する話をさ」

修司は理子以外と話す時は、微妙に口調が違う。
沙絵はコーラをストローで飲み干しながら、「うん、そうだったね」と頷いた。

「修司に言われて、清水さんの交友関係をそれとなく聞いてみたんだけど。あの人、ビックリするくらい何もないのよね。この人っていう友達も居ないし、終業後の行動もまったく分からない。話しかければそれなりに会話はするんだけど、自分からっていうのもあまりないみたい」
「それで」

修司が促すと、沙絵が「黙って聞いて」と制す。

「でもね、何度か女子会に行って、彼女の大学時代の同期の子に会えたの。彼女の話だと、清水さん。昔から憧れていた幼馴染みがいるらしいの」

沙絵はそこで話を切ると、じっと理子を見た。
なんだろうと、沙絵を見つめながら瞬きを返す。すると、沙絵が突然頭を下げた。

「ごめんなさいっ」

「えっ？！」

驚いたのは、理子だけではない。修司も尚紀も同じ反応を見せた。

「ど、どうしたのっ、何で急にごめんなさいなわけっ？」

「えっと、それは。……ちょっと嫌な気分になるんじゃないかと思って。理子さんにしたら、二度と思い出したくない事かも知れないし。だから、」

言いにくそうに沙絵が言葉を濁す。

「沙絵ちゃん。続けて」

尚紀ががらりと表情を変える。冷えた迫力に、さすがの沙絵も少し呑まれながら頷く。

「う、うん。その幼馴染みっていうのが、――”佐々木　隆文”なの」

刹那、理子の頭は真っ白になった。

（清水さんの幼馴染みが……隆文さん？そんな、偶然って……）

そうか。だから、「ごめんなさい」なんだ。

沙絵は清水を調べて行くうちに隆文に行き着き、理子との関係をも知った。

だからと言って、沙絵が謝ることなどないのに。

人の痛みを自分の事のように感じる沙絵を見ていると、自然と微笑みを浮かべてしまう。

清水はそれをどこに置き忘れてきたんだろう。

「清水さん、彼には物凄く懐いていたみたいで」

その表情に沙絵もほっと肩の力を抜いて、話を続けた。

「話をしてくれた人も彼女のことは”清水さん”って言ってたのに、その人は彼女を”りり”って呼んでいるのを聞いたんだって。清水さん、下の名前で呼ばれるのを物凄く嫌がっていたみたいよ。だから、その呼び方をしていたのも、清水さんが許してたのも、その彼だけなの」

確信に満ちた口調で話す。

いつの間に、彼女の交友関係を探っていたのだろう。

受付嬢も似合っているが、他の課でも十分やっていけるのではないか。

彼女の情報収集能力には、舌を巻くものがある。

目の前でグラスの底を啜っている沙絵に関心しつつ、理子の頭には、新しく出てきた単語が引っかかっていた。

――――『りり』？

どこかで聞いた事がある。

初めてではない言葉を探して、記憶の針が一気に逆戻りを始める。

『りり』…、『りり』、そうだ。そうよ、『りり』よ。

思い出した。

カチリ、と針が止まって、理子の中で一本の糸が生まれた。

理子の考えが間違っていなければ、いや、おそらく『そう』なのだろう。

だとしたら、隆文が頭の中で抱いていたのは、理子ではない。あれは聞き間違いではなかったんだ。
理子ははっと顔を上げて、尚紀を見た。
「尚ちゃんっ、違うっ。お兄ちゃん！！」
勢い余って席を立ちあがった理子に、沙絵がぎょっとする。
「へっ？お兄ちゃんっ！？」
「隆文さんと話がしたいの。お願い、連絡つけてっ！」

☆
★
☆

風呂上がりの修司は冷蔵庫から３５０ｍｌの缶ビールを取り出し、その場で一口煽った。
あの後、理子が強引に尚紀を連れて店を出て行った。
驚いた。の一言しか言えない。
あれほど過去を嫌悪していた理子が、なぜわざわざその元凶である男と連絡を取りたがったのか。
問いただしても、意味深な含み笑いをされるだけだった。
「あたしだって、やられてばっかりじゃないんだから」
と、的を得ない答えに、修司は曖昧に頷くしかなかった。
（一体、何だっていうんだ…？）
沙絵は、理子と山下が正真正銘の兄妹だと言う事に、絶句してい

た。

見た目もまるきり似ていない、名字の違う二卵性の双子など、本人か周りが言わない限り気づかないだろう。事実、修司も理子に紹介されるまで美咲繋がりの友人だと思っていた。

「あら、今日はお泊まりは無し？」

台所に入ってきた母が、修司に尋ねる。

「そうそう連泊はしないよ」

呆れると、「意外と真面目なのね」と言われた。

本当に母の考えていることだけは分からない。もしかして、あの父ですら分かっていないんじゃないだろうか。

（次、帰ってきたら聞いてみよう）

「じゃ、おやすみ」

缶ビール片手に部屋に戻る。

テーブルに置きっぱなしになっていた理子の携帯を開くと、目新しい着信があった。

『不在着信　公衆電話』

――――来た。

いよいよ、尻尾を見せ出した。

修司はこれを待っていたのだ。

プリペイドでは足がつかない。なら、足がつくものになるまで待

てばいい。
理想は清水個人の携帯なんだが、さすがにそれはないだろう。
あとは、この公衆電話を特定すればいい。
より多くかけてくる時間帯を絞り、その時間、彼女がどこにいるか調べれば良い。
じわり、じわりと罠に近づく獲物に、修司はこみ上げる笑いを堪えることができなかった。

35）過去　－前編－

☆
★
☆

時々、修司の無茶ぶりに泣きたくなる時がある。
例えば、今日の朝いちでかかってきた電話がそうだ。
「出番だ」の言葉に、嫌な予感を覚えてしまうのも、毎度のこと。
こと、清水への報復を始めてからの修司は容赦がない。
そんな父を長男が「また来てね」と笑顔で送り出してくれる。
その後ろから、妻の美咲がニヤニヤと山下の様子を眺めている。
子供達から『父親』と思われていない、この寂しさ。ここしばらくはまともに家にいない自分が悪いのだが、それでも堪らない孤独と疎外感を感じてしまうのは、決して間違っていないだろう。

「これをかけている場所を知りたい」

挨拶もなく差し出されたのは、理子が持っているはずの携帯。
受け取って履歴を見れば、そのほとんどが「公衆電話」からだ。

（馬鹿言うな。逆探知でもしなけりゃ無理だろうが）

これだけの手掛かりで、どうやって発信先を割り出せというのだ。
修司は自分を何だと思ってるんだろう。
いくら財閥の後継者で、機械オタクでも、限界はある。
山下は露骨に嫌そうな顔をして修司を見る。

「無理」

修司の手に携帯を押しつける。
だが、修司に受け取る素振りは無い。
「入っている録音、再生してみろよ」
言われて、山下は訝しげに眉を寄せる。修司の考えている意図が掴めないまま、しぶしぶ録音を再生させた。
携帯を耳に当てて内容を聞いてみるが、流れるのは時間だけだ。
ますますわけが分からない。
「…んだよ、コレ。無言電話だろ。こんなの聞かせてどうしろっていうの？」
分かっているのは、犯人は清水ということだけ。
一旦、携帯を耳から離すと、「もう一度、聞け」と修司が言う。
（何回聞いたって同じだろ）
だが、聞けと言う以上、これには何か重要なことが録音されているのだろう。山下は二度、三度とそれを再生させる。
時間いっぱいまで録音された無言電話。
何度も聞いているうちに、山下はある事に気がついた。
（あれ…？）
山下の表情を見て、修司がニヤリとしたり顔になる。
「分かるか？”無言電話”だけど”無音”じゃないよな。それが何の音なのか、割り出して欲しい」
「マジかよ…。こんなちっちゃな音、」

「ヘルツを変えたらいいだろ」
「お前、そんな簡単に言っちゃってくれるけどな。俺は科学捜査班じゃないぞ」
「でも、お前なら出来る」
（買いかぶってくれちゃったけどさ…）
さらりと言ってのける修司に、山下が忌々しげに舌うちをする。
「その時間帯でかかってくる事が多いんだ。場所が分かれば、現行犯で捕まえられる」
「もし、割り出せなかったら？」
そんなわけがないけれど、一応聞いてみる。
すると、修司はにこりと王子スマイルを浮かべた。
「その時は、お前が清水を尾行するだけだ」
クラリときそうな微笑と、物騒な発言のアンバランスさに、目眩がしそうだ。
妻帯者で、生まれたばかりの子供がいる男に、平気で他の女を尾行しろと言う修司は鬼だ。
王子などと呼ばれているが、裏はとんでもなく強かで、ろくでなし。
使えるものは何でも利用するし、そこに何の躊躇もない。
守る対象と、攻撃する対象がはっきりしている今は、尚更だ。
誰にでも良い顔をするのは止めろと言ったが、ここまでこき使われるとは思わなかった。
社会的な立場は自分の方が上なのに、この扱いは何だ。

「言っただろ。お前には働いてもらうって」

頼むよ、とさして心にもない言葉を吐く修司に、片頬が引き攣った。

あくまでも『友人』としてのスタンスを崩さないところが、気に入っている。

山下の素性を知ってからも、それは変わらない。

しかし……。

（理子、お前は騙されてるぞっ！）

この件が片付いたら、もう一度妹を説き伏せて見ようと、山下は固く心に誓った。

☆★☆

スタンドライトのオレンジ色の光だけが灯る部屋に、カチカチ…と規則的な硬い音が木霊する。

テーブルに肘をついて、親指の爪を噛んでいる黒髪の女。

「どうして…っ、」

計画は順調に進んでいた。

理子は清水の予想通り、何もできなかった。ただ、無言電話に怯えていただけだ。

徐々に疲弊しやせ細っていく姿は、自分の計画が順調な証。

見ていて楽しかったし、この上なく満足だった。

修司も沙絵との復縁を匂わせるように、食事に出かけた。
すべては、清水の思惑通りに進んでいた。

なのにっ……。

理子の４日間の欠勤後、事態は急変した。
堂々と修司と連れ立って出勤してきたではないか。
なんて厚顔な女なんだろう、どこまで強かなの。
何もできない癖に、弱いだけの女のくせに、男をたぶらかす事だけは長けているということなのか。
テーブルに転がる、用済みの携帯達。
ことごとく、着信拒否にされた携帯だ。
もう、個人で所有できる台数に達してしまった。これ以上は買えない。
でも、いやがらせを止めることなんて無理だ。止めれば、あの女に屈したことになる。
爪を噛む清水の体が、無意識に前後に揺れている。

上手くいかない、上手くいかない。

不満と苛立ちは仕事にも影響を見せ始めていた。
つまらないミスで、修司に叱責されたのは、今日の午後のことだ。
あんなミス、普段の自分なら絶対にしないのに。
みんなの前で辱められることなど、あってはならないのに。

「全部、あの女のせいよっ……」

仕事でミスを犯したのも、計画が進まないのも、この苛立ちも全部、あの女がいるせいだ。

（あの人を奈落に突き落としておきながら……っ、自分だけ幸せになるなんて、許さないっ）

フォトフレームに収まった、大好きな笑顔。

幸せな顔で笑っている自分。

自分にこの顔をさせるのは、世界中でただ一人、隆文だけなのだ。

☆★☆

「りり」

隆文は会った時から、そう呼ぶ。

清水　りり子。

きつい印象を与える目と、愛想のない口調からかけ離れた、愛らしい響きを持つ名前が嫌いだった。

でも、隆文に呼ばれる時だけは、嬉しかった。

自分を『りり』と呼んでいいのは、隆文だけ。

「タカ兄」

隆文をそう呼べるのも、りり子だけ。

二人だけが呼びあえる名前があるのは、それだけでお互いが特別になった気がしていた。

隆文はりり子にとって、ずっと『憧れの王子様』だ。

優しく、カッコよく、いつだってりり子をお姫様のように扱ってくれた。

中学、高校、大学と進むにつれて、隆文の魅力はさらに輝きを放

ち、彼の周りにはたくさんの女性が集まるようになった。
甘い花の蜜に群がる、蝶のような光景。
隣を歩く彼女が変わる度に、ツキン…と痛む胸の痛み。

（でも、私は”妹”だから）

彼女よりもずっと隆文の近くにいるはずなんだ。血のつながりはないけれど、自分達は違う絆で結ばれている。
りり子は隆文の自慢の妹であろうと、勉強に励み、隆文を応援し続けた。

「りりは良い子だな」

どれほどの彼女と付き合っていようと、隆文は時々りり子の元を訪ねてくる。二人で家の屋根に上り、満天の星空を見るためだ。
その時、必ず買ってきてくれるアイスを二人並んで食べた。

「俺、大学を卒業しても、あっちで就職することにしたんだ。もう内定も貰ってある」
「そっか。タカ兄もいよいよ社会人だね。あ〜ぁ、いいなぁ！私も早く大人になりたい」
「何言ってんだよ。りりはゆっくり大人になれば良いんだよ。そのうち戻りたくても戻れなくなるんだから」
「なに、それ。タカ兄。ジジ臭いよ？」

その頃、りり子の住む地区一体に土地開発事業の話が登っているという噂が立っていた。
りり子の家は、祖父の代から続く旅館を営んでいる。
ここ最近は、めっきり宿泊客の足が遠のいてしまっているが。

「りり、大学はこっちに来いよ。待ってるから」
「うん！」

隆文は宣言通り、大学を卒業し一流企業に就職した。が、そこは開発事業を請け負っている企業だったと知ったのは、ずっと後のことだ。

父は会社が提示した金額で、土地と家を売り渡した。

経営不振で膨らんだ赤字を補てんするには十分すぎる金額。父は、家族の為、この先の為に長年住み慣れた土地を離れる決意をした。

りり子はその金で、隆文の後を追う様に上京し、同じ大学に入った。

しばらくして再会した隆文は、既婚者になっていた。相手は、上司の一人娘という可愛らしい人だ。

美男美女。

まさにその言葉がぴったりのお似合いの二人に、りり子はお祝いの言葉を述べる事しかできなかった。

（もう、私がタカ兄の一番じゃなくなったんだね……）

秋風に似た寂しさが心を拭きぬけるけれど、悔しいくらいお似合いなのだから仕方がないと思った。

隆文が幸せなら、りり子はそれで良かった。いつだって隆文が第一で、唯一だった。

でも、そんな儚い想いは突然砕けてしまった。

隆文が突然離婚し、海外へ行ってしまったからだ。

（どう……して？）

あんなにお似合いだったのに。

出世街道にも乗って、順風満帆だったはずなのに。

愕然としたりり子は、突然の離婚と海外行きの理由を調べずにはいられなかった。

そうして隆文について調べ出したりり子は、またも驚愕の事実を知る事になる。

隆文は決してりり子が思い描いていたような『理想の王子様』などではなかった。

妻帯者でありながら、幾人もの女と関係を持っていたのだ。

それも、決まって若い女ばかりを選んでいる。

信じていたものが崩れてしまう。

りり子が思い描いた隆文はただの幻想で、蓋を開ければ、平気で不貞を働く男だったのだろうか。

違う、隆文はそんな男ではない。

誰よりも近くで隆文を見てきたのは、他ならないりり子だ。その彼が不倫などするわけがない。

事実を覆そうとすればするほど、隆文の不貞を露呈させていく。

違う、違う、違う、違うっ！

理想と現実。

その狭間で行き場を失くしたりり子の隆文への想い。

隆文を信じたい、でも、もう何を信じて良いか分からない。

そんな時だった。

付き合っていた女達の中に、山下財閥の関係者がいたというのを聞いたのは。

隆文と最後まで付き合っていたのも、この女だということも。

あの山下財閥なら、隆文一人海外に飛ばすことくらい造作もないだろう。

もしかして、別れた腹いせに隆文を海外に追いやるよう仕組んだ

のかも知れない。

そう考えたりり子は、この会社に入ることを目標に換え、何としてでも隆文を奈落に追いやった人物をつきとめる事だけに専念した。

そして、彼が不貞を働いていたことだけを都合よく記憶から消した。

二年後、見事財閥傘下の企業へ入社を決めたりり子は、今度こそ本物の『王子』とめぐり合った。

それが、浅野　修司だ。

36）過去　－後編－

☆
★
☆

配属されたのは、幸運にも修司がいる企画開発部だった。
優しく温和で、柔らかい物腰と、心を溶かすような『王子スマイル』、加えてあの容姿。
今度こそ完璧な形を成して、りり子の前に再来した王子。
これは運命なんだ。
神様がくれたとっておきのサプライズ。
隆文だけに開いていた間口が閉じ、気持ちが一気に修司へと流れていく。

「清水」

修司に名前を呼ばれる度に、胸が高鳴った。隆文のように「りり」と呼ばれることはないけれど、それでもいい。修司の存在が、りり子を支えていた。
そう、りり子は修司に隆文の面影を重ねていた。
りり子の知っている隆文像は、まさに修司だ。
いつだって優しく微笑み、傍に居てくれた。横に並んで歩くことはできなくても、彼の一番だったのは自分だったはず。
彼女が居ても、都会へ出ていっても、隆文はりり子の存在を覚えていてくれた。
家の屋根に上り、二人で満天の星空を見る。
言葉を交わさなくとも、お互いの存在があるだけで、心は満ち足りた。

だからこそ、修司という存在で救って欲しかった。もう一度、この心を満たして欲しかった。

隆文が空けた穴を、りり子は修司で塞ごうとしたのも、自分の心を守るため。

彼の代わりは、より完璧な人でないと埋まらない。

修司に、自分という存在を見て欲しい。

りり子は、その為に必死で働いた。

自分達の間にあるのは、仕事だけ。ならば、そこで成果を上げる事が、修司との絆を作る足掛かりになるような気がしたからだ。

隆文は、頑張るりり子を好きだと言ってくれた。

きっと修司にもその姿勢で接すれば、認めてもらえる。

毎日をまい進していくうちに、いつしか目的も影を潜め、頭の片隅にひっそりと存在するだけになっていた。

修司の元で働くことは、忙しくもあるけれど、充実した時間でもある。

彼に対する、憧憬とも慕情とも呼べる気持ちは、時が経つにつれ大きくなる。不思議とそれは、沙絵という愛らしい彼女がいても少しも色褪せることはなかった。

そして、沙絵の場所に立ちたいとは一度も思わなかった。自分には身分不相応の場所だと分かっていたし、彼女以上に完璧なものは作り出せない。

自分はこの場所から見ていられれば、それでいい。

二人が寄り添う姿を見ることで、隆文が幸せだった頃を思い出せるから。

（やっぱり、素敵）

だからこそ、修司の傍に理子が居ることが許せなかった。

修司には沙絵のような人が相応しい。

十人並みの容姿しか持ち合わせていない理子では、釣り合いが取

れない。身分違いもいいとこだ。
なぜ、修司が沙絵を捨ててまで理子を選んだのか。
とりわけ秀でたものがあるわけでもない、どこにでもいる女ではないか。

（彼女の何が良かったの）

沸々と胸に渦巻くどす黒い感情。追い立てられるように、白雪理子について探った。
そして、知ることになる。
彼女は山下　幸三の孫。隆文を奈落に追いやった張本人だということを。
りり子の中で、忘れていた復讐心に火が灯った。

そうよ、自分は何をしていたんだろう。
此処に入ったのは、隆文を追いつめた人物を知るためじゃなかったの？

理子には、自分が味わった以上の苦しみを味あわせてやりたい。
いや、そうするべきだ。
自分から隆文を奪い、修司までたぶらかした女に、かける情けがあるものか。
徹底的に思い知らせてやる。
りり子は理子の個人情報を入手するためだけに、ハッキングに強い男を探して近づいた。手段など選ばない。
見返りに関係を求められようが、金銭をせびられようが、目的が果たせるなら何だってした。
男から社内の極秘情報へのパスワードを受け取ると、誰もいない時間を見計らって、データを盗んだ。
そこで得た情報をもとに、理子の家に写真を送りつけた。

あの写真は隆文の家から持ってきたものだ。
二人が出かける姿を隠し撮りし、理子の顔を油性のマジックで何度も塗りつぶした。
真っ黒に染めると、彼女の存在が消えて無くなるようでスッとする。
いっそ、本当に消えてしまえばいいのに。

『負けないよ』

何度目かの無言電話での、宣戦布告。
小癪な態度に苛立ちを覚えたのも最初だけで、理子は口ほどの存在ではない。
実際、何一つできやしなかった。
ただ、じっと耐えていただけだ。

（馬鹿な女）

日ごとやつれていく姿に、笑いが止まらない。
携帯が鳴る度に強張る顔は、いつ見ても爽快な気持ちにさせてくれる。
修司に理子は似合わない。
彼に似合うのは、沙絵のような女性しかいないんだ。
隆文が妻を選んだように、修司も沙絵を選ぶべきだ。

「あんな女、消えればいいのよ…」

☆
★
☆

その公衆電話は、アパートから１０分ほど歩いた人気のない場所に、ひっそりと置かれていた。
夜の帳が下りて、数える程度の街灯がわびしさを誘う。
歩くヒールの音が、冬の冷気によく響いた。
むき出しの公衆電話の前に立ち、いつものように１０円玉を縦に積む。暗記した１１ケタの番号を指で押して、受話器を耳に当てた。

（忌々しい…）

さっさと修司と別れれば良いのに。何を思い立ったのか、突然着信拒否を始め出した。
いよいよ終焉になろうかというところでの、反撃の狼煙。
車に細工をしたのは、ちょっとした思いつきだったが、効果はてきめんだった。

（もう少しだったのに）

これ以上、あの人を汚さないで。
受話器から聞こえる呼び出し音を、ひとつ、ふたつと数える。
遠くでは微かに踏切を電車が通る音が聞こえる。
りり子は音がする方に視線を一瞬投げて、また電話機に戻す。
今日はやけに呼び出し音が長い。
イライラを紛らわすように、人差し指で電話機をトントンと叩いて、リズムを刻む。
幾日かの病欠後、理子は当然のように修司と連れ立って出勤するようになった。
繋がれた手を目の当たりにした時は、あまりの苛立ちに、目の前が真っ赤になった。
恥ずかしげに俯く姿には、侮蔑と殺意しか感じない。
何もできないような顔をしていても中身は性悪で、強かで、ずる

賢い。
どうしてみんな、あの女を選ぶのか。
騙されている。
その時、呼び出し音から通話に切り替わる。
りり子は積年の恨みを込めて、初めて声を発した。
「あんたなんか、死ねばいいのに」
刹那、
「誰が死ねばいいって？」
ガシャン――と受話器が下ろされ、側頭部を撫でるように低音が響いた。
「随分手こずらせてくれたね、――清水」
恋人に囁くような、甘美さを孕んだ声に、ぞわりと悪寒が背筋を走る。
心地良さすら覚える声音はまるで呪詛だ。
体が動かない。声が発せられない。
ただ警鐘のごとく早鐘を打ち続ける鼓動だけが、耳にうるさく響いた。
コクリ…と喉を上下させて、生唾を飲み込む。
瞬きすら忘れた両目が、冷気に晒されて痛い。
居るはずの無い、声。
彼がこの場所を知るわけがないのに。
それでもゆるゆると首を動かして、背後を振り返った。微かな望

みを現実へと変えるために。
だが、りり子の双眸が映したものは、最悪の結末。

「浅野…課長、補佐」

驚愕に目を見開いたりり子が、受け入れられない現実を零す。

「こんばんは」

王子の仮面を取り去った面は、なんて冷然としているんだろう。
その端整な美貌には、何の感情も浮かんではいない。
氷よりも冷たい視線に晒されて、カタカタ…と体が震え出した。
圧倒的な威圧、本能がそれを怖いと叫ぶ。
そんなりり子に見せつけるように、修司はおもむろに携帯をかざす。見覚えのある機種に、不似合いなベビーピンクの携帯。
修司が持つには、りり子は「ひ…っ」と息を飲んだ。
手慣れた仕草でボタンを操作し、画面に『公衆電話』の文字を表示させる。
茫然自失するりり子の前で、修司はそれにリダイヤルをかける。
途端、鳴り出したのは、今、りり子が使っていた公衆電話だ。

「俺が此処にいる理由がわかるな」

誤魔化しようがない。
修司が持っているのは、理子の携帯だ。

いつから……？いつから、携帯がすり替わっていた…？
なぜ、修司がここにいるの。

混乱に真っ白になった頭は何も答えてはくれない。ピリピリとし

た気配が、りり子から思考能力を根こそぎ奪い去った。
抑揚のない声に、りり子がぎこちなく頷く。

「そう、いい子だ」

言って、修司は悠然と艶笑した。

37）対決

☆★☆

尚紀が呼びに来たのは、午後8時を少し回った頃だった。
とにかく急かされて、理子は財布と携帯だけを手に尚紀が運転する車に乗り込んだ。

「なんなの、急に」

おかげで着替える暇すらなかった。部屋着に毛糸のカーディガンを羽織っただけという、なんとも緩い格好につい愚痴が零れる。
ファミリーカーの後部座席には、チャイルドシートがちょこんと収まっている。
助手席から問いかけると、尚紀が「修司が呼んでる」と言った。
なら、直接携帯に電話をすればいいのに。
言われた意味が分からなくて怪訝な顔をしたのは一瞬。すぐに「それって…」と言葉を失くす。
それは取りも直さず、修司が清水を追いつめたということだ。
携帯を渡した時、この後の計画についての説明は受けていたが、やはり現実となると衝撃が大きかった。
状況もその都度尋ねてはいたけれど、まさか本当に公衆電話の場所を割り出してしまうなんて。

「修司が現行犯で捕まえたんだ。で、どうするかは理子に任せるって言うから、こうして俺が足代わりになったわけ」

車はまだ修理中だもんな、と尚紀が横目で見る。

「あ、うん。そうだけど…。でも、どうやって」

「まぁ、それはいろいろとしたわけよ。って言っても、俺の活躍があってこその現行犯逮捕だぞ。アイツは本当に容赦がないもんな。ここぞとばかりに散々こき使いやがって。おい、理子。本当にあんな奴が彼氏でいいのか？アイツは理子が思ってるような優男なんかじゃないんだぞ？そろそろ目を」

「尚ちゃん。その話はまた後で、ね」

「あ…、そうか。そうだよな」

理子が窘めると、珍しく尚紀が口ごもった。

可哀そうに。こんな状況下でもつい不満が口につくほど、こき使われたのだろう。

家庭がありながら、こう夜な夜な家を空ける夫を美咲はどう思っているのか。子供達とのスキンシップはちゃんと取れているのだろうか。

「ごめんね、迷惑かけて」

「こら。それは言わないはずだろ。あ―…でもさ、これが解決したら、今度は俺を助けてくれよな。美咲の視線が日に日に痛いんだ…」

「わ、わかった。あたしがちゃんとフォローする」

「頼むぞ！チビ達に俺がパパだってしっかり言い含めてくれっ！」

なんてこと、相当重症だ。

理子は申し訳ない気持ちで、何度も頷いた。

本来なら理子が解決すべきこと。だが蓋をあけて見れば、清水に王手をかけたのは修司であり尚紀で、自分はその後ろで怯えていただけ。

当り前だ。傷つくのが怖くて、立ち向かうことができなかったの

だから。時には相手に傷を負わすことも覚悟しなければならないのに、理子はそれすら怖がっていた。
意気地のない自分。
そんな理子を叱咤したのは、修司達だ。
耐える事が自分にできる戦い方だと思っていたけれど、それだけでは何の解決にもならなかった。
自分には頼れる人がいる。力になってくれる人達がいる。
手を伸ばして助けを乞うたって、いいんだ。
それを忘れてはいけない。
自分に出来ること、出来ない事。
その見極めは難しくても、今の自分に出来ることだけは、はっきりと見えている。

（これで、最後にするんだ）

きゅっと唇を引き締めて、決戦の地へと向かった。

☆
★
☆

着いた先は、ファミレスだった。
窓際の席に向かいあって座る修司と俯いた清水が見える。
理子は駐車場に車が止まるや否や、助手席を飛び出して店内へと向かった。ドアに手をかけたところで、一度大きく息を吸って、ぐっと腹の底に力を込める。

（よし！）

震える心を奮い立たせて、二人のいるテーブルに近づいた。それに気付いたのは、入口が見える位置に座っていた修司だ。

目が合うと、無言で頷く。理子も頷き返しながら、俯いたままの清水を見遣った。
肩が微かに震えている。
理子が修司の隣に腰を下ろす。少し遅れて入ってきた尚紀が、清水の隣に座る。窓際に追いやられた清水は、これで逃げる事もできなくなった。
注文を取りに来たウエイターに尚紀が言葉少なく告げて遠ざける。
修司達の前に置かれたグラスは、すっかり水滴も乾いていた。

「ごめんね、遅くなって」

そう修司に囁くと、「そんなに待ってないから」と言われる。
修司はいつだって理子に優しい。だが、彼女にはどうなんだろう。
怯えて委縮する清水に、理子は改めて視線を向けた。
こうして見ても、似ている部分はほとんどない。強いて言えば髪の長さくらいで、背丈も年も、今は見えないが顔立ちだってまるで違う。
後は、名前のニュアンスだが。
そんな些細な類似点にも縋ってしまった隆文に、今なら同情を感じることができる。

『……理子、か。久しぶりだな』

約１０年ぶりに聞いた声は、あの頃よりもずっと穏やかで優しかった。
尚紀から事の顛末と、二人の間で交わされた密約を知り、その上で隆文に連絡を取ったのは、沙絵達とお昼を食べた翌日のことだ。
隆文と話しをし、彼の本心を聞いたことで、ようやく理子の中でも過去が昇華された。
なぜ、彼が理子にこだわったのか。

どうして、ああもあっさり身を引いたのか。
真実を知って、やはり自分は愛されていたわけではなかったのだと思い知らされたけれど、悲しいとは思わなかった。
だって、自分には修司という大切な人が傍にいるのだから。

「卑怯者」

沈黙を破り、口火を切ったのは、俯いていた清水だ。
唐突に投げつけられた暴言は、他の誰でも無い。理子に向けられたもの。
顔を上げた清水は、理子の予想に反して、くつくつと肩を揺らして笑っていた。

（もしかして、さっきも笑ってた……？）

きつい双眸は赤く充血し、その中には理子に対する憎悪が揺らめいていた。

「さすが、姑息な女のやる事は違うわね。浅野課長補佐まで顎で使うなんて、私には到底真似できないわ。どう、今の気分は？なんて言っても、あなたが大将だもの。そこから見下ろす景色はさぞ良い眺めよね。男を手玉にとる事だけは、お上手なんだし。彼のように優しい人を騙すなんて、簡単だったのよね？何もできないって顔してれば、全部男がやってくれるって思ってるんでしょうけど、大間違いよ。たいした美人でもないくせに、図々しい。どうやって課長補佐に取り入ったかは知らないけれど、同じ手であの人もたぶらかしたんでしょう。そして、要らなくなったから捨てたのよね。……っ、あの人には家庭があったのに、将来だって約束されてたのにっ！全部、あんたが壊したんじゃないっ！！それを一人だけ幸せになろうなんて、大した女だわっ！あんたなんか居なくなればいいのよ

っ！さっさと消えてっ！！」

真っ向から襲いかかる激昂に、理子はグッと奥歯を噛みしめて耐える。

清水の怒りは、ほとんどが見当違いだが、まるきり嘘でもない。

理子は自分が美人でないことは分かっているし、今回の件でも10年前も何もできなかった。修司をたぶらかしたつもりは毛頭無いけれど、理子に偏見を抱く清水からすればそう見えたのだろう。

隆文の将来を壊したことだって、無関係とは言えない。

知らなかったとはいえ、妻帯者と付き合っていたのは事実だ。

彼の人生を狂わせる一端を担ったのは、間違いない。

でも、だからと言って、彼女がした事が全て許されるとは思わない。この件に関しては、彼女は立派に加害者だ。

「――――だから？だから、あんな事したの」

理子は震える声で問いかける。清水ははんっと鼻先で笑った。

「そうよ。当然の報いじゃない。あんたなんかに浅野課長補佐は似合わないわ。それくらい自分でも分かってるんでしょ。なのに、いつまでたってもしつこく彼につきまとって……。本当、見苦しいったら。さっさと別れなさいよっ」

怨恨が刻まれたつり上がった口元、爛々と光る血走った双眸、髪を振り乱して叫ぶ姿は、般若のようだ。

どうしてここまできてしまったのか。

どこで間違えてしまったの。

清水の境遇に同情はするけれど――――っ。

その瞬間、乾いた音が店内に響いた。

顔を右に向ける清水、身を乗り出して手を振りおろしている理子、それに瞠目する男二人。
清水は叩かれた頬を手で押さえながら、顔にかかった髪の間から理子を睨みあげた。

「最低！何するのよ！」
「最低はどっちよ！その言葉、あなたにだけは言われたくないわ！自分が何をしたのか、分かって無いの?!殴られて当然の事をしたのよっ。人の過去をほじくり返して、貶めて、他人の不幸を笑ってるあなたこそ最低じゃない！」

理子は振りおろした手で、ぎゅっと握りこぶしを作った。

「まるで世界の中心に居るような口ぶりね。いつから彼が付き合う相手をあなたが選別するようになったの。一体、何の権利があってあたし達に口出ししたりするのっ。あ、あたしが可愛くないことくらい、分かってるわ！それでも、彼はあたしを選んでくれた。それの何がいけないのっ。あたしにだって幸せになる権利はあるのっ」
「タカ兄の人生めちゃめちゃにしておいて、何が幸せになる権利よっ！それが図々しいって言うのよ！」
「違うっ、あれはあたしだけが悪いんじゃない！」
「この期に及んで、しゃあしゃあと……っ。よくそんな事が言えたものねっ！この……恥知らずっ！」

今度は清水が手を振り上げる。理子が思わず目をつぶるのと、修司が理子を庇うのと、尚紀が振り上げた手を押さえるが、ほぼ同時だった。

「放しなさいよっ！」

腕を掴んだ尚紀に、目を剥いて清水が噛みつく。

「あんたは、何も知らないんだよ」

「どういう意味よっ。あなたの妹がタカ兄をたぶらかしたんじゃない！」

「そうじゃないのっ！隆文さんは、」

「理子、俺が話す。――あんたはさ、勝手な勘違いと思い込みでひとり空回りしてんの。俺がこれからヒールに成り損なった男の話をしてやる。座れよ」

言って、尚紀が力ずくで清水を座席に戻した。

「そもそも佐々木がなぜあの会社に入社したのか、そして常務の娘と結婚したのか、あんた知ってるか？あの男はある計画が持ち上がってから、ずっと一つの目的の為だけに行動していたんだ」

「目的って、そんなの出世の為じゃ」

「違うんだな、これが。当時、あんた等の住んでいた区域一帯に土地開発事業の話があがってただろ。佐々木の目的はそれを白紙に戻すこと。その為に、あえて事業の親会社に入社し、常務の娘と結婚した」

「何を根拠にそんな嘘をっ、デタラメ言わないでっ！」

「なんであんた相手に、この俺が嘘を言うの。そんなことに何の得があるんだよ。これは本人から聞いたことなんだぜ？それにな、あんたがこんな事さえしなければ、一生聞かなくて良い話だったんだよ。いいか、よく聞けよ。佐々木達は仮面夫婦だったのさ。双方の利益が一致した上での政略結婚だ。妻には結婚前から付き合っている男がいたし、あの男も不倫を繰り返した。それも、決まって若い女ばかり選んでな。その中の一人が理子だ」

言って、尚紀が理子に視線を向けた。

38）決着

☆★☆

思わず視線が揺らいでしまうと、修司がぎゅっと理子の手を握りしめた。

「何らかのきっかけで佐々木は理子が山下　幸三の孫娘だと知った。山下財閥の親族になれば、その影響力は絶大だ。一企業の常務が遣える権力など、たかが知れてる。あいつが欲しかったのは絶対的な権力で、妹に惚れてたわけじゃない」

その瞬間、繋いだ手に力が込められた。

尚紀の発した言葉で理子が傷つくと思ったのだろう。理子は修司に「自分は大丈夫だ」と浅く笑ってみせた。

「でもな、いくら仮面夫婦だと言っても、既婚者である以上、理子との関係は不倫だ。理子は慌てて別れを切り出したが、当然佐々木は受け入れよとはしなかった。当り前だよ、これさえ手に入れば自分の目的は成し遂げられるんだからな。その為だけに全てを投げうってきたような男が、みすみす手放すはずなんてない。で、どうしようもなくなった理子が助けを求めてきたのが、俺。佐々木を海外に飛ばしたのは、理子じゃない。俺だよ」

清水が驚愕に目を見開く。

「俺は佐々木に成り代わって計画をとん挫させることで、理子との

別れを承諾させた。もともと、計画を白紙に戻す事が目的だったんだから、それが成し遂げられれば、あいつが理子に執着する理由なんてないのさ」

「でも……っ、だったらなんで海外なんかに」

「それは、あの男が内部告発したからさ。自分の大事なものに手を出した報復、だったんだろうな。そこまでするかって気もしたけど、恨みの根は想像以上に深かったってことだ。あの当時、男が勤めていた企業は脱税と代議士への献金疑惑があった。その確固たる証拠を用意したのが佐々木。リークしたのは俺。その前に海外に飛ばしたのは、あの男への報復の可能性があったから。そして、めでたく計画はとん挫、あの男の目的は達成されたってわけさ」

話を聞き終えても、清水は驚愕と動揺から戻ってこれなかった。

「嘘、嘘よ……」

うわ言のように何度も呟いて、瞠目しながら首を振っている。

「なんで、どうしてタカ兄がそんなこと…。そんな事の為に人生かけたりするの。別に故郷なんてどうでも」

「……違うわ。あの人が守りたかったのは、故郷じゃない。あなたよ」

理子が静かに告げた。

「ずっと、あなたが大切だったから。だから、あなたと過ごしたあの場所を守りたかったの」

それは、先日の電話で隆文本人から聞いた告白だ。

ひとまわり近くも年の離れた、幼馴染み。兄のように慕ってくる

小さな女の子を自分だけの宝物だと気づいた時には、もう恋に落ちていた。

「”りり”――――。そう、呼ばれてたのよね」

隆文しか知らない呼び名で呼ばれて、清水が目を見張った。

理子はそんな彼女の表情に小さくはにかんだ。

「あたしと付き合っていた時、あの人が一度だけ寝言で呼んだ事があったの。途切れ途切れだったし、はっきりとは分からなかったから気に留めなかったんだけど、あれは”りこ”と言いたかったんじゃないのよね。”りり”と呼んでたのよ」

そう、夢に見るくらい清水に恋い焦がれていた。

だが、彼女は隆文を男として見ていない。

彼女は自分を『妹』と言い、隆文のことを『兄』と呼ぶ以上、隆文の想いはどこにも行けなくなった。

強引に関係を変える勇気もなく、それならいっそ彼女の良き『兄』として居続けようとした。

でも、感情は理性でどうにかなるものではない。

若い女ばかり手を出していたのは、無意識に清水の面影を重ねていたのだろう。彼女達を抱いている最中でも、隆文はいつもそこに清水を見ていた。

理子と付き合っているときだって同じことだ。

所詮、理子は清水の代わりでしかなかった。

「実はね、この間１０年ぶりに連絡を取ったの。どうしても確かめたいことがあって、兄に連絡先を教えてもらってね。……佐々木さん、あたしがあなたと同じ会社で、あなたを知ってると言ったら何て言ったと思う?”りりは元気にしてるか?”って聞くのよ。”あ

いつは不器用だから人に誤解されやすいけれど、本当はとてもいい子で頑張り屋だから、気にかけてやってほしい”そう言ってたわ。そんな事言われたら、もう”分かった”としか言えないじゃない」

隆文は理子が10年前の顛末を知ったと知ると、心から謝ってくれた。

自分ことの為だけに理子を利用したこと、理子に清水の面影を重ねて抱いていたこと、理子の気持ちを蔑ろにしてしまったこと。

女にだらしなくても、清水にだけは誠実だった。

それは隆文にとって、清水だけが綺麗なものだったからだ。

彼女の前だけでは、良い男を演じていたかった。

なぜ突然連絡を寄こしてきたのか、どうしてそこに幼馴染みの名前が上がったのか、隆文は何も尋ねなかった。ただ、理子の質問に対して誠実に答えてくれた。

もしかしたら、彼女が何かしたのを察したのかも知れない。

不器用で誤解されやすいけれど、とてもいい子で頑張り屋。

それが彼にできる精一杯のフォローだったんじゃないだろうか。

「じゃあ…、あたしのしたことって……っ。そんなの全然知らなかったっ！だって、あたしはずっと妹としか」

「うん。……妹なら、一生繋がっていられるものね」

開けたパンドラの箱に怯える清水に、理子が言葉を繋ぐ。

隆文が年の差に足踏みしたように、清水にとってもそれは超えられない壁だった。だからこそ、自分を『妹』という位置づけに置いたのだろう。

長く近くに居過ぎたからこそ、互いの想いに気付けなかった。

清水に至っては、隆文への恋心すら素直に受け入れられないでいたじゃないか。

だが、隆文の想いを知った今はどうだろう。

それでもまだ、自分の中にある隆文への想いを認めないのだろうか。

「清水」

茫然とする清水の前に、おもむろに修司が差し出したもの。

それは、彼女が理子へ続けた無言電話の履歴と、メールの履歴。

そして、車に細工をしている写真があった。

「これが君のしたことだ。今なら、これがどれだけ卑劣か分かるだろう」

その時、初めて清水の顔に怯えが見えた。

今まで頑なまでに誰にも開かなかった心が、隆文をきっかけに緩んできている。ようやく、周りの言葉が聞こえ出すと、自分の愚行に目を向けることができたのだろう。

このタイミングでそれを突き付けるのは残酷だと思ったが、理子は口を出さなかった。

やはり、罪は罪と認めて受け入れなければいけないと思ったからだ。

すべてはねじ曲がった愛情が愛憎へと成り変わったことで起きたことだけれど、清水のしたことは理子を傷つけた。

理子が叩いた左頬が赤くなっている。

手のジン…とした痛みは消えたが、人を傷つけると心はいつまでも痛みが残る。

修司の鋭い視線が清水を射抜く。尚紀も口には出さないが、その視線はありありと彼女を責めていた。

事の次第では、法に訴える。

それが彼らの主張だからだ。

ここがボーダーライン。

今、悔い改めなければもう後には戻れない。
理子はここへ来たのは、彼女に止めを刺すためなんかじゃない。
清水に隆文への想いを伝えるためだ。
この発端にいるのが彼なら、清水を止められるのは隆文しかいない。
偽善と呼ばれようと、彼女にある良心に全てを賭ける。
今、理子が望む結末はたったひとつだけ。

「タカ兄、元気にしてました…？」

清水が震える声で問いかける。

「うん。向こうで頑張ってるよ。今は誰とも付き合ってないって言ってたわ」

『りりに見合う男に戻って、日本に帰りたいんだ』

電話口で恥ずかしげに言った隆文の声を思い出して、思わず頬笑みが零れた。
いい年して恥ずかしいだろ、と言った隆文は、呆れるほど純な男になっていた。

「……そう、ですか」

清水はそれだけ呟くと、修司に向き合った。

「浅野課長補佐、それは警察に提出してくださって構いません。然るべき処遇を受けます」

真っ直ぐ修司を見て告げる清水に、修司は首を横に振った。

「これをどうするかを決めるのは、俺じゃないよ」

言って、修司は理子を見た。

それを決めるのは理子だ。

「清水さん。あなたのしたことは許せないわ。でも、これは警察には出しません。身の振り方は自分で決めて下さい」

はっきりとした口調で告げる。

清水は観念したように目を伏せた。そして、

「――――申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げて、初めて理子に謝罪をした。

39）何気ない幸せ

☆★☆

この年の仕事納めを持って、清水は会社を去る。

「いろいろとご迷惑をおかけしました」

修司の前で頭を下げる清水に、「今日までだったな」と声をかける。

あの後、清水は自主退社を決めた。

清水には不正アクセスに対する処罰が下るはずだったが、そこは理子が上手くとりなして事無きを終えた。

お決まりの「お兄ちゃん、お願い」攻撃に、尚紀が全てを帳消しにしてしまったからだ。

ただ、何の罰がなかったわけではない。

理子は清水に忘年会の出しものに強制参加することを義務付けた。

（あれは、何ていうか……）

いったい誰に対する罰なんだと、今思い出しても腹が立つ。

理子からも会社からもお咎め無しにも関わらず、退職願を提出した清水に修司は理由を尋ねた。

すると、

「あの人を追いかけたいんです」

と清々しい顔で言った。
おそらく、隆文が見ていたのはこの彼女なんだろう。憑き物が落ちたように、清水からは禍々しさが消えていた。
特攻をかけるというのが、いかにも清水らしい。
隆文への恋心を自覚した清水は、きつく感じさせていた目元がチャームポイントに映るのだから、恋というのは恐ろしいものだ。

「理子にも声をかけてやって。君のことを随分気にしていたから」
「はい。……理子さんには本当に申し訳ないことをしてしまったのに、良くして下さって」
「それはもう水に流すんじゃなかったのか」
正気を取り戻せば、自分がどれだけ悪質だったのかが見えたのだろう。
後悔に顔を歪める清水を、修司が窘める。
「ですが…」
「君の悪い癖だな。いつまでもこだわりすぎると、また大事なことが見えなくなるぞ」
これが上司としての最後の苦言になるだろう。
清水もそれが分かっているから、「はい。そうですね」と頷いた。
「今なら課長補佐が理子さんを選んだ理由がわかります。でも、ひとつ言わせていただいてもいいですか？」
「どうぞ」
清水は一旦言葉を切って、それからにこりと笑って言った。
「理子さん、甘すぎます」

自分を落とし入れた相手に、これほど寛大な処遇を下した理子は、誰の目から見ても「甘い」としか言いようがないだろう。
その恩恵を受けた清水ですら、そう思うのだ。
そんな恋人を持った修司は、もう苦笑いを浮かべることしかできなかった。
だが、実に清水らしい感想だと言える。
清水はクスクス笑いながら、「苦労されますよ?」とこれからの心配までする始末。

「肝に銘じておくよ」

目を伏せて、口端に笑みを浮かべて答える。
清水は居住まいを正すと、改めて頭を下げた。

「浅野課長補佐。今日までありがとうございました」

☆
★
☆

「しかし、お前の考えてることは分からないな」

非常階段で密談するが、いつのまにか当り前になってきたこの頃。
真冬にこんな吹きっ晒しの場所で一服をする馬鹿は、この男くらいだ。
山下は寒さに震えながら、煙草を美味そうにふかしている。

「昨日の敵は、明日の友って言うだろ?」

なんと清水がハッキングを依頼した男を、山下は会社に引き入れていた。
いまや情報管理部の社員として堂々と出勤している。

「俺が構築したセキュリティをかいくぐってきた男だぞ。巷に埋もれさせとくにはもったいなさすぎるって」
「言ってろ。……ところでお前、本当のところどうなんだ。佐々木と清水の関係、知ってたんじゃないのか」

『情報管理部』に席を置いているものの、事実上の経営者。
現在の社長は、祖父の側近に当たる人物で、いわば山下が社長職に就くまでのつなぎだ。
山下の正体を知っているのは、ほんの一握りの人間だけ。
その中に自分が入っていることについては、さほど気にした事は無い。
仮に自分が権力にへりくだるような人間なら、山下は端から修司を相手にしていないだろう。
この男がなんであろうと、修司にとっては友人で大切な恋人の兄。
それが「山下　尚紀」だ。

「バカ言うなよ。俺はそこまで暇じゃないよ。それに、余計な詮索はしないってのも条件に入ってたしさ。俺としては理子と別れてくれさえすれば、あの男の動悸なんてどうでも良かったんだし」

「寒っ…」と肩を竦めながら、山下が渇いた声で笑う。
同じように手すりに背中をもたれさせた修司が白い息を吐く。

「理子のヤツ、結局許しちゃうだもんな…」
「あぁ、そうだな」

あれだけの事をされても、最後は許してしまった。それも、清水と隆文のじれじれの愛情にほだされたというのが、いかにも彼女らしい話だ。

「あたしは、あたしの周りに居る人がみんな幸せであればいいと思ってるの」

偽善としか呼べない科白を堂々と言ってのけた理子には、頭が下がる。

お人好しもここまでくれば、あっぱれだ。

「それに、憎むのも体力がいるのよ？」

おどけた口調で笑った、修司の恋人。

「なぁ、……尚紀」

「おっ？」

初めて山下を名前で呼ぶと、驚きの声が返ってきた。修司は横目で山下を見遣ると、

「理子はもらうよ」

と宣言した。

一瞬、瞠目した山下だったが、「勝手にしろ」と破顔した。

☆
★
☆

今日も理子の鼻歌が聞こえる。
愛と勇気を歌った、大人から子供まで愛されているあの名曲。
初めてこの声を耳にしたときは、こうなることなど想像もしなかった。

（そういえば、最初は理子のこと、変な女って思ってたんだよな）

ご機嫌で童謡やアニソンを歌う顔も知らない隣人。
今は何も植えていないが、また春になったら畑を始めると息巻いている。

「今年はもっとたくさん、いろんな種類を植えたいのよね」

あのトマトは、懐かしい味がした。
スイカを手に、初めて理子を訪ねた。
隣で寝ていたシュウが、包丁の刻む音に反応して台所へと駆けていく。
修司もその後を追う。
もうすぐやってくる山下ファミリーと沙絵達、深澤と志穂等ですき焼きをする為に、さっきから大量の野菜を切っている。
母から借りてきた桶の半分を占める白菜。冷蔵庫には3キロの牛肉、子供達へのお菓子、食後のデザートまで取りそろえて準備は万端だ。
飲み物は各々が持参するのは、理子のポリシーなんだろうか。
午前中から部屋の掃除を手伝わされ、買い出しに走らされ、庭の雪かきまでさせられた。
誰の行いの悪さが祟ったのか、今日は生憎の雪。しかも『大』がつく大雪だ。
やや諦めモードの修司に反して、理子は「絶対来るから、絶対する」と言い張って譲らなかった。

その宣言通り、さっき修司の携帯には三組から「もうすぐ行く」との連絡が入っていた。
まだ半年ほど前のことなのに、理子とはずっと前から繋がっていた気がする。
たくさんのフィギュアに囲まれて、古ぼけたキン消しも飾ってある。

（俺達が出会った時の、だよな）

不安げな理子をなんとかしてやりたくて、修司があげたキン○マン。本当にまだ持っているとは、思わなかった。
ずっと飾ってあったというのだが、他に物がありすぎて分からなかったのだ。
こっそりと増殖している食玩達。いつ作ったんだと思われる、赤いプラモデル。黄色い○号機。
何度聞いても「幸子さんのだ」と言い張るけれど、いい加減認めたらどうだ。
押し入れにひた隠しにしてある、作りかけの１／６０スケールのプラモデルを知らないと思うな。

（ほんと、この子だけは理解不能だ…）

沙絵との別れ、シュウの病気、清水との確執、半年の間にいろんな事があった。
だが、それまでの付き合い方が根底から変わったのは、修司にとって大きな転機でもある。
ようやく『適当な恋愛』ではなくなったのだ。
今度こそ心から愛したい人に巡り合えた。
一生添い遂げたいと思える人は、意外にもこんなに近くにいたんだ。

キッチンの脇にある窓。
こんな場所で本気の恋愛が待っていたなんて、誰が想像できるだろう。
アニソンをご機嫌に歌う理子の傍らには、修司がいる。
少し鼻にかかったアルト、そのくせ音程は抜群で、何度でも延々リピートし続ける。
そんな理子が可愛いと思う。
愛しいと感じる。
何気ない時間が、幸せだと感じられる。
修司はそっと理子の腰を抱き寄せて、耳に唇を寄せた。

「わ…っ、修司くん?!」

名前で呼んでくれるようになった嬉しさを噛みしめながら、この気持ちを表せるとっておきの言葉を囁く。

「愛してるよ」

そして『王子』と謳われる最高の笑顔を理子に向けた。

～Ｆｉｎ～

39）何気ない幸せ（後書き）

本編、これにて完結です。
長い間、下げさせていただきました。ようやく再投稿することができます。
『窓恋』を待っていてくださって、ありがとうございました！

次回、４話完結の番外編となります。舞台は「忘年会」。
理子や沙絵達が、往年の名曲を歌いあげますので、そちらもよければご覧ください。

あ、でも対して内容はありませんので。私の趣味です…＾＾；

ではでは♪♪

1）　寛大な王子（前書き）

これより番外編です。
時間軸としましては、３８話～最終話の間の話です。

お祭り好き尚紀の発案で催される忘年会。
修司達は揃って同じ班に組み込まれたがいいが、そこにはなにやら不吉な影が潜んでいて……。

1）寛大な王子

「理子さん！お願い、お願いします！！」

ここは、フジモリ・ケーキ。

奥の厨房で優治のケーキ作りを間近で見学させてもらって、居住スペースでもあるリビングのローテーブルで、出来たばかりのケーキを頬張っていた矢先のことだ。

現在進行形で、理子は沙絵に拝み倒されている。

「え…、ちょっと。沙絵ちゃん？」

「お願いします！あと二人、どーしても二人足りないんですっ！理子さん、一肌脱いで下さいっ！」

一肌脱いでくれと懇願されても。

理子は当惑顔で沙絵と、その隣でやはり呆れ顔になっている優治を見遣る。

「沙絵、いい加減にしろよ。理子さん、困ってるだろ」

「優治は黙ってて！ね、理子さん。いいでしょ？」

「いいも何も……」

思えば、それが悪夢の始まりだった。

☆★☆

１２月の第３週の金曜日、系列グループの旅館を貸し切って行われる忘年会。前期と後期のふたグループに分けて行われるそれに、修司のいる企画開発部は後期組に割り振られていた。同じく総務も受け付けも、営業も後期。加えて、情報管理部までもが後期組だ。

偶然にしてはわざとらしい組み合わせに眉を寄せたのは修司だけで、沙絵は無邪気に喜んでいるし、堂々と権力の私的流用をした尚紀は、素知らぬ顔を決め込んでいる。

部署合同一泊二日の忘年会など、このお祭り好きな男がいかにもやりそうなことだ。

「なんだよ、修司。その物言いたげな顔は？文句あるのか？」

「無いよ」

ちらりと横目で見遣って、こっそり嘆息する。とりあえず、理子と同じ組であるのだから文句は言うまい。だが、その理子はというと、なぜか表情が堅い。旅館に近づくにつれて、徐々に笑顔が引きつりだしていた。

「どうかした？もしかして具合悪い？」

そうだとしたら、忘年会どころではない。それにどうせ旅館に一泊するなら、会社行事などではなく、理子と二人がいいに決まっている。修司は元々忘年会には興味がないし、理子が帰ると言えば、喜んで連れて帰る気でいた。

何が悲しくて会社から旅館まで直行しなければならないのか。この日だけは、半日で仕事を終え、各自旅館に向かう。送迎バスも来ていたが、修司は自家用車を選んだ。さほど遠くもないし、なにより足があった方が自由が効く。修司は理子と尚紀を乗せて、午後３時頃旅館に到着した。

「あ、ううん。そんなんじゃないの……。あ、あのね、浅野くん」

ツン…とスーツの袖を引っ張って、理子が呼び止める。修司が「なに？」と振り向くのと、

「りぃ――こさん！！」

一足先に到着していた沙絵が理子に突進してきたのが、同時だった。

「さ、沙絵ちゃんっ」

沙絵のタックルを真正面から食らって、理子が軽くよろめく。

「理子さん！理子さんはこっち！準備があるんですっ！」

「え…、あのっ。待って、やっぱり、せめて話だけでも…っ」

「そんな時間無いですって！早く、早く！」

言って、理子の手を取るや否や彼女を連れて旅館の中へ消えていく。あまりの騒々しさに半ば唖然とする隣で、尚紀がクツクツと笑った。

「沙絵ちゃん。気合い入ってるよなぁ」

「……おい、なんだよ。あれ」

二人が消えた方を視線で差すと、尚紀がひょいっと肩を竦める。

「沙絵ちゃん、今夜の宴会の運営係なんだぜ。いやぁ、出しもの担当は忙しいなぁ」

「あぁ、そう言えばそんなこと言ってたかな。なんでも沙絵に無理

矢理誘われたって」

沙絵と一緒に運営係をすることになったから、しばらく遅くなると言われたのは、先週のことだ。部内の忘年会ならいざ知らす、部合同ともなればそれなりに準備に追われるだろうと、修司は快く頷いた。

「そうみたい。しっかし、理子もあの年で……、なぁ？」

途端、意味深な台詞を口にする尚紀に、修司が眉を寄せた。

「なぁって、なんだよ」
「あれ？なに、その反応？修司にしてはえらく寛大じゃん」
「だから、何がだよ」

微妙に噛み合っていない会話に、声を尖らせる。尚紀は「へぇ～」と片眉を上げて、ぽんっと修司の肩を叩いた。

「ま、忘年会。楽しみにしてろ。良いもん、見れるからな！」

腹黒い満面の笑みにうろんの眼差しを向ける。この男のこの顔は、必ずろくでもないことを考えているに違いないからだ。

その後、部屋割りどおりの部屋に入り、適当に時間を潰した。本当なら理子と旅館の土産物店や中庭を散策しようと思っていたのに。当てが外れて時間を持て余している。

温泉は好きだが、何時間も浸かっていられるほどの風呂好きでもない。

もしこれが部屋付きの貸し切り風呂で理子と二人で入ったというのなら、余裕で1時間は浸っていられるのに。ただ大人しくできるかと言われば、１００％そんな自信はないのだが。

（暇、だな……）

仕方がないから部屋に戻って仕事の続きでもやろうかと踵を返したところで、修司を呼び止める声がした。

「課長補佐、おひとりなんですか？」

振り向けば、清水が中身の詰まった紙袋を抱えて立っていた。

「すごい量だな。大丈夫、持とうか？」

「いえ。平気です」

沙絵とさほど変わらない背丈の清水。紙袋で顔の下半分が隠れてしまっている。思わず手を差し伸べると、あっさりと断られた。

「あ、そうか。理子さんも出しものに回ってるんですよね」

あの一件から清水の中で、修司と理子はワンセットとして認識されたのだろう。憑き物が落ちた彼女は、口のきつさは変わらなくても醸し出す雰囲気は随分と柔らかくなった。かしこまった表情ばかりだったのが、こんな風におどけた表情にもなる。

以前は『あの女』呼ばわりしていた理子を『さん』付けで呼ぶようになったという事は、彼女の中にあったわだかまりが完全に解けたのだろう。

「そういう君も、だろ。大変だね」

理子はくだんの件を水に流す条件として、忘年会の出しものに強制参加を義務付けた。何をするかは聞いていないが、おそらく手に

持っている紙袋の中身は、出しものに使う小道具か何か。

「はい。……でも、意外です。課長補佐はもっと束縛的なのかと思ってました。寛大なんですね」

「何のこと？」

「今年の出しものの事です」

そういえば、行きしまに尚紀と交わした会話を思い出す。あれも同じような事を言っていた。だが、修司には今ひとつ的を得ていない会話に、首を捻るばかりだ。

口を揃えて『寛大』と称される理由とは、なに。

怪訝な顔で修司が問いかけた。

「あのさ、今年の出しものと俺とどんな関係があるんだ？」

清水が目を瞬かせて、首を傾げた。

「え……？理子さんから何も聞いてないんですか？」

「知ってたら聞いてない」

真面目な修司に、清水の表情が強張る。すぅ…と顔の色を引いて、浮かべた笑顔が固まった。これはいよいよ何かあるな、と確信した時だ。

「ご、ごめんなさい！急ぎますから！！」

問い詰める前に、清水が脱兎のごとく逃げ出した。

「あ、おい！」

小さくなった後ろ姿に唖然とする。

（いったい、何だっていうんだ……？）

理子は沙絵に付き合わされて運営係をやっているだけじゃないのか。

何がどうなっているのか、全くもって意味がわからない。まるで自分だけが蚊帳の外にいる気分だ。それが理子関係だというのだから尚更気分が悪い。

当然、知っていたら首を縦に振らないようなことなのだろう。ただ知らないだけなのだが、周りは自分がそれを許したと解釈している。だからこその『寛大』なのだ。という事は、よほど言い出しにくい事柄だったに違いない。

（言ってくれれば、もしかして頷いたかもしれないのに）

そんな気はさらさらないくせに、こういう時だけ妙に大人の余裕を演じて見たくなる。

携帯を開いて時間を見る。

宴会まであと1時間。

どうしてやろうか、と思案していると、清水が逃げた方向から見知った男がやってきた。

「なんだ、浅野もあぶれ組か」

鷹揚な雰囲気の深澤も温泉上がりらしく、ジーンズに軽くシャツを羽織った程度の軽装だ。洗いざらしの下ろした髪のせいで、会社で見るより幾分若い。

「なんですか。その”あぶれ組”って……」

「理子ちゃん、いないんだろ。なら、俺と一緒じゃないか」

言って、深澤が視線を近くのソファまで促した。どうせすることもない修司は、大人しくそれに従う。

「水嶋も、いないんですか？」

彼の恋人、水嶋　志穂は修司と同期。理子を親しげ呼び名で呼ぶのは、水嶋が理子の親友でもあるから。彼女のたおやかで包容力のある雰囲気は、理子には無いものだ。

「あぁ、例の出しものに駆り出された。しかし、お前よく許したな」

「その台詞、今日で三回目です。一体、今年の出しものって何なんですか？」

いい加減似たような会話にうんざりしてきた修司が問いかける。

深澤は珍しく、深い眦を見開いた。仕事が絡まなければ、深澤が見せる表情は多い。

「お前……、まさか知らないのか」

「あいにくと」

その台詞は二回目だ、とこっそりとひとり愚痴る。

ソファに持たれて頷くと、「そうか、まぁ言いにくいかもな」と苦笑した深澤が種明かしをした。

「今年はな、高木が扇動して女子社員がコスプレで歌うらしいぞ。それも全員が大人バージョンに改造したセーラー服でだ。そのセンターを張るのが、お前の理子ちゃんだ」

さらりと爆弾を投下されて、修司はぎょっと目を見開く。
セーラー服？コスプレ？
「なんですか、それ？！」
「だろ？俺も高木が志穂に話を持ってきた時は断固反対したんだがな……」
遠くを見遣る深澤は、ふぅっと達観の溜息を吐いた。
「可愛い顔して、高木は悪魔だな。さっさと志穂を味方につけやがった」
つまり、水嶋は沙絵の呼びかけに賛同したということだ。
「深澤さん、水嶋には弱いんですね」
同情を送ると、「お前もだろ」と逆に返された。
「まぁ、俺は一応黙認だが、お前はどうなんだ？言っとくが、あのセーラー服姿の理子ちゃんは、やばいぞ。彼女、高校は〇〇女子学園だったんだろ。あれの改造版は反則だ」
「……なにが、どうやばいんですか」
「相当エロい。見たら分かるさ」
それをなぜ深澤が知ってるんだ、という疑念を投げつける前に、「お疲れ」と肩を叩かれた。立ち上がって去っていく後ろ姿を見送りながらも、修司は徐々に自分の目が据わっていくのを押さえられなかった。
大人バージョンに改造したセーラー服って、なんだ。
〇〇女子学園と言えば、とにかく制服が可愛いという学校だ。デ

ィテールはセーラー服なのに、そのシルエットやプリーツのバランスが絶妙で、しかもそこそこ偏差値がないと入れない学校であることから、あの制服を着れることがステータスになっていた時期もあったほどだ。

知らなかった、理子が○○女子学園出身だったなんて。

修司も高校時代はあの制服をきた子と付き合っていた時がある。もう名前も思い出せなくなっているけれど、同じ年だったことだけは覚えている。もしかして、名前を出せば理子が知っている子かも知れない。

（いや、そうじゃなくて……）

問題は、あれを今の理子が着るということだ。

良い感じに熟れたあの脚線美を大衆の面前に晒すというのか。当時とは体つきも醸し出す色気も違うというのに、大人バージョンのセーラー服って何だ。

第一、言わなければバレないという問題ではない。出しものに参加する以上、必ずバレる。当り前だ。

（……あぁ、そうか。そういうことね）

つまり、今日まで修司の耳にその話が入って来なかったのは、誰かが意図的にそうしていたから。事前にばれて理子が出られなくならない為に、あえて修司を蔑ろにした人物がいる。

心当たりは、約二名。

――――さて、どっちかな。

修司は密かに冷笑を浮かべた。

2）真相

☆
★
☆

「それでは第〇回、〇〇コーポレーションの後期組忘年会を開催します！」

司会進行役の沙絵の声で幕を開けた忘年会。

座敷に整然と並んだ膳の前に座り、専務の乾杯の音頭にビールが入ったグラスを掲げ、それは始まった。

入ってきた者順に席に適当に座っているが、役付きが上座というのは暗黙の了解。が、列の中盤にいる修司の隣に、この社の経営者が座っている。

「いいのか、お前がこんなところに座っててても」

美味そうに刺身を頬張る尚紀に、呆れた声で問いかける。

「ん〜、いいの、いいの。誰も俺のことなんて知りやしないよ」

それはそうなのだが。

お猪口に注いだ熱燗をグビリと飲み干して、至福の顔をしている男は、純粋にこの会を楽しむつもりだ。だが、彼の素性を知っている者は、そういうわけにもいかないらしい。

始まって間もないのに、すでにビール瓶を片手にこちらの様子を窺っている存在が視界の端でちらつく。

「常務が見てるぞ」

視線を動かさないまま、ぼそりと修司が呟く。

「知ってる。だから、此処に居るの」

尖ったメガネをかけたキツネ顔が、目を皿のようにして尚紀に近づくタイミングを見計らっている。修司はちらりと横目で見遣って、呆れた。

あれでは出世へのパイプを繋げたい心情が見え見えだ。こんな序盤で、真っ先に常務がわざわざ酒を注ぎにくるなど不自然極まりないというのに。自分のことしか見えていない男に、場の雰囲気を読むという能力は備わっていないらしい。

「あれ、わざわざ俺の居る後期グループに変更してきたんだぜ。こんなところで何を売ろうってんだろうな」

「媚びだろ」

「んなもん、腐るほど貰ってるって。どうせくれるなら提案書にしろっつうの」

「お前、あの狐にそれを期待するのか」

それができれば今頃、専務職だ。

「わかってるって、だから常務止まりなんだろ。ま、それももうしばらくだけどな」

おちゃらけ顔で物騒な台詞を吐く尚紀に、修司が僅かに目を眇める。無言で徳利をかざすと、尚紀が持っていたお猪口を差し出した。

「上に行くのか」

「まぁね、じいさんも年だしさ。だいぶ人材も育ってきたし、幹部

候補も目星はつけたし。いい加減、裏から口出すのも限界だしな。あ、お前も理子を嫁に欲しかったら、もっと出世しろよ」

「なんで、そこで俺の出世が絡んでくるんだよ」

「そりゃ、あれだよ。理子はじいさんの”お気に入り”だから。ちなみに親父からも溺愛されてる。それをただの課長補佐程度の男にかっ攫われたってんなら、まぁ血の雨が降るだろうな。本気で日本刀とか持ち出すんじゃないか」

血の気多いからな、うちのじいさん。と呑気な発言をする傍らで、冗談じゃないと頬を歪める。

「山下家の男は揃いもそろって馬鹿ばっかりだな。それに理子は俺の役職と結婚するわけじゃないぞ」

「んな常識が通用するかよ。とやかく言われたくないなら、それだけの装備をしろって言ってんの。実力ありきだけど、人脈作りも大事な仕事だぞ、修司君」

ぐいっと中身を飲み干したお猪口を「ん」とひと言唸って、尚紀が差し出す。受け取れと催促されて手に持つと、今度は尚紀が酌を返した。

「そうだな。じゃあ、どうにもならなくなったら、尚紀に泣きついてみようかな」

「何て言って泣きつくつもりだよ。”尚紀さん、俺を出世させて下さい”か？」

トクトク…と心地良い音と共に透明な水がお猪口を満たす。

「馬鹿か、”お願い、お兄ちゃん”に決まってんだろ」

にこりと王子スマイルで微笑んで、一気に酒を飲み干す。本気で引いた顔を見ながら飲む酒も、なかなかだ。

「……実力で上がって来い」

「そうさせてもらうよ」

端からそれしか考えていない。尚紀に心配されるまでもなく、必ず理子の隣に並んでも遜色のない肩書きを掴んでみせる。

修司とて野心がないわけはないのだ。

「それはそうと、理子〇〇女子学園出身なんだって？」

今思い出したような口ぶりを装って、修司は言った。

「あれ？なんだ、とうとうバレたんだ」

あっけらかんとした口調に、修司は嫌そうに眉を寄せる。たったそれだけで全てを察した勘の良さ、こいつの頭の中はどうなっているんだろう。

「さっき、深澤さんに聞いたんだよ。お前が言ってた良いもんってコスプレだろ。お前こそ、よく許可したよな」

「だって、見たいじゃん。理子のセーラー服姿」

「どうせ高校時代も散々見てたくせに、今更だろ」

「そりゃあ、見たさ。堪能した。でも絶対今の方が似合うと思うんだよね」

何を基準に似合うと言っているのか。訝しむと「楽しみだなぁ」と目を反らした。

「俺の耳に入らないようにしたのは、知ったら邪魔するから？」
「さぁてね、これは沙絵ちゃんに一任してるもん。でも、修司にはギリギリまで言うなって言ってたから、そういう事なんだろ」
飄々とした態度からそれが嘘かどうかの判別はしにくい。なにせ平気な顔でとんでもないハッタリや嘘をぶちかますような男だ。
「なんだ、それでずっと此処に座ってんの？もしかしてさ、拗ねた？」
意地の悪い顔が、にやりと口端を上げる。修司はそれを一笑に付した。
「まさか、そこまで小さくないさ。此処まで来て、出るなとも言えないだろ。それなら、俺も堪能しようと思って」
「おぉ、修司にしてはノリノリじゃん。やっぱ見たいだろ？」
「それは、――――見たいさ」
あの制服をどう改造したのか。ノーマルな制服姿も見てみたかったけれど、大人になった理子が着る制服姿はもっと見てみたい。
壇上では、手品や一発芸が披露されている。出しものと言っても、やっている内容は結婚式の余興と大差ないものばかり。ただ、組み体操は意表を突かれた。
「そろそろ、かな」
演目の全てを把握している尚紀が呟いて、背中に隠していたハンディタイプのビデオカメラを持ち出した。最近では当り前になった手に収まるほどの極小で、軽量タイプ。いそいそとビデオが動くのを確認している姿は、シスコン丸出しだ。

とは言うものの、この時だけは修司もあからさまな蔑みの視線を送れる立場ではない。
尚紀のようにビデオカメラを持参しているわけではないが、しっかり携帯のムービーでとってやろうと思っている。もちろん、後で観賞する為ではない。

（見てろよ、沙絵）

お前の仕置きは、あの野獣じみた彼氏に任せてある。
どうせ「優治は知ってるもん！」とか言うんだろうが、聞くのと見るのでは大違いだってことを、思い知らせてやる。理子だけが俺の怒りを受けるのは、あまりにも可哀そうだと思わないか？
修司の双眸に黒い光が宿るのを隠すかのように、ふっと壇上の明かりが消えた。
今までとは違う演出に、周りがざわめく。尚紀は「おっ、いよいよだな」と嬉々としてカメラを向けた。

「それでは、次の演目です！後期組女性社員によりますオンステージ！曲目は、往年のあの名曲を曲に合わせたセーラー服と共にお楽しみ下さい！」

沙絵の声が響いた途端、わっと歓声が上がる。いつの間にかステージ前にはずらりと携帯を構えた男達が群がっていた。その中心を陣取っているのが、つい数秒前まで隣にいた尚紀。
カラオケのイントロが流れ、一斉に照明が灯る。
総勢２０人ほどの女性達が、ピラミット状に三列に並び、全員がセーラー服を着ている。
深澤の言う通り、確かにセンターを張っているのは、理子。

（……あれかっ！！）

太股の真ん中あたりまで切られたプリーツスカート。動く度にふわりふわりと裾が踊り、白いレースがのぞく。体のラインをさりげなく強調した造りに変えられたトップのラインが、妙に艶めかしい。いやらしさを前面に押し出していないが、その分、端端に手を加えた部分が男心をくすぐる。

白い靴下と、長い髪をポニーテールに結った、理子。

鼻歌でならした歌声は抜群で、制服と言う禁断の戦闘服が男の制服欲をかきたてる。

マイクスタンドの前で振りつきで歌う名曲は、かつて一世を風靡したあの曲。彼女達の全盛期はまだ子供だったが、会員番号を言えば誰のファンだったかが分かる、という辺りでいつの世代か分かってしまう。

唖然としていた修司は、はっと我に返って急いで携帯を壇上に向けた。

セーラー服とひとくくりにしても、それぞれが違う形のセーラー服を着ている。理子の右横で歌う水嶋は清楚さを前面に押し出し、それが逆に艶めかしさを突出している。二列目の端には、清水がいた。左横で歌う沙絵に至っては、そのまま敵を倒しに行きけそうだ。

『セーラー服で歌うってやつですよね。はい、知ってますよ』

電話口で、優治はしゃあしゃあと言った。優治曰く、理子を出しものに誘ったのは、フジモリ・ケーキに優治のケーキ作りを見学に行った日のことらしい。

(沙絵の奴、優治すらダシに使ったな)

「動画、送っとく。自分が正しかったかどうかは、それを見て判断しろ」

その為に、修司はムービーを撮影しているのだ。全体が映るよう引いてみたり、沙絵だけをフォーカスしてみたり。途中、誰かにおひねりを貰っている姿までばっちり撮影させてもらった。

壇上の恋人は、修司が携帯を向けている姿を見つけて、ぎょっとしていた。修司はそれににっこりと笑って答えた。尚紀はカメラ片手に、おひねりの大盤振る舞いをしている。

隣に人の気配がして振り向くと、やはり深澤が複雑な面持ちで壇上を撮影していた。

「深澤さんでも、そんなことするんですね」

「ば、ばかっ。俺じゃない！本人からの要望だっ！」

はなはだ心外だと不満を露わにしているが、口端がいつにもまして緩い。

「な？やばいだろ」

「……俺の前だけなら、ありです」

「――――同感、だな」

お互いに苦笑いを浮かべて、その後はビデオ撮影に専念した。

3）理子の憂鬱

☆
★
☆

（……どうしよう）

ステージから降りた理子の頭の中は、ひたすらその言葉ばかり回っていた。どのみちバレてしまうことは分かっていた。彼の機嫌を損ねるくらいなら、さっさと白状して許可を貰ったほうが、賢いやり方だったのだが。

「駄目！絶対ダメですからねっ！！」

なぜが沙絵の猛反対にあったのだ。修司が絡むと面倒くさいとか、あいつは心が狭い、とか延々とぶうたれられて、しぶしぶ修司への報告を断念させられた。これでも何度も言おうとした。その心意気だけはかってほしいが、修司に分かってもらえるとは到底思えないのは、なぜだろう。

結局、言えずじまいで本番を迎えてしまった……。

（しかも、ムービーなんて撮ってるしっ）

深澤と並んで、なにやら談笑しながらも、携帯のカメラは終止こちらを向いていた。表からは見えないが、あの仮面の奥には底知れぬ何かが潜んでいるということも、先日の事件で知ったばかり。

なんとか歌い上げたは良いが、当然心臓はバクバクだった。人前でセーラー服を着て歌ったことがじゃない。修司の反応が怖いのだ。

高校時代のセーラー服を微妙に手を加えたのは、りり子。彼女の

裁縫の腕は見事なものだった。だが、多少遊びをきかせ過ぎている。

（た、丈が短い）

腕を上げると、素肌が見えてしまう。『絶対にキャミソールは禁止！』のお達しで、素肌の上に着たのだが、やはり気が気ではなかった。スカートの丈は想像していたよりも長めだったが、それでも膝上１０センチ。裏地にはレースのビスチェがついている。可愛いけれど、動く度にひらひらと中が見えてしまうので、やはり気になって仕方がない。白いソックスと、ポニーテールは沙絵指定。姿見で見た自分の姿に、どんな顔をしていいのか分からなくなった。

「いいですよっ、理子さん！萌えますっ！その恥ずかしそうな感じが良いですっ。ぜひ、そのままで行ってください」

握りこぶしを作って力説されても。たじろぐ理子に、同じようにセーラー服に着替えた沙絵が興奮もあからさまに鼻息を荒くしていた。

（なんでこうなっちゃったかなぁ…）

終わった事をくよくよ考えても仕方がないが、この後、どんな顔をして修司と会えばいいか分からない。修司には運営係の手伝いをする、と告げていたのだ。それがいつの間にか、出し物に参加する羽目になった。

歌うのは良いとしても、やはりこの格好はまずいだろう。三十路にリーチをかけた女が、セーラー服だなんて。

彼はこれをみて何を思ったのだろう。……あぁ、目眩がする。

はぁ…と漬物石並みの重い溜息を落とした時だ。

「おつかれ、理子」

今、一番会いたくない人物がにこりと笑って立っていた。

「浅野、くん。お、おつかれさま」

あんなに素敵だと思っていた『王子スマイル』が、今日はやたら恐ろしい。思わず笑顔も片頬が引きつってしまった。

「なかなか、刺激的なカラオケだったね」

「え…、あの。――ご、めんなさい」

とにかく謝ってしまえの勢いで、謝罪を述べる。すると修司はひょいと肩を竦めて苦笑した。

「なんで謝るの？盛り上がってたし、いいんじゃない」

「へ？あ、の……怒って、ないの？」

てっきり、「いい年してなんて格好をしてるんだ」と詰られると思っていただけに、この反応は予想外だ。パチパチと瞬きをしながら、修司の顔色をうかがう。

「怒ってないよ。なにせ今日の俺は寛大だったらしいから」

「寛大…」

「そう、自分の恋人のあの暴挙を快く許した俺は寛大だって、会う人会う人に言われ通しだった」

「あ、あの…、浅野くん？」

朗らかな面で笑っているが、言葉を紡ぐ声は底冷えするほど冷めている。目はぴくりとも笑っていない。

（ぜ…ぜんぜん、良くないじゃない！）

駄目だ、完全に怒っている。やはり修司に隠し事をした時点でアウトだったのだ。

背筋を走る悪寒にぞくぞくしながら、修司の放つ冷気にたじろぐ。思わず一歩後ずさると、あっという間に腰を攫われた。腕の中に囚われて、そのまま壁に押し付けられる。

「あ、浅野くん！」

「なに」

「なに、じゃなくて！ここ、通路っ！」

「うん。知ってる。でも、誰も通ってないよ」

「そういう問題じゃなくって……んっ」

最後の言葉を良い終わらない間に、修司に唇を塞がれた。すぐに腰が抜けるような濃厚さになって、唇を放された時には一人では立っていられないほどだった。

修司の腕に縋りつきながら、目尻を赤く滲ませた理子が修司を睨む。修司はそれに何とも言えないくらいの艶笑を浮かべた。

「怒ってないけど、もし理子が俺に悪い事をしたなって思っているなら、俺からのお願いを聞いてほしいな」

「お願い…？」

ぽすりと彼の腕に体を預けて理子が聞き返す。美由紀の寛大な心遣いで、週の半分は理子の家に泊まる恋人。一昨日の情事を彷彿とさせるキスに、理子の欲望が目を覚ました。そのせいか、てっきり修司のお願いもその類のものだと思い、理子はわずかに頬を赤らめる。それを見て、修司がじわりと双眸を弛めた。

「そう。俺が前いたアパートの掃除。いい加減、引き払おうと思って」
「……え、」
当てが外れた理子は多分、ものすごく間抜けな顔をしていた。太陽の日差しが似合うほど健全な「お願いごと」に何度も瞬きを返す。そのまま修司を見上げると「何だと思ったの？」と王子スマイルが笑った。
勝手にエッチなことを想像してた理子は、カッと赤面して修司の胸から体を起こす。
「な、な、なんでもないですっ！！」
（だって、「お願い」とか言うんだものっ。ま、紛らわしい言い方しないでっ！！）
意味もなくスカートの汚れを払いながら、破廉恥な想像を隠す。そんな理子に修司はクスクスと笑った。
「それで、返事は？」
うかがい顔をじろりとねめつけながらも、理子はまだ赤みが残る顔で頷いた。その程度で修司へ秘密を作っていた事が許されるのなら、お安い御用だ。
「じゃあ、悪いけど明日、此処を出た足で向かってもいい？あらかた片づけてあるから、そんなに汚れないと思うよ」
「わかった。明日ね」

もっと怒られると思っていたのに。

物分かりのいい彼氏に、少しだけ歯がゆさと物足りなさを感じた。もし自分が逆の立場だったら、絶対おもしろくないと思う。こんなマニア受けしそうな格好で歌って踊った恋人。それが強制参加だったとしても、当日知らされれば面白くないと思うのが心情じゃないか？もしかして修司はそれほど理子に興味がないのだろうか。少しだけ彼の気持ちを勘ぐってしまいそうだ。

（駄目、駄目っ。彼は大人なのよ）

こんなことで目くじら立てるような小さい人ではない。りり子との一件で、修司からの想いを抱えきれないほど貰ったじゃないか。

「それはそうと、その格好で会場入りするの？」

心にかげったモヤモヤを「理屈」で取り払っていたところに、修司が言った。その格好の言葉に改めて自分がどんな格好なのかを思い出す。

「し、しませんっ！」

そうだ、衣装を脱ぎに行く途中だった。理子は、さっと両手でスカート丈から見える素足を隠し、カニ歩きで修司の脇を抜けるとそのまま部屋へ駆け戻った。

☆★☆

翌朝、旅館を出て駐車場へ向かうと、見覚えのある黒いワンボッ

クスカーが修司の車の隣に止まっていた。

「あっ…」

それに最初に気付いたのは、沙絵。声を上げて足を止める。行きはバスで来たが、帰りは修司の車で送ってもらうことになっていた。理子もそれが誰の車なのか分かって、数歩先に行ったところでやはり足を止めた。

運転席から出てきたのは、沙絵の恋人で理子が愛してやまない『フジモリ・ケーキ』のパティシエ　優治。野性味あふれる雰囲気から、どうしてあんなに甘いスイーツが生まれるのか甚だ不思議だけれど、お菓子作りに顔は関係ない。必要なのは情熱と愛情だ。

「おはようございます」

まず優治は修司に向かって挨拶をする。理子から見れば、修司は沙絵の元彼、優治は今彼という微妙な三角関係に思えるが、優治は修司に対していつも一歩引いた感じがする。それが年功序列の精神からなのかは分からないが、それなりに上手く付き合っているというのは、素直に嬉しかった。

「例のアレ、見ました。コイツには俺からよく言って聞かせますんで」

言って、鋭い眼光を躊躇なく沙絵に向ける。傍で見ていた理子の方がひっ…と竦みたくなるような強い眼差し。だが、幼馴染みの沙絵は堂に入ったものだ。まったく動じていない。

「沙絵、お前はこっち」

「えぇ〜、なんで？迎えに来てなんて、頼んでないじゃん」

わざわざ迎えに来てくれた彼氏に、平気で口を尖らせている。優治はそんなことなどお構いなしで、勝手に彼女のバッグを奪い、猫の首でも掴むように沙絵を引っ立てた。

「じゃあ、すみません。俺達はこれで。――沙絵、行くぞ」

「えっ、やっ！ちょっとっ、あ、あぁ、理子さん、みんなまたね！！」

ぐいぐいと腕を引っ張られながら、沙絵が手を振った。それに手を振り返しながら、追い立てられるように助手席に押し込まれた沙絵をなかば茫然と見ていた。

あっと言う間に、駐車場から走り去った優治達。

「なんだったの…？」

思わずそう言いたくなるほど、一瞬の出来事だった。

「さぁ、優治が沙絵を迎えに来ただけだよ」

「そう…なの？でも、彼何となく機嫌悪くなかった？」

「気のせいだよ」

「どことなく目も据わっていたような」

「それは彼に失礼だよ」

首を傾げながらにこりと笑われる。優治の強面は今に始まったことではない。本人は全く気にしていないが、怒ってもいないのに「怒っている」と言われるのは良い気持ちはしないだろう。人の機微にあまり敏くない理子は、修司が言うのならと頷いた。

「でもさっき、”例のアレ”とか言ってなかった？浅野君、優治君

に何か渡したの？」
「たいしたものじゃないよ」
それも、笑って軽く受け流された。二人のやりとりを傍で見ていた尚紀が、したり顔で修司を見ている。やはり何かあるんだろうかと勘繰ると、「行こうか」と背中に手を添えられて促された。

4）　修司の罠（前書き）

最終話です。

4）修司の罠

☆
★
☆

助手席に座る理子は、ようやく肩の荷が下りてすっきりしたのか、行き道とは打って変わって、晴れ晴れとした表情をしていた。

（さて、どうしてやろうか…）

今頃、沙絵は優治にたっぷりと『おしおき』をされているだろう。何のために沙絵ばかりクローズアップしたムービーを撮ったと思っている。

どうせ理子メインは尚紀が高画質で撮っているし、それをダビングしてもらえばいい。なんだかんだと言いながら、修司もあの理子には萌えた。そう、『もう一度じっくり見たい』と思えるくらいに。

アパートの掃除の手伝い、などと自分でもよくそんな適当な事を言えたと感心してしまう。部屋の掃除などとっくに終わっている。あるのは、廃棄処分を決めた家財道具だけだ。電気と水道は週明けに止める連絡を入れる予定なので、かろうじてまだ人が暮らせる環境にはある。だからこそ、アパートを「お仕置き場所」に選んだのだ。

修司は適当なところで尚紀を下ろし、その足でアパートへ向かった。

半年前、水浸しにならなければ理子と出会うこともなかった。彼女の鼻歌を聞かなければ今こうしていられたという確証は無い。災難だと思っていたことは、実はとんでもなく幸運だったと今は思えるから、人生何があるかわからない。

アパートの契約は今月いっぱい。修司は契約してある駐車場に車

を停めて、二人分の荷物を持って車を降りた。

「お邪魔します…」

ジーンズにタートルネックのニットワンピース。スカート好きな理子には珍しい組み合わせだが、会社行事ということで、無難にまとめてみたのだろう。

（ま、すぐに脱がすんだけど…）

どんな格好も、今の修司には問題は無い。

初めて足を踏み入れる空間に、理子はやや緊張ぎみだ。そういえば、理子が修司の空間に入るのは、これが初めてだ。まだ実家の修司の部屋に通したことがなかったな、と今さらのように思い出した。いつも理子の家に入り浸っているから、すっかり失念していた。

理子はたいして物が置いていない、がらんとした空間を興味深げに見渡していた。住み慣れた１ＬＤＫ。一人暮らしだし、掃除もまめな方ではないので、これくらいの広さで十分だった。なによりここは角部屋で、隣はその隣が物置として借りているという、最高の賃貸だった。おかげで隣人の騒音に悩まされることもなく、快適に暮らせていた。

「ねぇ、…掃除って、もうほとんどする事なんてないんじゃない？」

ようやく修司の「お願い」に違和感を覚えた理子が、振り向きながら尋ねる。

「ないよ。でもこれから少し汚すから。掃除はその後かな」

「え…」

「本当はね掃除はこの前来た時に終わってるんだ。後は家財道具を

処分したら終わり」

部屋にあるのはむき出しのスプリング付きのベッドと、一人用の冷蔵庫、布団が一式。

「え…、じゃあ何のために」

「分からない？」

声のトーンを変えて問いかけると、理子の小さな目が瞬いた。そして、すぅっと顔色を変える。

「あ…、っと…、その」

カチャリ…と響く施錠音にあからさまな動揺を浮かべる。

そう、ここに連れてきたのは、修司なりの「おしおき」をするためだ。身の危険を感じた理子は、ゆっくりと距離を縮めてくる修司に後ずさる。

「浅野、くん…。嘘…よね？」

「残念だけど、嘘じゃない。――さて。どうしようか。俺に隠してたのは、沙絵の指示？」

「し、指示ってわけじゃ」

「じゃあ、お願いかな。さしずめ修司に知られると面倒だ、とか何とか言い包められたんだろう」

「な…なんで、知ってるのっ！？」

――やっぱり。

当てずっぽうで言ったことなのに、そのまんま言っていたとは驚きだ。やはり彼に沙絵を任せて正解だった。きっと優治も俺と同じ方法で言い聞かせているに違いない。

まぁ、沙絵の事はどうでもいい。修司が問題視してるのは、理子の迂闊さだ。

「分かるよ。自分のことだから、ね」

さんざん人から「寛大だ」と言われてしまうほど、理子に対してだけ束縛的だという自覚はある。他の誰とも違う付き合い方をしている相手だ。彼女の無防備な色気を知っていいのは、修司だけに決まっている。当然、その脚線美に舐めるような視線を送っていいのも、触れていいのもだ。

「理子、もう一度、あれ着て」
「えっ、えぇぇ！！嫌よっ！」

珍しく即答が返ってきた。その反応で好きで着ていたわけじゃないと分かるが、面白くないのだから仕方がない。

「知らなかった。理子って〇〇女子だったんだ。あそこを選んだのは、やっぱりあの制服？」
「べ、別にそういうわけじゃなくて」
「誰かに勧められた？例えばご両親とか、もしくは尚紀」

離婚したとはいえ理子は正真正銘、山下　幸三の孫娘。少しでもより安全な場所に置きたいと思うのが親心だろう。

「尚ちゃんだけじゃないよ、お祖父ちゃんやパパもお父さんも」

つまり理子の周りの男共は揃いもそろって彼女を溺愛しているわけだ。自分のその一人になるのだろうか。いや、もうなってる？昨夜の尚紀の台詞が今さらながらに思い出される。確かに、理子を嫁

に欲しいと言えば、血の雨が降るかもしれない。

（どっちでもいいよ）

とにかく理子にはもっとしっかり、自分がどんな風に見えているのか分かってもらわないと。この先、修司の心臓はいくつあったってたりやしない。

「で、どうする？着る？着ない？」
「き、着ない！」
「どうして？」
「どうしてって…、は、恥ずかしいからよっ」
「俺達しか居ないよ」
「あ、浅野君が居るからじゃないっ！？」

他の誰に見られるより修司に見られる事が一番恥ずかしい、と頑なに拒む理子も可愛いけれど、それでは腹の虫が治まらない。

「理子」

すぐ傍まで体を寄せて羞恥に真っ赤になった彼女の顔をのぞいた。

「昨日は動揺してて、ちゃんと見れなかったんだ。だから、もう一度見たいな」
「う、そ！ムービー撮ってたじゃないっ」
「あれは、優治に送るためのムービーだよ。彼だって沙絵の雄姿は見たいと思ったからね」

そう言うと、理子が小さく声を上げた。

「じゃあ”例のアレ”って」
「そう。昨日の出しものを撮ったムービー」
それで合点がいったのか、理子が纏う雰囲気から拒絶の色が薄くなった。
「浅野くん、沙絵ちゃん撮ってたの？ずっと？」
「そう。だから、理子はまともに見れなかった」
実際はしっかり目に焼き付いているが、そんな事を言えば元も子もなくなる。修司は今、お得意の理子の良心に訴える作戦を遂行している途中だからだ。
「深澤さんまでが、理子の制服姿を事前に堪能していたのに…。ちゃんと話してくれていたら、俺だって止めないよ」
「……ほんと？」
ごめん、嘘だよ。
理子の体に腕を回して引き寄せても、もう理子は嫌がらない。簡単に人を信じてしまうところは相変わらずだが、今は騙されてほしいと願う。
「昨日は人の目もあったから、あんな場所で無体な真似なんてできるわけないよ」
こちらは半分、本当。社会人として、男としてのプライドが理性の暴走を一日遅らせたのだ。もしあれが忘年会じゃなければ、あのまま理子を部屋に連れ込んで散々鳴かせたはずだ。だが、そんなことをすれば週明けには立派に「獣」のレッテルが張られてしまう。せっかく「寛大」の評価を頂いているのだから、それはありがたく

頂戴することにした。
理子の唇に軽く唇を当てて、その小さな目をのぞきながらもう一度お願いする。

「駄目？」

すると理子は視線を彷徨わせて逡巡していたが、やがてちらりと修司を見上げて「いいよ？」と頷いた。

「でも、見るだけだからね！歌わないよ」
「分かってる」
「え…、エッチな事もしないでね！」
「もちろん」

そんな可愛いことを言って。
絶対、するに決まってるだろう。「おしおき」だと何度も言っているのに。
すぐに本来の目的を忘れてしまう可愛い恋人に口づけながら、修司はセーラー服に着替えるための手伝いをかって出た。
その後、彼が愛でたのは、セーラー服を着た理子だけでなく、何もまとっていない理子も存分に堪能したのは言うまでもない。

☆　Ｆｉｎ　☆

4）修司の罠（後書き）

番外編はこれにて完結です。
あまり内容は濃くない（というか、ただ修司が悶々として終わった）だけですが、本編作成中から絶対に理子にセーラー服を着せて歌わせてやろうと思ってました！
ので、無事私の願いが叶ってようやく肩の荷が下りた感じです。

もしかしたら時々、小話を投稿するやもしれませんが、ひとまずこれにて「完結」とさせていただきます！

長い間、ありがとうございました！

宇奈月　香

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1010q/

窓恋

2011年10月11日09時41分発行